昭和六年十二月十日印刷
昭和六年十二月十五日發行
昭和十五年十二月十日再版發行

國譯一切經 實積部五

【定價 金一圓五十錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(43)三九四〇番
三〇四〇番

兩角製本所　製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—寶積部五索引終—

覺分を修するなり。身・心散動の失を遠離するは、是れ猗覺分を修するなり。空・無相・無願の解脫に入るは、是れ定覺分を修するなり。學習の心を生起することを離るるは、是れ捨覺分を修するなり。是れを名けて七覺分を修すと爲す。」とあり。

【八七】　若し諸法に於て、乃至、聖道と名くるなり。

異譯本には「謂はく。永く斷、常の見を離るる故に、正見を修習すと名く。欲覺・恚覺・害覺を離るる故に、正思惟を修習すと名く。自、他の不平等を遠離する故に、正語を修習すと名く。諂僞・不實の相を離るる故に、正命を修習すと名く。怯弱なる身心の事（シワザ）を離るる故に、正業を修習すと名く。自ら矜足して他を慢る心を離るる故に、正勤を修習すと名く。諸の惛愚を離るるを、正念を修習すと名く。諸の分別を息むるを、正定を修習すと名く。是れを八聖道分を修習すと名く。」とあり。

【八八】　若し諸の菩薩にして乃至、聖道に立たしめば。

異譯本には「若し菩薩にして、生死を捨てずと雖も、而も生死の諸惡に爲つて染められず、無爲に住せずと雖も、而も恒に無爲の功德を修し、六波羅蜜を修行することを具すと雖も、而も聲聞辟支佛の行を示現せば。」とあり。

【八九】　誓願に自性無くして來り。

異譯本には「其の誓願に隨つて、衆生を拯濟する之れを名けて復と爲す。」とあり。

【九〇】　菩提の道場の故にて去り。

異譯本には「菩提心を發して、道場に坐せんと願ずる、之れを名けて往と爲す。」とあり。

【九一】　邊際に入れる。「究竟處に到れる」を謂ふ。

佛の言はく。今正に是れ時なり。と。爾の時に、持法炬菩薩は、十億の諸菩薩と倶に、彼の國に於て沒して兜率陀天に現れ、大光明を放つて遍く世界を照せり。時に、諸の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・釋・梵・護世の諸天子等及び諸の聲聞・菩薩の大衆は、未曾有を得て、是くの如き言を作して言はく。此の諸の菩薩の遊戲神通は、甚だ希有爲り。と。爾の時に。衆會は此の光明に因つて、一切功德光明世界を見、及び普賢如來の國界の莊嚴の、一劫に於て說くとも盡す能はざるを見たり。此の文殊師利の神變を現せる時に當つて、七那由他の諸天子等は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。爾の時に、持法炬菩薩は、文殊師利に白して言はく。共に釋迦如來に禮覲すべし。と。時に文殊師利は、彼の天子の、應に度す可き者をば皆悉く度し已りたれば、持法炬の諸の菩薩衆及び大聲聞・天・龍・夜叉・乾闥婆等と與に、往いて佛の所に詣り、到り已つて頂にて佛足を禮し、却いて一面に住れり。

爾の時に、持法炬菩薩は、佛に白して言はく。世尊、普賢如來は世尊に問訊したまへり。少病、少惱に、起居輕利・安樂にて行ずるや、不や。と。爾の時に、世尊は彼の諸の菩薩に告げて言はく。善男子、此の文殊師利及び持法炬正士の神通變化・智慧光明にて衆生を成熟し、諸佛に奉事せることは、一切の菩薩は、其の智慧方便の深く邊際に入れるを知る能はず。汝、善男子、應當に此の文殊師利及び持法炬正士幷に諸の菩薩の有つ所の神通・辯才・智慧を學んで、諸佛に奉事し衆生を成熟すべし。此の諸の正士は、無數の劫來、一の佛刹より一の佛刹に至つて、常に佛の事を作したれば、若し諸の衆生にして、此の正士の境界に入らば、當來には復と魔界に墮せざるなり。と。

爾の時に、世尊は、長老阿難に告ぐらく。淨善く此の法門を持て。三寶の種を斷たざらん故に。と。爾の時に、持法炬菩薩摩訶薩は、此の會より起ち、其の眷屬と與に本の佛刹に還りぬ。佛の此の經を說き已りたまふや、善德天子、長老阿難・一切世間の天・龍・乾闥婆・阿修羅等は、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜せり。

るなり。」とあり。而して、此の說述は正しかるべし。

【八五】一には、乃至、正觀前に現じて他に隨はざる故なり。異譯本には「謂はく。諸の菩薩は、自力に依つて覺悟するあつて、他に從つて聞かずと雖も、然も衆生を敎化して、其れをして、了知して深信を發生せしむるなり。來の想無く、亦去の想無しと雖も、而も勤めて、遍く一切智の行を修行するなり。境界に於て、念ずる無く憶する無しと雖も、而も其の中に於て、忘れず愚ならざるなり。智光を以て、諸法を開了すと、雖も、而も、恒に正定にて、寂然として動かざるなり。常に平等の法性に安住すと雖も、而も衆の翳障・戲論・分別を斷つなり。」とあり。

【八六】是の力に乃至說いて覺分と名く。異譯本には「謂はく。諸の菩薩は、一切の善法に於て、恒に忘失せざるは、是れ念覺分を修するなり。諸の緣起に於て、常に樂うて觀察するは、是れ擇法覺分を修するなり。菩提の道を行じて、永く退轉せざるは、是れ精進覺分を修するなり。法を知つて、足つて希求する所無きは、是れ喜

を證して去り、應ずるが如くに法を說かんとして來り、諸の禪定解脫を得て去り、現に欲界に生じて來り、聖道に入る故にて去り、大悲もて衆生を成熟せん故にて來り、無生法忍を得て去り、衆生を忍受する故にて來り、一切法に於て出離する故にて去り、衆生を拔き出さん故にて來り、誓願の堅固なるにて去り、[八九]誓願に自性無くして來り、三解脫門にて去り、故に生を受けて來り、[九〇]菩提の道場の故にて去り、衆生を菩提に安立するを爲さん故にて來るなり。天子、是れを諸の菩薩の去・來の道と名く。と。此の菩薩の道を說ける時に、五百の菩薩は無生法忍を得たり。

爾の時に、善德天子は、文殊師利に白して言はく。我等曾て、世界あつて一切功德光明と名くと聞く。何處に在つて、何等の如來は中に於て法を說くと爲すか。と。文殊師利言はく。天子、彼の一切功德光明世界は、上方の十二恒河沙の佛刹を過ぎたるに在つて、普賢如來は、中に於て法を說きたまへり。と。諸の天子は言はく。我等、願はくば、彼の世界及び彼の如來を見たてまつらんことを。と。爾の時に、文殊師利は、即、光明莊嚴三昧に入り、三昧の力を以て大光明を放つて、十二恒河沙の佛刹を過ぎて、遍く一切功德光明世界を照せり。時に、彼の菩薩は問はく。此の光明は何所より來れるか。と。彼の佛は告げて言はく。善男子、下方に十二恒河沙の佛刹を過ぎて、世界あつて娑婆と名け、彼の土に佛あつて釋迦牟尼如來・應・正等覺と名けて、世に在つて法を說きたり。彼に菩薩あつて、文殊師利と名くるが、光明莊嚴三昧に入り、大光明を放つて、遍く十方の無量の佛刹を照したれば、是の光明は來つて此の會を照すなり。と。彼の諸の菩薩は即、普賢如來に白さく。我等、願はくば、釋迦牟尼世尊及び文殊師利菩薩を見んことを。と。時に、普賢如來は、大光明の、十二恒河沙の佛刹を照して娑婆世界に至れるを放ちて、彼の菩薩をして、分明に此の菩薩の衆會を見しめたり。時に彼の世尊は、諸の菩薩に告ぐらく。誰れか彼の娑婆世界に往き能ふものぞ。と。爾の時に、持法炬菩薩摩訶薩は、佛に白して言はく。世尊、我れ彼の娑婆世界に往き能ふ。と。

る無く、能く作くるを著無く、證、相平等にして、是の中には、少しの法として、若しは生若しは滅を得可きある無きを觀察すと雖も、而も常に精進に修習して捨てざる、是れを則ち名けて、正勤を修すと爲すのみ。」とあり。

【八二】身の住する處無く。異譯本には「身の處は有る所無しと觀ずるなり。」とあり。因みに以下の「三念處」に對しても同樣の說述なり。

【八三】處に住する無く、處を建立する無き。異譯本には「一切の法に於て、皆得る所無き。」とあり。

【八四】一には、乃至、一切の取著を超過する故なり。異譯本には「謂はく、諸の菩薩は、永く欲貪を斷つと雖も、而も恒に諸の善法を捨てずして、若しは身若しは心に、常に善行を修せんと欲するなり。諸法の空にして、得る所無きを觀ずと雖も、而も衆生を化せん爲めに、勤めて精進を行ずるなり。心識は幻の如く化の如くなるを了知すと雖も、而も恒に諸佛の法を具して、正覺を成ずる心を捨てざるなり。諸法は依る無く作こる無く、取著すべからざるを知ると雖も、而も恒に、聞く所に隨ひ、理の如くに思惟す

遠離すれども、昏睡に隨はざる故なり。五には、慧根にして、諸法を決斷し、正觀前に現じて、他に隨はざる故なり。何をか諸力と謂ふ。謂はゆる、是くの如き諸法性の中に安住して、一切の煩惱の能く沮壞する無き、是れを名けて力と爲すなり。[八六]是の力に住する故に、便ち勝法に住して、實の如くに、異に非ず如に非ざるを了知するを、說いて覺分と名く。[八七]若し諸法に於て隨順して覺了し、是の道に由る故にて、次第に修行して祕密に通達し、法に於て動かずんば、說いて聖道と名くるなり。是の故に、諸天子、應に是くの如くに三十七品の菩提分の法を修すべくば、諸行を出過して復の障礙無く、智慧熾然として究竟の寂靜ならん。云何なるを名けて、究竟の寂靜と爲すか。謂はく。諸法は起る無く亦盡くる所も無し。盡くる所無き故に則ち作す所無し。作す所無き故に亦作す無きに非ずして受くる無し。受くる無き者は施設する無し。是れを究竟の寂靜と名く。と。此の法を說ける時に、一萬二千の天子は、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

爾の時に、善德天子は、文殊師利に白して言はく。菩薩は云何に道を修習するか。文殊師利言はく。[八八]若し諸の菩薩にして、生死を捨てずして衆生をして涅槃に入らしめ、愛取を捨てずして衆生を拔出して聖道に立たしめば、是れを菩薩は道を修習すと名く。復次に、天子、道を修習する者は、善巧に淸淨なる性空に安住するなり。何を以ての故ぞ。菩薩は、寂靜の心を以て一切法の自性の淸淨なるを見て、諸の衆生の諸見に樂著し隨眠に安住して方便無き者の爲めに、諸法の自性の空なる義を演說すればなり。所以は何ぞ。是れ諸の衆生は、自性の空なる中に於て見を生ずる故に、是の菩薩は、無相・無願・無所作にして一切法の自性は不生なることを以て、諸の凡夫の、久しく煩惱・生滅の見に習へる者の爲めに、此の無生に於て、信樂を得て、生滅に於ても亦動く所無からしむればなり。天子、是れを菩薩は道を修習すと名く。復次に、天子、應に菩薩の去・來の道を見るべし。諸の天子の言はく。文殊師利、云何なるは菩薩の去・來の道なるか。文殊師利言はく。天子、菩薩は菩提

り。異譯本には「戒學・心學・慧學」とあり。

【七五】一には、自ら慳むなり、乃至、無智の人に隨順するなり。此の說述は、「六度」に就きて、自ら犯すと、他の守る者を憎むと、他の犯する者に從ふとの三を謂ふ者なり。

【七六】施をば增長し。異譯本には「一切を能く捨て、」とあり。

【七七】一切の法は、虛空の如くなれども。異譯本には「恒に一切諸法の、如來、無生・無得・無起・無有作者にして、猶、虛空の如くなるを觀察すれども。」とあり。

【七八】法性は淸淨なれども。異譯本には「一切の法の、無業無果なるを觀ずと雖も」とあり。

【七九】諸法は寂靜なれども。異譯本には「一切の法の、空にして有る所無きを信解すと雖も」とあり。

【八〇】一切の法は、虛無く行無けれども。異譯本には「諸法の、本來寂靜なるを知ると雖も、」とあり。

【八一】復次に、乃至、是れを正勤と名く。異譯本の、此の文に當たる者には「是に諸の菩薩は、恒に一切の、諸法の、作こる所あ

に厭足を有つ無く、菩提に回向するなり。禪定をば增長し、心散亂せず、菩提に回向するなり。智慧をば增長し、常に善業を修め、菩提に回向するなり。是れを不放逸に依つて住して此れを得る、波羅蜜の三つの伴助と名く。是の故に、諸天子、不放逸に住せば、一切の善法を增長することは、佛の印可したまふ所なり。復次に、[七七]一切の法は虛空の如くなれども、是に四つの正勤をば應當に觀察すべし。何等を四と爲すか。謂はゆる、諸法は無作なれども、未だ生ぜざる不善の法の生ぜざらん爲めの故に、精進を發起するなり。[七八]法性は清淨なれども、已に生ぜる不善の法の除滅する爲めの故に、精進を發起するなり。[七九]諸法は寂靜なれども、未だ生ぜざる善の法を生ずるを得しめん故に、精進を發起するなり。[八〇]一切の法は處無く行無けれども、已に生ぜる善の法の、住して失せざらん故に、精進を發起するなり。天子、是の諸の回薩の四つの正勤は、佛の印可したまふ所なり。[八一]復次に、諸天子、法の性は平等にして生ずる無く滅する無く、此の法性の得る所無きに依る故にて、諸惡を作らず。法性に順ずる故に、勤めて衆善を修するなり。是くの如くに修せば、修する所無しと爲す。復次に、一切の法に於て取らず捨てざる、是れを正勤と名く。復次に、諸天子、應に四つの念處を觀ずべし。謂はゆる、[八二]身の住する處無く、受の住する處無く、心の住する處無く、法の住する處無し。と。[八三]處に住する無く、處を建立する無き、是れを念處と名く。復次に、應に四つの如意足を觀ずべし。[八四]一には、身心懈らず、樂んで善法を修する故なり。二には、一切衆生を成熟せん爲めに、精進を發起して貪欲を斷つ故なり。三には、一切の法は得可からざれども、而も諸佛の法を證する故なり。四には、心は幻化の如く法は依る所無しとして、一切の取著を超過する故なり。復次に、應に五根を觀ずべし。[八五]一には、信根にして、決定して諸法の中に安住するを上首と爲す故なり。二には、精進根にして、遍く諸行を修して佛身を成就する故なり。三には、念根にして、諸法を具足して、心善く調柔にして忘失する無き故なり。四には、定根にして、攀緣を

調伏も亦、八法を以てして、清淨を得ることを。」とあり。
【七〇】一には、乃至、八には三界の寂靜なり。
異譯本には「一には、內、恆に寂靜なるなり。二には、外に行ふ所を護るなり。三には、三界を捨てざるなり。四には、緣起に隨順するなり。五には諸法の、其の性の無生なるを觀察するなり。六には、諸法に作者ある無きを觀察するなり。七には、諸法の本來無我なるを觀察するなり。八には、畢竟じて、一切の煩惱を起さざるなり。」とあり。
【七一】復八法を有たば觀察に入らん。
異譯本には「應に知るべし。不放逸も亦、八法を以てして、清淨を得ることを。」とあり。
【七二】六には。乃至、八には不放逸なり。
異譯本には「六には、自ら貢高せざるなり。七には、諸の諍論を滅するなり。八には、善法を退かざるなり。」とあり。
【八三】行の苦・苦の苦・壞の苦。
異譯本には「生の苦・老の苦・死の苦とあり。因みに「行の苦」とは「八苦」の一にして「一切の有爲法の無常にし變化遷動する苦」を謂ふ。
【七四】增上の戒、乃至、懸な

放逸なり。天子、是れを八法と名く。菩薩は、不放逸に安住する故にて、諸佛の菩提及び菩提分の法をば、一切當に得べし。是の故に、天子、應に是の不放逸に依つて住すべし。汝等、天子、不放逸に依らば、則ち三種の樂を常に損減せじ。何等を三と爲すか。一には、天の樂なり。二には、禪の樂なり。三には、涅槃の樂なり。復次に、諸天子、不放逸に依つて住せば、三つの苦を離るることを得ん。何等を三と爲すか。謂はゆる[七三]行の苦・苦の苦・壞の苦なり。又、不放逸ならば、三種の畏を超えん。何等を三と爲すか。謂はゆる地獄・餓鬼・畜生なり。又、不放逸ならば、三有を超ゆることを得ん。何等を三と爲すか。謂はゆる欲の有・色の有・無色の有なり。復次に、諸天子、不放逸に依つて住せば、三垢を離るることを得ん。何等を三と爲すか。謂はゆる貪の垢・瞋の垢・癡の垢なり。又、不放逸は、三つの學處に於て、當に圓滿なるを得べし。何等を三と爲すか。謂はゆる[七四]增上の戒・增上の心・增上の慧なり。不放逸ならば、常に三寶に親近し供養することを得ん。何等を三と爲すか。謂はゆる佛寶・法寶・僧寶なり。復次に、不放逸に依つて住せば、三種の波羅蜜の障を離ることを得ん。何等を三と爲すか。[七五]一には、自ら慳むなり。二には、施を行ずる人に於て心に憎嫉を生ずるなり。三には、慳の人に隨順するなり。自ら戒を破り、戒を持つ者を憎嫉し、戒を破る人に隨順するなり。自ら瞋り、忍辱する者を憎嫉し、瞋恚の人に隨順するなり。自ら懈怠し、精進の者を憎嫉し・嫉怠の人に隨順するなり。自ら散亂し、禪定の者を憎嫉し、散亂の人に隨順するなり。自ら智慧無く、智慧の者を憎嫉し、無智の人に隨順するなり。汝等、諸天子、是れを不放逸に依つて住する者の、當に遠離することを得べき三つの波羅蜜の障と名く。復次に、諸天子、不放逸に依つて住せば、當に三種の波羅蜜の伴助を得べし。何等を三と爲すか。謂はゆる、[七六]施をば增長し、果報を求めず、菩提に回向するなり。戒をば增長し、生天を求めず、菩提に回向するなり。忍辱をば增長し、一切衆生に於て害心を生ぜず、菩提に回向するなり。精進をば增長し、種種の善根

【六五】天耳通は、乃至、故なり。異譯本には「一切の聲の限隔する所無きを聞くなり。」とあり。

【六六】煩惱に、乃至、故なり。異譯本には「廣く善根を集めて、諸の散動を離るるなり。」とあり。

【六七】聲聞の、乃至、入るなり。異譯本には「初發の誓願の如くに、恒に善友と爲つて、廣く衆生を濟ふなり。」とあり。

【六八】一には、苦、なり、乃至、八には、一切智なり。異譯本には「一には、苦智にて、遍く五蘊を知るなり。二には、集智にて、永く諸愛を斷づなり。三には、滅智にて、諸の緣起の畢竟じて不生なるを觀ずるなり。四には、道智にて、能く有爲・無爲の功德を證するなり。五には、因果智にて、業と事と相違ある無きを知るなり。六には、決定智にて、無我、無衆生等を了知するなり。七には、三世智にて、善く三世の輪轉を分別し能ふなり。八には、一切智智、謂はく、般若波羅蜜にて、一切處に於て證入せざる無きなり。」とあり。

【六九】復八法を有たば寂靜に入らん。異譯本には「應に知るべし。

八法を有たば、禪定に入らん。何等を八と爲すか。一には、寂靜にして阿蘭若に住するなり。二には、[五七]憒閙を捨離するなり。三には、[五八]境界に染らざるなり。四には、[五九]身心を輕く安んずるなり。五には、[六〇]心は定境を緣ずるなり。六には、[六一]諸の聲の相を絕つなり。七には、食を減じて身を支ふるなり。八には、[六二]聖の樂を取らざるなり。是れを八法にて禪定に入ると名く。天子、復八法を有たば、智慧に入らん。何等を八と爲すか。一には、[六三]蘊に善巧なるなり。二には、界に善巧なるなり。三には、處に善巧なるなり。四には、緣起に善巧なるなり。五には、諦に善巧なるなり。六には、三世に善巧なるなり。七には、一切の乘に善巧なるなり。八には、一切の佛法に善巧なるなり。是れを八法にて智慧に入ると名く。天子、復八法を有たば、神通に入らん。何等を八と爲すか。一には、[六四]天眼通は、障礙無きを見る故なり。二には、[六五]天耳通は、障礙無きを聞く故なり。三には、他心通は、一切衆生の心を觀ずる故なり。四には、宿命通は、前際を憶念する故なり。五には、神足通は、一切の神變を示現する故なり。六には、漏盡通は、一切衆生の漏を盡す故なり。七には、[六六]煩惱に任せず解脫を取らずして、方便力なる故なり。八には、[六七]聲聞の解脫に依らずして涅槃に入るなり。是れを八法にて神通に入ると名く。復、八法を有たば、能く智に入らん。何等を八と爲すか。[六八]一には、苦智なり。二には、集智なり。三には、滅智なり。四には、道智なり。五には、因智なり。六には、緣智なり。七には、三世智なり。八には、一切智なり。是れを八種と名く。[六九]復、八法を有たば、寂靜に入らん。何等を八と爲すか。[七〇]一には、內の寂靜なり。二には、外の寂靜なり。三には、愛の寂靜なり。四には、取の寂靜なり。五には、有の寂靜なり。六には、生の寂靜なり。七には、一切の煩惱の寂靜なり。八には、三界の寂靜なり。是れを八法と名く。[七一]復、八法を有たば、觀察に入らん。何等を八と爲すか。一には、戒なり。二には、聞なり。三には、禪なり。四には、智慧なり。五には、神通なり。[七二]六には、智なり。七には、寂滅なり。八には、不

【五五】尊重するなり。異譯本にに「師長を敬重するなり。」とあり。
【五六】下心なるなり。異譯本に「憍慢を摧伏するなり」とあり。
【五七】憒閙を捨離するなり。異譯本に「衆人と共に群り聚つて談說せざるなり。」とあり。
【五八】境界に染らざるなり。異譯本には「外の境界に於て貪著する所無きなり」とあり。
【五九】身心を輕く安んずるなり。異譯本には「若しは身若しは心に、諸の樂好を捨つるなり。」とあり。
【六〇】心は定境を緣ずるなり。異譯本にに「一處に攀緣する無きなり。」とあり。
【六一】諸の聲の相を絕つなり。異譯本には「音聲文字を修飾することを樂まざるなり。」とあり。
【六二】聖の樂を取らざるなり。異譯本には「轉じて他人に教へて、聖の樂を得しむるなり。」とあり。
【六三】蘊に善巧なるなり。異譯本に「善く諸蘊を知るなり。」とあり。
【六四】天眼通は、乃至、故なり。異譯本にに「一切の色の障礙ある無きを見るなり。」とあり。

る如くに道場を莊嚴することを辦じ、即便に合掌して是くの如き言を作さく。文殊師利、今正に是れ時なり。と。是に於て、文殊師利は、一萬の菩薩五百の聲聞及び天・龍・夜叉・乾闥婆等の前後に圍繞せると與に、佛足を禮し已つて、會中に於て沒して兜率陀天に現れ、諸の菩薩・聲聞の大衆と與に、彼の道場に於て、敷に隨つて坐せり。時に諸の大衆は、悉く四天王宮・三十三天・夜摩天・兜率及以び化樂、他化自在の諸の天衆等・魔衆・梵衆、乃至、有頂の、互に相ひ唱へて、文殊師利は今兜率陀天に在つて、方に法を説かんと欲す。と言へるを聞けり。諸天は聞き已るや、無數の百千は、皆來つて會に集りたれば、此の欲界の天宮を盡すとも、容れ受けざる所なり。時に文殊師利は、即神力を以て、彼の諸天をして、自ら寛廣にして相ひ妨げ礙へざることを見しめたり。

爾の時に、善德天子は、文殊師利に白して言はく。大衆は已に集れり。願はくば、説法を爲したまはんことを。と。文殊師利は、善德天子に告げて言はく。四種の法あつて、菩薩は不放逸に住せば、則ち能く一切の佛法を攝取せん。何等を四と爲すか。一には、戒律に住して多聞を具するなり。二には、禪定に住して智慧を行ずるなり。三には、神通に住して大智を起すなり。四には、寂靜に住して常に觀察するなり。天子、八種の法を有たば、戒律に入らん。何等を八と爲すか。一には、身の清淨なり。二には、語の清淨なり。三には、意の清淨なり。四には、見の清淨なり。五には、頭陀の功德の清淨なり。六には、[五二]命の清淨なり。七には、[五三]一切の、詐つて異相を現して利を以ひ利を求むることを捨離する清淨なり。八には、[五四]一切智の心を捨てざる清淨なり。是れを八法もて戒律に入ると名く。復、八法を有たば、多聞に入らん。何等を八と爲すか。一には、[五五]尊重するなり。二には、[五六]下心なるなり。三には、精進を發起するなり。四には、正念を失はざるなり。五には、聞くに隨つて受持するなり。六には、、心に善く觀察するなり。七には、聞くが如くに轉じ教ふるなり。八には、自をば讃し他を毀らざるなり。是れを八法にて多聞に入ると名く。天子、復

【五二】命の清淨なり。異譯本に「正命して、自ら資くるなり。」とあり。
【五三】一切の乃至清淨なり。異譯本には「諸の詐僞不實の相を離るるなり。」とあり。
【五四】一切智の心を捨てざる清淨なり。異譯本に「恒に菩提の心を忘失せざるなり。」とあり。

魔衆は當に善利を得べければ、說法の者をして、身・心悅豫して精勤に修習せしむるに、無礙の辯才及び陀羅尼を與へ、承事供給して、衣服・飮食・臥具・湯藥に乏しき所無からしめん。とて、卽、呪を說いて曰はく。

怛姪他　阿末麗　毘末麗　替哆低　阿羯梓　是多設堵嚕　誓曳杜野筏低　部多筏低伽米麗　喃低　蘇普低　普普細　地唎蘇溪　悄提　可詣　米洗禮　央矩麗跋麗　呼盧忽黎　索醯　輸戍米提地唎　阿那筏低底底使咜泥　吃利多唎低　吃利多費低　肥盧遮都費低漫怛囉悖馳那馳路迦阿跋羅目多蹬躊蘇唎耶　と。

世尊、若し善男子・善女人にして、專精に此の陀羅尼を受持して、心散亂せずば、常に諸天・龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の守護する所と爲り、一切の惡鬼は便を得能ふ無し。と。彼の魔波旬の此の呪を說ける時に、三千大千世界は六種に震動せり。爾の時に、世尊は魔波旬に告ぐらく。善い哉、善い哉。汝の辯才や。當に知るべし。皆是れ文殊師利の神通の境界なることを。と。是の文殊師利の神通力を現し、及び魔波旬の呪を說ける時に於て、三萬二千の天・人は阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。時に、文殊師利は、神力を還し攝めて、此の衆會をして、皆悉く自ら、本の如くにして住することを見しめたり。

爾の時に、文殊師利は、善德天子に告げて言はく。善男子、汝、兜率陀天に往き、遍く天衆に告げて言へ。我れ當に彼に來るべし。と。時に善德天子は是の語を聞き已るや、世尊の足并に諸の菩薩・大德の聲聞を禮し、其の眷屬の恭敬して圍繞せると與に、衆會の前に於て忽然として現れず、須臾にして已に兜率陀天に至れり。爾の時に、善德は、遍く諸の天子に告げて言はく。汝等應に知るべし。文殊師利は汝を憐愍するが故に、此に來り至らんと欲することを。汝等、應當に諸の欲樂を捨て、憍慢を遠離し、恭敬尊重して、隨順して法を聽くべし。と。爾の時に、善德天子は、應ぜら

如き惡事を斷たん爲めに、陀羅尼を說かん。」と曰ひて、直ちに、次に陀羅尼の文に續けてあり。

の如き言を作さく。若し此の法門に於て信解を生ぜざる者は、彼れは得る所無く、亦證する所も無きなり。と。

爾の時に、須菩提は、彼の諸の比丘に告げて言はく。長老、汝等少しく得る所有り、證する所有りや。と。諸の比丘は言はく。若し增上慢の者ならば、則ち說いて、得る有り證する有り。と言ふ可きも、增上慢無き沙門の法は、得る無く證する無ければ、彼れ何處に於て此の動念を生じて、自ら、我れ是くの如く得我れ是くの如くに證す。と言ふことを謂はん。若し其の中に於て念を動す者あらば、則ち是れ魔業なればなり。と。須菩提言はく。長老、汝の解する所の如きは、何を得、何を證して、是の說を作すか。と。諸の比丘言はく。唯佛世尊及び文殊師利のみ、我が得る所を知り、我が證する所を知りたまはん。大德、我が解する所の如くんば、若し苦の相を了知せずして、是の說、言はく。苦をば我れ應に知るべし。を作さば、增上慢と爲す。是くの如くに、集をば應に斷つべく、滅をば應に證すべく、道をば應に修むべし。とせば、增上慢と爲す。と。彼れは苦・集・滅・道の相を了知せざる故に、是の說、言はく。乃至、道をば我れ已に修す。を作して、增上慢を爲すなり。云何となれば、苦の相は、謂はく。無生の相なり。是くの如くに、集・滅・道の相も、若く無生の相にして、卽是の無相には得る所無ければ、其の中に於て、少しの苦として知る可く、集として斷つ可く、滅として證す可く、道として修む可きものある無ければなり。若し此に說く聖諦の義の中に於て、驚かず怖れず畏れざる者は、增上慢に非れども、若し驚怖を生ぜば增上慢と爲さん。と。

爾の時に、世尊は彼の諸の比丘を讃じて言はく。善い哉、善い哉。とて、須菩提に告ぐらく。此等の比丘は、迦葉佛の法中に於て、曾て文殊師利の、是くの如き甚深の法を演說せるを聞きて、此等の比丘は、往昔に是の深法を修行せる故に、今聞くや、隨順して速に了知し能ひしなり。是くの如くに次第して、我が法中に於て、是の深法を聞きて信解を生ずる者は、一切當に彌勒の法中に於て、

異譯本には「本願未だ滿たざる故に、無上涅槃を速に證することを求めず、」とあり。

【四〇】　有つ所の、乃至、成熟せば。異譯本には「深く無我を知ると雖も恒に衆生を敎化し、」とあり。

【四一】　佛の乃至生ぜずんば。異譯本には「諸法の自性の、猶、虛空の如くなるを觀ずと雖も、而も功德の淨き佛國土を勤修し、」とあり。

【四二】　「復次に」等。此の一句に當るべき者は、異譯本には無し。

【四三】　本來解脫し、乃至、解脫せば。異譯本には「心則ち散せず。心則ち散ぜずんば、」とあり。

【四四】　本性空ならば、乃至、二つ無く。異譯本には「性空ならば則ち二無く、二無くんば則ち我、我所無く」と前後してあり。

【四五】　是の五蘊は、乃至、取る無く。異譯本には「五蘊の法は、因緣を以て有なり。因緣にて有なる故に則ち力ある無く、力無ければ則ち主無く、主無ければ則ち我・我所無く、我・我所無ければ則ち受取する無く等」とあり。

【四六】　五蘊の法界は、乃至、

若し諸の菩薩にして、魔怨を摧伏しながら、而も四魔を現作せば、此の地を得と爲さん。須菩提言はく。文殊師利、此の菩薩の行は、一切の世間は甚だ信じ難しと爲す。文殊師利言はく。是くの如し、是くの如し。汝の說く所の如し。是の諸の菩薩行は、世間に於て世法を超過したればなり。須菩提言はく。文殊師利、當に此の世間に超過せるを說くことを爲すべし。文殊師利言はく。夫れ世間とは、名けて五蘊と爲せども、此の蘊の中に於て、色は聚沫の性なり、受は水泡の性なり、想は陽炎の性なり、行は芭蕉の性なり、識は幻の性なり。是くの如くにして當に知るべし。世間の本性は、聚沫・陽炎・泡・幻・芭蕉なれば、是の中に、蘊無く蘊の名字も無く、衆生無く衆生の名字も無くして、世間無く世間を超過せることを。若く五蘊に於て、是くの如くに正しく知るを、名けて勝解と爲す。若し正しく勝解せば、則ち[四三]本來解脫し、若し本來解脫せば則ち世法に著せず、若し世法に著せずんば則ち世間を超過せん。復次に、須菩提、五蘊の本性は空なり。[四四]若し本性空たらば則ち我・我所無く、若し我・我所無くんば是れ則ち二つ無く、若し本より無二ならば則ち取捨無く、取捨無き故に則ち著する所無く、著する所無き故に則ち世間を超過せん。復次に、須菩提、[四五]是の五蘊は因緣に屬す。若し因緣に屬せば則ち我に屬せず・衆生に屬せず。若し我に屬せず衆生に屬せずんば是れ則ち主無く、主無くんば則ち取る無く、取る無くんば則ち諍ふ無し。諍論無き者は、是れ沙門の法にして、手にて空に畫くに、觸れ礙ることある無きが如くに、是くの如き空平等の性を修行せば、世間を超過せん。復次に、須菩提、[四六]五蘊の法界は、同じく法界に入りて是に則ち界無し。若し是れ界無くば則ち地界・水・火・風界無く、我無く、衆生無く、壽命無く、欲界及び色、無色界無く、有爲・無爲・生死・涅槃界無し。是の界に入り已らば、則ち世間と倶にして而も住する所無し。若し住する所無くば、則ち世間を超過せん。と。此の世間を超過する法を說ける時に、二百の比丘は諸法を受けず、漏盡きて意解し、各各鬱多羅僧の衣を脫いで、以て文殊師利を覆うて、是く

諸法の體相の平等なるを覺悟す。」とあり。

【三五】正性離生。無漏智を生じて煩惱を斷ずるを「正性」（又聖性とも曰ふ。）と曰ひ永く異生（即ち凡夫）の生を離るるを「離生」と曰ふ。二乘、菩薩乘共に「見道」に入りたる時を謂ふ。異譯本には、單に「正位」とあり。

【三六】時に、乃至、取るが如し。異譯本には「其の人、巧捷に疾走して箭を追ひ、箭の未だ至らざる間に、還つて復、收得するが如し。射師と言ふは、菩薩に喩ふるなり。一子は、衆生に喩ふるなり。怨家は、煩惱に喩ふるなり。箭と言ふは、此れは則ち聖智に喩ふるなり。」とあり。因みに、本經も、異譯本も、此の譬喩は共に剴切ならざるが如し。

【三七】一切の地に、乃至、住する所無くば。異譯本には「世に行ずることを示し、而も世法に爲つて染められず、」とあり。

【三八】若し一切の地を、乃至、住せずんば。異譯本には「世間に現じ同じて、諸法に於て、見を起さず、」とあり。

【三九】涅槃を求めずんば。

上下にも、亦是くの如くに說けども、是くの如き言說の種種なる差別は、虛空に於てして異あるに非るが如きなり。是の故に、仁者、一切法の畢竟たる空の中に依つて、種種なる諸地の相を建立すれども、亦空性として差別あるに非るなり。須菩提言はく。文殊師利、汝は已に[三五]正性離生に證入せりや。曰はく。我れ已に證入し、而して亦復出づ。須菩提言はく。云何なれば、證入し而も復還り出づるか。文殊師利言はく。仁者、當に知るべし。此れは是れ菩薩の、智慧の方便なることを。正性離生に於て實に如くに證入し、方便にて出ればなり。須菩提、譬へば、人の、射術に於て善きあつて、一の怨敵を有つて之れを害せんと念欲せしが、射師に子あつて、憐愛すること甚だ重し。時に、彼の愛子は曠野の中に在りしが、其の父謬つて、是れを怨讎とする所と謂ひ、箭を放つて之れを射るに、子は便ち大に喚んで言はく。我れ咎無きに、何すれぞ害せらるるか。と。[三六]時に彼の射師は、速疾の力を有つて急に子の所に往き、却つて其の箭を取るが如し。菩薩も亦復是くの如し。聲聞・辟支佛を調伏することを爲さん故に正位に入れども、還つて彼より出でて、聲聞・辟支佛の地に墮せざるなり。是の義を以ての故に、名けて佛地と爲す。須菩提言はく。云何なる菩薩にして、此の地を得るか。文殊師利言はく。若し諸の菩薩にして、[三七]一切の地に住しながら、而も住する所無くば、此の地を得と爲さん。[三八]若し一切の地を悉く能く演說しながら、而も下劣の地に住せずんば、此の地を得と爲さん。若し修行するあつて、一切衆生の煩惱を盡すことを爲しながら、而も法界は盡くる無しとし、無爲に住すと雖も、而も有爲に行き、生死の中に於ては園觀の如き想にて、[三九]涅槃を求めずんば、此の地を得と爲さん。[四〇]有つ所の志願をば悉く圓滿ならしめんとて、無我の忍を得ながら衆生を成熟せば、此の地を得と爲さん。[四一]佛の智慧を得ながら、而も彼の無智の人の所に於て瞋恨の心を生ぜずんば、此の地を得と爲さん。法を求むる者の爲めに法輪を轉じながら、而も法界に於て亦差別する無く、是くの如くに修行せば、此の地を得と爲さん。[四二]復次に、

此れに對する異譯本の文には「我れも亦是くの如し。」とあり。

【二八】汝、乃至、證せるか。異譯本には「若し是くの如くんば、汝は何を得る所ぞ。」とあり。

【二九】佛界の平等なるを我れ是くの如くに證せり。異譯本には「我れ如來の平等にして自性無き境界を得たり。」とあり。

【三〇】聖者の解脫は、乃至、得ざるに非ず。異譯本には「聖心の解脫には境界ある無し。云何にして、是の故に我れに今境界の得可き無し。」とあり。

【三一】如來の解脫も、乃至、無きに非ず。異譯本には「佛も亦是くの如し。其の心の解脫には、境界ある無し。云何にして、得る所有りと謂はんや。」とあり。

【三二】諸法を、乃至、解し。異譯本には「諸漏永く盡きて、心に解脫を得。」とあり。

【三三】衆生に、乃至、覺せしむる。異譯本には「我れ能く一切諸法の皆緣より起るを了知せしむ。」とあり。

【三四】一切諸法の、乃至、了知す。異譯本には「我れ常に、一切

其の法を說く者も、亦復是くの如し。若し他を將け護らんとて、驚怖を生ぜんことを恐れて、是くの如き甚深の義を隱覆して、但雜句・綺飾の文辭を以ひて演說することを爲さば、則ち衆生に、老・病・死の苦を授けて、無病・安樂なる涅槃を與へざるなり。と。此の法を說ける時に、五百の比丘は〔三〕諸法を受けず、漏盡きて意に解し、八千の天人は塵垢を遠離して、諸法の中に於て法眼淨を得、七百の天子は阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、是の願を作して言はく。我等も未來世に於て、當に文殊師利の如くに、是の辯才を得べし。と。

爾の時に、長老須菩提は、文殊師利に語つて言はく。汝豈に聲聞乘の法を以て、聲聞の爲めに說かざるか。と。曰はく。一切の乘の法は、是れ我が乘ずる所なり。須菩提言はく。汝は是れ聲聞と爲すや。辟支佛と爲すや。應正等覺と爲すや。曰はく。我れは聲聞爲れど、他の聲に因つて解を生ずる故ならず。我れは辟支佛爲れど、大悲を捨てて畏るる所無き故ならず。我れは應正等覺爲れど、本願を捨つる故ならず。須菩提言はく。汝は云何にして聲聞と作すか。曰はく。彼れ諸の衆生の、未だ曾て法を聞かざるに、聞くを得しむる故に、我れは聲聞爲り。又問ふ。汝は云何にして辟支佛と爲すか。曰はく。〔三〕衆生に、法界を信ぜしめ覺せしむる、是の故に我れ辟支佛爲りと說くなり。又問ふ。汝は云何にして應正等覺と爲すか。曰はく。〔三四〕一切諸法の法界は平等なりと、是くの如くに了知す。是の故に我れは應正等覺爲り。須菩提言はく。文殊師利、汝は決定して、何の地に住すと爲す。曰はく。一切の地に住するなり。須菩提言はく。汝は豈亦凡夫地にも住するや。文殊師利言はく。我れ亦決定して、凡夫地にも住す。須菩提言はく。汝は何の密意にて是の說を作すか。曰はく。一切諸法の自性は平等なる故に、說くこと是くの如し。須菩提言はく。若し一切の法皆悉く平等ならば、當に何所に於て、諸法の此の聲聞地・辟支佛地・菩薩佛地を建立すべきか。文殊師利言はく。譬へば、十方虛空なる界の中にて、說いて、此れは是れ東方の虛空と言ひ、南・西・北方・四維・

識・癡を有つを見ばとあり。

【三〇】何に依るは正しき修行なるか。異譯本には「何所に住するを、名けて正住と爲すか。」とあり。

【三一】正しき修行とは依る所無きを爲すなり。異譯本には「夫れ正住とは、住する所ある無く、住する所無きに住する、是れを名けて正住と爲すのみ」とあり。

【三二】道にも依らずして修行するか。異譯本には「豈正道に住するを以て正住と爲さざるか。」とあり。

【三三】若し有爲を住せば、則ち平等非ず。異譯本には「若し有爲に住せば、則ち平等の法性に住せず」とあり。

【三四】無爲の中に頗は數有りや。異譯本には「無爲は是れ數の法なりや。不や。」とあり。

【三五】數。類別の義を取りて、種類を謂ふ。

【三六】聖者の乃至無きあらんや。異譯本に「一切の聖人の無爲法を得るに數有らざるか。」とあり。蓋し、聲聞・緣覺・佛と種類有るを謂ふなるべし。

【三七】若し一切の法は皆化の如くならば。

り。佛言はく。文殊師利、[二〇]何に依るは正しき修行なるか。曰はく。[二一]正しき修行とは、依る所無きを爲すなり。佛言はく。[二二]道にも依らずして修行するか。曰はく。若し依る所有つて修行せば、則ち是れ有爲なり。[二三]若し有爲を行ぜば、則ち平等非ず。所以は何ぞ。生・住・壞を離れざる故なり。佛言はく。文殊師利、[二四]無爲の中に頗は[二五]數有りや。文殊師利言はく。世尊、若し無爲に數有らば、即是れ有爲なり。無爲と謂ふに非ず。佛言はく。[二六]聖者の無爲を證するを得る若くんば、則ち此の法に寧數無きあらんや。曰はく。法に數無き故に、聖は數を遠離するを、數無しと爲すなり。佛言はく。文殊、汝は聖法を證せりや。證せずと爲すや。文殊師利言はく。世尊、若し化人に、汝は聖法を證せりや、證せずと爲すや。と問はば、彼れは云何に答へんか。佛言はく。文殊夫れ化人ならば、則ち證・非證有るを說く可からず。文殊師利言はく。佛は豈、一切の諸法は皆化の如しと說かずや。佛言はく。是くの如し、是くの如し。曰はく。[二七]若し一切の法は皆化の如くならば、云何ぞ問うて、汝は聖法を證せりや證せずと爲すや。と言はん。佛言はく。文殊、[二八]汝三乘に於て何の平等を證せるか。曰はく。[二九]佛界の平等なるを、我れ是くの如くに證せり。佛言はく。汝は佛の境界を得たるか。曰はく。若し世尊にして得たまはば、我れも亦當に得べきのみ。と。

爾の時に、尊者須菩提は、文殊師利に語つて言はく。如來は佛の境界を得たまはざるか。と。文殊師利は言はく。汝は、聲聞の境界に於て、得る所有りや。須菩提言はく。[三〇]聖者の解脫は、得るに非ず得ざるに非ず。曰はく。是くの如し、是くの如し。[三一]如來の解脫も亦、境界有るに非ず、境界無きに非ず、須菩提言はく。文殊師利、汝は新に發意せる菩薩を將け護らずして、法を演說するなり。文殊師利言はく。須菩提、意に於て云何。若し醫人あつて、病者を將け護らんとて、辛・酸・苦・澁等の藥を與へざらんに、而ち彼の醫人は、彼れ病者に於て、其の差すことを與ふと爲さんや。死を與ふと爲さんや。須菩提言はく。是れ死苦を與ふるにて、安樂を施すに非ず。文殊師利言はく。

【一四】衆生の現に、乃至、住すと爲す。異譯本には「一切の凡夫の貪・瞋・癡を起す處は、是れ如來の住する所の平等の法なり。」とあり。

【一五】空・無相・乃至、住するなり。異譯本には「一切の凡夫は、空・無相・無願の法の中に於て貪・瞋・癡を起す。是の故に、一切の凡夫の貪・瞋・癡を起す處は、卽是れ如來の住する所の平等の法なり。」とあり。

【一六】文字・語言の中に、乃至、有るなり。異譯本には「空は言說の故を以て有り。貪・瞋・癡も亦、言說の故を以て有り。」とあり。

【一七】若し無生・無起、乃至、有生・有起を說くことを得。異譯本に「無生・無起・無作・無爲の、諸行の法に非るもの有り。乃至。若し有らずんば、則ち生・起・作・爲の諸行の法に、應に出離すること無かるべし。有るを以ての故に、出離を言ふのみ。」とあり。

【一八】則ち相應せず。異譯本には「當に知るべし。是の人は未だ善修行せざれば、名けて修行の者と爲すを得ず。」とあり。

【一九】他の煩惱を見ば。異譯本に「他の(ヒト)の貪・

煩惱の本性は、是れ佛界の本性なり。世尊、若し煩惱の性は佛の境界と異らば、[一三]則ち佛を一切の法の平等の性の中に住すとは說かじ。煩惱の性は卽佛界の性なる故を以て、如來を平等の性に住すと說くなり。又問ふ。汝は、如來は何の平等に住すと見るか。曰はく。我が解する所の如きは、[一四]衆生の現に貪・瞋・癡を行ふ者の住する所の平等なるに、如來は住すと爲す。佛言はく。衆生は現に三毒の煩惱を行つて住するに、何の平等ぞや。答へて曰はく。[一五]空・無・相・無願の平等性の中に住するなり。佛言はく。文殊、彼の性空の中に、云何にして復貪・瞋・癡有るか。文殊師利言はく。彼の有の中に於て、性空の處有り、貪・瞋・癡有るなり。佛言はく。何の有の中に於て、性空有りと說くか。曰はく。[一六]文字・語言の中に於て性空有りと說き、性空有る故に貪・瞋・癡有るなり。佛の說きたまふ所の如くんば「諸の比丘、無生・無爲・無作・無起有り。[一七]若し無生・無爲・無作・無起にして有らずんば、亦有生・有爲・有作・有起を說く可からず。是の故に、比丘、無生及び無所起有るを以て、此れに由つて有生・有起を說くことを得。」と。是くの如くに、世尊、若し性空・無相・無願、無くんば、則ち貪・瞋・癡等の一切の諸見を說く可からざるなり。佛言はく。文殊師利、是の義を以ての故に、汝の說く所の如く、煩惱に住する者は是れ性空に住するや。文殊師利言はく。世尊、若し觀行する者にして、煩惱を離れ而して性空を求めば、[一八]則ち相應せず。云何ぞ、別に性空として、煩惱に異るものあらんや。若し煩惱は卽是れ性空なるを觀ぜば、正しく修行すと爲さん。佛言はく。文殊師利、汝は煩惱に住するか、煩惱を離るるか。文殊師利言はく。有らゆる煩惱は悉く皆平等なり。是くの如き平等を、我れ正に修行す。此の平等に入れば、則ち煩惱を離れず煩惱に住せざるなり。若し沙門・婆羅門にして、自ら欲を離れたりと謂ひ、[一九]他の煩惱を見ば、彼れは二見に隨へるなり。云何なれば二見なる。煩惱有りと謂へば、名けて常見と爲し、煩惱無しと謂へば、名けて斷見と爲せばなり。世尊、正しき修行は、自他・有無の相を見ざるなり。何を以ての故ぞ。一切の法に明了なる故な

【八】無念、乃至、境界なり。異譯本には「無爲は思量の境界に非ず。」とあり。

【九】依る所無き故に、乃至、說く可からざればなり。異譯本には「思量に非る境界の中には、文字ある無く、文字無き故に辯說する所無く、辯說する所無き故に諸の言論を絕ち、諸の言論を絕つ者は、是れ佛の境界なり。」とあり。

【一〇】一切衆生の、乃至、煩惱の性は得可からずして。異譯本には「諸佛の境界は、當に一切、衆生の煩惱の中に求むべし。所以は何ぞ。若し正しく衆生の煩惱を了知せば卽是れ諸佛の境界なる故なり。」とあり。

【一一】增・減ありや。異譯本には「去・來ありや。」とあり。

【一二】云何にして、乃至、了知するか。異譯本には「若し諸佛の境界にして、來無く去無くんば、云何にして、若し正しく衆生の煩惱を了知せば、卽是れ諸佛の境界なり。と、了知するか。」とあり。

【一三】則ち佛を、乃至、說かじ。異譯本には「如來は則ち平等の正覺に非じ。」とあり。

善徳天子會　第三十五

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘の衆一千人と倶なりき。菩薩摩訶薩の十千人、幷に欲・色界の諸天子の等あり。

是の時に、文殊師利菩薩摩訶薩は、善徳天子と倶に會の中に在りしが、爾の時に、世尊は、文殊師利に告ぐらく。汝當に此の諸天・大衆及び諸の菩薩の爲めに、諸佛の甚深なる境界を演說すべし。と。文殊師利は、佛に白して言はく。唯然り、世尊。若し善男子・善女人にして、佛の境界を知らんと欲せば、當に知るべし。眼・耳・鼻・舌・身・意の境界に非ず、色・聲・香・味・觸・法の境界に非ざることを。世尊、[五]境界に非るは是れ佛の境界なり。是の義を以ての故に、[六]佛の得たふ所の阿耨多羅三藐三菩提の如きは、何の境界と爲さんか。と。佛言はく。空の境界なり。諸見に平等なる故なり。無相の境界なり。一切の相に平等なる故なり。無願の境界なり。三界に平等なる故なり。[七]無作の境界なり。有作に平等なる故なり。無爲の境界なり。有爲に平等なる故なり。と。文殊師利言はく。世尊何等は是れ無爲の境界なるか。佛言はく。[八]無念なるは、是れ無爲の境界なり。文殊師利言はく。世尊、若し無爲等の是の佛の境界を無念と爲さば、何に依つて說かんか。[九]依る所無き故に則ち說く所無く、說く所無き故に則ち說く可からざればなり。佛言はく。文殊師利佛の境界をば、當に何に於て求むべきか。曰はく。[一〇]一切衆生の煩惱の中に於て求めん。何を以ての故ぞ。衆生の煩惱の性は得可かすらずして、聲聞・緣覺の知り能ふ所に非ざる、是れを則ち名けて諸佛の境界と爲せばなり。佛言はく。文殊師利、境界には[一一]增・減ありや。曰はく。增・減無きなり。佛言はく。[一二]云何にして、一切衆生の煩惱の本性を了知するか。曰はく。佛の境界に增・減ある無き如くんば、煩惱の本性にも亦增・減無ければなり。佛言はく。云何なるを名けて、煩惱の本性と爲すか。曰はく。

【五】境界に非るは是れ佛の境界なり。異譯本（文殊師利所說不思議佛境界經「唐、菩提流志、譯」）には「是等の如き差別の境界無きは、是れ乃ち名けて諸佛の境界と爲す。世尊、善男子・善女人にして、佛の境界に入らんと欲せば、入る所無きを以てして方便と爲さば、乃ち能く悟入せん。」とあり。

【六】佛の得たまふ所の乃至、何の境界と爲さん。異譯本には「如來は何の境界を以て菩提を得たまふか。」とあり。

【七】無作の、乃至、平等なる故なり。異譯本には「無作の境界にて菩提を得。諸行は平等なる故なり。」とあり。

名を受持せば、生ずる所の處にて、種族尊豪に、識性聰慧にして、善く世俗の文詞に通達し能ひ、凡べて發する所の言を人皆信受し、諸地の中に於て、淸淨なる【四】戒・定・智慧・解脫・解脫知見を具足し、宿命智を獲、五神通を得、亦當に佛の十八の不共をも得て、速に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　生ずる所に未だ曾て諸佛を離れず　八種の梵音聲を具足して
速に無上菩提の果を證せん　と。

復次に、功德華、下方に世界あつて、種種音聲と名け、劫を積集智慧と名く。彼に現に佛あつて、一切法門神變威德光明照曜如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、身を轉じて、陀羅尼の、成就正覺と名くるを得、能く九十俱胝の諸佛如來の說く所の法を受持するに當つて、一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　正覺陀羅尼を成ずるを得　無量なる諸佛の法を受持して　一生
に當に大菩提を證すべし　と。

爾の時に、開敷功德寶華菩薩及び一切功德辯才音菩薩は、陀羅尼門を得、八萬俱胝の菩薩は、皆悉く無上菩薩に趣き向ひて退轉せざるを得、三那由他の諸天及び人は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

佛の此の經を說き已りたまふや、功德華菩薩及び一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。』

【四】戒・定・慧・解脫・解脫知見。（一）戒身（佛の身、口・意の三業の、一切の過非を離るる者）（二）定身（佛の眞心、寂靜にして一切の妄心を離るる者）（三）慧身（佛の眞智、圓明にして法性に觀達する者）（四）解脫身（佛の心身、一切の繫縛を解脫する者）（五）解脫知見身（自己の實に解脫せるを知る者）以上を五分法身と曰ひ、佛身を成ずる五種の功德法なり。而して、戒に由つて定を生じ、定に由つて慧を生じ、慧に由つて解脫を得、解脫に由つて解脫知見を得る者にして、又、始の三は、因に由つて名け、後の二は、果に就いて曰へる者なれど、此れを總括して佛身と爲す者とす。

當に阿耨多羅三藐三菩提を得べからしむること、猶悅意如來の刹中の、有らゆる衆生の、常に安樂を受くるが如くなればなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　生ずる所に常に大威德を具し　諸根色力皆殊勝に　智慧無邊にして著する所無し　と。

復次に、功德華、西北方に世界あつて、名けて離垢と爲し、劫を廣族と名く。彼に現に佛あつて、種種勝光明威德王如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、身を轉じて、無量辯才莊嚴の陀羅尼を得て、悉く能く八十倶胝の如來の說く所の法を受持し、得る所の國土の功德莊嚴も、亦西方の極樂世界の如くにして、異ることある無きなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　國土は猶無量壽のの如くにして　甚深なる諸法智を成就し　一生に當に佛の菩提を證すべし　と。

復次に、功德華、東北方に世界あつて、名けて無憂と曰ひ、劫を辯才莊嚴と名く。彼に現に佛あつて、無數劫積集菩提如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、即八十倶胝の諸佛世尊を供養することを爲し、身を轉じて、六十種の言音の辯才を具足せん。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　智慧無邊にして彼岸に到るに　八十倶胝の佛に供ずを如きにて生を轉じて當に妙なる辯才を得べし　と。

復次に、功德華、上方に世界あつて、無量功德莊嚴威德と名け、劫を無量吼聲と名く。彼に現に佛あつて、虛空吼聲淨妙莊嚴光明照如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の

六十俱胝那由他の佛に事へ奉ることを爲し、遍一切處陀羅尼・無盡藏陀羅尼を得ん。乃至、未だ無上菩提を成ぜずとも、終まで更に三惡趣の中に入らず、常に諸佛の刹土に往生することを得て、菩薩の行を修し、無量の惡趣の衆生を度脫して、當に阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざることを得べし。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　獲る所の功德に邊ある無く　決定して當に陀羅尼を得て　無上菩提の果を成就すべし　と。

復次に、功德華、東南方に世界あつて、勝妙莊嚴と名け劫を出生功德と名く。彼に現に佛あつて、千雲雷吼聲王如來と號せり。淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、身を轉じて、佛の四無所畏・四種の神足・大慈・大悲・十八不共の法を得、得る所の國土の功德莊嚴も、亦西方の極樂世界の如くにして、異ることある無きなり。若し女人あつて、能く受持せば、皆悉く轉じて丈夫の身と爲らん。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　不思議なる勝功德を獲　彼れ常に無量の佛に見え　女人は當に丈夫の身を得べし　と。

復次に、功德華、西南方に世界あつて、無量莊嚴と名け、劫を能生妙法と名く。彼に現に佛あつて、最上妙色殊勝光明如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、則ち九十俱胝の諸佛如來に事へ奉ることを爲して、度脫一切衆生三昧を得ん。何が故に名けて、度脫一切衆生三昧と爲すか。若し善男子・善女人は、此の三昧に依つて法を演說する時には、能く三千大千世界の中の惡趣の衆生をして、悉く皆解脫して人天に生ずるを得て、普く安樂を獲、決定して

【二】遍一切處（Vairocana）。法身佛の梵名を毘盧舍那と曰ひ、譯して「遍一切處」と曰ふ。虛空の如く邊際無く、一切の處に滿つる意なり。
【三】無盡藏。德廣くして窮無きを「無盡」と曰ひ、其の德を包藏する者を「藏」と曰ふ。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　當に是くの如き諸の功德を獲べく　亦餘の勝法をも成就し能ひて　速に無上なる佛の菩提を證せん　と。

復次に、功德華、南方に世界あつて、功德寶莊嚴と名け、劫を廣大功德と名く。彼に現に佛あつて、功德寶勝莊嚴威德王如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、身を轉じて、當に日輪光明遍照三昧を得て、諸佛の刹に於て、願に隨ひ往生すべし。亦當に無量の功德にて莊嚴せる佛土を攝受すべし。彼の刹に生じ已つて、三十二相を具し、無礙の辯才を獲、身を轉じて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　身を轉じて當に難思の定を得べく　三十二相以て莊嚴し　一生に當に菩提の果を證すべし　と。

復次に、功德華、西方に世界あつて、離一切憂闇と名け、劫を能勝王と名く。彼に現に佛あつて、一切法殊勝辯才莊嚴如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、毒も害する能はず、刀も傷くる能はず、火も燒く能はず、水も溺らす能はず。此の身を捨て已るや、當に化生を受け、陀羅尼の、名けて百旋と爲せるを獲べし。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

若し人彼の佛の名を受持せば　水火刀毒も害する能ふ無く　身を轉じて當に化生の報を受け　百旋の陀羅尼を成就すべし　と。

復次に、功德華、北方に世界あつて、離塵闇と名け、劫を持大名稱と名く。彼に現に佛あつて、積集無量辯才智慧如來と號せり。若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、則ち

卷の第一百一

功德寶華敷菩薩會　第三十四

唐　菩提流志　漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の耆闍崛山に在して、大比尼の衆千二百五十人と倶にして、復無量の諸菩薩の衆ありき。

爾の時に、會中に、菩薩の、開敷功德寶華と名けたるありしが、卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、是の言を作さく。世尊、我れ如來に於て諸問するあらんと欲す。唯願はくば、哀愍して聽許を垂れられんことを。と。佛は功德華菩薩に告げて言はく。善男子、汝の問ふ所を恣にせよ。當に汝が爲めに說くべし。と。爾の時に、功德華菩薩は、佛に白して言はく。世尊、十方の世界に、頗る現在せる諸佛如來あるを、若し善男子、善女人等にして、名號を受持せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を證得し能ふや。不や。と。佛言はく。善い哉、善い哉、功德華。汝今天・人の世間及び未來世の諸の菩薩等を利益し安樂にせんと欲する爲めに、如來に是くの如き義を問へり。諦に聽け。諦に聽きて善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに說くべし。と。功德華言はく。唯然く、世尊、願うて聞かんことを樂欲す。と。

爾の時に、佛は功德華菩薩に告げて言はく。善男子、東方に世界あつて、一切法功德莊嚴と名け、劫を普集一切利益と名く。彼に現に佛あつて、無量功德寶莊嚴威德王如來と號し、壽命は數無く、其の佛の衆會は無量無邊にして、皆是れ淸淨なる諸大菩薩なるが、若し淨信の善男子・善女人あつて、彼の佛の名を受持せば、卽能く六十千劫の生死の罪を滅除し、[一]身を轉じて、陀羅尼の、名けて樂說無礙と爲せるを得て、凡べて法を說く所に、常に十倶胝の諸佛世尊に爲つて、授くるに辯才を以てして無畏を得しめらる。

【一】身を轉じて。「命終し次生を受けて」の意なり。

じて讃歎せり　我等は讃歎するを見て　即其の歎ずべきを呵し　我等は即之れに問はく　汝は曾て佛を見たるかと　時に於て我れに答へて言はく　我れ生れて適に七日にして　天の佛名を歎ずるを聞きたりと　女は如來の　眞實にして差異無きを讃歎せるを　我等歎ぜざるを聞き已つて　即最勝の心を發して　無上菩提を求めたり　我れ佛名の　故を聞き　宿業に於つて悟ることを得て　即來つて救世を禮したるは　勝法を求めん爲めの故なり　佛に見え禮敬し已つて　最も無上なる法を聞き　人中の尊仙を見たてまつるや　諸の苦の際を離れんことを求めたり　佛の說きたまふ所の法の　眞實にして能く世を度するを　我等中に於て學ぶは無上の法を爲めん故なり　菩薩の行ずる所は　佛の法を得ん爲めの故なるを聞き　我等も亦應に習ふべきは　佛の道を得ん爲めの故なり　說き出したまへる要道の門は　菩薩の應に行ずべき所なれば　我れも亦此の門に趣いて　世に爲つて敬禮せられん　と。

佛は彼れの誠心を知り　熙怡として微笑するや　阿難は即佛に白さく　願はくば笑の因緣を說きたまはんことを　と。

爾の時に、佛は偈を以て阿難に告げて曰はく。

此の諸の婆羅門　及び梵志梵天は　同じく共に一劫の中に　次第に正覺を成ぜん　曾て過去世に於て　具に五百の佛に供じたるが　[七三]今より妙行を以て　當に億數の佛に見え　八十億劫に於て　終まで難處に墮せざるべし　一一の劫の中に於て　當に億數の佛に覲ゆべく　然る後に乃ち當に　最勝なる兩足尊を成ずべし　皆當に同一の號にて　號して梵光明と曰ひ壽命も亦同等にして　壽は八十億歲なるべし　刹土も皆同等にして　各八十億の僧あり　無量の衆を化度し　衆生を利益し已つて　當に泥洹に入つて　寂靜なる滅度を證すべし　と。

佛の經を說き已りたまふや、無垢施菩薩摩訶薩及び諸の大衆・梵天の梵志等・五百の菩薩・大士・波斯匿王・諸の大聲聞の弟子・諸天・八部・人及び非人は佛の所說を聞きて、皆大に歡喜せり。

【七三】今より妙行を以て。異譯本には「此に於て壽終し已つて、」とあり。

當に何と斯の經に名けて、云何に之れを奉持すべきか。佛、文殊師利に告ぐらく。當に名けて、分別說應辯と爲し亦、說三昧門とも名くべく、當に是くの如くに之れを奉持すべし。と。佛の是の經を說ける時に、八萬億の衆生の諸天及び人は、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、必ず退轉せざるに定りたり。

爾の時に、辯嚴菩薩は、佛に白して言はく。世尊、此の無垢施菩薩は、何時當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべきか。と。佛は辯嚴に告ぐらく。善男子、此の無垢施菩薩は、數に過ぎたる劫にて、數に過ぎたる佛を供養し已つて、當に成佛を得べく、號は無垢光相王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊にして、世界の號は無量德莊嚴と曰ひ、聲聞・辟支佛無く、微妙なる嚴飾は諸の天處に勝らん。と。無垢施菩薩は、親しく如來より記名を受くるを聞くや、心淨く踊躍して、虛空の、高さ[七〇]八十億多羅樹に湧在して、大光明の百千億の諸佛の刹土を照せるを放ち、世尊の頂上に當つて、八萬四千の種種なる天寶にて莊嚴せる殊妙なる寶蓋を化作し、即空中に於て、無量の神足力を以て、無量なる十方の諸佛を供養し禮拜し、已にして還つて佛の所に至り、一面に在つて立てり。

爾の時に、[七一]婆羅門の梵天及び五百の婆羅門は、無垢施菩薩に授くる記を聞き、及び神足の變現を見、踊躍歡喜して、一時に同聲にて、偈を以て佛を讃ずらく。

能く佛を恭敬する者は　世の第一の利を得　[七二]發心して菩提を求めば　佛の第一智を爲めん
我等昔惡を造りたれば　今邪見の家に生れて　佛及び僧を見るを得ながら　口を發して惡言を出せり　我れ今誠に心に　惡口にて犯す所の罪　諸賢佛子を見て　是れ不吉と爲すと謂へるを悔ゆ　若し如來　兩足中の最尊に見えずんば　唐しく此の人身を受け　唐しく人の食ふ所を食ふのみ　我れ及び無垢施は　出でて祀祠の故を爲すや　施女は佛子を見　敬ひ重ん

[七〇] 八十億多羅樹。異譯本には「八十億七尺」とあり。「七尺」は、多羅樹の普通の高さを謂ふ者なるべし。

[七一] 婆羅門の梵天及び五百の婆羅門。異譯本には「梵天梵志及び五百の衆」とあり。

[七二] 發心して、乃至、爲めん。異譯本には「若し正覺に稽首せば、便ち平等の法に逮らん。」とあり。

此の無垢施菩薩は、發心して已來、八萬阿僧祇劫に阿耨多羅三藐三菩提の行を行じたり。此の無垢施菩薩は、菩薩の行を修して六十劫を經、然る後に、文殊師子法王子は乃ち菩薩の心を發したるなり。[六七]阿難、文殊師利の等の八萬六千の諸大菩薩の有つ所の功德にて莊嚴せん佛土と爾所の菩薩との如くに、等しくして異るある無し。と。

爾の時に、大德目連は、無垢施菩薩に謂うて言はく。善男子、汝は已に久しく阿耨多羅三藐三菩提の心を發したるに、何を以て女人の身を轉ぜざるや。と。無垢施菩薩は、目連に答へて言はく。世尊は大德を、神足に於ては人中にて最も第一と爲す。と記したまへるに、何すれぞ男子の身を轉ぜざるや。と。大德目連は卽便に默然たり。無垢施菩薩は大德目連に謂うて言はく。亦、女身を以ても阿耨多羅三藐三菩提を得ず。亦、男身を以ても阿耨多羅三藐三菩提を得ず。所以は何ぞ。菩提は無上なれば、是を以て得可からざればなり。と。

授記品第五

爾の時に、文殊師利法王子は、佛に白して言はく。未曾有なり、世尊。此の無垢施菩薩の、乃ち能く甚深の法を善く解し、誓願の力を以て諸の願を成就することや。と。佛は文殊師利に告げて言はく。是くの如し、是くの如し。汝の言ふ所の如し。此の無垢施菩薩は、曾て六十億の佛の所に於て空三昧を修し、八十億の佛の所に於て無生法忍を修し、三十億の佛の所に於て[六八]甚深の法を問ひ、曾て衣服・飮食を以て八十億の諸佛を供養し、及び此の[六九]分別辯の印三昧を問ひたればなり。又、文殊師利、若し善男子、善女人あつて、菩提の爲めの故に、恒河沙の等の如き諸佛の刹土に中に滿ちたる珍寶を持ちて、布施に用ふとも、此の經を受持して、讀誦し通利して、廣く人の爲めに說くには如かず。乃至、但書きて持つ功德すら最上最勝なれば、況んや說の如くに修行するをや。所以は何ぞ。能く諸の菩薩の行法を受持する故を以てなり。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、

【六七】阿難。異譯本には、斯の語無くして「女の成佛せん時に」とあり。而して「復次に文殊師利等」の語を續けたり。

【六八】甚深の法。異譯本には「深妙なる菩薩の道品」とあり。

【六九】分別辯の印三昧。異譯本には單に「印三昧」とあり。

爾の時に、大德阿難は、卽、座より起ち、更に衣服を整へ、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を以て問うて曰はく。

天龍梵音師子の吼　迦陵頻伽雷震の聲　貪瞋癡を除いて喜悅を生ぜしめたまふ　願はくば十力の海笑の緣を說きたまはんことを　六變の震動に嬈す所無く　天の妙華を雨して衆の情を悅ばせ　世尊の諸の外道を摧伏したまふこと　猶師子の野干を伏するが如し　惟願はくば世尊我が爲めに　微笑したまふ所以の因緣を說きたまはんことを　萬億の日月珠と電光と　天龍梵王の諸光明とを　釋迦の口より出づる淨光明は　諸の光明を遏めて佛光勝れたり　眉間の毫相は珂月の如く　圓滿柔軟なること喩へば天衣にして　白毫の放つ光は無量を照せり　願はくば何故に斯の光を放ちたまへるかを說きたまはんことを　世尊の齒は淨くして垢穢無く　方平齊密にして白きこと雪の如く　佛の口は應に雜色の光　青・黃・赤・白・紫・玻瓈を出すべし　假に界壞れ日月落ち　地は滿虛空にして居る處無からしむとも　水の性を變じて火と爲さしむ可く　火の性も亦變じて水と爲す可く　大海も盡く枯竭せしむ可くとも　（六六）如來の實語は終まで二つならず　十方の趣に生ぜる諸の衆生に　假に一時に緣覺を成ぜしめて　一一の緣覺は諸問を集め　百千萬種に億劫を經　盡く共に如來の前に集會し　各異れる音を以て同時に問はしむとも　如來は卽一音を以て報じて　能く彼の衆の無量の疑を斷ちたまふなり　智慧を成就して彼岸に至り　一切の智慧にて莊嚴せられ　三十二の最勝を具したまへる尊　大威德の者願はくば解說したまはんことを　世尊何の緣にて微笑し　何の衆生に菩提の記を授けたまへるか　諸天世人は咸く聞かんと欲す　願はくば如來微笑の音を演べたまはんことを　と。

爾の時に、佛は阿難に告ぐらく。汝、是の無垢施菩薩の、誠實の願を以て、此の三千大千世界を動したるを見たりや。不や。と。阿難は佛に白して言はく。世尊、唯然く已に見たり。佛言はく。

【六六】如來の實語は終まで二つならず。異譯本に「佛の說きたまふ所は、至誠にして、未だ曾て差異有らず。」とあり。

之れを奉行すべし。世尊の說きたまふ所の諸の菩薩の行の如きに、此の法の中に於て、一つの法を行はずとも、則ち十方にて現在法を說きたまへる諸佛を欺誑すと爲さん。と。爾の時に、大德目連は、無垢施女に謂つて言はく。汝敢て佛の前に於て大師子吼するは、菩薩の難行をば豈知らざるか。終まで、女身を以てしては、阿耨多羅三藐三菩提を得ざるなり。と。爾の時に、無垢施女は大德目連に答へて言はく。我れ今佛前にて、誠實なる願を作さん。若し來世に於て、必ず成佛するを得て、如來・無所著・等正覺、乃至、佛世尊・天人師たらば、此の誠實の願を以て、此の三千大千世界をして六種に震動せしめて、諸の衆生に於て惱亂無からしめよ。世尊の說きたまふ所の諸の菩薩行の如きを、我れ形を盡すまで行ぜば、此の實願を以て、虛空の中に於て衆くの天華を雨し、百千の妓樂は鼓たずして鳴り、我れをして、此の女身を變じて、〔六二〕十六の童子と成さしめよ。と。無垢施女の此の誠實の願を發し已るや、卽時に三千大千世界は六變して震動し、虛空の中より衆くの天華を雨し、百千の天樂は鼓たずして自ら鳴り、無垢施女は、卽、女身を變じて十六の童子と成れり。

時に、大德目連は、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、而して佛に白して言はく。世尊、我れ今面り、諸佛菩薩の初めて發意せるより〔六三〕乃ち〔六四〕道場に至るまでを禮せん。世尊、此の女人に、乃ち是くの如き大威德の神足力あつて、能く大願を發し、既に願を發し已るや、願に隨ひ皆成ずればなり。と。佛は目連に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の言ふ所の如し。菩薩は、初めて發意せるより乃ち道場に至るまで、天・人に禮せらるること佛の塔廟の如くなるは、〔六五〕是れ諸の聲聞・緣覺の無上の福田なればなり。と。時に於て、世尊は、熈怡として微笑せるが、諸佛の常法として、若し微笑する時は、口中より卽青・黃・赤・白・紅・紫・玻璃等の種種の色光を出して、無量無邊の諸佛の刹土を照し、諸天・魔宮・日月の精光は皆復た明ならず。還り攝る光明は、頂上より入るなり。

〔六二〕 十六の童子と成さしめよ。異譯本には「男子と爲るを得て、年八歲にして道はん。」とあり。

〔六三〕 乃ち道場に至るまで。異譯本に「諸の菩薩」とあり。

〔六四〕 道場(Bodhimaṇḍala)。釋尊の聖道を成ぜし處(中印度、摩竭陀國の尼連禪河の側なる菩提樹下の金剛座「金剛定に入れる故に名く。」)を謂ふ。此れより轉じて(一)道を得る行法(二)佛を供養する處(三)道を學ぶ處(四)寺院(五)法座の諸事に用ひらる。今は聖道を成ずる者を謂ふ。

〔六五〕 是れ福田なればなり。異譯本には「諸の聲聞及與び緣覺に過ぎたればなり。」とあり。

他の人を嫉まずして　彼れの利を得るを見て喜び　等心にて大慈を行ひ　衆を化するに染著無し　[六一]此の四無量を行じて　智者は善く守護せば　淨土を得ること難き無く　速に無上の道を成ぜん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、清淨なる衆を得ん。何を謂うて四と爲すか。他の徒衆を悕望せざる故なり。和合せざる者をば攝めて和解せしむるなり。學問し誦習する者に、其の須ふる所を給するなり。兩舌を捨離するなり。是れを菩薩は四法を成就して、清淨なる衆を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく。

終まで他の衆を望まず　離るる者をば能く合せしめ　學人に乏しき所を給し　衆生を離別せず　能く此の四事を行じて　便ち清淨なる衆を得るは　衆を淸めん爲めの故に行ずるに　極苦をも亦捨てざればなり　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、願ふ所の佛土に願に隨つて生ずることを得ん。何を謂うて四と爲すか。他の名譽・利養の法中に於て憎嫉を生ぜざるなり。專心に六波羅蜜を修習するなり。一切の菩薩に於て世尊の想を生じ、初めて發心せるより、乃至、道場までを、常に等心にて觀ずるなり。終まで利養・名譽の爲めに諂曲し虛讃せざる故なり。是れを菩薩は四法を成就して、願ふ所の土に隨ひ卽往生することを得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく。

他の名利を憎まず　清淨なる六度を求め　尊に等しくして菩薩を觀　終まで諂つて名を求めず　菩薩此の善を行ぜば　能く十方の界を見て　心の願ふ所に隨ひ　卽其の中に生ずることを得　と。

爾の時に、無垢施女は、佛に白して言はく。世尊、説きたまふ所の菩薩の行の如きは、我れ當に

【六一】此の四無量を、乃至、守護せば、異譯本に「此の四法の無量なるを以て、常に將に護らんとして慈心を懐かば」とあり。

を脫ぎて法座に敷くに以ふるなり。一切に給侍して、終まで疲厭する無きなり。說法の處に詣つて論に勝たんとする心無く、大衆を恭敬して但世尊の想を生ずるなり。多くの衆生に勸めて菩提心を發さしむるなり。是れを菩薩は四法を成就して、八十の隨形好を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

座に敷くに衆の妙衣もてし　供養して疲厭する無く　與に法を持ちて競ふことをせず　衆に勸めて道心を發さしむ　能く此の法を行ぜば　[五五]速に衆好を成ずるを得　[五六]菩薩行に親近せば　好の八十種を具せん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、善き應辯を得ん。何を謂うて四と爲すか。受持して菩薩の法藏に親近するなり。晝夜六時に[五七]三陰の經を誦するなり。諸佛の菩提の無生・無滅にして世の信じ難き所を、然も能く受持し讀誦して、廣く他の爲めに說きて喜悅を得しむるなり。[五八]身命を惜まざるなり。是れを菩薩は四法を成就して、善き應辯を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩藏を護持し　勇猛に三陰を誦し　無生の、世と相違せるを　方便して說いて喜ばしめ　身命を愛せずして　十力の正法を持ち　疑慮無くして　最上なる勝菩提を行ずるなり　此の甚深なる法を修せば　便ち能く應辯の　譬へば雜華鬘の　天人の樂んで見る所の如くなるを得ん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、清淨なる土を得ん。何を謂うて四と爲すか。嫉妬せざる故なり。[五九]等心なる故なり。菩提の所を護る故なり。[六〇]四部の衆に親近せざる故なり。是れを菩薩は四法を成就して、清淨なる土を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

【五五】速に衆好を成ずるを得。異譯本には「道難き無く」とあり。因みに「衆好」は「八十種好」なり。

【五六】菩薩行に親近せば。異譯本に「菩薩是の功德に習ひ已らば」とあり。

【五七】三陰の經を誦するなり。異譯本には「三品の諸佛の經典を誦習し」とあり。

【五八】身命を惜まざるなり。異譯本には「能く說を奉行して、身命を惜まざるなり。」とあり。

【五九】等心なる故なり。異譯本に「心意、常に平等なり。」とあり。

【六〇】四部の衆に親近せざる故なり。異譯本には「四輩に違はざるなり。」とあり。而して理より見るも「親近すべき」を曰へること明なれば、原本の書記の際に、過って「不」の字を加へたる者なるべし。

廢忘せるをば憶念せしめ　恒に意に適へる音を出し　法を說いて疲倦せず　常に諸の定相を修するなり　此の四法を以てせば　咸く宿命を識るを得　能く無量の劫を憶し　[五三]速に佛の行ずる處を悟らん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、常に諸佛に遇はん。何を謂うて四と爲すか。寧ろ身命を捨つとも、法を誹謗せざるなり。寧ろ身命を捨つとも、菩薩を謗らざるなり。寧ろ身命を捨つとも、惡知識に親近せざるなり。諸佛を憶念して厭足する無きなり。是れを菩薩は四法を成就して、常に諸佛に遇ふと爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

菩提を謗らず　亦菩薩を謗らず　樂うて惡知識より離れ　諸佛を念じて厭ふこと無し　[五四]大德行を此に行ぜば　諸佛に値遇するを得て　未だ正覺を成ぜざる頃にも　恒に諸佛と會せん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、三十二相の身を得ん。何を謂うて四と爲すか。諸の珍寶を採つて佛の塔廟に散ずるなり。種種の香油を以て塔の基座に塗るなり。雜華鬘を以て塔廟を莊飾し、種種の妓樂を以ひて以て供養するなり。常に賢聖に給侍して、初より遠ひ離れざるなり。是れを菩薩は四法を成就して、三十二相を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

寶を採つて塔廟に散じ　又香油を以て塗り　雜華と衆の妓樂と　給侍して賢聖に適せば　相莊嚴の身の　端妙にして殊特に好きを具し　此の衆相を得たるを以て　以て人中の尊を嚴らん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、八十の隨形好を得ん。何を謂うて四と爲すか。衆の妙衣

【五三】速に佛の行ずる處を悟らん。異譯本には「疾く佛、衆の導師を成ずることを得ん。」とあり。

【五四】大德行を此に行ぜば。異譯本には「此の聖道德を修習せば、」とあり。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、大なる財富を得ん。何を謂うて四と爲すか。乞ふ者には逆はざるなり。施す所の物に於て愛惜を生ぜざるなり。恒に衆生の、多くの財寶を獲んことを願ずるなり。諸見を捨離して正信に順ずるなり。是れを菩薩は四法を成就して、大なる財富を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく。

施すに心は逆ふ所無く　財に於て悋惜する無く　諸佛の法を信解せば　生生に財富を獲ん
信解するに諂嫉無く　[五一]彼れの過患を訟へず　專心にて一向に信ずる　是の故にて財寶を得ん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、大智慧を得ん。何を謂うて四と爲すか。他の法の中に於て憎嫉を生ぜざるなり。過を除く法を說いて、疑悔無からしむるなり。勤めて精進する者に、勸めて廢せしめざるなり。己身は常に多く空法を修すること樂むなり。是れを菩薩は四法を成就して、大智慧を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

正法を嫉まず　他に敎へて疑悔を除き　常に衆生を將ゐ導き　佛の諸の空行を修するなり
智者は此の法を樂まば　智慧の名稱を得て　善く諸佛の語を解し　速に兩足尊を成ぜん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、宿命を憶ひ識らん。何を謂うて四と爲すか。學問して、忘失する所ある者を誦し習ふなり。憶念を作して、忘れたる者の爲めに說くことを爲すに、恒に意に適へる好聲を出して、人をして樂うて聞かしむるなり。常に法施を行じて、廢すること有らしめざるなり。生死を脫して涅槃に趣き向はん爲めの故に、[五二]善財の如くに、禪の方便に入らんことを願ずるなり。是れを菩薩は四法を成就して、能く宿命を憶すと爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

【五一】彼れの過患を訟へず。異譯本に「未だ曾て人の短を求めず。」とあり。

【五二】善財。是れ「華嚴經入法界品」に在る善財童子なるべきか。若し然らば、文殊師利の所に於て發心し、後、五十三の知識に詣つて、法界に證入せる者なり。

に供養せん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、殊妙なる端正を得ん。何を謂うて四と爲すか。[五〇]諸の荒穢を去つて嗔恚を行はざるなり。樂んで佛の塔廟を淨め、妙飾以て供養するなり。威儀に住して戒を持つなり。先意もて問訊し、說法の者を譏らずして、恒に世尊の想を生ずるなり。是れを菩薩は四法を成就して、殊妙なる端正を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

他人を嗔惱せずして　荒穢の行を去離し　世尊の廟を掃灑して　恭敬して飾寶を獻じ　常に淨戒を持ち　意を發して先に問訊して　法師に於て礙ぐる無く　敬ふこと心に世尊の如くにするなり　此の四つの善事を行ぜば　是れを勇健の者と謂ひ　殊妙なること最も第一にして見る者歡ばざるは莫し　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、能く化生することを得ん。何を謂うて四と爲すか。蓮華を雕刻して佛の形像を坐うるなり。優鉢羅華・鉢頭摩華・拘末頭華・分陀利華及び餘の種種の雜妙なる諸華を以て、滿掬し、以て如來及び諸の塔廟に散ずるなり。無量の衆生を利益せんと志願し、恒に和敬を行ひて、彼れの短所を譏らざるなり。種うる所の善根にて、多くの衆生を利益し安樂にし、生死の苦惱を脫せしめん爲めに、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと願ずる故なり。是れを菩薩は四法を成就して、能く化生を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

華を刻んで尊像を坐ゑ　種種の華もて供養し　利益して衆を惱さずんば　諸佛の刹に化生せん　恒に弘誓の願を發して　十方の衆生を度せんとする　此の四つの妙行を以て　恒に諸佛の刹に生ずるなり　と。

【五〇】諸の荒穢を去つて嗔恚を行はざるなり。異譯本には「未だ曾て瞋恚せず、諍訟瑕穢の結を離るるなり。」とあり。

を成就して、諸の陀羅尼を得と謂ふ。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく。

若し種種なる施を行はば　能く陀羅尼を得　莊嚴せる好婇女も　意の須つ所に隨ひ　悉く皆能く充足させ　常に如來を讃歎し　[四五]諸の實智慧の　世尊の許す所を修するなり　此の四事を以ひば　卽陀羅尼を得て　百千億劫に於て　聞く所を終に忘れず　十方の佛の說く所を　盡く能く受けて憶念せん　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、能く三昧を得ん。何を謂うて四と爲すか。多く生死を厭患するなり。常に閑靜の處を樂むなり。常に勤めて精進するなり。善く能く諸の作す所の業を成就するなり。是れを菩薩は四法を成就して、能く三昧を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

[四六]有らゆる生を捨離し　獨り行くこと麒麟の如く　善男子勤行して　[四七]作す所の業を成就するなり　慧者能く　此の四つの勝妙なる法を成就して　菩提に親近せんと　[四八]諸の最勝の法の寂靜の意を有つ者を求めば　能く諸の三昧を得て　勝菩提たる　諸佛の行ずる處を覺了せんと。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、能く神足を得ん。何を謂うて四と爲すか。身の輕き故なり。心の輕き故なり。一切の法の中に於て依止する無き故なり。[四九]四界を受くるに空界と爲す故なり。是れを菩薩は四法を成就して、能く神足を得と爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく。

身心の輕きことも亦爾く　智者は法に著せず　此の諸の四界を受くること　空界と等を同じうするなり　此の四法を具せば　能く神足に乘ずるを得て　一念に億の刹を過ぎて　爾所の佛

【四五】諸の、乃至、修するなり。異譯本には「智度無極の、諸佛の聖慧を求むるなり。」とあり。

【四六】有らゆる、乃至、麒麟の如く。異譯本には「一切の周旋の處を棄捐して、彼れ一心を修すること虛空の如く。」とあり。

【四七】作す所の業を成就するなり。異譯本には「修業すべき所を、能く究竟するなり。」とあり。

【四八】諸の最勝の、乃至、求めば。異譯本には「佛道の、斯の寂妙なるを遵修せば、」とあり。

【四九】四界。地・水・火・風の四界なり。

と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば　能く光明の、無量の佛土に過ぐるを放たん。何を謂うて四と爲すか。能く燈明を施すなり。法の滅せんと欲する時に正法を護持するなり。能く放逸及び難處に墮せる衆生の爲めの故に、其の所に往いて法を說くことを爲すなり。寶にて飾れる瓔珞を以て佛の塔廟に施すなり。是れを菩薩は四法を成就して、能く光明の十方の刹に過ぐるを放つと爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

若し能く燈明を施し　[四三]法の末の中にて法を護り　難と放逸とを開導し　寶の飾を佛廟に施さば　是の故にて諸の菩薩は　能く淨き光明の　無量の佛土に過ぐるを放ち　照す所は邊涯無く　光を蒙るもの皆安樂にして　卽無上の心を發さん　と。

無垢施女、若し菩薩は能く四法を成就せば、無量無邊の諸佛の刹土を震動し能ふ。何を謂うて四と爲すか。說く所の如くに行ずるなり。深法の忍を得るなり。堅く善法を持つなり。無量の衆生を化して阿耨多羅三藐三菩提に行かしむるなり。是れを菩薩は四法を成就して、能く無量無邊の諸佛の刹土を震動すと爲す。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を明にせんと欲して、偈を說いて言はく。

說く所の如くに修行し　善く深法の忍を解し　白淨の法を得んと欲して　堅く諸の妙行を持ち　能く無量の衆をして　菩提の心を發さしむ　此の四法を行ずる者は　能く無量の刹を動すなり　と。

無垢施女、若し菩薩は四法を成就せば、陀羅尼を得ん。何を謂うて四と爲すか。能く淨妙なる種種の須ふる所のものを施すなり。莊嚴せる諸の婇女をも須むる者には便ち施與するなり。常に種種の法を以て諸の如來を讚歎するなり。[四四]親近して多く般若波羅蜜を修習するなり。是れを菩薩は四法

【四三】法の末。─「末法」を謂ふ。第一卷、同名の解、參照。

【四四】親近して、乃至、修習するなり。異譯本には「既に行ずる所有らば、志、多く、般若波羅蜜に在るなり。」とあり。

憶して　常に諸佛と會し　千萬億劫に於て　恒に難處に生ぜざるか　云何にせば種好[四三]及び三十二相を得　云何に辭辯を善くし　及び應辯を得るか　云何にせば淨土を修め　比丘衆を成就せるに　願樂する所の處に隨ひ　能く彼に生ずることを得るか　導者は何の行を作して　能く色の名稱を得　力精進等を得　云何にして不壞を得たまへるか　云何にして猶豫せずに　能く菩薩の道を行じ　諸の掉悔を去離して　衆生に法を說くことを爲したまふか　佛法の衆中に於て　云何にしても最勝を得んと　寧ろ己が身命を捨つとも　而も法を誹謗せじ
世尊は　今世及び未來を知りたまはざる無し　願はくは大智世尊　次いで菩薩の行を說きたまはんことをと。

菩薩行品　第四

爾の時に、世尊は、無垢施女を讃じて言はく。善い哉、善い哉。汝は多く諸の衆生を安樂にし利益せん爲めの故に、世間の諸の天・人を憐愍する故に、如來に諸の菩薩摩訶薩の斯くの如き行を問へり。諦に聽け。諦に聽きて、善く之れを思念せよ。吾れ當に汝が爲めに分別して解說すべし。と。
時に、無垢施女及び諸の大衆は、皆善い哉と稱し、願うて聞かんと樂欲せり。
爾の時に、世尊は、即便に說くことを爲さく。菩薩は、四法を成就せば、能く諸魔を破らん。何等を四と爲すか。他の利養に於て憎嫉を生ぜざるなり。兩舌を去離するなり。多くの衆生に勸めて善根を種ゑしむるなり。一切の衆生に於て慈愍の心を生ずるなり。無垢施女、是れを菩薩は四法を成就して能く諸魔を破ると爲す。
爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。
憎嫉の心　及以び兩舌の語を生ぜず　能く多くの衆生に　善法の根栽を種うることを教へ　能く廣き慈心を修めて　普く十方に及すなり　善く此の行を行ぜば　能く諸の魔怨を摧かん

【四三】種好。「八十種好」の略なり。

し　云何にせば光明を放つて　無量の稱を顯發するか　願はくは大悲もて世尊　菩提に應ずる行を說きたまはんことを　云何にせば如來の妙音聲を總持するを得　云何にせば能く淸淨なる妙勝の定を修持し　云何にせば諸の行人は　能く神足の力を得るか　今世尊の　諸人の實行を說きたまはんことを勸請したてまつる　云何にせば專念　及與び堅固の心を得　云何にせば應辯の　微妙に具足を成ぜるを得　云何にせば理に順じ　衆義を含むこと圓足して　善く微妙の法を說くに　慧は礙へらるる無きを得るか　云何にせば施惠　淨戒及び忍辱　善精進禪定を樂み　智慧もて世間を照すか　云何にせば宿命を憶し　天眼にて明了に見　天耳他心の智(あり)　神足にて諸刹を過ぐるか　云何にせば胎に處らずして　蓮華の中に化生し　恒に諸佛の前に於て　空無我の法を說くか　云何にせば怨親を等しうして　愛及び荒穢を斷ち志行に高下無きこと　其れ猶風地の如くなるか　利衰及び毀譽　稱義と苦樂とに　云何に八法を捨てて　世に行ずること猶日の如くなるか　云何にせば諂ひ諍はず　我を除き憍慢を捨て　寂靜に禪定に處り　智者は實の義を樂むか　云何にせば　妻子及び財寶を愛樂せず　云何に諸の行人は　閑靜の處を樂むか　云何にせば飛鳥の如く　亦麟の一角の如くに　云何に正法を樂み　及び喜悅の心を樂むか　云何にせば諸の智人は　地水火風を觀ずるに　傾動分別する無く　禪に處ること虛空の如く　非法の行を行はず　他の行を觀ることを樂はず　寧ろ身命を捨つとも　終まで法を捨離せざるか　云何にせば菩提に於て　想を生ずること世尊の如くにし　世尊の想を生じ已つて　能く菩提の願を發すか　云何にせば、[四二]淨土　及與び淸淨の僧を得んと　智者の長壽を得たるを　名を稱して安樂を得　方便もて彼岸に至り　諦を見れども證を取らず　能く無量の衆を度せんと　樂うて善根を行ずることを勸むるか　云何にせば宿命を　せば端正を得　及び化生を得　智慧と財寶多く　能く衆生の心を知るか　云何にせば宿命を

【四二】淨土、乃至、勸むるか。「阿彌陀佛の極樂淨土及び無量壽を成就せるを、稱名して往生し、而も還相廻向として十方に受生する」を指せるに非ざるか。

定せしめん。と。此の菩提は、是れ有なりと爲すか。是れ無なりと爲すか。若し是れ有ならば、是れ有爲の菩提にして、邊見に執へられたり。若し是れ無ならば、則ち是れ虚妄にして、亦邊見に墮せん。と。無癡見菩薩は無垢施女に答へて言はく。此の菩提をば、之れを名けて智と爲す。と。無垢施女は無癡見菩薩に問うて言はく。此の智は名けて、生ずと爲すや。生ずる無しと爲すや。若し名けて生ずと爲さば、則ち是れ善順なる思惟の生ずる所に非ず。是れ有爲の智にして、凡愚の知る所のものなり。若し生ずる無しと名けば、無生の中には有る所無く、若し有る所無くんば則ち分別も無く、菩薩・聲聞・辟支佛・諸の如來の菩提に分別ある無し。凡愚の人は菩提を分別すれども、智慧の人は則ち分別する無ければなり。と。時に無癡見菩薩は卽便に默然たり。

爾の時に、大德須菩提は、諸の大德の聲聞幷に諸の大菩薩に謂うて言はく。諸の大德、我等は宜しく還るべく、須く舍衛城に入つて食を乞ふべからず。所以は何ぞ。無垢施女の說く所は、卽是れ智者の法食なれば、我等、今日は法食を樂んで搏食を須ひざらん。と。無垢施女は、須菩提に問うて言はく。[四〇]說ける諸法の如きは、上る無く下る無きに、此の法の中に於て、何の求むるあつて、乞を行ふに當れるか。大德、法を戲論せざれ。是れ比丘の行ずる所は、戲論を樂む可からざればなり。此れは是れ依る無きの法にして、依止するに非ざる者の行ずる所・賢聖の行じて退轉ある無き所のものなればなり。と。

爾の時に、八大聲聞・八大菩薩・梵天等の五百の婆羅門・無垢施女・波斯匿王及び諸の大衆は、倶に佛の所に詣り、到り已るや、頂にて佛足を禮し、右に遶ること三匝し、卻いて一面に坐せしが、無垢施女は別に遶ること七匝して、頂にて佛足を禮し、合掌して立ち、偈を以て佛に問はく。

我れ無等の尊　應供無量稱　衆に甘露の喜を施したまへるに問ひたてまつる　菩薩は云何なる
行にて　云何にせば道樹に在つて　魔を破り勞怨を降し　云何にせば天地　山王及び林藪を動

【四〇】說ける、乃至、下る無きに。異譯本には「向(サキ)には、舉がる無く下がる無きものを說けるに」とあり。謂はゆる、法の平等、無差別にして、取る所無きを謂ふなるべし。

には卽命を濟ふを得、恐怖の者には卽無畏を得しめん。と。[三八]夫れ畏と言ふ者は、是に取る有るか。取る無きか。若し是れ取る有る者ならば、凡愚の人も亦復取る有らん。是の故に然らず。若し是れ取る無くんば、則ち施す所無く、無施の法の中にて、何にして除くこと有るを得ん。と。觀世音菩薩は卽便に默然たり。辯嚴菩薩は觀世音菩薩に謂はく。善男子、何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。觀世音菩薩は言はく。此の女は、生滅の法を問はず。是の故に答ふ可からず。と。無垢施女は觀世音菩薩に問うて言はく。是の無生・無滅の問を有ち回きか。觀世音は無垢施女に答へて曰はく。無生・無滅の中には乃ち文字・言說無し。無垢施女は觀世音に問うて言はく。諸の智慧者は文字無きに於て假に文字を說き、然も文字に著せざれば、法性には礙無し。是の故に慧者は文字を礙とせず。と。

時に無垢施女は、辯嚴菩薩に謂はく。善男子、汝は言へり。我れ當に是の念を作すべし。願はくば、舍衞城中の衆生の、其の我れを見る者をして、皆辯辯を得て、諸の妙偈を以て互に相ひ問答せしめん。と。善男子、汝の此に施す所の辯辯は、覺を以て起すか。[三九]若し覺を以て起さば、一切の有爲は皆覺觀に由つて起れば、是の故に寂靜に非ず。若し愛を以て起さば、施す所は則ち虛なり。と。辯嚴菩薩は無垢施女に答へて言はく。此れは是れ、我の初めて菩提心を發せる時に、其の我れを見る者は、皆辯辯を得て、諸の妙偈を以て互に相ひ問答せんことを。と願じたるものなり。と。時に無垢施女は、辯嚴菩薩に問うて言はく。善男子、汝今も卽ち菩提心の願を有てりや。若し卽ち有らば、則ち是れ常見なり。若し今無くば、以て彼れに施す可からずして、是の故に願ずる所は則ち虛なり。と。時に辯嚴は卽便に默然たり。

爾の時に、無垢施女は、無癡行菩薩に謂はく。善男子、汝は言へり。我れ是の念を作す。願はくは、舍衞城の衆生の、其の我れを見るある若き者をして、無癡の見を得て阿耨多羅三藐三菩提を決

[三八] 夫れ畏と言ふ者は、乃至、是の故に然らず。異譯本には「療治する所の者は、陰あつて受くるか、受くる所無しと爲すか。設し受くる所有らば、則ち愚夫の以(シワザ)に關する故に、「陰を受くるある無し」とには應ぜざるなり。」とあり。

[三九] 若し覺を以て、乃至、則ち虛なり。異譯本には「設し、念を生じ興立する者(コト)を以てせば、一切衆生は皆、念を興立す。是の故を以て、寂然に至らず。若し、生得する所を以て成就せば、則ち虛妄なり。」とあり。

なり。と。時に寶相菩薩は卽便に默然たり。

時に無垢施女は、離惡趣菩薩に謂はく。善男子、汝は言へり。我れ是の念を作して舍衞城に詣らんと爲す。願はくは、城中の衆生の、應に惡趣に墮すべきある若き者をして、盡く現世に輕く受けしめて、速に苦惱を脫せしめん。と、如來は業の不可思議なるを說きたまふが、此の不可思議の業も速斷す可きか。若し斷ず可くんば、則ち如來の說く所に違はん。若し不んば、云何にして、能く輕く受け速に斷ずることを知らん。若し斷じ能ふとならば、無主の法の中に於て、汝は則ち是れ主なれば、斷じ能ふとする若き者も亦當に能く斷ぜざるべし。と。離惡趣菩薩は無垢施女に答へて言はく。我れ願力の故を以て、輕く受けて速に斷ぜしめ能ふ。と。無垢施女は離惡趣菩薩に問うて言はく。善男子、[三四]諸法は如性なれば、願力を以てして受くべからず。と。離惡趣菩薩は卽便に默然たり。

爾の時に、無垢施女は、除諸蓋菩薩に謂はく。善男子、汝は言へり。我れ當に是の念を作すべし。願はくは、舍衞城中の衆生をして、盡く五蓋を除かしめん。と。汝は是の念を作し是の定に入り已つて、能く衆生をして五蓋に爲つて覆はれざらしめんとせるが、[三五]此の定中に於て、已れは自在なりや。他は自在なりや。若し已れの自在ならば、彼れに及ぶに由無し。一切諸法は彼れに至る者無ければ、云何ぞ汝は禪定に入つて他の五蓋を去らんや。[三六]若し他の自在ならば、則ち他を能く利益するにあらず。と。除諸蓋菩薩は無垢施女に答へて言はく。此の行は慈を以て首と爲す。と。無垢施女は除諸蓋菩薩に問うて言はく。[三七]諸佛は皆慈行を行ずれども、善男子、佛因にて衆生は五蓋を以て患と爲さざる者有り叵きをや。と。除諸蓋菩薩は卽便に默然たり。

時に無垢施女は、觀世音菩薩に謂はく。善男子、汝は言へり。我れ當に是の念を作すべし。願はくは、舍衞城中の衆生をして、牢獄に繫き閉ぢられたるは速に解脫を得、當に死すべきに臨める者

[三四] 諸法は、乃至、受くべからず。
異譯本には「諸法は平等なれば、願を以てして動轉せしむべからず。」とあり。

[三五] 此の定中に於て、乃至、彼れに及ぶに由無し。
異譯本には「三昧は已れに屬するや、他人に屬するや。設し已れに屬せしめば、一切諸法は皆悉く無爲なれば、亦、合會すること無し。」とあり。

[三六] 若し、乃至、利益するにあらず。
異譯本には「設し他人に屬せば、他に於て恩德を造(イタ)す能はず。」とあり。

[三七] 諸佛は、乃至、有り叵きをや。
異譯本には「一切の諸佛は、皆慈心を行じ、亦、佛土を有てども、一切衆生は、故もて、長く盡きず。」とあり。

知も亦知に非ず。文殊師利は無垢施女に答へて言はく。知無きを以て得る無きを得る故に、始際と言ふのみ。無垢施女は文殊師利に問うて言はく。得る無きの中には、言の分ある無く言語の道を過ぎたれば、說く所ある無し。文殊師利は無垢施女に答へて言はく。說くは文字を假りて說くのみ。無垢施女は文殊師利に語つて言はく。諸佛の菩提は字句・言說に過ぎたり。是の故に菩提は則ち說く可からず。と。

爾の時に、無垢施女は、無礙見菩薩に謂うて言はく。汝、善男子は是の言を作せり。我れ是の念を作して舍衞城に詣ることを爲さん。願はくは、城中の衆生をして、必ず定つて應に阿耨多羅三藐三菩提を得べき者をして、其の見る所の物を、盡く是れ如來の像ならしめ、又阿耨多羅三藐三菩提に於て決定せしめん。と。若く如來を見る時には、色身の觀と爲すや。法身を用つての觀と爲すや。若し色身を以て觀ば、則ち佛を見ざること、世尊の我が色身を見我が音聲を聞く者の若きは、彼の人は邊見なれば、我れを見たりと爲すに非ず。と說きたまふが如し。若し法身を以てせば、法身は見る可からず。所以は何ぞ。法身は見聞を離れて取る可からざる故なり。是を以て見聞す可からず。と。時に無礙見菩薩は卽便に默然たり。寶相菩薩は無礙見菩薩に謂うて言はく。善男子、何故に無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。無礙見菩薩は言はく、無垢施女の問ふ所は無性の法にして、此の無性の法は說く可からず。是の故に答へず。と。無垢施女は言はく。善男子、我れ無性の法を問はず。無性の法は問ふ可からざるをば、學び已つて答ふることは則ち礙ある無し。と。

爾の時に、無垢施女は、寶相菩薩に謂うて言はく。善男子、汝は言へり。我れ當に是の念を作して舍衞城に詣らん。願はくは、城中の一切の種族の居家の寶藏をして、七寶を具したるを湧出せしめん。と。汝寶を施す心に、染著有りと爲すや。染著無きや。若し染著有らば則ち凡愚と同じ。所以は何ぞ。凡夫は愛著を有つ故を以てなり。若し愛著無くんば、愛著無き中には、施す寶有る無き

則ち見ること無しと爲さん。と。大德阿那律は卽便に默然たり。大德阿難は阿那律に謂うて言はく。何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。阿那律は阿難に答へて言はく。此の女の問ふ所は、假名を壞することを爲すなり。是の故に假名を以てして答ふ可からず。と。

時に無垢施女は、阿難に謂うて言はく。世尊は大德を、多聞に於て人中にて最も第一と爲す。と記したまふが、是れ實義と爲すや。是れ文字と爲すや。若し是れ實義ならば、[二八]義は說く可からず。若し說く可からざる法ならば、則ち耳識の知る所に非ず。若し耳識の知る所に非ずんば、復說く可からざるなり。若し文字を以てとならば、世尊は說いて、了義に依つて文字に依らざれ。と言ひたまふ。是の故に大德阿難も、亦多く聞けるに非ず、亦義を了せるに非ず。と。大德阿難は卽便に默然たり。文殊師利法王子は大德阿難に謂うて言はく。何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるや。と。阿難は言はく。此の女の問ふ所の多聞は、文字を離れたれば、此れは則ち音聲を以てして答ふ可からず。[二九]平等の平等たる非心を問ふことは、心相を離れたる故に、此れは學地の人の法に非ざれば、我れ何ぞ能く答へんや。此れは是れ、如來法王の彼岸に至れる處なり。と。

菩薩品第三

爾の時に、無垢施女は、文殊師利法王子に謂うて言はく。世尊は汝を[三〇]深き解に於ては菩薩中に於て最も第一と爲す。と言ひだまふが、[三一]汝は十二因緣の深を以てに爲つて深と爲すか。眞深を以てに爲つて深と爲すか。若し十二因緣の深を以て深と爲さば、衆生の成ずる十二因緣の深といふ者ある無し。所以は何ぞ。十二因緣は、來無く去無き故に、眼識の知る所に非ず、耳・鼻・舌・身・意の識の知る所に非ざれば、此の中に、十二因緣として是の行ずる法非ず。若し眞深を以てにて深と爲さば、[三二]眞深は則ち深に非ず。亦眞深を得る者も無し。と。文殊師利は無垢施女に答へて言はく。[三三]始際の深の故を以て深なり。無垢施女は文殊師利に問うて言はく。始際は則ち際に非ず。是の故に汝の

【二八】義は說く可からず。異譯本には「義には言說無し。」とあり。

【二九】平等の平等たる非心を問ふことは。異譯本には「要義の要義たる無心を問ふことは、」とあり。

【三〇】深き解。異譯本には「信解の深妙なること、」とあり。

【三一】汝は、乃至、眞深を以てに爲つて深と爲すか。異譯本には「十二緣の深き故を以て、深きか。自然の深き故を以て、深きか。」とあり。

【三二】眞深は、乃至、得る者も無し。異譯本に「其の自然も自然ある無く、自然に達する者も亦有る所無し。」とあり。

【三三】始際の深の故を以て深なり。異譯本には「本際、深妙なる故に曰うて深と爲す。」とあり。乃ち、始際とは、諸法の無始、無終の窮極の所を謂ふ。只、一切の差別の發現せざる點を以て始際と曰ふ者にして、眞際、實際と謂ふも、見る方面に由つて名を異にするのみ。

と說きたまふが、若く法を說く時には、境界有る法を說くや。境界無き法なりや。若し境界有る法を說かば、則ち凡夫と等し。所以は何ぞ。凡夫は境界有る法を說くを以ての故なり。是を以て、大德は凡夫の法を離れず。若し境界無きものならば、則ち有る所無く、若し有る所無くんば、何ぞ說法は人中にて最も第一と爲すと名けん。と。富樓那は、卽便に默然たり。大德離越は富樓那に謂うて言はく。大德何すれぞ無垢施の女の問ふ所に答へざるか。と。富樓那は離越に答へて言はく。此の女は、有爲を問はずして第一義を問ふなり。第一義の中には則ち言說無し。是の故に理の答ふ可き無し。と。

時に無垢施女は、離越に謂うて言はく。世尊は大德を、禪を行ずるに於て人中にて最も第一と爲す。と記したまふが、大德の禪の時には、有心の禪に依るか。無心の禪なるか。[二七]若し心に依つて禪に入らば、心は幻化の如くにして實ならざれば、此の定も亦復實ならず。若し心無くして禪に入らば、諸の外法たる草木・枝葉・華果等も、亦應に禪を得べし。所以は何ぞ。彼れは無心に同じきを以ての故なり。と。大德離越は卽便に默然たり。大德阿那律は離越に謂うて言はく。何ぞ無垢施女の問ふ所に答へざるや。と。離越は阿那律に答へて言はく。此の女の問ふ所は、諸佛の行ずる處なり。是れ聲聞の答ふる所に非ず。と。時に無垢施女は言はく。諸佛の法と聲聞の法と異るありや。若し是れ異るあらば、無爲に二つありや。諸の賢聖は皆無爲を行ずるに、無爲の法には則ち生ある無く、若し生ある無くんば則ち是れ二つ無く、若し是れ二つ無くば、則ち是れ如のみ。如のみならば二つ無し。是の故に、大德離越、何すれぞ是の說を作さんや。と。

時に無垢施女は、阿那律に謂うて言はく。世尊は大德を、諸の天眼に於て人中にて最も第一と爲す。と記したまふが、大德は天眼を以て見る所に、物有りと爲すや。物無しと爲すや。若し物有りと見ば、則ち常を見ると爲し、若し物無しと見ば、則ち斷を見る、と爲す。若し二つの邊を離れば、

【二七】若し心に依つて禪に入らば。異譯本に「設し心を用ひば」とあり。

分別無きものなれば、此れは則ち言說す可からず。と。
時に無垢施女は、摩訶迦葉に謂うて言はく。世尊は大德を、頭陀は人中にて最も第一と爲す。と記したまひ、又復大德は、衆生を憐愍する故に八解脫に入り已つて、施を受けたまふが、乃至、一念にても他の施を受けば、身を以て報ゆるか。心を以て報ゆるか。若し身を以て報いば、身の性は記する無きこと、喩へば艸木・牆壁・瓦礫等の如くにして異る無し。是の故に、施恩に必ず報ゆる能はず。若し心を以て報いば、心は念念に停らざれば、亦報ゆること能はず。若し身心を除かば、則ち法を爲す無し。若し法を爲す無くば、誰れか能く報ゆる者ぞ。と。摩訶迦葉は卽便に默然たり。
大德須菩提は摩訶迦葉に謂うて言はく。何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。摩訶迦葉は須菩提に答へて言はく。此の女の問ふ所は、法の眞際を問ふなれば、此の理は言を以て宣べ答ふ可からず。と。時に無施垢女は、須菩提に謂うて言はく。世尊は大德を、無諍に於ては人中にて最も第一と爲す。と記したまふが、此の無諍の行は、有の性に入るや如の性に入るや。若し如の性に入らば、如には生の相非ず。如には滅の相非ず。生の相ならざる若き滅の相非ざる若きは、則ち是れ平等なり。若し是れ平等ならば、則ち是れ如のみ。若し是れ如のみならば則ち作る無く、若し是れ作る無くんば則ち言說無く、若し言說無くんば則ち思議す可からず、若し思議す可からずんば、則ち宣べ表す可からざるなり。若し有の性に在らば、有の性は虛誑なり。若し是れ虛誑ならば聖の行ずる所に非ず。と。大德須菩提は、卽便に默然たり。富樓那彌多羅尼子は須菩提に謂うて言はく。何ぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。須菩提は富樓那に答へて言はく。我れ理に於て應に答ふる有るべからずして、唯默然を有つは、是れ我が樂む處なり。此の女の問ふ所は、戲論無き法を問ふなれば、若し言說を有たば、則ち過患を生ぜん。法性をば說く無きは、是れ無諍の行なり。と。
時に無垢施女は、富樓那に謂うて言はく。世尊は大德を、說法に於ては人中にて最も第一と爲す。

【三六】 無諍。異譯本には「閑居に在つて空を行ずる」とあり。

るが　毒を飲みて誰れか能く眠らん　死に處りて誰れか歡ぶあらん　巖に墮ちて何ぞ活を望まん　世相は皆是くの如し　人の蛇の間に處るが如くんば　何ぞ睡と欲とあらん　四大は毒蛇の如くなれば　何ぞ歡樂の心あらんや　諸怨の遶る所と爲ること　餓うるが如くなるに何ぞ樂むあらん　諸怨を爲す國をば　父王も何ぞ樂むあらん　自ら世尊に見えしより　發心して佛を成ぜんと願じたり　王我れ未だ　菩薩の誓くの放逸をも見聞せさるなり　と。

聲聞品第二

爾の時に、無垢施女は舍利弗に謂うて言はく。大德、我れ少しく問ふ所あらんと欲す。願はくば、解說を爲したまはんことを。憐愍の故を以て。世尊は仁者を、智慧の中にて最も第一なり。と記したまふが、此の慧は是れ有爲なるか。是れ無爲なるか。若し是れ有爲ならば、虛誑にして實の法に非ず。若し是れ無爲ならば、無爲の法には則ち生ある無く、無生の法ならば則ち起るある無く、無起なる故を以て大德の智慧は則ち有る所無し。と。舍利弗は即便に默然たり。大德目犍連は、舍利弗に謂つて言はく。大德、何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。舍利弗は目犍連に答へて言はく。此の女は、有爲の法を問はずして、乃ち第一義諦を問へるが、第一義の中にては則ち言說無し。是の故に言を以てして答ふ可からず。と。

時に無垢施女は目犍連に謂うて言はく。世尊は大德を、神足に於ては人中にて最も第一と爲すと記したまふが、大德の神足に乘ずる時には、衆生の想を爲すや。法を作すの想を爲すや。若し衆生の想に任せば、衆生には實無ければ、彼の神足も亦實無し。若し法の想に任せば、法は變異する無し。若し變異無くんば、則ち得る所無し。若し得る所無くんば、則ち分別する無し。と。大德目犍連は、即便に默然たり。摩訶迦葉は目犍連に謂つて言はく。大德、何すれぞ無垢施女の問ふ所に答へざるか。と。目犍連は言はく。此の女は、分別の神足を問はずして、諸の如來の菩提の作無き

來の、在在處處にて法を說く所あれば、心を繫けて往いて聽き、悉く皆若しは文若しは義を受持して、一句をも失はざりき。梵志、我れ日夜に於て、未だ嘗て諸佛世尊を見ざるはあらず。梵志、我れ佛を觀て厭くこと無く、法を聽きて足ること無く、衆に供じて倦むこと無し。と。爾の時、無垢施女の是くの如くに種種に佛・法・衆を讚ぜる時に、[三五]梵天婆羅門等、五百人は、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

時に、無垢施女は、卽車を下り、步み進んで諸の菩薩・聲聞の所に詣り、到り已るや、盡く頂にて其の足を禮し、恭敬尊重の心を以て、大德舍利弗の所に詣り、到り已るや、前んで立つて、舍利弗に謂つて言はく。我れは是れ女人にして、智慧微淺に、諸の煩惱多く、又放逸多く、卑下の事を樂み、不順なる思惟に爲つて牽かる。善い哉、大德舍利弗、我れを憐愍する爲めの故に、微妙の法を說きたまへ。我れ聞くを得已らば、長夜に利益增長して安樂ならん。と。

始め此の事を論ずるや、王波斯匿は其の所に來り至つて、其の說く所を聞きしが、王は無垢施女に命じて言はく。汝は諸の快樂を悉く少く所無きに、何ぞ憂色を爲して睡眠せず、世の樂を樂まさるか。と。時に、王波斯匿は、卽其の女の爲めにとて、偈を說いて言はく。

端嚴なること天女の如く　澡浴して香を塗りたるをば服し　瓔珞等具足せるに　何の憂にて睡眠せざるか　國富みて財寶多く　父母に自由を得たるに　何の樂む可からざるあつて　睡眠せざるか　汝は衆親の意を悅ばせ　諸人悉く敬ひ望み　我れ種種に莊嚴せるに　汝何すれぞ樂まざるか　汝何事を見聞して　此の憂慼を懷くか　善い哉何の願ふ所なりとも　汝我れに此の事を語れ　と。

爾の時に、無垢施女は、偈を以て父王に答へて言はく。

王は家中の　陰界入の諸の羸と　世に居ること幻技の如く　人命の暫くも停る無きとを覺らざ

【三五】梵天婆羅門。異譯本には「梵天梵志」とあり。

其の髪は紺青の如くに　清淨にして右に旋り　佛の面は滿月と　百葉の蓮華の色との如し
毫相は珂雪の如く　右に旋つて人觀るを樂み　黑蜂の遶ると靑蓮と　眉目も亦是くの如し
頻車は師子の如く　眼の眴なること牛王の如く　唇は頻婆果の如く　齒は白く密にして齊平なること　其れ猶白鵝の行れるが如く　舌は廣くして面を覆ひ　音を暢ぶること甚だ清淨にして聞く者皆歡喜す　孔雀鵝雁の聲　音は瑠璃の琴の如く　堅翅衆の鈴の聲　迦陵頻伽の音　拘耶羅鳥の音　命命〔二二〕拘吉羅　及び種種の音樂と　佛の聲も亦是くの如し　其の吼ゆること師子の如くに　能く諸の競論を破し　諸の垢惱を除去し　實語もて諸見を斷じ　大衆に處在して　能く諸の問疑を盡すに　謬らずして和柔に　衆の心を悅可し　二邊を去り離れて　正しく中道を說き　恒に意に適へる音を說きて　音を聞くもの皆歡喜し　口行に諂曲無く　語に隨ひ各解を得るは　佛語の慧の莊嚴なり　雜妙の華鬘の如くに　項圓く臂傭く直く　掌は平にして輪相淨く　手指は纖長にして妙に　爪は赤銅の色の如し　佛の身は堅く平滿にして　細腰なる師子の體　深き齊にして圓好なる　陰藏は馬王の如く　其の身は金山の如くにして　一孔に一毛生じ　右に旋つて上に向けり　其の喩へば龍象の如き　膕き髀と鹿の〔二三〕蹲腸びたる　踝と平に鉤れる鎖骨と　足平にして輪相現じ　千輻具に分明なり　と。

梵志、爾の時に、諸の天子は虛空の中に在つて、此くの如き事を以て如來を讚歎したり。復次に、如來應供は一切の有を度して、彼岸に至らせんと大慈悲を得たること大醫王の如くに、諸の衆生を護らんとして、憎にも愛にも染らさること蓮華の水に在るが如くなり。我れ少分を歎ずるのみ、と。

梵志、我れ生れて適に七日にして、世尊の、是くの如き實の功德を聞きたりしが、爾れより已來、恒に睡眠する無く、亦欲の覺・瞋恚の覺・惱の覺無く、是れより已來、我れ父母・兄弟・姊妹・親屬・財寶・瓔珞・衣服・城邑・園觀及び己身・壽命に於て、盡く戀愛の心無く、唯佛を念ずるを除くのみ〔二四〕。如

〔二二〕拘吉羅。又「拘枳羅」と書す。第二卷、同名の解、參照。

〔二三〕蹲。原本には「蹲」とあれど、誤なれば訂したり。

〔二四〕「如來の」等。此の一句と前句との間に異譯本には「梵志當に知るべし。是れの故を以て、」とあり。

醫の如くに　病める衆生を治し救ふ　佛をば世中の勝　是れ諸法の王と爲すに　此等は是れ佛弟子にして　阿羅漢を成辦せり　是くの如き行の菩薩をば　慧人は云何ぞ離れん　此の妙行を行ずる者は　世人の應に讃ずべき所なり　此等は是れ慧人にして　久遠より常に施を行じたれば　梵志此れを敬はば　衆事の吉なること疑無し　此の具相の者　心淨き良福田を讃ずるを　梵志若し信ぜば　喜を得憂無くして樂まん　と。

爾の時に、梵志は復偈を以て、無垢施女に答へて言はく。

愚小の心に隨ふ勿れ　祠るに沙門を見る莫れ　剃髮して袈裟を被たるに　樂を求めん者は近く莫れ　汝の父母は喜ばずして　[一九]我等は慚愧を懷かん　汝若し施を行はんと欲せば　其の事も亦吉ならず　善い哉此等の諸の比丘を　恭敬する勿れ　と。

爾の時に、無垢施女は、偈を以て梵志に報ずらく。

我れ若し惡道に墮せば　父母諸の眷屬　財寶及び　[二〇]勇健も　盡く救ふ能はざる所なり　彼れ威德の衆を除けば　誰れか我れを救ひ能ふ者ぞ　[二一]佛法衆を敬ふが故に　身及び壽命をも捨てん　尊き三寶を除き已らば　更に依るべき道無ければなり　と。

爾の時に、梵志は無垢施女に問うて言はく。汝未だ曾て佛及び僧を見ず、亦未だ曾て法を聞かざるに、何に由つて此の信を有つか。と。無垢施女は梵志に報じて言はく。我れ初めて生れて七日の時に、高殿の上に處り金足の床に在りしに、五百の天子の虛空に飛行しつつ、無量の功德を以て佛・法・僧を讃嘆するを見たり。我れ時に、復一の天子の、未だ曾て佛を見法を聞き及び衆僧を覩ざるあつて、諸の天子に問うて、佛は何に似たるか。と言へるを聞くを得たり。彼の諸の天子は、我が至心を知り幷に一の天子の問ふ所に答へて、喜悅を生ずることを爲させん故にて、偈を說いて言はく。

【一七】祠祀に、乃至、不吉と爲らん。異譯本に「諸の利を求むるに、義として、必ず意の如くならじ。」とあり。

【一八】此等の、乃至、洗除すればなり。異譯本には「斯等の志行、教化の功德は、諸の祠祀に於て、最も吉安と爲す。」とあり。

【一九】我等は慚愧を懷かん。異譯本には「吾等、當に大明王に啓すべし。」とあり。

【二〇】勇健。異譯本には「神咒」とあり。

【二一】佛、法、衆。本經にては佛、法、僧即ち三寶を謂へり。

をして、盡く現世に輕く受けて、速に苦惱を脫せしむべし。と。[八]除諸蓋菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衛城中の衆生をして、盡く五蓋を除かしむべし。と。[九]觀世音菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衛城中の衆生をして、牢獄に縛ぎ閉ぢられたるは速に解脫を得、當に死すべきに臨めるには卽命を濟ふを得、恐怖の者には卽無畏を得しむべし。と。[一〇]辯嚴菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衛城中の衆生の、其の我れを見る者をして、皆辭辯を得て、諸の妙偈を以て互に相ひ問答せしむべし。と。[一一]無礙行菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衛城中の、衆生の、其の我れを見るある若き者をして、無癡の見を得て阿耨多羅三藐三菩提を決定せしむべし。と。是等の如くに、八大菩薩及び八大聲聞は、共に上の事を論じつつ遂に舍衛城の門に至れり。

爾の時に、城內の波斯匿王の女を、名けて[一二]無垢施と曰ひしが、始めて[一三]年八歲なれども、顏貌端嚴にして世に希有とせられたり。其の女は、[一四]二月八日の[一五]佛星の現るる日に於て、五百の婆羅門と倶に、瓶に滿したる水を持ち、出でて城外に至り[一六]天像を浴洗せんとせり。爾の時に、五百の婆羅門は、諸の比丘の門外に在つて立てるを見、見已るや皆不吉と爲せり。時に婆羅門の衆中の最も長宿の者の、年百二十にして、名けて梵天と曰へるが、無垢施女に謂つて言はく。今諸の比丘は門外に在つて立てり。此の事は不吉なり。我等は宜しく還つて城に入るべく、須く此れを見るべからず。若し此れを見已らば、[一七]祀祠に於ける宜利・吉祥等の事は、皆不吉と爲らん。と。

爾の時に、無垢施女は、偈を以て婆羅門に答へて言はく。

[一八]此等の皆無受にして　第一に應に讃すべき所なるは　能く多くの衆生の爲めに　一切の惡を洗
除すればなり　此等は皆清淨にして　盡く四つの聖諦を見たれども　外道は清淨に非ずして
　兩足尊の福田　此れに施さば報は量無く　此の中に種うる者は
癡冥に爲つて覆はれたり
三有に於て盡くる無し　戒行を淨く具足し　淤泥より出でて著する無く　世に行ずること良

【八】除諸蓋菩薩。異譯本には「棄諸陰蓋」とあり。
【九】觀世音菩薩。異譯本に「光世音」とあり。又「觀自在」とも稱す。第一卷、同名の解(三一三頁)參照。
【一〇】辯嚴菩薩。異譯本には「辯積」とあり。
【一一】無礙行菩薩。異譯本には「超度無虛迹」とあり。
【一二】無垢施(Vimaladattā)。異譯本に「維摩羅達(晉に離垢施と言ふ。)」とあり。
【一三】年八歲。異譯本には「厥の年十二」とあり。又、別の異譯本(得無垢施女經「元魏、般若流支、譯」)にも「年始めて十二」とあり。
【一四】二月八日の佛星の現る日。異譯本には「月の八日の明星の時」とあり。又、別の異譯本には「二月八日、弗沙星の日」とあり。
【一五】佛星(Puṣya)。二十八宿中の鬼宿の星なり。卽ち弗沙星なり。而して「佛」の字は、音標文字とも見らるれど、佛の出家、成道は皆二月八日を用ひたれば、有意の文字とも見るべし。
【一六】天像を浴洗せんとせり。異譯本には「祠壇に詣でて、大祠祀せんと欲せり。」とあり。

べし。願はくば、城中の一切の衆生をして、四聖諦を聞かしめん。と。大德目犍連の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の一切の衆生をして、魔事ある無からしめん。と。摩訶迦葉の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の衆生の、其の我れに施す者をして、無盡の報、乃至、泥洹を獲しめん。と。大德須菩提の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の衆生の、其の我れを見る者に、此の因緣を以て、彼の衆生をして、天上・人中にて諸の快樂を受けて、苦の際を盡すことを得しめん。と。大德富樓那彌多羅尼子の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の一切の外道・梵志・尼犍子等をして、悉く正見を得しめん。と。大德[二]離越の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の一切の衆生をして、諍無きの樂を得しめん。と。大德[三]阿那律の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の一切の衆生をして、宿業の報を識らしめん。と。大德阿難の言はく。我れ當に是くの如き定に入つて、舍衞城に詣つて食を乞ふべし。願はくば、城中の一切の衆生をして、先に聞く所の法をして、皆悉く前に現ぜしめん。と。[四]文殊師利法王子は、是の念を作して言はく。我れ當に舍衞城中の一切の門戸・窓牖・牆壁・器物・樹木・枝葉・華果・衣服・瓔珞をして、皆空・無相・無願・無所有・無我・無戲論・無性の聲を出さしむべし。と。[五]無礙見菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衞城中に、若し衆生の應に阿耨多羅三藐三菩提を得べき者あらば、其の見る所の物をして、皆是れ如來の像ならしめ、又阿耨多羅三藐三菩提を決定せしむべし。と。[六]寶相菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衞城中の一切の族姓の室宅の中の寶藏をして、諸の七寶を具したるを湧出せしむべし。と。[七]離惡趣菩薩は是の念を作して言はく。我れ當に舍衞城中の衆生の應に惡趣に墮すべきある若き者

【二】離越(Revata)。普通に離婆多と書す。佛弟子中、座禪第一なりと曰はる。
【三】阿那律(Aniruddha)。又、阿㝹樓駄と書す。佛の從弟にして、十大弟子中にて天眼第一と曰はる。
【四】文殊師利法王子(Mañjuśrī)妙德、妙首又は妙吉祥などと譯す。普賢菩薩と一對にて、普賢の釋尊の右に在つて理を司るに對して、左にあつて智を司ると曰はる。法王子とは、菩薩は皆、如來法王の子とせらるれども、文殊は、菩薩の上位に在るに由り、特に文殊に稱する者とす。又、小乘の比丘中にて、舍利弗を智慧第一と稱するに對して、文殊を、菩薩中にて智慧なりと稱す。
【五】無礙見菩薩。異譯本には「無虛見」とあり。
【六】寶相菩薩。異譯本には「寶英」とあり。
【七】離惡趣菩薩。異譯本には「棄諸惡趣」とあり。

卷の第一百

無垢施菩薩應辯會　第三十三

西晉　聶道眞　漢譯

序品　第一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に遊んで、大比丘の衆千人と倶なりき。皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡きて復の煩惱無く、諸法の中に於て皆自在を得、作す所已に辦じ、重擔を捨てて己利を逮得し、諸の有の結を盡して正智の解脫を得、心に善解脫を得、慧に善解脫を得、其の心調伏せること大象王の如くにして、心に自在を得て彼岸に到り、八解脫に入りたり。唯阿難一人を除くのみ。復諸の菩薩摩訶薩あり。皆大莊嚴もて衆に知識せられ、不退轉に逮びて盡く一生補處なり。其の名を寶手菩薩・德藏菩薩・慧嚴菩薩・稱意菩薩・觀世音菩薩・文殊師利法王子・悅音法王子・不思議解脫行法王子・思惟諸法無障礙法王子・彌勒菩薩・施無憂菩薩・無礙見菩薩・離惡趣菩薩・無礙行菩薩・斷幽冥菩薩・除諸蓋菩薩・辯嚴菩薩・寶德智威菩薩・金華光明德菩薩・思無礙菩薩、是等の如き菩薩摩訶薩萬二千人は倶なりき。

爾の時に、大德舍利弗・大德目犍連・大德摩訶迦葉・大德須菩提・大德富樓那彌多羅尼子・大德離越・大德阿那律・大德阿難及び文殊師利法王子・無礙見菩薩・寶相菩薩・離惡趣菩薩・除諸蓋菩薩・觀世音菩薩・辯嚴菩薩・無礙行菩薩、是等の如き八大菩薩及び八大聲聞は、晨朝に衣鉢を執持し、舍衞城に入つて食を乞はんと欲せり。時に、道中に於て、各是の念を作し、共に斯の事を論じたり。

爾の時に、大德舍利弗の言はく。「[一]我れ當に是くの如き定に入り已つて、舍衞城に詣つて食を乞ふ

【一】我れ當に、乃至、食を乞ふべし。異譯本（佛說離垢施女經「西晉、竺法護、譯」）に「當に是くの如き像（スガタ）の三昧正受にて、城に入つて分衞すべし。」とあり。

足したり。爾の時に、無畏德菩薩は、自の父王阿闍世に語つて言はく。大王、一切の諸法は皆是くの如くに、即時に忽ち相を化生するに、諸の分別にて起す所の相を離れて、諸の顚倒無きなり。王還、即此の時に女身を復現せん。王見るや、不や。王は已に見たりと言へど、而も我れは、色身の相を以て見るるに非ず。我れの今現に比丘の身を見し已つて、復女身を見すことは。と。佛は王に問うて言はく。何れは是れ實なるか。大王、應當に是くの如くに學ぶべし。一切の法の中に住して、一切の衆生の煩惱に燒るる故を正見するに、法力に達せざるを以ての故にして、達せざる故を以て、疑ふ處に非ざるに於て疑悔を生ずることを。と。當應に數數如來及び文殊師利童子菩薩に親近すべくんば、彼の菩薩の威德の力の故を以てして、大王をして過を悔ゆるを受くることを得しめん。と。

爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。汝此の無畏德菩薩の授記の法門を、受持し諸誦して忘るる勿かれ。阿難、若し善男子、善女人の等あつて、七寶を具足して施して、三千大千世界の諸佛如來に滿すと、若しくば、復人あつて、能く此の無畏德菩薩の授記の法門の一句一偈を受持するとは、聞き已つて受持することの福を得ることは、彼れに過ぎたり。何に況んや、具足して若しは讀み若しは誦して、廣く人の爲めに說き、法の如くに修行することをや。と。如來の此の無畏德菩薩の授記の法門を說きたまへる時に、[五三]月光夫人たる無畏德の母丼に諸の天・龍・阿修羅等は、佛の說を聞き已つて、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

【五三】　月光夫人たる無畏德の母。異譯本には「王の婦、月明」とあり。

の如き樂を受くるなり。と。

爾の時に、無畏德菩薩の母を、號して〔四六〕月光と曰ひしが、阿闍世王と倶に、十指の爪掌を合して佛の所に往き至り、白して言はく。世尊、我れは大利を得たり。我れ九月に於て、此の子を懷娠したれば。然り、此の善男子は、今是くの如き大師子吼を作したれば、我れ今此の善根を迴して阿耨多羅三藐三菩提に向け、此を過ぎて已後に、彼の離垢光世界に於て無上なる正眞の正覺を成ぜんことを。と。是に於て、佛は、尊者舍利弗に告げて言はく。舍利弗、汝今見たりや、不や。答へて言はく。已に見たり。佛言はく。舍利弗、此の月光女は、是の身を捨て已つて忉利天に生じ、號して光明增上天子と曰はん。若くにして、彌勒菩薩の菩提を得る時に、〔四七〕是に彼れは王の上足の子と見れ、彼に於て彌勒佛を供養し已つて、便卽に出家せん。彼れ王子と見れて、彌勒佛の說く所の法に於て、〔四八〕初・中・後の說を盡く能く憶持すれば、次第に皆賢劫の諸佛に見えて、悉く供養することを得ん。是くの如くに、漸次に佛を供養し已り、然る後に、彼の離垢如來の菩提を得る時に、大王と作るを得て七寶を具足し、號して持地と曰へるに於て、彼れは王子と見れて、是くの如き諸の如來を供養し已つて、亦乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、號して遍光如來・應・正遍知と曰ひ、佛の世界を具足し成就せんこと、上に說く所の如きなり。と。

爾の時に、月光夫人は歡喜踊躍して、卽、價直百千兩金の妙寶の瓔珞を脫いで佛に供養し、大王に語り已つて〔四九〕五百の正戒を受け、具に梵行を修めたり。

爾の時に、無畏德菩薩は、如來の前に在つて是くの如き言を作さく。此の誓願の因緣力を以ての故に、我れをして未來に菩提を得ん時に、〔五〇〕諸の菩薩にも亦皆法服を被て一切化生せんことを。此の誓願の因緣を以ての故に、願はくば、如來をして猶年少の〔五一〕八臘比丘の如くならしめんことを。と。無畏德菩薩は是くの如くに、現身に此の語を說き已つて、正法服を被て卽比丘と成つて、威儀を具

【四六】月光。異譯本には「旃羅盧（漢に月明照と言ふ。）」とあり。

【四七】是に彼れは王の上足の子と見れ。異譯本に「國王あつて阿と名くるに、當に太子と作つて、終好と字することを爲すべし。」とあり。

【四八】初、中、後。最初より最後までの意にして「始、中、終」と同じ。

【四九】五百の正戒。比丘尼の持つべき具足戒にして、實數は、三百四十八なり。此れを八波羅夷、十七僧殘、三十捨墮、百七十八單提、八提舍尼、百衆學、七滅諍の七聚に分類しあり。

【五〇】諸の菩薩にも乃至八臘比丘の如くならしめんことを。異譯本には「我が刹中の諸の菩薩をして、自然に長大なる法座に化生し、袈裟、自然に身に著き、等しく老少無く年二十の容色の如くならしめんことを。」とあり。

【五一】八臘。臘は法を修行する歲の名なれば、卽ち生年二十歲にして、比丘戒を受けてより、八年の者を謂ひ、二十八歲に當る。

と已に訖つて、是くの如き言を作さく。不審なり。尊者、諸の大聲聞は、何故に晨朝に如來の所を離れて此に來り至れるか。應に法を聽き已り、然る後に食を乞ふべきに。尊者、且く去れ。我れ正に爾の間に、須臾に彼に到らん。と。無毘德女は、晨朝の時に於て、阿闍世王丼に女の母及び王舍城の無量の人衆の導き從ひ圍遶せると共に、如來の所に至つて如來の足を禮し、却いて一面に坐せしが、彼の諸の聲聞も亦佛の所に至り、佛足を禮し已り、却いて一面に坐したり。

爾の時に、尊者舍利弗は、佛に白して言はく。世尊、此の無畏德女は、是くの如くに奇なる哉、大福利を得たることは。と。佛は尊者舍利弗に語つて言はく。此の無畏女は、已に過去の九十億の佛に於て菩提の心を發し、彼の佛の所に於て諸の善根を種ゑたり。無上なる佛の菩提を求めん爲めの故なり。と。舍利弗言はく。世尊、此の女は女身を轉じ能ふや、不や。と。佛言はく。舍利弗、汝は彼の女を豈是れ女なりと見たるか。汝今應に是くの如き見を作すべからず。何を以ての故ぞ。是の菩薩の發せる願力の故を以て、女身を示現して衆生を度せんが爲めなればなり。と。是に於て、無畏德女は、是の誓言を作さく。若し一切の法に、男非ず女非ずんば、我れをして今は丈夫の身を現ぜしめて、一切の大衆をして皆悉く覩見せしめよ。と。此の語を說き已るや、卽、女身を滅して丈夫の身を現し、虛空に昇り、高さ七多羅樹に住して下らざりき。爾の時に、世尊は卽、尊者舍利弗に語つて言はく。汝、舍利弗、彼の無畏德菩薩を見たりや、不や。虛空に在り、住つて下らざるを。と。舍利弗言はく。已に見たり、世尊。と。佛言はく。舍利弗、此の無畏德菩薩は、復七千阿僧祇劫を過ぎて正覺を成ずるを得、號して離垢如來・應・正遍知と曰はん。彼の佛の世界を名けて光明と曰ひ、佛の壽は百劫に、正法は十劫にして、純菩薩僧は三萬にして不退轉の菩薩なり。彼の佛の世界は、淨き瑠璃の地にして、八道は莊嚴に蓮華に覆はれ、一切の諸の惡道の名ある無く、天・人充滿し、舍利弗、兜率天の微妙なる樂及び勝れたる法味を受くるが如くに、彼の諸天子は、是く

有らゆる三千大千世界の釋・梵・護世の四天王等及び餘の天子、乃至、阿迦尼吒天等は、悉く來つて禮拜し、十指の爪掌を合して、菩薩の所に至つて菩薩の足を拜したり。羅睺羅言はく。是くの如し、是くの如し。と。時に無畏女は〔四一〕羅雲に問うて言はく。是くの如き法を成就せる菩薩にして草座に坐せば、彼の高廣なる大床に坐せるに勝り、及び聲聞の梵天に在るに勝れるなり。と。

爾の時に、阿闍世王は、無畏女に語つて言はく。汝は、此れは是れ釋迦如來の子にして、學戒〔四二〕の中に於て最も第一爲るを知らざるべきか。と。時に無畏女は、父王に語つて言はく。且く止めて、大王、是の說言――羅睺羅は是れ如來の子なり。――を作したまふこと勿かれ。大王、頗は見頗は聞きたまふや。不と以したまふや。師子の王は野干を生めりや、不やを。王言はく。見ざるなり。女言はく。〔四三〕大王頗は見頗は聞きたまふや。轉輪聖王は諸餘の小王を禮敬するや、不と以すやを。答へて言はく。見ざるなり。女言はく。大王、是くの如くにして、如來師子の王は大法輪を轉ずるに、聲聞は闊遠せるなり。大王、若し正法に依つて說かば、何者か是れ如來の眞の子爲るか、則ち應に諸菩薩是れなり。と答へ言ふべし。是の故に、大王、如來に子有り如來に子無し。と說き言ふを得す。若し如來に眞の子有りと說かば、應に、若し阿耨多羅三藐三菩提の心を發さばこれ如來の眞の子なり。と言ふべし。と。此の法門を說ける時に、阿闍世王の宮內の二萬の諸女は菩提の心を發し、二萬の天子は彼の法に滿足し、此の女の師子吼を聞き已つて、菩提の心を發したり。王に復語つて言はく。〔四四〕此れは是れ過去・未來・現在の諸佛の子たらんと、諸の煩惱を離れて聲聞の戒を學べど、云何ぞ眞の子ならん。と。爾の時に、彼の諸天子は、〔四五〕華を以て佛に散じて王舍城に遍うせるは、以て無畏女を供養せん爲めの故なり。

時に無畏女は、彼の床より下り已り、然る後に諸の大聲聞を禮敬して、種種の微妙なる飮食の、若しは舐め若しは嗅ぎ若しは啖ふものを施して、法の如くに彼の諸の聲聞を供養せり。供養するこ

【四一】羅雲。「羅睺羅」に同じ。

【四二】學戒。異譯本に「持戒」とあり。

【四三】大王頗は、乃至、見ざるなり。異譯本には、此れに當るべき文に「當に是の因緣を知りたまふべし。彼れ羅云は、怛薩阿竭（佛を謂ふ。）從りせずして、父母の胞胎の生と爲すことを。」とあり。

【四四】此れは是れ、乃至、眞の子ならん。異譯本には「舍利弗、摩訶目揵連、摩訶迦葉、須菩提、薮越、羅云、阿難、是くの如き報は、法を聞きて皆奉行すれど、猶、是の佛の子に非ず。」とあり。

【四五】華を以て、乃至、故なり。異譯本には「發心し已つて、天華を雨して、遍く羅閱祇大城の中を覆ひ、以て女、無慾憂に供養したり。」とあり。

屣を踏み復高牀に坐して、能く是くの如くに、諸の聲聞と共に論義を往復することや。汝、豈不淨の者の爲めに法を說くことを得ざれ。及び高牀に坐する人の爲めにして法を說くことを得ざれと。いふを聞かざるか。と。時に無畏女は、卽、尊者羅睺羅に語つて言はく。頗は實の如くに淨・不淨を知れりや。尊者羅睺羅、是の世間は淨なりや。不や。羅睺羅言はく。淨・不淨無し。無畏女言はく。如來の制戒を、隨つて受け行じ、而して、彼の戒を犯すを淨・不淨と爲す。[三八]若くならば、復人あつて彼の戒を犯さずんば、淨・不淨非ざるか。無畏女言はく。且く止めよ。且く止めて是の說を作す勿かれ。若しは法を說く如き若しは戒を制する如くにして修行する者をば、彼れを不淨と說くなり。羅睺羅、彼れは無漏の法を證得せる故を以て、彼れには則ち犯すことある無く、犯さざるを以て、彼れには亦淨・不淨も有ること無し。何を以ての故ぞ。諸の聲聞は、諸の說法を過ち諸の制戒を過つを以て、如來は諸の聲聞の學者の爲めに、三界に來つて彼れが爲めに故に說けるなり。而して、彼れ聲聞は、已に三界を過ちたれば是の義を以ての故に過・不過を說くなり。諸界の是くの如くなるに、彼れは戒を覺知する能はざる故を以て淨・不淨を說くなり。而して虛空は唯言說のみあつて、唯智力のみにて見る、是の故にて淨・不淨を說くを[三九]得(ざ)るなり。羅睺羅言はく。淨と不淨と何の差別あるか。無畏女言はく。譬へば眞金の、諸の垢を遠離せる如きは、莊嚴の具を作れると及び作らざる者との色に、何の差別ぞ。羅睺羅言はく。差別ある無し。無畏女言はく。淨と不淨とは、唯名字あつて以て差別を爲すのみ。餘の差別無し。何を以ての故ぞ。一切の法の性は、一切の垢を離れて無染・無著なればなり。と。女は尊者羅睺羅に語つて言はく。高廣の床に坐せるには應に法を說くべからざれ。とは、一切の菩薩は草敷に坐して高床に坐せるに勝り、[四〇]聲聞の梵天に在るに勝れり。羅睺羅言はく。何の義を以ての故ぞ。女言はく。羅雲、頗は菩薩は何の座に坐して菩提を得たるかを見よ。羅睺羅言はく。草座に於て坐したり。女言はく。菩薩は草座に坐せるに、

【三八】「若くならば」の一節羅睺羅の言と見るべし。

【三九】得(ざ)るなり。「不」の字は當然有るべき者と考へ、括弧して(ざ)を入れたり。

【四〇】聲聞の梵天に在るに勝れり。異譯本に「聲聞の、梵天に坐するに過ぎたり。」とあり。

如くに畢竟じて無ならば、云何ぞ、如來は、是くの如き說――恒河沙の等の諸佛は當に正覺を成すべし。――を作したまへるか。女言はく。法界は生ず可しと爲すや。不や。須菩提言はく。生ず可からざるなり。無畏女言はく。諸佛如來は、一切皆是れ法界の性相なり。須菩提言はく。[三四]一切の諸の法界を見ざるや。無畏女言はく。[三五]有らゆる說く所の言語は無漏なるに、而も、恒河沙の等の諸佛は當に正覺を得べし。と說きたまふ此の言は何の趣ぞ。何を以ての故に。法界は不生・不滅なる故に、一切の說も非說も畢竟淨なるを以てなり。故に彼の事に非ざるものを以て、言說して實際より離るべからざるなり。須菩提言はく。汝は甚だ奇なる哉。旣に是れ在家なるに、而も能く是くの如くに善巧に法を說き、復是くの如き無盡の辯才を有つことや。無畏女言はく。須菩提、[三六]取る有るに以て取らざる無く、聞くに以て聞かざる無ければ、若しは在家若しは出家なりとも、而ち辯才を有つなり。何を以ての故ぞ。心淨き故を以て智をして顯ならしめ、智の顯なる故を以て辯才を顯せばなり。と。女は尊者須菩提に語つて言はく。今菩薩の行を善く說くべし。須菩提言はく。汝の說くを我れ聽かん。無畏女言はく。須菩提、菩薩は八種の法行を成就するものなる故に、在家・出家を言ふを得ず。何等か八法なる。須菩提、一には、菩薩は身の清淨を得、定つて菩提を信ずるなり。二には、大慈・大悲を成就して衆生を捨てざるなり。三には、大慈悲を成就せん故に、世間の一切の諸事に善巧なるなり。四には、能く身命の分を捨てて方便善巧を成就するに及すなり。五には、善巧に無量の發願するなり。六には、般若波羅蜜の行を成就して、一切の見を離るる故なり。七には、大勇猛に精進して、以て諸の善業を修めて厭足無き故なり。八には、無障智を得て、以て無生法忍を得る故なり。須菩提、菩薩は是くの如き八法を成就せる故なれば在家・出家を言ふを得ず。何の威儀に隨つて菩提の中に住すとも、障礙ある無きなり。と。

爾の時に、尊者[三七]羅睺羅は、無畏女に語つて言はく。此の言は、乃ち是れ不淨の言說なり。汝實

[三四] 一切の諸の法界を見ざるや。異譯本には「是れを說いて、第一の未生未起と爲すか。」とあり。

[三五] 有らゆる說く所の言語は無漏なるに。異譯本には「說く所は皆第一なり。」とあり。

[三六] 取る有るに、乃至、聞かざる無ければ。此の文は、正則の直譯にては誤讀せられ易きに由り、括弧内の句を挿入せり。

[三七] 羅睺羅(Rāhula)。釋尊の悉多太子たりし時の嫡子にして、十五歲にして出家し、舍利弗を和上として沙彌となり、遂に阿羅漢果を得て、十大弟子中、密行(忍辱)第一と稱せられたり。後に法華の會座にて、大乘に歸向して、佛より、將來に於て蹈七寶華如來と成るべしと授記せられたり。

と言へるが、我れ此れを有つ辯ならば、若し我れ說いて、覺知する所ある無くとも、若しは內若しは外に、則ち辯才有らん。と。時に須菩提は、卽、女に語つて言はく。汝は何を證する所、何に法を得る所にて、是くの如き快妙なる辯才を有てるか。女は卽答へて言はく。自知せざる故に、他に從つて知ることもせず。得る所の善法及び不善法の差別の相に、是くの如くに法を知れば、染淨・有漏無漏・有爲無爲・世間出世間及び凡夫の法を見ず。見ざるを以ての故に、彼の法體は是れ佛と佛の法となるを以て、佛の法を得れども而も佛を見ざるなり。須菩提、若し是くの如くならば、覺する所無ければ、此れを有つ辯才を見んや。須菩提言はく。何の辯才をか云はん。女言はく。須菩提、仁の「得る所とする」如きは、是くの如くにして除滅せり。と。女は、尊者[三二]舍利弗に語つて言はく。彼の法體の如きは、聞くこと無く得ること無くして、而も說く所有り。と。女は、尊者須菩提に語つて言はく。法體は住す可きや不や。復、增減す可きや。不や。として、此の辯才有り能ふ。と。時に、須菩提は卽女に語つて言はく。若し無漏を證せば、法に差別ある無きに及び、辯說無きに及ばん。彼の法體は不可說なる故を以てなり。女は尊者須菩提に語つて言はく。一切法に於て、何を云うて是くの如き念言、——善く其の利を得て、是くの如き辯を得たり。との——を生ぜしか。須菩提言はく。汝は辯を得たる故を以て說くや。得ざる故に說くと爲すや。女は尊者須菩提に語つて言はく。佛の、一切の諸法は響の如し。と說きたまふ如きを信ずるや、不や。須菩提言はく。我れは此の事を信ず。女は言はく。[三三]影・響に辯才有りと爲すや、辯才無きや。須菩提言はく。內の聲の故を以てして、外の響有るなり。女は須菩提に言はく。聲有りと緣ずるを以て彼の響有れど、彼の響には何の性相有りと爲すか。然り、彼の響・聲には性相ある無し。何を以ての故ぞ。若し緣にて生ずることを以てすとも、彼れには生の義無ければなり。須菩提言はく。一切の法は緣にて生ず。無畏女は言はく。一切の諸法の體性は不生なり。須菩提言はく。若し一切の法の體性は、是くの

[三二] 舍利弗。恐らくは「須菩提」の誤記なるべし。當の議論には、舍利弗は何等の關係も無く、頗る唐突なるのみならず、異譯本にも舍利弗の文字無し。

[三三] 影、響に、乃至、無きや。異譯本に「是の響の出づるに、響の像(スガタ)有りと爲すや、無きや。」とあり。

故を以てなり。」と。爾の時に、尊者大迦葉は無畏女に語つて言はく。汝は何佛より是くの如き法を聞きて、正見を得たるか。佛の說きたまふ所の如くんば、正見を發すには二つの因緣あり。他より法を聞くと及び內に思惟するとなり。」と。女は言はく。大迦葉、彼の外聲を藉るは、外聲を聞く故にて後に內に思惟するなり。大迦葉、菩薩大士も、他說を假らず音聲を假らずんば、云何にして寂滅に住することを言はん。迦葉言はく。汝は聞く所の法に隨つて觀察する故に、名けて觀行と爲さん。と。時に大迦葉は、復女に問うて言はく。菩薩は云何に內に自ら思惟するか。女は言はく。大迦葉、[二六]諸の菩薩と共に法を說き事を同うし、而も衆生の相を起さざる若き菩薩は、是くの如くに內觀す。是の故に名けて內觀を成就すと爲す。大迦葉、[二七]一切の諸法に[二八]本際及び[二九]中、[三〇]後際を具足すれども、一切の法は眞如の體なる故を以て、一切の法は現在に眞如の體なる故なり。と是くの若くに觀する者、是れを菩薩は名けて內觀を成就すと爲すことを、應に知るべし。迦葉言はく。汝は云何に此の諸法に安んずるか。女は言はく。大迦葉、[三一]是くの如くに應に作すべし。彼の眞如の如くに、縛も無く解も無しと見るなり。大迦葉言はく。云何にして、而く見るを名けて正見と曰ふか。女は言はく。大迦葉、二邊の見を離るる故にて、作さず作さざるに非ざる若き、是くの如くに見て見ざれば是れを正見と名く。大迦葉、法は唯名字のみあつて、名字を離れたる故は、永く證せざるを以ての故なり。と。時に大迦葉は、復女に問うて言はく。云何にして、自ら見るを得る。無畏女は言はく。尊者大迦葉の見る所の如くなり。大迦葉言はく。我れ自身を見及び我所をも見ず。女は尊者大迦葉に語つて言はく。應當に是くの如くに一切の法を見るべし。我・我所無き故を以て。と。

此の法を說ける時に、尊者須菩提は、心大に歡喜して、無畏女に語つて言はく。善く大利を得て、是くの如き辯才を成就し能ひたり。と。時に、無畏女は卽、尊者須菩提に語つて言はく。須菩提、法には得可き有り得可からざる有つて、而して求めらるるか。而我れに語つて、善く辯才を得たり

の身を空と爲し、諸法の空なるにも、亦是くの如し。」とあり。

【二六】諸の菩薩と共に、乃至、內觀を成就すと爲す。異譯本には「一切天下の人と共に合適して、疎遠ならざるは、是れ則ち菩薩の、身に善を行ずるなり。」とあり。

【二七】一切の諸法に、乃至、應に知るべし。異譯本には「當來の法・過去の法・今の現在の法に、意に增減する無き、是れを菩薩の法を行ずと爲す。」とあり。

【二八】本際。又「前際」とも謂ふ。「過去世」なり。

【二九】中際。「現在世」を謂ふ。

【三〇】後際。「未來世」を謂ふ。

【三一】是くの如くに、乃至、無しと見るなり。異譯本には「二つの事あり。有法も無法も增せず減ぜず。と、是の念を作すなり。是れを自ら身の意行を見ると爲す。是れ身の意行を見るには、則ち見知する所無きを爲すなり。」とあり。

す可けん。と。何かの方便に隨つて、衆生の樂ふ者には、佛は則ち無障礙の身を示現したまふは、方便に住したまふ故なり。然るに、大迦葉の我れに謂へる言に曰はく。彼の世界を見及び彼の佛等正覺を見たりや、不や。と。我れ彼の佛を見れども、[一三]肉眼の見に非ず。肉眼にて視る所の色に非ざるを以ての故なり。[一四]天眼の見に非ず。受無きを以ての故なり。[一五]慧眼の見に非ず。想を離れたるを以ての故なり。[一六]法眼の見に非ず。諸行を離れたる故なり。[一七]佛眼の見に非ず。[一八]識の視を離れたる故なり。迦葉、我れの如來を見ることは、亦尊者迦葉の見る所の如し。無明・[一九]愛見の心を滅したるを以ての故なり。大迦葉、我れの彼の佛を見ることは、亦尊者迦葉の見る所の如し。又復、亦我・我所等をも見ればなり。と。迦葉は女に言はく。若し法にして永く無くば、云何にしてか無明及び愛及び我・我の相を起さんや。有らゆる衆生は見る可からざる故なり。と。女は言はく。大迦葉、是くの如くに一切の諸法は永く無くんば、彼れを云何に見るか。大迦葉の言はく。若し一切の佛の法は畢竟じて是れ無ならば、云何ぞ見る可けん。女は言はく。大迦葉、諸佛の法の[二〇]増長の義を見たりや、不や。大迦葉の言はく。我れ尚諸の凡夫の法をすら知せず。何に況んや、佛の法をや。無畏女は言はく。是の故に尊者大迦葉は、[二一]彼の法をば成就せず。云何となれば、[二二]斷・續を有つてして、證者の見ならざればなり。大迦葉、諸法は永く無にして示現す可らずんば、是の故にて、大迦葉、一切の法は皆無なり。若し法にして本より無ならば、云何ぞ彼の清淨法界を見るべけん。大迦葉、若し清き如來を見んと欲せば彼の善男子・善女人は、應に自の心を淨むべし。と。時に、大迦葉は無畏に語つて言はく。云何にせば、善く自心を淨むるか。と。女は言はく。大迦葉、[二三]自身の眞如及び一切法の眞如の如くに、若し[二四]彼の者も作らず失はずと信ぜば、是くの如きは、自心の清淨を見る故なり。迦葉問うて言はく。自心は何を以て體と爲すか。女は言はく。[二五]空を體と爲す。若し、彼の空として自身を信ずる故を證せんとならば、卽、眞如の空なるを信ぜよ。一切の法性は寂靜なる

[一三] 肉眼。「五眼」の一なり。第二卷同名の解參照。
[一四] 天眼。「五眼」の一なり。
[一五] 慧眼。「五眼」の一なり。
[一六] 法眼。「五眼」の一なり。
[一七] 佛眼。「五眼」の一なり。
[一八] 識の視。「識にて視る可き」の義にして卽ち「認識」の意なるべし。
[一九] 愛見。凡べて、對者の實在を認めて愛情を起すものを「愛見」と謂ふ。又、迷事の惑を「愛」と曰ひ、迷理の惑を「見」と曰ふ。此の時は「愛見」は煩惱の總名となる。
[二〇] 増長の義。「積極的の意義」の意なるべし。
[二一] 彼の法。「佛を見る法」の意なるべし。
[二二] 斷續。斷・常、卽ち實の空無又は實の恒有の一邊に偏したる邊見の意なるべし。
[二三] 自身の眞如、乃至、自心の清淨を見る故なり。異譯本には「能く自ら身の空なるを觀ぜば、諸法の空なるに入り、諸法の空亦滅ぜず亦增せざる、是れを、自ら諸の淨を見ると爲す。」とあり。
[二四] 彼の者。「自心」を指すなるべし。
[二五] 空を體と爲す。乃至、寂靜なる故を以てなり。異譯本の此れに當る文には「空の盡きたる空是れなり。是

めに說法せるを見、彼の說く所の法は、此の處に悉く聞え、佛の神力の故に、復彼の諸樹の微妙なる栴檀の香を嗅ぐを得たるが、彼の世界の佛は、是くの如き言を作さく。是くの如し、是くの如し。無畏女の說く所の如きなり。菩薩は是くの如く初發心の時に、已に聲聞緣覺の境界に過ぎたり。と。

此の法を說ける時に、彌勒菩薩摩訶薩は、佛に白して言はく。世尊、彼の妙樹の香は、何の因緣にて來るか。と。佛言はく。彌勒、是れ無畏女が、諸の聲聞と共に法を論議し、及び誓願を發すが如きを、彼の佛は知り已れる故に、神力を以て是くの如き香及び彼の世界を現じたるにて、彼の上妙なる栴檀の香は、此の三千大千世界に遍きなり。と。

時に、無畏女は目連に語つて言はく。若く是くの如き不可思議なる諸の勝功德を見て、能く狹劣なる小乘聲聞の心を發起して唯自ら度する者をば、當に知るべし。善根の甚だ微少爲ることを。誰れか無量の功德を成就せる菩薩の事を見て、菩提の心を發さざらんや。目連、頗は彼の佛の世界は此を去ること幾何なるかを知れりや。と。答へて言はく。知らざるなり。女言はく。目連、諸の神通に乘じて百千劫を經ば、彼の佛の世界を知り能ひ見能ふとは、是の處あること無し。譬へば、一切の竹葦・叢林の算數すべからざる如き、是等の如き諸佛の世界を過ぎて、方に乃ち彼の香象世界あるなり。と、爾の時に、彼の佛は光明を卷き攝めたるに、旣に光を攝め已るや、香象世界及び彼の如來は勿然として現はれず。

爾の時に、尊者摩訶迦葉は、無畏に謂うて言はく。女は曾て彼の香象世界、及び彼の如來・應・正遍知を見たりや。女は卽答へて言はく。大迦葉、如來をば見る可きや、不や。佛の說きたまふ如くんば、若し色を以て我れを見及び聲を以て我れを求めば、彼れは盡く邪道を行ずるにて、如來を見る能はず。諸の如來の體は、卽是れ法身にして、佛の法は見聞す可きに非ざるを以て、云何ぞ知見

は縁覺乘を受け、幾の數の衆生は佛乘を受くるかを知れりや。目連答へて言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、聲聞は、頗は幾の數の衆生を聲聞は之れを度し、幾の數の衆生を縁覺は之れを度し、幾の數の衆生を佛は能く之れを度したまふかを知れりや。目連答へて言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、聲聞は、頗は幾の數の衆生は[三]定聚に在つて是れ正見の者なるか、幾の數の衆生は邪定聚に住するかを知れりや。目連答へて言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、唯如來正眞の正覺のみあつて、實の如くに善く諸の衆生界を知つて、法を說くことを爲したまへども、是くの如き事は諸の聲聞・縁覺の境界に非ざるなり。況んや餘の衆生をや。目連、當に知るべし。此れは是れ如來の殊勝の事にして、如來は具に一切智を得たまへる故なれば、一切の聲聞・縁覺に無き所なることを。と。時に、無畏女は、復尊者大目連に語つて言はく。世尊は常に、大目犍連は神通の中に於て最も第一と爲す。と記したまへるが、目連は、神通もて能く香象世界に至り能ふを知り、彼の世界の一切の諸樹は皆上妙の栴檀香を出すことを知れりや。不や。と。目連答へて言はく。今始めて彼の世界の名を聞くを得たれば、云何ぞ能く彼の世界に往き至らんや。と。目連は女に問はく。彼の佛は何の名にして、彼處の世界に在つて說法したまふか。と。女は卽答へて言はく。彼の佛を、號して放香光明如來・應・正遍知と曰ひ、彼に在つて法を說きたまふ。と。目連は女に語らく。今は云何にせば、彼の佛を見たてまつるを得んか。と。時に、無畏女は座を起たず威儀を動さずして、誓願を作さく。若し菩薩の初發心の時をして、能く一切の聲聞・縁覺に過ぎしめば、此の誓願を以て、願はくば、彼の放香光明如來は身を此に現じたまひて、諸の聲聞・縁覺をして、彼の香象世界を見、及び上妙なる栴檀香樹を嗅がしめたまはんことを。と。時に、無畏女の此の誓を發し已るや、是に於て、放香光明如來は身より光を放てるに、光を放てる故を以て、時に諸の聲聞は、皆彼の香象世界及び佛の、菩薩の諸衆に圍繞せられ、羅網にて身を隱し、衆の爲

【三】　定聚。「正定聚」に同じ。第三卷、同名の解、參照。

れば大乘に至らんや。舍利弗言はく。汝我れの我が證する所の法を說くを聽け。乘・非乘の差別の相無く、一相なるを以ての故に、謂はゆる無相・無畏なり。女の言はく。若し法にして無相ならば、云何ぞ求められん。舍利弗言はく。無畏德女、諸佛の法と凡夫の法と何の勝負・差別の相あるか。女は尊者舍利弗に語つて言はく。空と寂靜と何の差別あるか。舍利弗言はく。差別無きなり。無畏德言はく。舍利弗空・寂靜に差別・勝負の相ある無きが如くに、諸佛の法と凡夫の法とにも勝負・差別の相ある無し。又舍利弗、亦虛空は能く諸色を受けて差別する無きが如くに、諸佛の法と凡夫の法と差別ある無く亦異る相も無し。と。

爾の時に、尊者大目犍連は、無畏德女に語つて言はく。汝、佛の法と聲聞の法とに何の差別あるを見て、是くの如き諸の大聲聞を見れども、起つて奉迎せず、與に酬對せず、床座を讓らざるか。と。無畏德女は目連に答へて言はく。假に星宿をして、三千に遍滿せしむとも照了する能はず。聲聞も亦爾く、入定の智を以てして照知し能ふなれば、若し定に入らずんば則ち覺知せざるなり。大目連言はく。若し定に入らずんば、則ち衆生の心を知る能はじ。女は言はく。目連、佛は定に入らずして恒河沙の等の世界に於て、應ずる如くに法を說いて、諸の衆生を度するは、善く心を知る故なり。何ぞ、微少なる星宿の光明たる諸の聲聞に況んや。此れは是れ諸佛如來の勝事なり。又、大目連、一切の聲聞は、頗は能く幾の世界の成と幾の世界の壞とを知るありや。大目連言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、聲聞は、頗は幾の數の諸佛は已に涅槃に入り、幾の數の諸佛は未來に當に入るべく、幾の數の諸佛は現在に今入るかを知れりや。目連答へて言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、聲聞は、頗は幾の數の衆生は貪欲多き者、幾の數の衆生は瞋恚多き者、幾の數の衆生は愚癡多き者、幾の數の衆生は等分行の者なるかを知れりや。目連答へて言はく。知る能はざるなり。女言はく。目連、聲聞は、頗は幾の數の衆生は聲聞乘を受け、幾の數の衆生

を長ぜん爲めなり。是の故に、菩薩は衆生を禮敬するなり。而れども諸の聲聞には嗔恨の心無く、又復善根を增長する能はざればなり。大王、假ひ百千の諸佛如來をして妙法を說くことを爲さしむとも、而も彼れの得る所の戒定三昧には增益ある無し。大王、聲聞は瑠璃の如く、菩薩は寶器の如し。大王、譬へば、瓶滿つれば、天の雨を降す時にも、而も一滴をも受けざるが如し。是くの如くに、大王、諸の聲聞の等は、假に百千の諸佛如來をして妙法を說くことを爲さしむとも、而も潤を受くる無く、戒・定・慧等を增益する能はず、亦衆生をして發心して一切智に至らしむることも能はざるなり。大王、譬へば、大海の能く諸の河及び雲・雨等を受くるが如し。何を以ての故ぞ。大海は是れ無量の器なる故を以てなり。大王、諸の大菩薩摩訶薩等の法を演說する時には、隨つて聞く所の者は大福利を得て、一切の諸善根の本を增長す。何を以ての故ぞ。諸の菩薩は、皆是れ無邊なる言說の器なる故を以てなり。と。爾の時に、阿闍世王は女の語を聞き已つて嘿然として住せり。

爾の時に、舍利弗は是くの如き念を作さく。此の無畏德女は大辯才を得て、能く是くの如くに無盡に言說す。我れ今に於ては、前んで其の所に至つて、少少之れを問はん。我れ且く、之れに女は忍を得たりや、不や。を問はん。と。是の念を作し已つて、前んで女に問うて言はく。汝は今聲聞乘に住するを爲すや。答へて言はく。不なり。汝は今緣覺乘に住するを爲すや。答へて言はく。不なり。汝は今大乘心に住するを爲すや。答へて言はく。不なり。舍利弗言はく。若し是くの如くんば何の乘に住するを爲して、能く是くの如くに師子吼するや。女は尊者舍利弗に答へて言はく。若し我れをして今住する所あらしめば、則ち師子吼を作す能はざるなり。我れ住する所無き是の故にて、我れ師子吼を作し能ふなり。而も舍利弗は是くの如き言――何の乘に住するを爲す。――を作せり。。舍利弗の證得する所の法の如きは、彼の法に豈乘の分別あらんか。此れは是れ聲聞・緣覺の乘な

【二】瑠璃。「吠琉璃」と同じ。第一卷、同名の解、參照。

薩は龍象の如し　魔を降し道樹に坐して　無量の衆生を度するなり　【一〇】猶夜の虚空に　見ゆる諸星にては現れざれども　滿月の顯現する故にて　能く閻浮提を照すが如し　聲聞は星宿の如くにして　菩薩は滿月の如し　衆生を愍念する故に　涅槃の道を示現するなり　螢火の光を以ては　作す所あらしめ能はざれども　日光の閻浮を照すや　種種の事を作さしむ　聲聞は螢火の如くなれば　多く利益すること能はざれども　佛は解脱の光を具して　一切の衆を愍念するなり　野干の聲を以ては　獸王をして恐れしむる能はざれども　唯獅子王のみあつて　一吼ゆれば飛鳥も落つ　大王諸の聲聞は　菩提心を發さざれば　衆生を益して　一切の煩惱を除くことを爲さざるなり　大王此れを見たる故に　聲聞の心を發さずして　既に大心を發し已りたれば　云何ぞ小を發すを得ん　大王善く身に　能く無上心を發して　一切の衆を救拔せんと　小乘の道を棄捨するを得ば　善く世間の身を得　復世間の利を得ん　善く來つて世間に在つて　無上心を發し　無上道を希求せば　諸の衆生を救拔せん　若し能く自他を利せば　彼の人は善く嘆ぜられ　亦世の名稱を得　及び究竟の道をも得ん　是れを以ての故に我れ今　聲聞を禮敬せざるなり　と。

爾の時に、阿闍世王は無畏德女に語つて言はく。女は大なる我慢なり。云何となれば、乃ち諸の大聲聞を見て奉迎せざればなり。と。女の言はく。大王、此の語を作したまふこと勿かれ。大王も亦慢なり。云何となれば、王舍城内の諸の貧窮の者を迎へざればなり。と。王は女に語つて言はく。彼れは我が類に非ず。我れ云何ぞ迎へん。女の言はく。初心の菩薩も亦復是くの如し。一切の聲聞・緣覺は類に非ざればなり。王は女に語つて言はく。汝豈諸の菩薩の、皆悉く一切の衆生を禮敬することを見ざるか。女の言はく。大王、菩薩は、憍慢瞋惱の諸の衆生等を度し、彼れをして廻向の心を起すことを得しむるを爲すなり。是の故に、一切の衆生を禮敬するは、衆生の諸の善根の本

【一〇】猶、夜の虚空に、乃至、現れざれども。異譯本には「虚空の中に星宿を滿たせども星宿の衆にては、夜は明けず。」とあり。

影は妙ならざるが　聲聞は蓖麻の如くにして　世を救ふ發心せず　[六]樹王の所に至つては　多くの衆は利益を得るが如くに　諸の菩薩も亦爾く　能く一切の衆を益するなり　秋の陽炎を以ては　諸の小水を竭す能はざれど　大海に至り已らば　能く無量の衆を潤すなり　聲聞の道の狹劣なることも　猶牛の蹄の跡の如くなれば　衆生の有つ所の　諸の煩惱を滅する能はざるなり　[七]諸の小山に上つて　金色の身を現ずるに非ずして　唯須彌山に昇つてのみ　悉く金色の身なるを見るなり　大王諸の菩薩も　亦須彌山の如くにして　彼れの世に住する故を以て世間は解脱を得て　皆是に一色の身として　一切智は具足するなり　聲聞の智は爾らずして　其の猶朝露の　世を潤す能はざるが如きは　法を證せざるを以ての故なり　地の多く增長せるは　無量の衆を潤益するが如く　聲聞は華の露の如くなれども　菩薩は大雨の如くに親近すれば大法を得ること　海の潤す勢の如し　猶躑躅華は　彼の微妙なる香無ければ　男女は樂まざる所にして　唯薝蔔華を喜ぶが如く　[八]青蓮華を求むる如きは　華香は甚だ奇妙なればなり　躑躅の聲聞の如くなるは　彼れの智は衆を潤さざるにて　猶薝蔔華の如き　諸菩薩も亦爾く　衆生を愍念する故に　能く衆生の衆を化するなり　大王頗は曾て知りたまはん何者か大なる奇特なる　一人曠野に在つて　多くの人を利する如き是れなることを　若し善く安隱に　無量の衆生を度せんと欲せば　應に菩提の心を發して　二乘の道を取る勿かるべきなり　世間の曠野の中にて　能く道を失へる衆を濟ふこと　彼の善き導師の如くに　諸の菩薩も亦爾り　大王頗は曾て見たまはん　小栰も大海を度れども　唯彼の大船に乘せてのみ能く無量の衆を度すことを　大王聲聞は栰にして　菩薩は大船の如し　[九]道法を修することゝ薫じ已つて　饑渴の海を度らしむ　大王頗は曾て見たまはん　驢に乘じて陣に入るに堪ふれども　唯象馬に乘じてのみ　鬪戰に便ち勝を得るを見ることを　聲聞は驢乘の如くにして　菩

【六】樹王。異譯本に「譬へば、樹の栴檀香の如きは、」とあり。

【七】諸の小山に、乃至、見るなり。異譯本に「人あつて、須彌に近かば、皆、山に隨つて金色と作るも、若し、其の餘の土石の山ならば、色を以て變形する能はざるが如し。」とあり。

【八】青蓮華(Utpala)。優鉢羅華とも曰ふ。青色の蓮華にして、葉長くして廣く、青白分明にして、大人の目の相に似たりとて多く佛眼に喩ふ。

【九】道法を、乃至、度らしむ。異譯本に「七覺を持ちて一切を度して、愛欲を脫し大海を過らしむ。」とあり。

むることを爲して、更に少芥子の中の空三昧の力を求むる諸の聲聞の人に、而ち禮敬することを欲するありや。大王、頗は諸佛如來の功德智慧の日月の光の如くなるを聞くことを得たるに、是くの如きを聞き已つて、方に乃ち諸の聲聞の人の螢火の蟲を禮敬することありや。諸の聲聞は、唯能く自ら潤し自ら照さんと、他に從つて聲を聞きて、解を得るのみなるを以ての故に。大王[四]佛の涅槃に入りたまひてすら、倘諸の聲聞の人を禮敬せず。何に況んや、今は世尊の世に在すをや。何を以ての故ぞ。大王、若し聲聞の人に親近するあらば、是の人は卽聲聞の心を發し、若し人緣覺の人に親近せば、是の人は卽、緣覺の心を發し、若し正眞の正覺に親近せば、卽阿耨多羅三藐三菩提の心を發せばなり。と。

無畏德女は、是くの如くに說き已り、偈を以て父阿闍世王に報じて言はく。

譬へば人の海に至つて　一文錢を取るが如し　我れ諸の聲聞の　行ずる所を見るに亦是くの如し　大法海に至り已れるに　大乘の寶聚を捨てて　狹劣なる心を起し　小乘の道を修行せんや

人の王に親近して　出入に障礙無きが如きに　王に從つて一錢を乞ふは　彼の人は徒に王に親むのみにして　敬心にて輪王に近き　從つて百千財を乞ひ　無量の貧窮を潤すは　是れを善く王に親むと爲す　人の一錢を求むるが如く　聲聞も亦是くの如くに　眞の解脫を求めずして　小なる涅槃を取るなり　若し狹劣なる心を起し　自ら度すれども他を度せずんば　猶小醫師の　唯自ら己れの身を治する如きなり　譬へば大醫王の　衆多の人を療治するが如くに　善く慈悲の心を起さば　恭敬名稱を得ん　彼の醫の世利を得るは　醫方に達せるを以ての故にして　自ら度して他を度せざるは　智者は恭敬せざるなり　善巧なる醫王の　衆方に通達し已つて　無量千億の　病苦の諸の衆生を救ひて　彼の醫は世間の　恭敬及び名稱を得るが如くに　菩提の心を發せる者は　普く煩惱の病を治するなり　大王[五]蓖麻の林の　華香

【四】佛の涅槃に入りたまひてすら。異譯本に「佛の般涅槃の後」とあり。

【五】蓖麻。「大麻」に似て、種子は絞つて油と爲す。

服を著けて彼處にて坐せり。時に無畏德は、諸の聲聞を見れども、起たず迎へず、默然として住して、共に問答せず。迎へず禮せずして、床座を讓らざりき。阿闍世王は、無畏德の默然として住せるを見、卽之に告げて言はく。汝豈此等は皆釋迦如來の上足の弟子にして、大法を成就し、也世間の福田たるを知らざるか。諸の衆生を愍念する爲めの故を以て、乞食を作せるを、汝今既に見ながら、何故に起たず迎へず禮せず、共に相ひ問はず、復[二]座を讓らざるか。汝今は何事を覩見する故にて、起ち迎へざるか。と。爾の時に、無畏德は、父王に白して言はく。不審なり、大王、轉輪聖王の諸の小王を見て、起ち迎ふるを、頗は見頗は聞きたりや。不や。王言はく。不なり。復言はく。大王、師子獸王の、野干を見たる時に、起ちて迎ふることを爲せるを、頗は見頗は聞きたりや。不や。王言はく。不なり。復言はく。大王、帝釋天王の、餘の天を迎ふるを、頗は見頗は聞きたりや。不や。大梵天王は曾て餘の天衆を禮敬したること有りや。不や。王言はく。不なり。復言はく。大王、大海の神ハ、江・河・池等の神禮敬せるを、頗は見頗は聞きたりや。不や。王言はく。不なり。復言はく。大王、須彌山王の、諸餘の小山王を禮敬せるを、頗は見頗は聞きたりや。不や。王言はく。不なり。復言はく。大王、[三]日月光神の、曾て螢火の蟲を禮敬せることありしを、頗は見頗は聞きたりや。不や。王言はく。不なり。女は言はく。大王、是くの如くに、菩薩の發心して阿耨多羅三藐三菩提に趣向せるは轉輪聖王にして、大慈悲を以て初より發心し已れるに、云何ぞ、大慈悲を離れたる小乘の聲聞を禮敬せんや。大王、頗は已に無上なる正眞の正覺の道を求めたる師子獸王にして、小乘の野干の人を禮するありや。大王、頗は已に大梵道の處を求めて發進せる者にして、當に微少なる善根の聲聞の人に親近すべきありや。大王、頗は大智の海に到らんと欲し、善く大法の聚を知ることを求めんと欲して、牛跡たる聲聞の人を求むるありや。彼れは他に從つて音聲を聞くを以ての故なり。大王、頗は佛たる須彌山に至らんこと欲し、如來の無邊なる色身を求

【二】座。原本に「坐」とあれど「座」の誤記なるべきに由り改めたり。

【三】日月光神。「日天子」「月天子」を指す者なるべし。第四卷、同名の解、參照。

卷の第九十九

元魏　佛陀扇陀　漢譯

無畏德菩薩會　第三十二

是くの如くに我れ聞けり。一時、婆伽婆は王舍大城の耆闍崛山の中に住したまひて、五百の比丘の衆と倶なりき。菩薩摩訶薩は無量無邊なりしが、復八千の菩薩あつて上首爲り。皆三昧及び陀羅尼を得、善く空・無相・無願の三解脫門・善巧・諸通に入り、無生法忍を得たるなり。謂はゆる彌樓菩薩・大彌樓菩薩・常入定菩薩・常精進菩薩・寶手菩薩・常喜根菩薩・跋陀波羅菩薩・寶相菩薩・羅睺菩薩・釋天菩薩・水天菩薩・上意菩薩・勝意菩薩・增上意菩薩摩訶薩の等八千人にて上首爲り。

爾の時に、婆伽婆は王舍城に依つて住せるに、王・王子・諸の婆羅門・長者・居士の若きは、尊重し讃歎して佛を供養せり。爾の時に、世尊は無量百千萬の衆の恭敬し圍繞せるを具有して、說法を爲せり。

爾の時に、尊者舍利弗・尊者大目犍連・尊者大迦葉・尊者須菩提・尊者富樓那・彌多羅尼子・尊者離波多・尊者阿濕卑・尊者優波離・尊者羅睺羅・尊者阿難の、是等の如き無量の聲聞は、其の晨朝に於て、衣を整へ鉢を持ちて王舍城に入り、家より家に至り、法の如くに食を乞ひて、更に餘の緣無かりき。時に、諸の聲聞は、是くの如くに食を乞ひて、漸漸に遂に阿闍世王の住する所の宮殿に到れり。王の所に至り已るや、却いて一面に立ち、默然として住り、乞食及び不乞食を言はざりき。爾の時に、阿闍世王に女あつて、無畏德と名けたり。端正なること、無比・無匹・無雙・無竝・無類にして、最勝殊妙なる功德を成就せり。年始めて十二なりしが、其の父王の堂閣の上に在つて、金寶の

【一】無畏德。異譯本（佛說阿闍貰王女阿術達菩薩經「西晉、竺法護、譯」）には「阿術達」（漢に「無愁憂と言ふ」と割註せり。）とあり。

を放ち、其の光は普く無量の國界を照し、上は梵世に至りしが、還つて如來の頂上よりして入りぬ。爾の時に尊者阿難は是の事を見已るや、心に自ら念じて言はく。如來・應・正等覺は、因緣無くして微笑を現したまふに非ず。と。是の念を作し已つて、卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、是の言を作さく。何の因緣を以て、此の微笑を現したまへるか。と。佛、言はく。我れ念ふに、往昔、千の如來あつて、亦此の處に於て是くの如き法を說きしに、彼の諸の衆會に、各各亦恒河上優婆夷あつて上首爲りき。彼の優婆夷及び諸の大衆は、是の法を聞き已つて皆悉く出家して、無餘涅槃に於て滅度を得ん。と。阿難は佛に白して言はく。當に何と此の經に名け、我等は云何に受持すべきか。と。佛、言はく。此の經を名けて、離垢淸淨と爲し、是の名字を以て汝當に受持すべし。と。此の經を說ける時に、七百の比丘の衆、四百の比丘尼の衆は、諸漏永く盡きて心に解脫を得たり。

爾の時に、欲界の諸天子は、種種なる天の諸の妙華を化作して、佛の上に散じて、是くの如き言を作さく。此の優婆夷は甚だ希有と爲す。能く如來と共に相ひ酬對して、畏るる所無きことや。是の人、已に曾て無量の佛の所にて、親近し供養して諸の善根を種ゑたればなり。と。佛の是の經を說き已りたまふや、恒河上優婆夷及び諸の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して、信受し奉行せり。』

根を積集する。若きは諸の菩薩及び彼の善根は皆不可得なればなり。積集の時に、卽心無きなり。積集に非る時にも亦復是くの如し。恒河上言はく。說く所の無心とは、何の義を明さんと欲するか。世尊は告げて曰はく。此の法は思惟の知り能ふ所に非ず。亦思惟の得能ふ所に非ず。何を以ての故ぞ。此の中の心すら尙得可からず。何に況んや、心の生ずる所の法をや。心の不可得なるを以て、是れを卽說いて不思議の處と名く。此の不思議の處は、得ることも無く證することも無く、染非ず淨非ざるなり。何を以ての故ぞ。如來は、常に一切の諸法は猶虛空の罣礙無きが如しと說く故なり。恒河上言はく。若し一切の法は虛空の如くんば、云何ぞ、世尊は、諸の色・受・想・行・識及び界・處・十二因緣・有漏・無漏是れ染・是れ淨・生死・涅槃有り。と說きたまふか。佛は恒河上に告ぐらく。譬へば、我と說きて言說有りと雖も、而も實には我の相の得可きある無きが如くに、我れ諸の色を說けども、實には亦色の相の得可きある無く、乃至、涅槃にも亦復是くの如し。又陽焰に水の得可き無きが如くに、我れ諸色、乃至、涅槃を說くも亦復是くの如し。恒河上、我が法中に於て梵行を修する者は、一切の法の皆得る所無きを見るものにして、乃ち說いて、眞に梵行を修すと名くべきも、增上慢の人は、得る所有りと說けば、是れ則ち眞の梵行に住すと名けず。我れ、是くの如き增上慢の人は、此の深法を聞けば、大なる驚疑を生じて、生・老・病・死・憂・悲・苦・惱を解脫する能はず。と說かん。恒河上、若し我が滅後に、能く是くの如き甚深にして流轉を斷ずる法を說くものあらんに、愚癡の輩あつて、惡見に由る故にて、是の法師に於て瞋害の心を生じ、是の因緣を以て諸の地獄に墮せん。恒河上の言はく。佛の流轉を斷ずる法と說きたまふ所の如きは、何の義の故を以て、流轉を斷ずと名くるか。世尊は告げて言はく。流轉を斷ずる者は、謂はゆる實際たる不思議の界にして、此の法は穿鑿・沮壞す可からず。是の故に說いて、流轉を斷ずる法と名く。と。

爾の時に、世尊は煕怡として微笑せるに、其の面門より種種の光、靑・黃・赤・白・紅・紫・玻璃の色

爾の時に、世尊は恒河上に問はく。汝は何より來れるか。と。彼の優婆夷は、卽、佛に白して言はく。世尊、若し化人に問うて、汝何より來れるか。と是くの如くに問ふ者に、當に云何に答ふべきか。と。世尊は告げて言はく。夫れ化人ならば、往來ある無く亦生滅無ければ、云何ぞ當に、從つて來る所あるか。と說くべき。又問ふ。諸法は、豈皆化の如くならずや。佛言はく。是くの如し、是くの如し。汝の說く所の如し。恒河上の言はく。若し一切の法は皆化の如くならば、云何ぞ問うて、汝何より來れるか。と問はんや。世尊は告げて曰はく。是れ幻化の人ならば、惡趣に往かず、天上に生ぜず、涅槃を證せざるが、恒河上、汝も亦爾るか。白して言はく。我れ若し身の幻化に異るを見ば、乃ち說いて、善惡の趣に往き涅槃を證すと言ふべきも、我れは身の幻化に異るを見ざれば、云何ぞ說いて、諸の惡趣、乃至、涅槃に往くことを言はん。復次に、世尊、涅槃の性の如きは、畢竟じて、復と善惡ぃ趣及び般涅槃を生ぜず。我れ己れの身を觀ることも亦復是くの如し。佛言はく。汝、豈涅槃界に趣かざるか。恒河上の言はく。此の問を以て生ずる無き者に問ふが如くんば、應に云何に答ふべきか。佛言はく。生ずること無き者は、卽涅槃なり。恒河上言はく。諸法は豈皆涅槃に同じからずや。佛言はく。是くの如し是くの如し。世尊、若し一切の法は涅槃に同じくば、云何ぞ問うて、汝豈涅槃界に趣かざるかと言うか。復次に、世尊、譬へば、化人は化人に謂うて、汝豈涅槃界に趣かざるか。と曰ふが如きに、彼れは是の問に於て、當に云何に答ふべきか。世尊は告げて言はく。此の問ふ所の者には攀緣ある無し。恒河上言はく。如來は豈攀緣する所あるを以てして、斯の問を致さんや。世尊は告げて言はく。然り、我が問ふ所も亦攀緣する無し。但此の會には、善男子及び善女人の、應に成熟せらるべきもの有る爲めの故に、故に斯の問を發せるのみ。何を以ての故ぞ。如來は彼の諸法に於ては、名字をすら猶得可からず。何ぞ諸の法、及び彼の能く涅槃に趣く者を有たんや。恒河上言はく。若し是くの如くんば、云何ぞ菩提の爲めの故に善

を記して曰はく。汝等は當來の世に於て、千劫を過ぎて後に、無垢光明劫中の陽焔世界の雜忍佛の刹に於て、一劫の中に於て、相ひ次いで成佛して、皆同一に字して、辯才莊嚴如來と號して世に出現せん。文殊師利、是くの如き大法門には大威德あれば、能く菩薩摩訶薩及び聲聞乘の者をして、大利益を獲しむるなり。文殊師利、或は善男子・善女人あつて、菩提を求むるを爲すに、方便善巧無くして六波羅蜜を行じて、千劫を足滿すると、若しくば、復人あつて、半月を經る時に、一此の經を書寫し讀誦するとは、獲る所の福聚の比は、前の功德は、百分・千分・百千倶胝、乃至、算數・譬喩も及ぶ能はざる所なり。是の故に、文殊師利、是くの如き微妙の法門、即ち諸の菩薩の契經の本を、我れ今汝に付囑す。汝當に來るべき世に受持し讀誦して、人の爲めに解說せよ。譬へば、轉輪聖王の世に出現するや、有つ所の七寶は皆悉く前に在れど、王の滅する後は寶も隨つて隱れ沒するが如く、是くの如き微妙の法門にして世に流行せば、即ち諸の如來の七菩提分等の法眼は滅せざれども、若し流行せずんば、正法は當に滅すべきなり。是の故に、文殊師利、若し善男子・善女人等にして、菩提を求むることを爲さば、應當に精進を發起して、此の經を書寫し、受持し讀誦し、人の爲めに演說すべし。此れは是れ我が教なれば、後の世に於て悔恨の心を生ずる勿かれ。と。佛の此の經を說き已りたまふや、妙慧菩薩・文殊師利菩薩及び諸の大衆・天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。』

恒河上優婆夷會　第三十一

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は舍衛國の祇樹給孤獨園に在せり。時に、舍衛城に優婆夷の、〔三二〕恒河上と名くるありしが、其の住する處より來つて佛の所に詣り、頂にて佛足を禮し、退いて一面に坐せり。

〔三二〕恒河上。是れ、本名を言はざる者にして、只「恒河の上（ホトリ）の人」と稱し居りたるに非るか。本文中の說話より見るも、然るべきを思ふ。

忍を得たるを以ての故なり。又問ふ。妙慧、汝は今猶女身を轉ぜざるか。妙慧は答へて言はく。〔一九〕女人の相は了に得可からざれば、今何を轉ずる所ぞ。文殊師利、我れ當に汝が爲めに疑惑を除斷すべし。我れの是くの如くに眞實に語る故に由つて。當來の世に於て阿耨多羅三藐三菩提を得ん時に我が法中に於ける諸の比丘の輩は、命を聞き善く來つて、出家して道に入り、我が國土の中の有らゆる衆生の身は皆金色にして、服用・資具は第六天の如くに、飮食豐饒なること念に隨つて至り、魔の事及び諸の惡趣ある無く、亦復女人の名ある無く、七寶の座あつて上に寶網を羅ね、七寶の蓮華は覆ふに寶帳を以てし、文殊師利の成ずる所の淨刹の莊校嚴飾の如くに、等しうして異るある無けん。若し我が此の言にして虛妄に非ずば、今此の大衆の身は皆金色にして、我れの女身も變じて男子を成ずること、三十歲の〔二〇〕知法の比丘の如くならん。と。此の語を說ける時に、此に諸の大衆は皆金色と作り、妙慧菩薩は女を轉じて男と成り、三十歲の知法の比丘の如くなり。是の時に、地居天の衆は、展轉して讚じて言はく。大なる哉、大なる哉。妙慧菩薩摩訶薩の、能く來世に於て菩提を得る時に、嚴淨する佛刹の功德の是くの如くなることとや。と。

爾の時に、佛は文殊師利に告ぐらく。此の妙慧菩薩は、當來の世に於て等正覺を成じ、殊勝功德寶藏如來と號して世に出現せん。と。佛の此の妙を說ける時に、三十俱胝の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉に住し、八十俱胝の衆生は、塵垢を遠離して法眼淨を得、八千の衆生は、皆智證を獲、五千の比丘の菩薩乘を行じて心の退轉せんと欲せるものは、妙慧菩薩の意樂・善根・威德の殊勝なるを見たる故に因つて、各各身に著くる所の上服を脫いで、以て如來に施したてまつり、是くの如くに施し已つて、弘誓を發して言はく。我等は此の善根を以て、決定して、願はくば阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんことを。と。彼の諸の善男子等は、此の善根を以て無上菩提に廻向せる故に、九十劫の生死の苦を超えて、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざるなり。爾の時に、世尊は卽之れ

【一九】女人の相は乃至何を轉ずる所ぞ。異譯本には「是れに於て得る所無し。所以は何ぞ。法には男無く女無ければなり。」とあり。

【二〇】知法。「如法」の誤寫なるべし。異譯本には、此の所を「適に是の語を作すや、便ち男子と成り、頭髮卽ち墮ち、袈裟身に著き、便ち沙彌と爲れり。」とあり。義、當に然るべし。次の「知法」も亦同じ。

爾の時に、文殊師利法王子は妙慧に告げて言はく。汝は何の法に住して、斯の誓願を發せるか。と。妙慧は答へて言はく。文殊師利、問ふ所に非ざるなり。何を以ての故ぞ。[一六]法界の中に於ては、住する所無き故なり。と。又問ふ。云何なるを名けて菩提と爲すか。答へて曰はく。法を分別する無き、是れを菩提と名く。又問ふ。云何なるを名けて菩薩と爲すか。答へて曰はく。一切の諸法を虛空の相に等しうする、是れを菩薩と名く。又問ふ。云何なるを菩提の行と爲すか。答へて曰はく。猶陽焰・谷響の行の如くなるは、是れ菩提の行なり。又問ふ。何の密意に依つて是くの如き說を爲すか。答へて曰はく。我れは此の中に於て、少しの法も密・非密なる者を見ず。又問ふ。若し是くの如くんば、一切の凡夫は應に即菩提なるべし。答へて曰はく。汝は菩提は凡夫に異りと謂ふや。是の見を作す莫かれ。何を以ての故ぞ。此等は皆同一なる法界の相にして、取る非ず捨つる非ずして、成壞無き故なり。又問ふ。此の義の中に於て、解了し能ふ者は其の數幾何ぞや。答へて曰はく。若干の幻化の心・心所の量の如き若干の幻化の衆生は、能く斯の義を了す。文殊師利言はく。幻化は本より無きに、何ぞ是の心・心所の法の如きを有たん。答へて曰はく。法界も亦爾く、有に非ず無に非ず。乃至、如來も亦復是くの如し。と。爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく。世尊、今此の妙慧は、甚だ希有と爲す。乃ち能く是くの如き法の忍を成就せることは。と。佛言はく。是くの如し、是くの如し、誠に言ふ所の如し。然るは、此の童女は、已に過去に於て菩提心を發し、[一七]三十劫を經て、我れ乃ち無上菩提に發趣したるが、彼れは亦、汝をして無生忍に住せしめたるなり。と。

爾の時に、文殊師利は、即、座より起ち、其の爲めに禮を作して、妙慧に白して言はく。我れ往昔の無量劫前に於て、已に曾て供養して、今は還親近を得たりとは謂はざりき。と。妙慧は告げて言はく。文殊師利、汝今是くの如き分別を起す莫かれ。何を以ての故ぞ。[一八]分別する無くして、無生

【一六】法界の中に於ては住する所無きなり。異譯本に「諸法は計數すべからず、亦、住する所無し。乃至仁の是の問を作すは問はざるに如かず。」とあり。

【一七】三十劫を經て、乃至、住せしめたるなり。異譯本には「仁の前に先だつこと三十億劫にして、仁乃ち彼れに於て無上正等度の意を發し、適に甫めて、乃ち無所從生法忍に入りたれば、是れ仁の本、發意に造れる時の師なり。」とあり。

【一八】分別する無くして、乃至、故なり。異譯本には「無所從生法忍は、亦念ずる所も無く、亦師あることも無し。」とあり。

一には、他の求むる所あらば、施して滿足せしむるなり。二には、諸の善法に於て深く信解を生ずるなり。三には、諸の菩薩に於て莊嚴の具を施すなり。四には、三寶の所に於て勤めて供養を修するなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

他の求むる所あらば滿足せしめ　深法を信解して嚴具を捨し　三寶の福田に勤めて供養せば
命終の時に臨んで佛は前に現ぜん　と。

爾の時に、妙慧童女は、佛の說くを聞き已るや、白して言はく。世尊、佛の說きたまふ所の如き菩薩の諸行をば、我れ當に奉行すべし。世尊、若し我れ是の四十行の中に於て、一行を闕きて修せずんば、則ち佛の敎に違ひ、如來を欺誑するなり。と。爾の時に、大目犍連は、妙慧に告げて言はく。菩薩の行は甚だ行ぜられ難ければ、汝今斯の殊勝なる大願を發すとも、豈是の願に於て自在なることを得んや。と。爾の時に、妙慧は白して言はく。尊者、若し我が弘なる願にして、眞實にして虛しからず、能く諸行をして圓滿なるを得しめば、願はくば、此の三千大千世界は六種に震動し、天より妙華を雨し、天鼓自ら鳴らんことを。と。是の語を說ける時に、虛空の中に於て、華の散ずること雨の如く、天鼓自ら鳴り、三千大千世界は六種に震動せり。是の時、妙慧は重ねて目連に白さく。[一四]我が是くの如き眞實の言を以ての故に、未來の世に於て當に成佛を得べきことも、亦今日の釋迦如來の如くにして、我が國中に於ては、魔の事及以び惡趣・女人の名ある無けん。若し我が此の言にして虛空に非ずんば、斯の大衆の身をして皆金色ならしめよ。と。是の語を說き已るや、衆は皆金色なり。爾の時に、尊者、大目犍連は卽座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、頂に佛足を禮して、白して言はく。[一五]世尊、我れ今先づ、初めて發心せる菩薩及び諸の菩薩摩訶薩の衆に禮す。と。

【一四】我が是くの如き、乃至、女人の名ある無けん。異譯本には「是れ、則ち我れの至誠を證明せるなれば、若し未來に菩薩の意を起す者あらば、亦當に、是く――我れも後に久しからずして、亦當に如來、無所著、等正覺の如くなるべし。――の如くなるべし。」とあり。

【一五】世尊、我れ今、乃至、禮すべし。異譯本に「今、諸一切の、初めて大意を發して菩薩と爲れる者に、我れ當に自ら歸して、之れが爲めに禮を作すべし。所以は何ぞ。八歲の女子すら、感應すること此くの如し。豈ぞ況んや、高士の摩訶薩をや。」とあり。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、言ふ所を人信ぜん。何等を四と爲す。一には、發言と修行とを常に相應せしむるなり。二には、善友の所に於て諸惡を覆はざるなり。三には、[八]聞く所の法に於て過失を求めざるなり。四には、法を說く者に於て惡心を生ぜざるなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

發言と修行とは常に相應し　己れの罪を善友に藏さず　經を聞きて人の法の過を求めずんば
言ふ所を一切は皆信受せん　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、[九]能く法の障を離れて速に清淨を得ん。何等を四と爲す。一には、深き意樂を以て[一〇]三律儀を攝むるなり。二には、[一一]甚深の經を聞いて誹謗を生ぜざるなり。三には、[一二]新發意の菩薩を見て一切智の心を生ずるなり。四には、諸の有情に於て大慈平等なるなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

深き意樂を以て律儀を攝め　甚深の經を聞いて能く信解し　[一三]初發心を敬ふこと佛の如くに想ひ
慈心もて普く洽らせば障は消除せん　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、能く諸魔を離れん。云何なるを四と爲す。一には、法性の平等なるを了知するなり。二には、精進を發起するなり。三には、常に勤めて佛を念ずるなり。四には、一切の善根を皆悉く廻向するなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

能く諸法の平等なる性を知り　常に精進を起して如來を念じ　一切の諸の善根を廻向せば　衆魔は其の便を得る能はず　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、命終の時に臨んで諸佛は前に現ぜん。何等を四と爲す。

【八】聞く所の法に於て過失を求めざるなり、別に異譯本に「人の說法を聞いて、是非を言はざるなり。」とあり。

【九】能く法の障を離れて速に清淨を得ん。異譯本に「殃罪無きを得て、作す所の善行は、疾く淨住するを得ん。」とあり。

【一〇】三律儀。異譯本に「戒と三昧と智慧と」とあり。

【一一】甚深の經を聞いて誹謗を生ぜざるなり。異譯本には「心意に念ずる所は、常に善に志すなり。」とあり。

【一二】新發意の菩薩を見て一切智の心を生ずるなり。異譯本には「初發心の菩薩には、意に便ち一切智を起して、度脫する所多きなり。」とあり。

【一三】初發心を敬ふこと佛の如くに想ひ。異譯本には「當に人に一切智を敬ふべし。」とあり。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、當に佛前に於て化生を受けて、蓮華の座に處るを得べし。何等を四と爲す。一には、諸の華果及び細末の香を捧げて、如來及び諸の塔廟に散ずるなり。二には、終まで他に於て妄に損害を加へざるなり。三には、如來の像を造りて安に蓮華に處くなり。四には、佛の菩提に於て深く淨信を生ずるなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

華香を佛及び支提に散じ　他を害せず幷に像を造り　大菩提に於て深く信解せば　蓮華に處つて佛前に生ずることを得　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、一佛土より一佛土に至らん。何等を四と爲す。一には、他の善を修むるを見て、障惱を爲さざるなり。二には、他の法を說く時に、未だ嘗て留礙せざるなり。三には、燈を然して如來の塔を供養するなり。四には、諸の禪定に於て常に勤めて修習するなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

人の善を修め正法を說くを見て　謗毀を生じ留難を加ふることをせず　如來の塔廟に燈明を施し　諸禪を修習せば佛刹に遊ばん　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、世に處して怨無けん。云何なるを四と爲す。一には、諂無き心を以て善友に親近するなり。二には、他の勝法に於て嫉妬の心無きなり。三には、他の獲る名譽を心に常に歡喜するなり。四には、菩薩の行に於て輕んじ毀る心無きなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

諛諂を以て善友に親まず　人の勝法に於て妬む心無く　他の得る名譽を常に歡喜し　菩薩を謗らずんば怨無きを得ん　と。

諦に聽け、諦に聽きて、善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに說くべし。と。妙慧は白して言はく。唯然く、世尊、願はくば聞かんことを樂欲す。と。

佛言はく。妙慧、菩薩は四法を成就せば、端正の身を受く。何等を四と爲すか。一には、惡友の所に於て嗔の心を起さざるなり。二には、大慈に住するなり。三には、深く正法を樂ふなり。四には、佛の形像を造るなり。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

嗔は善根を壞れば增長すること勿かれ　慈心もて法を樂ひ佛像を造らば　當に相の莊嚴を具せる身にて　一切衆生の常に樂んで見ることを獲べし　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、富貴の身を得。何等を四と爲す。一には、時に應じて施を行ふなり。二には、輕んじ慢る心無きなり。三には、歡喜して與ふるなり。四には果報を希はざるなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

時に應じて施を行ひて輕んじ慢る無く　歡喜して授與して希求せず　能く此の業に於て常に勤修せば　生るる所に當に大財の位を獲べし　と。

復次に、妙慧、菩薩は四法を成就せば、眷屬壞れざるを得。何等を四と爲す。一には、善く離間の語を棄捨し能ふなり。二には、邪見の衆生を正見に住せしむるなり。三には、正法の將に滅せんとするに、護つて久しく住らしむなり。四には、諸の有情をして佛の菩提に趣かしむるなり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

離間の言及び邪見を捨て離し　正法の將に滅せんとするを能く護持し　衆生を大菩提に安住せば　當に諸の眷屬を壞らざることを成ずべし　と。

【七】善く離間の語を棄捨し能ふなり。異譯本には「惡說を傳へて、彼れ此れを鬪亂せしめざるなり。」とあり。

卷の第九十八

妙慧童女會　第三十

唐　菩提流志　漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の耆闍崛山の中に在して、大比丘の衆千二百五十人・菩薩摩訶薩十千人と倶なりき。

一時に、王舍城に長者の女あつて、名けて二妙慧と爲せしが、年始めて八歲にして面貌端正に、容色姝好に、諸相具足して見る者歡喜せり。曾て過去の無量の諸佛に於て、親近し供養して、諸の善根を種ゑたればなり。時に、彼の女人は如來の所に詣り、頂にて佛足を禮し、右に遶ること三帀して、長跪し合掌して、偈を說いて言はく。

無上等正覺は　世の大明燈爲り　菩薩の行ずる所を　唯願はくば我が問ふことを聽したまはんことを　と。

佛は妙慧に告ぐらく。今恣に汝問へ。當に解說を爲して疑網を斷たしむべし。と。爾の時に妙慧は、卽、佛前に於て偈を以て問うて曰はく。

云何にせば端正　大富尊貴の身を得　復何の因緣を以て　三眷屬は沮壞し難きか　云何にせば己れの身にて　化生を　千葉の蓮華の上に受け　面り諸の世尊に奉らるるか　云何にせば　自在なる勝神通を證得して　遍く無量の刹に往き　諸佛を禮敬し能ふか　云何にせば四怨無きを得　言ふ所をば人信受し　五法の障を淨除して　永く諸の魔業を離るるか　云何にせば命終の時に　六諸佛に見えて　清淨の法を說きたまふを聞き　苦惱を受けざるを得るか　大悲なる無上尊　惟願はくば我が爲めに說きたまはんことを　と。

爾の時に、佛は妙慧童女に告げて言はく。善い哉、善い哉。善く此の深妙の義を問ひ能ひたり。

【一】時に王舍城に、乃至、妙慧と爲せり。異譯本(佛說須摩提菩薩經「西晉、竺法護、譯」)に「爾の時に、羅閱城大國に、長者あつて號して、郁迦と曰ひしが、郁迦に女あつて、須摩提と名けたり。」とあり。

【二】妙慧(Sumanā)。卽ち須摩提にして「智度論」には「妙意」と譯したり。過去世に於て、五百の金錢を以て須羅那女より五莖の華を買ひて燃燈佛に供養して、記別を受けたる菩薩なり。

【三】眷屬は沮壞し難きか。異譯本に「他人の別離する所と爲らざる、」とあり。

【四】怨。異譯本に「讎怨」とあり。別の異譯本(佛說須摩提菩薩經「姚秦、鳩摩羅什、譯」)には「仇怨」とあり。

【五】法の障を淨除して。異譯本には「云何にせば、殃罪無きを得て、作す所の善行は、能く壞る者無きか。」とあり。

【六】諸佛に見えて、乃至、受けざるを得るか。異譯本には「佛、前に在つて立ち、經法を說くことを爲し、卽ち苦痛の處に墮せざらしめたまふか。」とあり。

の華鬘を棄て擲ち　翻つて熱鐵を戴くが如く　愚夫は欲に耽るが故に　諸佛の教を棄捨し　下劣の法を貪求して　諸の罪業を造作するなり　諸欲に迷醉する者は　閻羅界の中に墮して常に熱鐵の丸を飲み　復洋銅の汁を飲むなり　欲に迷醉する者は　善に背いて非を行ひ　清涼を捨て離れて　永く閻羅界に趣くなり　若し智慧ある人にして　我が是の法を說くを聞かば　應に一切の欲を捨てて　速に出離を求むべし　と。

爾の時、世尊の是の偈を說き已るや、優陀延王は、卽、佛に白して言はく。今此の聞く所のものは、希有なり、希有なり。如來・應・正等覺は善く能く是の諸欲の過患を說きたまへり。我れ今佛・法・僧の寶に歸依し、今より已往、乃至、形を盡すまで、佛・法・僧に歸して優婆塞と作らん。唯願はくば、世尊、我れを攝受したまはんことを。と。佛の此の經を說き已りたまふや、優陀延王及び諸の大衆・天・人の世間・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、歡喜して奉行せり。」

の殃を受けて　來り相ひ救はざるなり　先世の中に於て　自ら是くの如き業を作れるに由り　假令ひ父母の等にても　相ひ救ひ能ふ者無し　先世の中に於て　自ら是くの如き業を作れるに由り　假令ひ男女の等なりとも　相ひ救ひ能ふ者無し　先世の中に於て　自ら是くの如き業を作れるに由り　假令ひ兄弟の等なりとも　相ひ救ひ能ふ者無し　先世の中に於て　自ら是くの如き業を作れるに由り　假令ひ姉妹の等なりとも　相ひ救ひ能ふ者無し　先世の中に於て　自ら是くの如き業を作れるに由り　假令ひ朋友の等なりとも　相ひ救ひ能ふ者無し

愚夫は邪欲の爲めに　女人を貪り求め　無間地獄の中にて　是くの如き諸苦を受くるなり

此の不清淨　穢惡の女人は　愚夫の遊行する所なるを說かば　智者は皆遠離して　彼の女人に親近することは　最も極りたる下劣と爲し　是れ惡中の惡なれば　何ぞ欣樂と爲すに足らんと　[一五]欲に耽る諸の凡夫は　常に糞囊を抱けば　此の業の因縁に由つて　常に無量の苦を受くべきなり　愚夫は女人の爲めに　種種の刑罰たる　囚繫及び捶打を受けながら　而も厭離の心無し　愚夫は女人の爲めに　種種なる燒害を被りながら　能く斯の苦を忍受して　厭離の心無し　或は置れて尖標に在り　或は殺し或は水に沈められ　或は大坑に擲たれて　備に諸の苦毒を受く　是くの如き苦を見ると雖も　猶婬欲の中に於て　女人を稱讚して　曾て厭離を生ぜざるなり　或は少智の人あつて　衆苦の本爲るを知れど　見已るや還親近すること

胡膠の火るが如し　佛の說く所を聞き　復信受を生ずと雖も　仍多く女人を畜へ　其の衆は群羊の如し　或は諸佛の教を聞き　纔に厭ひ悔ゆる心を興せども　須臾にして貪の復生ずること　惡毒の還發するが如し　猶怖を被りたる猪の　暫く止るも須臾の頃にして　若し糞穢を見ば　貪愛還つて復生ずるが如し　愚夫は法を聞き已るや　暫くのみ心は驚怖すれど後に諸の欲色を見るや　貪愛は還つて復生ずるなり　猶丈夫あつて　其の自身の首より　金

【一五】欲。「婬欲」を謂ふ。

るに麻麥を以てすれば　沸くに隨つて漂ひ沒するが如し　是の欲に耽る人の如きも　善惡を識らずして　死して當に惡道に墮して　鑊湯の中に煎煮せらるるなり　鑊湯の大數は　六十四倶胝にして　諸惡を造る人は　彼を以て居處と爲すなり　是くの如き一一の鑊の　量は各一由旬にして　猛火遍く燒然して　底は四周の際に及ぶなり　或は百年　或は二三四百を滿して　煎煮の苦を受くるあるは　皆自の業に由つて爲すなり　獄卒は利き鉤を以て時に復擧げて出で令むるに　皮肉皆爛れ墮ち　其の骨の白きこと珂の如し　是に於て諸の獄卒は　復將ゐて鐵槽に置き　杵を以て之れを搗くに　救護し能ふ者無し　爾の時に諸の骨髓は　盡く末に碎けて塵と爲るも　[14]業風に由つて吹かるるや　死し已れるもの復還つて活く

若し他の妻妾童女等に　侵し逼るあらば　當に鐵刺の樹に緣り　幷に斧杵の殃を受くべし三股の鐵叉　或は四五岐の者あつて　他の妻室を侵し擾すもの　當に此の刑治を受くべし復鐵嘴の烏あつて　髓腦を探り啄み　野干等の諸獸は　競ひ來つて之れを食噉するなり　是くの如き邪欲の人は　當に屎糞の獄に墮し　及び　鋒刃に走り　亦復刀山にも上るべし　是くの如き邪欲の人は　炎熱の獄に顚墜し　既に燒害せられ已つて　復寒氷に趣くなり　是くの如き邪欲の人は　亦極炎熱　嘷叫及び大叫に墮し　幷に黑繩の中に往くなり　是くの如き邪欲の人は　當に醎熱の河に沒み　復煻煨を經歷すれども　未だ便の死に至り底らざるなり　地獄に蒺藜あつて　五つの角極めて銛利なるが　彼れ狗に爲つて逼られて　忙て怖れて其の中に走るなり　女人を愛戀すれば　大怖の處に墮ちて　或は鐵丸を呑み　或は洋銅の汁を飮む　二つの熱鐵の山あつて　彼れ此れ來り相ひ合するに　昔時欲に耽れる者は　中に於て苦の殃を受くるなり　斯の苦楚を受くる時には、都べて救護する者無きは　是くの如き罪報は　皆自業の緣に由ればなり　昔同じく歡愛せる者　今何所に於て在るか　我れ獨り其

【一四】業風。善惡の業、能く人を轉じて、三界に輪廻せしむること、風の吹き廻す如きに喩へて曰ふ。

の充滿せることも亦復然り　胃脾腎肝膽　及び腸肺糞穢　丼に髓腦膿血に　八萬戸の諸蟲の中に在つて常に唼り食ふに　盲冥なる諸の愚夫は●癡網にて自ら纒ひ覆ひ　是れに於て了する能はざるなり　雜食して餘す所の穢は　九孔に常に流れ注ぐ　是くの如き過患の身は先の不淨の業に由るを　愚夫は女人に於て　彼の聲色に繫戀し　斯れに由つて染著を生じて嘗て實の如くに知らざるなり　蠅の吐たるものを見て　愛著の心を生ずるが如くに　愚夫の女人の境界を　貪ることも亦是くの如し　女色に顛仆すれば　恒に自ら其の身を穢すに　如何なれば彼の愚夫は　此れに於て樂み遊び止るか　鳥の食を求むるが爲めに　網羅を避くるを知らざるが如く　女人を貪愛して　害を被ることも亦是くの如し　譬へば水中の魚の　網する者の前に游泳して　便ち他に爲つて執へらるるが如くに　豈自ら損傷するに非ずや　女は魚を捕ふる人の若く　諂誑は猶網の如く　男子は魚に同じく　網を被ることも亦是くの如し

殺す者の利刀は　復甚だ畏るべしと雖も　女人の刀の畏るべき　傷害は復彼れに過ぎたり

蛾の燈炬に投じ　及び火の屋を燒く時に　蟲等の焚燒せらるるは　依る無く救ふ者無きが如くに　女人に迷醉して　貪火に燒害せられ　斯れに由つて惡趣に墮するものの　依怙無きことも亦然り　邪行の諸の愚夫の　他の妻室を愛戀して　妄に欣悅の想を生ずるは　猶家鷄の如くなり　亦曠野の雉の如くに　妄に殺害の所に遊んで　損傷をば自因り生じて　救濟する者無し　佛法を捨て離れ　彼の女人に親近し　是の業の因緣に由つて　惡道に墜墮するなり　又諸の獼猴の　巖樹の間に跳躑して　必ず自の損傷を致すが如きは　豈愚惑に由らさらんや　是くの如くに欲に耽る者は　彼の諸の女人に於て　癡網に爲つて羅せられて　數生死の苦を受くるなり　世の罪人をば　處するに尖標を以て苦むるが如くに　婬欲に耽醉する者は　當に劍の樹林に懸るべし　譬へば猛火を以て　燒然したる彼の鑊湯に　之れに投ず

如し　諸未だ諦を見ざる者の　欲の爲めに白法を失ふことは　風の微なる燎を吹くが如く其の義も亦是くの如し　假し善丈夫の如きならば　殺す者に爲つて執へられて　寧ろ斯の逼害を受くとも　應に女人に親むべからざるなり　若し女色を樂み觀ば　貪求は轉復多くして　相を取る凡夫の　欲愛を增長することは　炎夏の時に於て　曠野の中を遊行し　渇逼りて鹹水を飮むに　飮み已つて渇の彌增すが如し　未だ眞實を見ざる者は　愚癡もて徒に自ら活くれば　女人に親近するや　貪欲の愛は堅固なり　若し人毒蟲に觸れば　便ち毒に爲つて害せらるるが　是くの如き諸の凡夫の　欲を犯すことも亦是くの如し　譬へば綵畫の瓶の內に盛るに惡毒を以てするに　是の中は實に畏るべきに　外相には端嚴を現すが如し　女人に於て嚴飾して　彼れは姝妙爲りと謂へど　是の中の甚だ穢惡なることは　[三]氣の滿ちたる皮囊の如し　又繒綵を以て　利刀を纏ひ裹めるが如くに　彼の女人を莊嚴するとも　其の義亦是くの如し　火の深坑に滿つるや　煙無くして能く燒害するが如く　女人も亦是くの如くに暴惡にして哀愍無し　死せる狗死せる蛇の　穢惡にして壞爛せるが如く　亦糞穢を燒くに人皆之れを厭惡するが如し　死蛇糞狗の等は　甚だ厭惡すべしと雖も　是の諸の女人の厭ふべき如きは復彼れに過ぎたり　譬へば劫の壞る時に　大地に皆火起り　叢林の諸の草木は　一切悉く燋然し　大身の者の居る所の　海水は盡く乾竭し　須彌等の寶山まで　世界の遍く燒け壞るるが如し　是の劫燒の時に　山海を焚燎する如きには　諸の衆生の　救護を爲し能ふ者ある無きが　玆の女欲に因る故にて　諸の愚夫を燒害することは　猶劫火の然えて一切皆燒き盡るが如し　不淨は常に流れ注ぎ　涎洟膿血の身をば　奈何ぞ彼の愚夫は　此れに於て耽著するぞや　骸骨相ひ楷へて柱とし　皮肉以て之れを覆ひ　臭穢甚だ惡むべきこと棄て殘せる宿食の如し　亦倉廩の門に　穬麩の恒に狼藉せるが如く　此の身に諸の穢惡

【三】氣の滿ちたる皮囊の如し。異譯本には「又、油にて洗へる衣を、身の上に掛け搭くるが如し。」とあり。

顚倒の妄見を作す勿く　布施及び淨尸羅を　勤修して　當に生天を得　菩提の道を證すべし
と。

復次に、大王、或は丈夫あつて、身命の爲めに、極めて自ら勞苦して珍財を積集するも、後に女人に爲つて纒ひ攝めらるるが故に、彼れの僮僕の如くに敬事し供承するなり。是の因緣に由つて、財寶を慳悋して沙門及び婆羅門に施さず。亦復王法の治罰・輕毀・凌辱をも堪忍して、悉く能く之れを受くるなり。或は女人に捶打訶叱せられ、或は至つて怖懼して、意を屈して瞻奉し、其の憂感するを見るや、卽自ら念じて、我れ今云何にせば彼れをして歡悅せしめんかと言はん。當に觀るべし。此の人は是れ欲の僮僕なることを。斯る不淨・下劣の境に於て淨の想を生じ愛染を起して、是くの如き女人に親近する時に、卽是に惡趣の業を圓滿するなり。此れは是れ、丈夫の第四の過患なり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

欲に耽りて昏醉せる人　彼れには實に安樂無し　惡法に親近する故に　善丈夫と名けず　若し人自ら縱に逸して　禁戒を有つ者無く　心の爲す所に隨はば　福利を失ひ壞る　彼の智慧無き人は　畜生の法を行ひて　女色に馳せ趣くこと　猶猪の糞穢を樂むがごとし　愚なる者は　欲染の過患を觀る能はずして　妄に慇重の想を生ずること　猶盲冥の人の若し　色の爲めに繋縛せられて　欲愛を增長すること　猶野干の　屍塚の間を離れざるが如し　聲香味觸に於てして　愛著の心を生じて　生死の中に輪轉すること　獼猴の杜に繋がるるが如し　無明の纒ひ覆ふ故にて　女の爲めに迷亂せらるるは　市に利を求むる人の　矯詐もて來り親附するが如し　愚人の欲に親近して　是に魔の境界に入るは　猶[三]蠮茶迦の　糞穢を耽嗜するが如く　亦霪雹雨の　能く稼穡を損じ　窯師の常に火に近いて　多く焚燒せらるるを爲すが

【三】蠮茶迦。糞を食ふ蟲にして蜣の類なりと謂ふ。

名くるに與ることを　是くの如き現世の　果報の珍寶は　皆父母を　供養するに因つて得るなり　復來世に於ては　當に駝驢等の身の　重を負ひて驅役するを　遠離し　亦復屎糞灰河刀山鋒刄　鎔銅等の苦を　受けざるべく　又來世に於て　生れて人中に在つて　富んで財寶豐饒なる穀帛を有ち　妻子眷屬　悉く皆和穆し　或は復當來に　天上に生ずるを得て　宮殿園苑　音樂の自然なるに　意を縱にして歡娛し　諸の妙樂を受くるなり　何ぞ智有る者にして　是の法音を聞きながら　父母の田に於て　供養を勤めざらんや　と。

復次に、大王、若し諸の丈夫は、邪見に由つて、自身の速に當に壞滅すべきを知らずして、諸の惡を造作して自ら欺誑せば、彼の愚癡の人は、虛しく長夜を度ること、猶木石をば彫刻して成す所の如き、形は人に似たれども識る所無きがごとくに、諸欲を習ふ者は、卽是れ惡趣に往く業を成就するなり。此れは是れ、第三の過患なり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

丈夫は欲の爲めに　迷亂せられて　斯れに由つて　種種の諸罪を造作す　倒見の闇障は　其の心を隱蔽し　此れに乘じて當に　惡趣の牢獄に生ずべし　邪行の者は　當に復　一切の賢聖を遠離し　亦諸の沙門等を　恭敬せず　顚倒の見に由つて　乃至山河邪魅に　歸命す　貪欲に爲つて　或は復　一切の禽獸を殺害して　神祇を祭祀す　倒見を因と爲して　非法に福を求め　斯れに由つて　永く一切の安樂を離る　若し是の中に於て　造惡の者は　淨信を知らずして　兇險無慚なり　是くの如き人は　永く賢聖を離れて　彼れ必ず當に　嘷叫地獄[九]に墮すべし　或は欲に爲つて　他を逼惱して　當に　燒然[一〇]　極燒然[一一]の獄に墮すべし　復倒見に由つて　佛法僧に於て　親近して　恭敬し供養すること能はず　正敎の法寶を　而ち聽聞せず　賢聖に遠つて　諸の惡趣に墮せん　是の故に智者は　既に人身を得たれば　復た斯の

【九】嘷叫地獄。號叫地獄と同じ。又、叫喚地獄とも曰ふ。八大地獄の一なり。
【一〇】燒然。炎熱地獄に同じ。又、燒炙地獄とも曰ふ。八大地獄の一なり。
【一一】極燒然。大熱地獄に同じ。又、大燒炙地獄とも曰ふ。八大地獄の一なり。

に於て忻樂せんや　寧ろ鐵獄に投じ　刀山を馳せ走り　焰爐に眠臥すとも　女色に親まざれ

常に邪欲を　貪染する者の若きは　衆多の　諸の利樂の事を退失すればなり　女人にて能く衆苦の因を作れば　欲を能く滅壞せば　一切安樂なり　惡法の積集し　善友の乖き離るるは　皆女人を耽り求むるを以て　本と爲す　若し我が說く所を　聞きて　能く女人に於て

深く厭離を生ずることを得るあらば　則ち淸淨なる天道を　莊嚴するを爲し　亦當に速に

無上菩提を證すべきなり　と。

復次に、大王、夫れ父母は、皆生むる所の子を利益にせんと願ずる故に、作し難きを能く作し、能く一切の忍び難き事を忍んで、假令ひ種種の不淨・穢惡なりとも、皆能く之れを忍び、又、子の色力の身をして速に增長せしめんと欲する故に、閻浮の勝妙の事を見せ、乳哺養育して疲厭の心無からしめ、或は子をして諸の妙樂を獲しめん爲めに、艱辛をば經て、求めて得たる所の財物をば供給し、資生に須ふる所を營辦し、及び他の家に往いて婚娶を結び求むるなり。旣に婚娶し已るや、他の女人に於て愛戀して耽著し、耽著に由る故に昏醉心に纒ひ、或は父母の漸く將に衰老せんとするや、違ひ逆らひ輕んじ欺き、有つ所の資財を無慚に費し用ひて、或は父母をして家に住せざらしむる、是くの如きは、皆欲に由つて迷倒せらるればなり。大王、當に知るべし。此の因緣――已れの父母に於て恩養に棄背し、他の女人に於て尊重・承事して、種種に供給して疲厭の心無き、――を以て、卽是に地獄の本を成就することを。此れは是れ、丈夫の第二の過患なり。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

汝等當に知るべし　父母を　尊重し供養する者は　是の人は常に　釋梵[八]護世に　扶持せらるるを有ち　能く居家をして　安隱快樂ならしめ　或は貿易に因つて　大海の遠方に　安隱に往來して　諸の財利の　此れを卽ち說いて　無價の大寶と爲すを獲て　現に能く果の　最上田と

【八】護世。「四天王」を謂ふ。

あつて　毒藥を服食し　身心痛惱して運動する能はざるが如く　是の欲因に由つて　能く苦の本を爲すこと　身に毒を有つが如くなるを　愚は了知せざるなり　亦幻化の法なるを　了せずして　妄に尋ね求めて　但自ら疲れ苦むあるが如く　愚夫も亦爾く　常に欲染に於て　疲れ苦みながら貪り求めて　諸の地獄に墮するなり　或は飮食を設けて　歌舞妓樂し　他の女を婚娶して　將に已れが妻と爲さんとし　衆多の　利無き苦の法を積集するなり　愚夫は此の無利の業を造つて　諸罪を增長し　善根を退失しながら　無利の中に於て　身命を惜まず斯れに由つて　惡道の深坑に墜墮して　便ち地獄の　猛焰鐵丸　鋒刄刀山　毒箭の諸苦を招くなり　女人は能く　衆多の苦の事を集むるに　假に華香を以てして　嚴好を爲すを　愚人は此れに於て　妄に貪求を起し　親近して　下劣の法を稱譽し　智慧を退失して　三塗に墮落するなり　此く愚癡に由つて　迷惑せらるることは　海の疲れたる鳥の　彼岸に迷ふが如く又愚夫の　熱鐵を取つて　之れを頸項に置くが如く　牛の軛を被れるが如くなり　欲は諸の酒の　人を狂亂するが如くなるに　如何ぞ愚夫は　苦の本たるを知らざるか　或は父母に於て　恩慈を識らざるは　皆欲染に由つて　此の過患を生ずるなり　常に是くの如き　邪欲の法に於て　稱讃し習行して　慙愧を有つ無きは　彼れは愚癡に由つて　迷亂せる故にして　是の罪を作り已つて　當に三塗に趣くべきなり　耽つて欲を重ぬる　昏醉の人は　父母の恩をも　亦能く棄捨すれば　貪染して　欲に親近するある者の若きは　則ち福德の上田に　違背することを爲すなり　無量倶胝の　妄想煩擾の　展轉して逼惱するは　此れよりして生じ　或は復　世間の財位を悕求するは　是の非法を以て　展轉して相ひ勸むるにて　此れに由つて現には　捶打の苦の事を招き　死しては必ず當に　阿鼻地獄に墮すべきなり　現に衆苦の　皆來つて身に集るを見　善友は乖き離れ　天宮を永く失するに　何ぞ智ある人にして　此れ

る無きに由つて善丈夫に非ざれば、餓鬼の法を行うて智慧ある無く、耽欲・放逸にして欲に執へられ、欲に繋縛せらる。欲にて活命する所にて、愚夫に親近して諸の智者に遠り、惡友を伴と爲して宜とする所に非ざるを行ひ、女人の不淨の境界に貪著し、便ち女人に爲つて調伏せらるること、猶奴僕の如くに繋屬するなり。諸の女人の所に墮落するや、慚無く愧無くにして、諸の瘡漏の門に膿血・穢汙・洟唾の常に流るること、猶塚間不淨の境界の如くなるに親近し遊止し、父母に於て恩養に違背し、沙門及び婆羅門に捨離して、殷重・恭敬・供養せず。畜生の行ふ所の法を習行して、佛・法・僧に於て淨信を生ぜずして、涅槃界に於て永く當に退失すべし。是くの如き等の人は、當に衆合、乃至、阿鼻の諸大地獄に入るべく、亦復當に鬼界・畜生に墮すべくして、救護ある無きなり。我が敎を聞くと雖も、猶數邪惡を思念して、女人の歌舞・戲笑に厭離を生ぜざるは、當に知るべし、彼れは愚人の法を習ひて、善丈夫の事を修行することを樂まざるものなることを。當に知るべし。丈夫の女人に親近する時は、即是れ惡道に親近する法なることを。此れは是れ、丈夫の第一の過患なり。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

諸欲は皆苦に　下劣穢惡にして　膿血の不淨なれば　深く厭ひ畏るべく　衆多の過患の　集る所の處なれば　何ぞ智ある人にして　此れに於て忻樂せんや　猶廁の中に　不淨の盈ち溢れたるが如く　亦死せる狗　若しくば死せる野干　及び屍陀の林の　穢汙の充ち遍きが如くに　欲染の患の　厭ふべきも亦然り　諸の愚癡の輩は　女人を愛戀すること　犬の子を生めるが如くに　未だ嘗て捨て離れず　亦蠅の　吐かれたる飮食を見るが如く　又群猪の　糞穢を貪り求むるが若し　女人にて能く　清淨の禁戒を壞り　亦復　功德の名聞を退失して　地獄の因を爲し　天道に生ずることを障ふれば　何ぞ智ある人にして　此れに於て忻樂せんや　又人

因縁に由り、彼の女人の虚妄なる言說に爲つて誑惑せられ、遂に如來及び諸の聖衆に於て、毒害の意を生ぜり。と具に陳上し已り、復佛に白して言はく。惟願はくば、如來及び諸の聖衆の、我れに歡喜を施さんと、我が懺悔を聽きて、斯くの如き罪愆を速に消滅せしめたまはんことを。と。

爾の時に、世尊は彼の王に告げて言はく。汝が說く所の如き、謂はく。如來及び諸の聖衆に於て、凡愚の人の諸の過患を有つて、遂に福田に於て妄に瞋毒を起せるが如きは、汝今若し能く聖法の律に依つて、自ら其の罪を悔いて覆藏の心無く、未來の世を盡して復と更に犯さずんば、我れ當に攝受して、汝をして、當來に善法をば增長せしめん。と。優陀延王は、復佛に白して言はく。世尊、我れ女人に爲つて迷倒せられ、狂亂して知る無く、此れに因つて麁猛なる瞋恚を發生したれば、斯の罪業に由つて當に地獄に墮すべきも、唯願はくば、世尊、諸の衆生を利益し安樂にせん故に、慈悲もて女人の諂曲・虛誑の過患を開示し、我等をして女人に親近せしむる勿くば、當に長夜に於て諸苦を免るるを得べし。と。佛、言はく。且く斯の事を置け。何ぞ此れを問ふことを要して、餘を問はざるか。と。王、言はく。世尊、我れに異る問無し。女人は我れをして地獄の業を造らしめたれば、我れ今に於ては、唯女人の過患・女人の諂曲・虛誑・邪媚を了知せんと爲せば、願はくば、開示を爲したまはんことを。と乃至、三請ふことも亦是く說くが如し。佛言はく。王應に先づ丈夫の過患を知り、然る後に女人の過患を觀察すべし。と。優陀延王、(言はく)唯然く、願はくば、樂んで聞かんと欲す。と。

佛言はく。一切の丈夫は、皆四種の不善なる愆過に由つて、諸の女人の爲めに迷亂せらる。何者を四と爲すか。一には、諸の欲染に於て耽著して厭くこと無く、女人を樂み觀て自ら縱に逸し、沙門及び婆羅門に親近して、清淨の戒を具して福業を修むる者を知らず。是等の如き人に親近せさるを以て、則ち淨信及び淨尸羅・多聞・施・慧に於て、悉く皆退失す。彼れ信・戒・多聞・施・慧等の法あ

巻の第九十七

優陀延王會　第二十九

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は[一]拘睒彌國の[二]瞿師羅園に在して、大比丘の衆千二百五十人と倶なりき。爾の時に、[三]優陀延王の第一の夫人を、名けて[四]舍摩と曰ひしが、常に如來及び諸の聖衆に於て深く信じて、恭敬し親近し供養し、及び常に如來の功德を稱讃せり。時に、王に復第二の夫人あり。名けて[五]帝女と爲せしが、常に諂姤を懷き、彼の王の所に往きて、妄に如來幷に諸の弟子は、大夫人に於て非とする所の法を有てりと說けり。王は是の語を聞くや、極めて瞋怒を生じ、即箭を以て舍摩夫人を射たり。爾の時に夫人は、王を哀愍する故に、[六]慈三昧に入りたれば、時に放つ所の箭は、遂に即却き還つて王の頂上に至り、空中にて住りしが、其の箭は熖赫として、猶火の聚の如くにして甚だ怖畏すべく、乃至、三射れども皆是くの如くなりき。爾の時に、優陀延王は既に斯の事を見るや、身を擧つて毛竪ち、驚き忙て悔恨して、夫人に謂うて曰はく。汝は天女爲りや、龍女爲りや。復は夜叉・乾闥婆女・[七]毘舍遮女・羅刹女爲りや。と。夫人は答へて言はく。我れは天女に非ず、乃至、亦羅刹の女にも非ず。大王、當に知りたまふべし。我れ佛の所に於て正法を聽聞し、五戒を受持して優婆夷と作れるが、大王を哀愍して慈三昧に入りたれば、王は我れに於て不善の心を生ぜりと雖も、我が慈願に由り、傷損無きを得たるなり。と。因つて、王に勸めて言はく。善い哉、大王、當に如來・應・正遍知に於て歸命し頂禮して、必ず安隱を獲らるべし。と。優陀延王は、便ち是の念を作さく。彼れは、佛の所に於て正法を聽聞して、優婆夷と作れるにてすら、尚此くの如き威神の力あり。何に況んや、如來・應・正等覺なるをや。と。是の念を作し已つて、即、佛の所に往き、頂にて佛足を禮し、右に遶ること三匝して、白して言はく。世尊、我れ欲染の

【一】拘睒彌(Kosambī)國。「法顯傳」に據れば、鹿野苑精舍より西北に行くこと十三由旬にして、國あり。拘睒彌と名く。とあり。或は曰ふ。憍薩羅卽ち舍衛國と同じ。と。
【二】瞿師羅園(Ghositārāma)。
【三】優陀延(Udayana)王。拘睒彌國の王にして、又、優塡王とも書く。釋尊の忉利天上に登つて不在なりし時、牛頭栴檀を以て其の像を造りたるにて有名なり。
【四】舍摩。異譯本(佛說大乘日子王所問經「法天譯」)には舍摩嚩底(Kṣemavatī)とあり。
【五】帝女。異譯本には「無比摩建彌迦女」とあり。
【六】慈三昧。異譯本に「慈心定」とあり。又別の異譯本(佛說優塡王經「西晉法炬譯」)には「一意に佛の慈心を念じ」とあり。
【七】毘舍遮(Piśāca)。「毘舍闍」と同じ。第一卷、同名の解、參照。

を說きて　能く世間の盲冥の眼と作りたまふべく　願はくば微笑の因緣を說きたまはんことを
と。

時に於て、世尊は阿難に告げて曰はく。汝此の五百の長者の、今我が所に於て阿耨多羅三藐三菩提の心を發せるを見たりや、不や。と。阿難白して言はく。唯然く、已に見たり。佛、阿難に告ぐらく。此の五百の長者は、已に往昔の百千億那由他の諸佛の所に於て、承事し供養して諸の善根を種ゑたれば、今是の法を聞き無生忍を得たるなり。此の諸の長者は、是れより已後惡趣に生ぜず、人・天の中に於て常に快樂を受け、復來世の彌勒佛の所に於て、供養し恭敬し尊重し讃嘆し、及び賢劫の中の一切の諸佛にも、悉く皆承事し恭敬し供養し、諸佛の所に於て正法を聽聞して、受持し讀誦し、他の爲めに廣く說き、二十五劫を過ぎて、各諸佛の刹中に於て無上菩提を成じ、皆同一に字して、勝蓮華藏如來・應・正等覺と號せん。と。爾の時に、尊者阿難は佛に白して言はく。世尊、希有なり。世尊、希有なり。善逝、當に何と此の廣大なる法門に名け、云何に持ち奉るべきか。佛、阿難に告ぐらく。是の法門を、菩薩瑜伽師地と名け、亦勇猛長者の問ふ所と名け、是くの如き名號を汝當に受け持つべし。と。佛の此の經を說き已りたまふや、尊者阿難及び諸の比丘・五百の長者・諸の菩薩衆・天・人・阿修羅等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して、信受し奉行せり。

を得べし　大心たる菩提の心は　諸心中の最上なれば　一切の縛を解脫して　諸の功德を具せん　少福の諸の衆生は　此れに於て　欣樂する無く　生死の過を觀ずして　菩提心を樂はず　菩提心の功德は　若し色の方分あらば　虛空界に周遍して　容受し能ふ者無けん　恒河沙の等の　諸の佛刹土の中に　假使ひ珍寶を布きて　諸佛を供養すとも　能く一合掌して菩提に廻向する心あらば　其の福は彼れに過ぎて　邊際は得べからず　唯供養の福のみに非ず餘の福にても亦復然りと　是くの如くに菩提の心を　最勝の仙は說きたまふ所なり　菩提の心の最勝なることは　[三一]阿伽陀の藥の　能く一切の病を除くが如くに　一切の安樂を與ふるなり　我れ諸の衆生を見るに　[三二]三火に熱惱せらるるを　智者は無量劫に　勤苦して常に修習すること　醫王の如く勇猛に　菩提の行を具足して　衆生の苦を救拔して　永く諸の憂惱を離れしめんと　一切の生處に於て　終まで是の心を捨てずに　諸の行願を勤修して　勇猛に佛法を求むるなり　我等は善利を得たり　我等は心に欣樂す　今釋師子に遇ひたるにて　當に如來の身を得べからんことを　と。

爾の時に、世尊は卽便に微笑せるに、其の面門より種種の光、靑・黃・赤・白・紅・紫・玻瓈を放ちて、無量無邊の世界を照すに、乃至、梵世、日月の威光は皆悉く隱蔽せるが、還つて遶ること三帀して、佛の頂より入れり。

爾の時に、尊者阿難は卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、白して言はく。世尊、何の因緣あつて、此の微笑を現したまへるか。佛の現したまふ所の如きに、因緣無きに非ず。とて、卽、佛前に於て偈を說いて言はく。

諸佛の、最上の導師　無因を以て微笑を現したまはじ　世間を哀愍したまふ利益者　願はくば爲す所の因緣を說きたまはんことを　貧乏の衆生には法財無ければ　應に最上たる大乘の施

【三一】阿伽陀。「阿竭陀」と同じ。第三卷、同名の解、參照。
【三二】三火。貪・瞋・癡の三毒を喩へて謂ふ。

屬して　苦を受くるを誰れか共に分ち能ふ者ぞ　父母兄弟及び妻子　朋友僮僕并に珍財は死し去らば一つの來り相ひ親む無く　唯[二〇]黑業の常に隨逐する有るのみ　智人には終まで親愛を爲さずして　諸の惡業を作つて阿鼻に入らば　唯業盡きて方に出づるを得ることを除き親屬も代り能ふ者ある無し　閻羅の使者は唯業を考ふるのみにて　親緣及び友朋を問はず汝人身を得ながら惡を捨てざれば　極苦を今應に甘んじて忍受すべしと　閻羅は常に彼の罪人に告ぐらく　少しの罪をも我れ加へ能ふことある無く　汝自ら罪を作り今自ら來つて　業報を自ら招けば代る者無しと　父母妻子も救ひ能ふ無ければ　唯當に勤めて出離の因を修むべく　是の故に應に枷鎖の業を捨てて　善く遠離を知つて安樂を求め　家妻子に於て應に怖を生じて　恒に佛教に依つて正しく修行すべし　在家は熾然として苦の本爲ること　猶炎鑪の甚だ畏るべきが如くに　身心は燋熱すれば燒然を鎭むるに　誰れか智者にして貪著を生ずるものあらん　諸佛の教を愛樂して修行し　營み求むる所無きを快樂と爲すに　愚闇の凡夫は覺知せずして　家の苦の本爲るを　横に貪愛するなり　彼の皮筋骨肉の中に於て　迷惑して妄に夫婦の想を生じ　幻化の如くなるを了知し能はずして　凡夫は此れに於て貪著を生ずるなり
智者は能く此の過患を知り　世間の欲樂を皆捐棄し　法を樂むこと當に藥を求むる想の如くにし　應に速に居家の縛を捨離すべきなり　と。

爾の時に、五百の長者は、此の法を聞き已るや無生忍を得、歡喜踊躍して偈を説いて言はく。

慶ばしき哉大利　諸利の中の最上なるを獲たれば　我等は佛法に於て　皆欣樂の心を生ぜり
菩提に發趣せんと　衆生の類を利樂せしめ　善を以て命を養ひ　覺慧もて自ら心を安んぜん諸の衆生を憐愍して　願はくば當に佛道を成ずべからんことをと　我等は皆已に　無上菩提の心を發したり　金色の相莊嚴にて　世界を照明せんと　菩提を樂ふ心の者は　當に如來の身

【二〇】黑業。善を白業に喩ふるに對して「惡業」を謂ふ。

に佛法に於て淨信を生じて　惡道の畏るべきに隨ひ行く勿かるべし　設ひ壽命をして千億歲ならしむとも　猶無常なるを懼れて厭離を生ずるに　何に況んや須臾も保つ可からざるに　彼れが爲めに惡趣の中に沈淪せんや　或は惡友あり來つて　人身は得難きに今已に得たれば多く財寶を求めて娛樂を受け　及び此の盛年に嬉遊を恣にせよと相ひ勸むとも　何ぞ財を求めて樂む者あらん　〔一八〕設ひ守護を得とも猶勤苦すればと　此の愚人の徒なる妄言を　是の故に智者は應に觀察すべし　財物は幻の如く亦夢の如くなるに　愚癡の衆生は誑惑せらるれど　刹那の時に得て刹那に失へば　何ぞ智有る者にして愛心を生ぜんや　譬へば幻師の幻化の事　〔一九〕乾闥婆城の種種の色の如くに　財寶は是くの如くに凡愚を誑せども　虛妄の中に於て何ぞ實あらん　種種に苦惱して求めたる財利も　水火王賊は常に侵奪して　此れに由つて能く衆苦の因と爲れば　何ぞ智有る者にして愛樂を生ぜんや　諸の常に貪愛を懷く者あつて財利を馳せ逐ひて厭く時無く　能く父母に於て慈心無く　乃至親屬にも怨害を生ず　言語は善順なれども心は乖き違ひ　種種なる欺誑の緣を造作し　或は邪論邪呪等を學んで　技藝を誇り衒ふこと婬女の如し　或は復諂誑して柔和を現し　或は復剛强に威猛を示す　是くの如き無量なる衆惡の業は　皆財利に由つて生ぜざるは莫し　珊瑚金玉摩尼珠　是の物は本來泡沫の如くなるに　幻化の如くなるを了知し能はずして　此れに虛しく誑されて三塗に墜つるなり　彌勒世尊の出現する時に　一生にして次いで當に我が處を補ふべく　國界は黃金もて地に布かんも　是等は何所從り來ると爲すか　劫盡きて世間悉く燒け壞れ　須彌河海も盡く燋け枯れ　畢竟じて磨滅して虛空に歸せんに　而ち此の寶物は何に從ひ去るか　種種なる惡業もて財物を求め　妻子を養育して歡娛と謂へど　命終の時に臨んで苦の身に逼るや　妻子も相ひ救ひ能ふ者無し　彼の三塗の怖畏の中に於ては　妻子及び親識を見ず　車馬財寶も他人に

【一八】設ひ守護を得とも猶勤苦すれば。異譯本には「護り惜むこと、重重にして、苦惱增せば」とあり。

【一九】乾闥婆城。天の樂人、乾闥婆の、巧に樓閣を幻作して人に見することよりして、蜃氣樓の名と爲す。

身は自由ならず。飲食に依つて生くる故なり。三十三には、[一七]身は妄なる纏裹なり。終に敗壞する故なり。三十四には、身は惡友と爲す。逆害多き故なり。三十五には、身は殺者と爲す。自ら殘害する故なり。三十六には、身は苦器と爲す。苦に逼らるる故なり。三十七には、身は苦の聚と爲す。五蘊の生なる故なり。三十八には、身は無主と爲す。衆緣の生なる故なり。三十九には、是の身には命無し。男女の相を離るる故なり。四十には、是の身をば空と爲す。應に蘊・處・界と觀るべきが故なり。四十一には、是の身は虛妄なり。夢中の如くなる故なり。四十二には、是の身は不實なり。幻化の如くなる故なり。四十三には、身をば幻惑と爲す。陽焰の如くなる故なり。四十四には、身をば欺誑と爲す。影像の如くなる故なり。是れを四十四種と爲す。菩薩は是の觀を作す時に、有つ所の身命の愛欲・執著せる妻子・舍宅・飲食・衣服・車乘・香鬘・一切の樂具を、皆悉く厭離して顧戀する所無くば、速に能く六波羅蜜を成じて、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

善く人身を得るは甚だ難しと爲さば　此の身の爲めに衆惡を造る莫かれ　畢竟じて塚間にて狐狼に餧すなれば　惡見を爲して貪愛を生ずること勿かれ　凡愚は迷惑癡狂の故にて　此の身を愛するに由り諸業を造れども　此の身も亦復恩を知らずして　晝夜に唯衆苦の緣を增すのみ

機關は動轉して常に疲困し　涕唾便利は恒に充滿し　饑渴寒熱相ひ煎り迫るに　何ぞ智ある者にして此の身を愛せんや　此の身は厭く無きこと大坑の如くにして　徒に能く衆の怨害を長養し　此の身に由る故にて常に惡を作り　無量劫に於て諸苦を受くれば　應に定つて死することを念じて勝福を修め　正信を佛法の中に生ずべし　飲食衣服及び塗香にて　此の身を長養し來れること已に久しきも　誰れか能く執持して壞れざらしむるか　應に益無きを知つて耽り迷ふこと勿かるべし　牟尼世尊には遇はれ難く　無量劫中の時に出現せるなれば　當

【一七】身は妄なる、乃至、敗壞する故なり。異譯本には「菩薩は、身の勤苦すとも無利なるを觀ず。是れ無常生滅の法なる故を以てなり。」とあり。

時に、世尊は此の偈を說き已つて、復五百の比丘に告げて言はく。若し諸の菩薩は、勝れたる志樂を發して、阿耨多羅三藐三菩提に趣かんには、應に此の身の四十四種を觀ずべし。何等を名けて、四十四種と爲すか。一には、[一五]此の身は厭ふべし。性に和合無き故なり。二には、此の身は臭穢なり。膿血常に流るる故なり。三には、是の身は堅ならず。畢竟じて敗壞する故なり。四には、是の身は羸弱なり。支節にて相ひ持つ故なり。五には、是の身は不淨なり。穢惡流溢する故なり。六には、是の身は幻の如し。凡愚を誑惑する故なり。七には、是の身は瘡門なり。九處に常に流るるが故なり。八には、是の身には火然ゆ。欲火盛なる故なり。九には、是の身は火と爲す。瞋火猛き故なり。十には、是の身は遍く然ゆ。癡火遍き故なり。十一には、是の身は盲冥なり。貪・瞋・癡なる故なり。十二には、是の身は網に墮せり。愛の網覆ふ故なり。十三には、是の身は瘡の聚なり。瘡は遍滿する故なり。十四には、是の身は安からず。[一六]四百四病なる故なり。十五には、諸蟲の住む處なり。八萬戸の蟲なる故なり。十六には、是の身は無常なり。畢竟じて死に歸する故なり。十七には、是の身は頑癡なり。法に於て無知なる故なり。十八には、猶瓦器の如くなり。生・住・壞なる故なり。十九には、是の身は逼迫なり。憂惱多き故なり。二十には、救護を有つ無し。必ず壞滅する故なり。二十一には、是の身は險惡なり。諂誑にして知り難き故なり。二十二には、底無き坑の如くなり。諸欲滿し難き故なり。二十三には、火の薪を受くるが如くなり。色を貪つて厭くこと無き故なり。二十四には、身に厭き足る無し。五欲を貪受する故なり。二十五には、捶打を被るが如くなり。損害に隨ふ故なり。二十六には、是の身は不定なり。盛衰・增滅する故なり。二十七には、身は心の轉ずるに隨ふ。正思惟せざる故なり。二十八には、身に恩を知らざるなり。必ず冢間に棄つる故なり。二十九には、身は他の食と爲る。狐狼に噉はるる故なり。三十には、身は機關の如くなり。筋骨にて相ひ持つ故なり。三十一には、身は觀られず。膿血・糞穢なる故なり。三十二には、

【一五】此の身は厭ふべし。性に和合無き故なり。異譯本には「菩薩は、身の愛樂す可からざるを觀ずるは、饒益せざる故を以てなり。」とあり。

【一六】四百四病。身體構成の物質的原素たる地・水・火・風を元として、各、一百一の病起ると立てたる者なり。

るが如くに、駛き河流の終に死海に歸するが如きなり。復、長者に告ぐ。次に此の身の前後の因緣を觀ずるも、初め欲愛の和合よりして生じ、長養を爲さん故に[九]摶食を咽み、生藏に至つて痰癃にて之れを消し、[一〇]次に黄藏に至り將に熟せんと欲する時に、則ち變じて酢と爲り、[一一]次に風藏に至り風にて汁滓を分ち、各別に流行して大・小便を成し、汁は變じて血と爲り、血は變じて肉と爲り、肉の處に脂を生じ、脂の處に骨を爲し、骨の中に髓を生ず。是くの如くに、身の緣の前後は不淨なり。若く、菩薩は是の觀を作す時に、復應に思惟すべし。此くの如き身は、三百六十の骨の聚にて成る所なれば、朽壞せる舍の如くにして、諸の節にて支持し、四つの網脈を以て周く帀つて彌し布き、五百の肉は猶泥の塗りたるが若く、六つの脉は相ひ繫り、五百の筋纒ひ、七百の細脉は以て編絡を爲し、十六の麤脉は鉤帶として相ひ連り、[一二]二つの肉繩の長さ三尋半なる有つて、內に於て纒ひ結び、十六の腸胃は生・熟藏と遶り、二十五の氣脉は猶窓の隙の如く、[一三]一百七の關穴は破碎せる器の如く、八萬の毛孔は亂草の覆へるが如く、五根・七竅に不淨盈滿し、七重の皮は六味の長養を裹んで、猶祠火の呑受して厭く無きが如し。是くの如き身の、一切臭穢にして自性の潰亂せるを、誰れか此れに於て愛重し憍慢すべけん。唯應に他の器を借るが如しと觀察して、猶車の運載するごとくに、但養育して菩提に至る故を爲すべきなり。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

是の身は衆穢の器なること　猶糞を貯へたる瓶の如くなるに　凡夫は智慧無くして　色を恃んで憍慢を生ずるなり　鼻中に洟恒に流れ　口氣は常に臭穢に　眼は眵に蟲は身に遍きに　誰れか當に淨想を生ぜん　人の炭を執持し　[一四]磨鎣して白からしめんと欲するに　假使ひ時を盡すに至るとも　體色は終まで變無きが如くに　設ひ其の身を淨めんと欲し　河を傾け以て自ら身を洗ひ盡すとも　淨め能ふ莫き　其の事も亦是くの如し　と。

【九】摶食（Piṇḍa）。原本には搏食とあれど、誤なれば訂せり。摶食とは、四食の一にして、「手にて握り丸めたる食物」を謂ふ。當時、印度人の食法なり。
【一〇】次に黄藏に至り、乃至、酢と爲り。異譯本には「然る後に、火大增彊に煮變成熟し」とあり。
【一一】次に風藏に至り。異譯本には「後風力に歸し、」とあり。
【一二】二つの肉繩の、乃至、生熟藏と繞り。異譯本には「內に纒ひたる其の腸は、生、熟藏の腸と分れて、十六の交絡して、住するあり。」とあり。
【一三】一百七の關穴。異譯本には「一百七の節」とあり。
【一四】磨鎣。「鎣」は、原本には瑩を用ひたれど、此の所は鎣の字寧は適當せるに由り、三本に據つて改めたり。

應に精進を起すべく、身命を惜まずして應に一心を修すべく、禪定に安住して應に智慧・善巧方便を修すべく、應に我・人・衆生・壽命に於て皆悉く捨離すべければ、衆生の爲めの故に應に布施を行ひ、淨戒を護持すべく、衆生の爲めの故に應に忍辱を修し精進を發起すべく、衆生の爲めの故に應に禪定に入り、智慧・善巧方便を修習すべきなり。と。時に諸の長者は、復佛に白して言はく。世尊、我等は身及び彼の妻子・一切の財寶・資生の具に於て心に常に愛惜す。世尊、菩薩摩訶薩は云何に觀察すとも、身・命に於て貪悋無き能はず。と。爾の時に、世尊は長者に告げて言はく。善男子、菩薩摩訶薩の、阿耨多羅三藐三菩提に於て勝れて志樂する者は、應に此の身の無量の過患を觀ずべし。微[七]塵積集して、生・住・異・滅し念念に遷流す。九つの漏瘡の門は、猶毒蛇の住む所の窟穴の如く、其の中に主無きこと空なる聚落の如く、畢竟じて破壞すること坏・瓦・瓶の如く、惡露の盈溢せること猶穢器の如く、諸の不淨を受くること猶圊廁の如く、觸れ動すべからざること猶惡瘡の如く、美を食りて患を爲すこと雜毒の食の如く、恩德を識らざること未生の怨の如く、人を欺き誤ること惡知識の如く、癡愛に害せらるること獼猴を友とせるが如く、智慧の命を斷つこと猶殺者の如く、諸の善法を奪ふこと猶劫賊の如く、常に人の便を求むること猶怨讎の如く、慈心を有つ無きこと猶魁膾の如く、事を承けられ難きこと暴惡の人の如く、箭の身に著けるが如くにして之れに觸るれば則ち痛み、朽腐せる舍の如くにして常に務め修治し、老い弱りたる乘の如くにして驅り策たれ難く、毒蛇の篋の如くにして附き近づかれず、逆旅の館の如くにして疲苦の集る所に、孤獨なる舍の如くにして攝屬する所無く、獄卒の司る害の如くに、王者の憂ふる國の如くに、邊城の警むる畏の如くに、惡國の多くの災の如くに、破器の持ち難きが如くに、[八]祠火の厭く無きが如くに、陽焰の誑誑なるが如くに、幻化の人を惑すが如くに、析けたる芭蕉の、中に堅實無きが如くに、水の聚沫の執持せられざる如くに、水上の泡の速に起り速に滅するが如くに、河岸の樹の危に臨んで動搖せ

【七】微塵積集して、乃至、念念に遷流す。 異譯本には「此の身は不實の緣法にして、合集せること極微の聚の如く、頂より足に至るまで、次第に破壞す。」とあり。

【八】祠火の厭く無きが如くに。 異譯本には「火の蔓延するが如く、」とあり。

て佛足を頂禮し、右に遶ること三帀して、却いて一面に坐せり。爾の時に、世尊は知れども而も故に問うて、長者に告げて言はく。汝等、何の緣にて今我が所に來れるか。と。時に、勇猛授は、五百の長者と座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、白して言はく。世尊、我等諸人は、同時に集會して是の議を作して言はく。佛の世には遇ひ難く、人身は得難く、乃至、生死を解脱することは、倍復難しと爲す。我等、聲聞・辟支佛の乘に於てして滅度を求むると爲さんか。當に最上の佛乘に發趣すべきことを爲さんか。と。咸是の言を作さく。我等は寧ろ無上の佛道に於てして涅槃に趣かん。と。此の議に由る故にて、今如來・應・正等覺に詣れるなり。世尊、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を志求せば、應に云何に學ぶべく、應に云何に住し、云何に修行すべきか。佛、言はく。善い哉、善い哉。汝等の、阿耨多羅三藐三菩提に發趣せんとて、我が所に來り詣れることや。應當に諦に聽きて、善く之れを思念すべし。諸の菩薩の、應に學ぶべく、應に住すべく、應に修行する所の如きを、當に汝が爲めに說かん。と。時に諸の長者は、敎を受けんとて聽けり。

佛は長者に告ぐらく。菩薩摩訶薩の、阿耨多羅三藐三菩提に於て、勝れて志樂する者は、當に一切の衆生に於て大悲の心を起して、應に廣く修行すべく、應に勤めて薰習すべくあるべし。是の故に、菩薩は、身・命・財及以び妻子・倉庫・舍宅・飲食・衣服・車乘・臥具・華鬘・塗香・一切の樂具に、應に著する所無かるべし。何を以ての故ぞ。諸の衆生の、身に執著するを以てして惡業を生じ、惡業に由る故にて地獄の中に墮すれども、若し衆生に於て大悲の心を起して、身・命・財に於て則ち執著せずんば、便ち善趣に生ずればなり。是の故に、菩薩摩訶薩の、阿耨多羅三藐三菩提に於て勝れて志樂する者は、諸の衆生に於て慈悲を起し已つて、應に大捨を修して報を求めざるべきなり。[四]報を求めざる者にして應に戒律に住すべく、[五、六]三戒清淨にして應に忍辱を具すべく、能く諸惡を忍んで

【四】報を求めざる者にして、應に戒律に住すべく。異譯本に「果報を求めずして、戒行に安住し」とあり。
【五】三戒清淨にして應に忍辱を具すべく。異譯本に「三相清淨にして、諸の忍辱を修し」とあり。
【六】三戒。一に在家戒（八戒なり）二に出家戒（十戒・具足戒なり）三に道俗具戒（五戒なり）を謂ふ。

卷の第九十六

勤授長者會　第二十八

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘の衆千二百五十人と倶なりき。皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡きて復の煩惱無く　上調伏を得たること猶大龍の如く、作す所已に辨じ、諸の重擔を棄て、己利を逮得し、諸の有結を盡し、正智にて解脱して心に自在を得、最上應供として衆に知識せられたり。――唯阿難の猶學地に在るあるのみ。――其の名を阿若憍陳如・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶阿濕波・舍利弗・大目乾連・摩訶劫賓那・摩訶拘絺羅・摩訶梵頗・羅睺羅・難陀と曰ひ、是等の如きを、而ち上首と爲せり。復菩薩摩訶薩五百人あつて、倶に皆三昧及び陀羅尼を得たりき。

爾の時に、舍衞の大城に、一の長者の　勇猛授と名けたるあり。富有にして、財寶倉庫に盈滿し、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・摩尼・眞珠・象・馬・牛・羊・奴婢・僕使・商估等の類、一切衆多なりき。時に、勇猛授は、五百の長者と遊讌衆會して、是の議を作して言はく。諸仁者、佛の出世することは難く、人身は得難く、時も亦遇ひ難く、佛法の中に於て信を以て出家する、是の事も亦難く、比丘の性を成ずることも、亦復甚だ難く、法の如くに修行することも、是れ亦難しと爲し、恩を知つて恩に報い少恩をも忘れざる、是の人は得難く、能く佛法に於て信樂の心を生ずる、是の人は得難く、信樂の成就する、是の事復難く、佛の法を莊嚴する、是の事も亦難く、生死を解脱することは、倍復難しと爲す。我等は、聲聞・辟支佛の乘に於て滅度を求むるを爲さんか。當に最上の佛乘に發趣すべきを爲さんか。と。咸く復唱へて言はく。我等、寧ろ無上の佛道に於てして涅槃に趣かん。と。是の議を作し已つて、前後に圍遶して、舍衞城を出でて祇陀林に向ひ、如來の所に詣つ

【一】上調伏を得たること。異譯本（佛說無畏授所問大乘經「施護等譯」）に「心善く解脱し慧は善く解脱したること」とあり。

【二】唯阿難、乃至、在るのみ。異譯本に「唯、一補特伽羅なるは、謂はゆる阿難なり。」とあり。

【三】勇猛授。異譯本には「無畏授」とあり。

るべし。諸佛は値ひ難く、正法は聞き難ければ、豈獨り大王のみにして自ら往かんや。當に衆生の爲めに善友と作るべく、王は應に此の舍衞城の中に於て、諸の人民に勅して悉く隨從せしめ、王の敎に違ふ者をば、正法にて之れを治むべし。所以は何ぞ。凡べて諸の菩薩すら猶眷屬あつて、圍遶し莊嚴せり。況んや、王に於てをや。と。時に、波斯匿王は菩薩に白して言はく。誰れ者は、是れ菩薩に於て眷屬なるか。と。菩薩は答へて言はく。菩提心を勸むるは、是れ菩薩の眷屬なり。覺悟せしむる故なり。如來に見えよと勸むるは、是れ菩薩の眷屬なり。虛妄ならざる故なり。正法を聞くことを勸むるは、是れ菩薩の眷屬なり。多聞を獲るが故なり。聖衆を見ることを勸むるは、是れ菩薩の眷屬なり。善友を得るが故なり。四攝は、是れ菩薩の眷屬なり。衆生を攝むるが故なり。六波羅蜜は、是れ菩薩の眷屬なり。菩提を增長するが故なり。三十七品は、是れ菩薩の眷屬なり。道場に趣き向ふが故なり。菩薩に斯の眷屬あつて、莊嚴し侍衞して、能く魔軍を摧き、師子吼に至り、最勝の處に登るなり。と。爾の時に、波斯匿王及び諸の大衆は、歡喜して踊躍し、九千の衆生は、煩惱の垢を離れて清淨眼を得たりき。

佛の是の經を說き已りたまふや、善順菩薩・波斯匿王及び諸の天・人、乾闥婆・阿修羅等は、佛の所說を聞き、歡喜して奉行せり。」

を以てして、善順菩薩に施すに以ひ、是の言を作して曰はく。善い哉、仁者。願はくは、哀納を垂れたまはんことを。と。善順菩薩は、王に告げて言はく。大王、當に知るべし。我れは此の衣に於て、應に之れを受くべからざることを。所以は何ぞ。[一六]然るは、我れに自ら百の[一七]納衣あつて、恒に樹枝に掛け以て筐篋と爲すに、一切の衆生は欺き奪ふ想無ければなり。我れ既に自身に慳悋の心無く、亦他人をもして愛著を生ぜざらしむれば、其に施す者あらば、清淨の施と名く。と。時に波斯匿王は、復是の言を作さく。汝若し受けずんば、願はくば當に我が爲めに足を以て之れを踏み、我れをして、長夜に安樂・利益ならしむべし。と。菩薩は爾の時に、王の爲めの故に、卽、雙足を以て此の二衣を踏めり。時に波斯匿王は、菩薩に謂つて言はく。今此の衣は、便ち汝が身に於て我が爲めに受け訖りたれば、我れ何に用ふる所ぞ。と。善順菩薩は王に告げて言はく。汝此の衣を以て、城中の貧窮・苦惱にして依怙無き者に施せ。と。爾の時に、波斯匿王は菩薩の敎の如くに、此の二衣を持ち、諸の貧人を會めて之れを施與したり。時に、諸の貧人の、斯の衣に觸るる者にして、狂へる者は心を得、聾せる者は聞くを得、盲せる者は見るを得、根の不具なる者は悉く足を具するを得たり。菩薩の威神力に由る故なり。彼の時に、衆人は倶に聲を發して言はく。我れ今何を以て菩薩の恩を報ぜんか。と。爾の時に、空中に聲あつて、告げて曰はく。諸人、當に知るべし。善順菩薩には、華香・飮食を以て恩を報ずる者と爲すべからず。唯當に、速に菩提の心を發すべきのみ。と。

是の時に、五百の貧人は、空中に是くの如き聲あるを聞き、咸く偈を說いて言はく。

我等今は　菩提心を發し　當に正覺を成して　諸の勝法を說き　諸の衆生に於て　施すに安樂を以てすべし　我れは菩提にて　佛法を得んことを樂ふ故なり　と。

爾の時に、波斯匿王は菩薩に白して言はく。善い哉、仁者。汝若し彼に詣つて將に如來に見えんとせば、願はくば、時を我れに報ぜよ。我れ當に隨從すべし。と。善順菩薩は言はく。大王當に知

【一六】然るは、乃至、清淨の施と名く。別の異譯本には「我れ自ら弊服、補納の衣を有てるが、時あつて大王、我れの此の弊衣を樹に掛くること、一日より或は七夜に至るに、取る者ある無く、亦貪る者も無ければ、我れ起つて遊行するに、顧惜の意無し。是の故を以て、大王、凡そ衣服は、但、形を蓋ふを以てせば、已れをして著意無からしめ、又彼れをして貪らざらしむるなり。」とあり。

【一七】納衣。又、糞掃衣と曰ふ。第一卷、同名の解、參照。

と爲すか。一には、正法を護持するなり。二には、菩提心を發すなり。三には、諸の衆生に無上の願を起すことを勸むるなり。復、三十二法あつて、若し善男子、善女人にして、能く勤修せば、則ち如來に見えて、空しく過ぎざることを爲すなり。一には、諸の如來に於て、壞れざる信を生ずるなり。二には、正法を護持して、久しく住ることを得しむるなり。三には、尊重なる僧に於て、輕んじ慢らざるなり。四には、應供の人に於て、恭敬し親近するなり。五には、愛に於て僧に於て、心常に平等なるなり。六には、恒に正法に於て樂み、聞きて恭敬するなり。七には、寂靜に安住して、諠鬧を離るるなり。八には、如來の乘に於て、演說して倦むこと無きなり。九には、若し法を說く時には、名利の爲めにせざるなり。十には、眞實を志求して、理の如くに勤修するなり。十一には、捨施なり。十二には、持戒なり。十三には、忍辱なり。十四には、精進なり。十五には、禪定なり。十六には、正慧なり。十七には、諸の衆生に於て、樂に隨つて護念するなり。十八には、衆生を成熟して、法を[一五]忘失せざるなり。十九には、恒に已れの身に於て、善く自ら調伏するなり。二十には、善き法要を以て、他を調伏するなり。二十一には、煩惱に染らざるなり。二十二には、常に出家を樂むなり。二十三には、阿蘭若に住するなり。二十四には、聖種にて足ることを喜ぶなり。二十五には、頭陀を勤行するなり。二十六には、不善の法を捨つるなり。二十七には、弘誓の堅固なるなり。二十八には、蘭若にて懈る無きなり。二十九には、衆の善本を植うるなり。三十には、常に放逸ならざるなり。三十一には、二乘の見に遠るなり。三十二には、大乘を讚歎するなり。と。是に於て、五百の比丘は斯の法を聞き已るや、塵垢を遠離して法眼淨を得、及び萬二千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。爾の時、世尊は法を以て敎化して、諸の衆生をして善利を得しめ已るや、諸の比丘幷に餘の來衆と與に、忽然として現れず。

爾の時に、波斯匿王は、既に斯の事を覩るや踊躍して歡喜し、便ち二つの衣の價直百千兩金なる

【一五】忘。大正本には「妄」とあれど、他の原本には「忘」とあり、而して、此の方宜しかるべしとて、改めたり。

れに於て一にする有るは、王は實に貧窮にして、善順は富貴なり。王、今應に知るべし。[三]憍薩羅國の一切の衆生の財物の庫藏せるを、善順の五戒・八齋の堅固淸淨なるに比するに、百分・千分して其の一に及ばず、倶胝分に至るとも、亦一にも及ばざることを。と。

爾の時に、波斯匿王は、親しく如來の眞實の敎誨を聞き、憍慢とする所を捨て、合掌して、殷勤に善順を瞻仰して、偈を說いて言はく。

善い哉我が憍慢を摧伏せることや　當に如來の最勝の身を得べく　此の王位を以て汝に於て捨て[四]願はくば恒に汝が菩提の衆と爲らんことを　我れは實に貧窮にして汝を富めりと爲すと
今此の說の妄言に非ざるを知るは　王位は徒に衆苦の因と爲り　白法に背いて惡趣に生ずればなり　と。

爾の時、波斯匿王は是の偈を說き已り、佛に白して言はく。世尊、我れ今に於ては、無上の大菩提心を發し、衆生の、安樂に生死の繫縛を解脫せんことを願ず。我れ今財物・庫藏の金銀の屬を以て、分つて三分と爲し、一分をば、如來世尊及び比丘の衆に施し、一分をば、舍衞城中の貧窮・苦惱・依怙無き者に施與し、一分の財物をば、留めて國用に資せん。凡べて我が所有の園池・華果は、悉く最勝たる如來幷に比丘の衆に施し奉らんことを願ず。唯願はくば、世尊、哀を垂れて納受したまはんことを。と。爾の時に、憍薩羅國の五百の長者は、斯の事を覩已るや、皆無上大菩提の心を發したり。

爾の時に、善順菩薩は、佛に白して言はく。唯願はくば、如來の、諸の大衆の爲めに法要を說きたまひて、諸の衆生の、如來に遇へる者をして、空しく過ぎざることを爲さしめたまはんことを。と。爾の時に、世尊は衆人に告げて言はく。善男子、三つの無量なる功德の資糧あつて、諸の如來に於て、稱說するありと雖も、猶盡すこと能はず。況んや聲聞、諸の二乘等に於てをや。何者を三

【三】憍薩羅(Kosalā)國。印度當時の十六大國の一にして、今のオードウ(Oudo)地方なり。舍衞城の在る國にして、南方に同一國名の憍薩羅のあるに別たんため、城名を取つて又舍衞國と曰ふ。波斯匿王の領土なり。

【四】願はくば、乃至、衆と爲らん。異譯本に「願はくば、國を以て相ひ上つて、今より仁を師と爲さん。」とあり。

爾の時に、菩薩は卽、王の前に於て、偏に一肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、卽、偈頌を以て如來に請ひて曰はく。

如來は眞實智もて　諸の群生を悲愍したまふ　願はくは我が深心を知り　哀を垂れて作證を
爲したまはんことを　と。

爾の時、菩薩の偈を說きて請ひ已るや、彼の大地の忽然として震ひ裂けたるに於て、五百の聲聞・十千の菩薩・梵・釋の諸天及び龍・鬼・無量の衆生の圍遶せるに於て、如來は地より涌出したまへば、善順菩薩は合掌恭敬し、前んで佛に白して言はく。世尊、我れ先に、此の舍衞城の中に於て遊化往來して、劫初の時の閻浮金の鈴を得たるが、其の鈴の價直は閻浮提に過ぎたり。我れ爾の時に於て、便ち是の念を作さく。若し衆生の、舍衞城に於て最も貧窮なる者あらば、當に此の鈴を以て之れに施し與ふべし。と。復自ら思惟すらく。波斯匿王は、此の城中に於て最も貧者と爲す。何を以ての故ぞ。王位を恃んで、諸の衆生に於て未だ嘗て憐愍せず。殘ひ剝ぎ欺き奪ひて、橫に侵損を加へ、貪愛覆蔽して厭き足ることを知らざればなり。我れ此の王を以て最も貧なる者と爲す故に、將に金鈴もて之れに施與せんとするに、王は我れに問うて言はく。我れを貧窮と謂ふに、誰れを證者と爲すか。と。我れ又答へて云はく。如來・應・正等覺は煩瞋の垢を捨離したまひて餘無く、諸の衆生に於て悉く皆平等なれば、當に作證と爲すべし。と。惟、願はくば、世尊、示教利喜したまはんことを。と。爾の時に、世尊は波斯匿王を調伏せんと欲するに爲つて、之れに告げて曰はく。大王、當に知るべし。或は法あつて、善順は貧窮にして、王を富貴と爲し、或は法あつて、王を貧窮と爲し、善順は富貴なることを。所以は何ぞ、身は王位に登つて世に於て自在に、金・銀・摩尼・硨磲・珊瑚は庫藏に盈滿する、此の時に當つて、善順は貧窮にして王を富貴と爲せど、勤めて梵行を修めて淨尸羅を樂み、家を捨てて多聞し、諸の放逸を離れて八齋・五戒をし、弘く濟うて疲るる無き、此

に非ずや　若し人淨信を知つて　佛法僧に歸依せば　身及び命財に於て　常に堅固ならざるを念ぜん　堅固ならざるを知り已つて　彼に於て迷ひ惑はずんば　能く身命財に於て　永く常なる堅固を得ん　若し能く　念住を勸めて　不放逸を樂まば　彼の人を富貴と名く　善の財は常に安樂なればなり　火の焚燒する時の如きは　林樹を厭はず　王も今亦是くの如くに貪愛して厭き足る無し　水は雲を厭はず　海は水を厭はざるが　王も今亦是くの如くに何ぞ厭き足る時あらん　日月は常に巡歷して　四方を厭はざるが　王も今亦是くの如くに命を終ふるまで　休息する無し　火の焚燒する時の如きは　草木を厭はざるが　智人も亦是くの如くに　未だ嘗て善を行はずんばあらず　水の雲を厭はざる如く　海の水を厭はざる如く　智人も亦是くの如くに　善の增長することを厭はざるなり　王の位は自在なりと雖も　畢竟じて無常に歸し　一切は、皆不淨なれば、智者は應に捨て離るべきなり　と。

爾の時に、波斯匿王は斯の語を聞き已るや、內に慚愧を懷きて、菩薩に謂うて曰はく。善い哉、仁者、汝善く勸むと雖も、我れ猶未だ信ぜず。今の汝の斯の言は、汝の自說と爲すか。證ありと爲すか。と。菩薩は答へて言はく。汝聞かずや。如來・應・正等覺は一切智を具したまへるが、今は現に無量の天・人・乾闥婆・阿修羅等と與に、舍衞大城の祇樹給孤獨園に在せば、當に大王の是れ貧窮の人なることを證すべきなり。と。王言はく。仁者、若し汝の說く如くんば、我れ願はくば、相ひ與に往いて如來に見え、敎誨を聽聞して歸依・供養せんことを。と。菩薩は答へて言はく。大王、當に知るべし。如來の境界は、諸の凡愚の測り能ふ所に非ずして、煩惱の慢を破り、衆生を哀愍し、已に聖智に於て、能く此の世及び來世を知りたまへば、若し善根の勝れたる意樂を有たば、極遠に在りと雖も、佛は常に加護したまふことを。若くなれば、我が心に、大王をして我れに於て信を生ぜしめんと欲するを知りたまはば、必ず當に此に來つて、我が爲めに證を作したまふべし。と。

【三】念住。「四念住」を謂ふ。

の長者は菩薩に謂うて言はく。是の說を作す莫かれ。何を以ての故ぞ。波斯匿王は富貴にして財多く、庫藏盈ち溢れ、珍寄なる賄貨は用ひて窮り盡くる無ければ、云何ぞ乃ち、貧中の最貧なりと言はん。と。

爾の時に菩薩は、大衆の中に於て偈を以て答へて曰はく。

設ひ千億餘を伏藏するありとも　貪愛の心を以て厭足する無きこと　猶大海の衆流を吞むが如くんば　斯くの如き愚人を最も貧と爲す　此れに由つて後貪をして增長せしめ　展轉して滋蔓り相續じて生ずれば　現在の世及び未來に於て　彼れ無智の者は常に貧しくして匱しと。

爾の時に、善順菩薩は此の偈を說き已るや、諸の大衆と即便に往いて、波斯匿王に詣れり。時に於て彼の王は、長者五百餘人と、庫藏の財寶を算數し校計するに方りしが、菩薩は爾の時に、前んで王に白して言はく、我れ此の城に往來遊化して、劫初の時の閻浮金の鈴を得たるが、其の鈴の價直は閻浮提に過ぎたり。我れ彼の時に於て、竊に是の念を作せり。此の城中にて最も貧なる者あれば、當に此の鈴を持ちて之れを施し與ふべし。と。復更に思惟せり。城中にて最も貧なるは、王に過ぐる者莫し。と。今此の鈴を齎して以て相ひ奉らんと願ふ。王は既に貧窮なれば、我れに爲つて之れを受けよ。と。

爾の時に、菩薩は是の言を作し已り、重ねて偈を說いて言はく。

若し人多く貪り求めて　財を積んで厭き足る無くんば　是くの如き狂亂の人を　名けて最も貧なる者と爲す　王は恒に賦稅を多くし　橫に過無き人を罰し　國城に愛著して　來世の業を觀ぜず　世に於て自在を得ながら群生を蔭ふこと能はず　諸の貧苦の人を見ながら　曾て憐愍の念無し　女人に耽り染つて　惡道を懼れず　邪亂して未だ嘗て覺めざるは　豈貧窮の者

我れ日月釋梵天　世間の王位の三有の報を觀るに　一切無常にして堅固ならざれば　何ぞ智有る者にして玆の願を爲さんや　と。

爾の時に、天帝は此の頌を聞き已つて、復菩薩に白さく。若し言ふ所の如くんば、何を求むる願と爲すか。と。是に於て、菩薩は偈を以て答へて曰はく。

我れ本より世間の樂を貪らず　但不生不滅の身を求むるのみ　勤めて方便を修めて群生を濟ひ　同じく彼の菩提の路に登らんことを願ふなり　と。

爾の時に、天帝は是の頌を聞き已るや、心に安樂を生じ、必ず菩薩の、釋の位を求めざるを知り、歡喜踴躍し、偈を以て嘆じて曰はく。

汝の言ふ弘く濟うて群生の爲めにせんとは　此の心は廣大にして與に等しき無し　願はくは魔軍を破り甘露を澍し　斯れに由つて勝法輪を轉ぜんことを　と。

爾の時に、天帝は是の偈を說き已つて、恭敬して遶り旋つて菩薩の足を禮し、忽然として現れざりき。

爾の時に、善順菩薩は、其の晨朝に於て、舍衛城に入つて遊化往來して、[一〇]劫初の時の[一一]閻浮金の鈴を得たるが、其の鈴の價直は閻浮提に過ぎたり。爾の時に、菩薩は此の金の鈴を持ち、四衢の中に於て、高聲に唱へて言はく。此の舍衛城に於て、誰れか最も貧窮なるか。當に此の鈴を以て之れを施し與ふべし。と。時に最勝耆舊の長者ありしが、是の語を聞き已るや、奔り走つて來り、菩薩に白して言はく。我れは此の城に於て最も貧窮と爲せば、此の鈴を持ち我れに施すべし。と。爾の時に、菩薩は長者に語つて言はく。汝は貧者に非ず。所以は何ぞ。此の城中に於て、善男子の、貪中の最も貪なるあれば、應に此の鈴を以て之れに施し與ふべし。と。長者は問うて言はく。誰れを此の人と爲すか。菩薩は答へて言はく。波斯匿王は、此の城中に於て最も貪者と爲す。と。時に彼

【一〇】劫初。謂はゆる成劫の初め、卽ち現在の此の世界の成立の最初の時を謂ふ。

【一一】閻浮金（Jambunada-suvarṇa）。閻浮那他金又は閻浮檀金の略なり。卽ち閻浮提洲の中央上に同名の樹あり。其の下の河(那他の義)中より出づる金にして、赤黃色に紫焰の氣を帶びたりと云はる。

[六]日光夫人及び[七]五髻の諸の夫人等をして、菩薩の所に往き、重ねて試錬を加へて其の禁戒を壞らしめんとせり。時に舍支等は、卽五百の盛年の女人と、香を以て身に塗り、花もて莊り、藻もて飾り、後夜の分に於て、菩薩の前に至つて是の言を作さく。我等女人は、年色姝しく盛なり。願はくば、枕席に親んで、相ひ興に歡を爲さん。と。爾の時に菩薩は、無染の眼を以て、彼の諸女を觀、之れに告げて言うて曰はく。地獄・畜生・閻羅王界・諸の狂亂せる者・正心ならざる者・臭穢の膿血不淨の愛に耽昏なる惡羅刹は、是れ汝の親友にして、諸の天・人の淸淨なる眷屬には非ず。と。

爾の時に、菩薩は重ねて偈を說いて言はく

愚人は昏迷して不淨を念じ　臭穢膿血の身に耽り染れども　諸欲は迅く滅して無常に歸し　永く地獄閻羅の界に沈むなり　假令ひ汝等の如き　色身の殊勝なるを變化して世間に滿たしむとも　我れに一念の貪染の心無く　常に夢の如き怨の如き想を生ずるのみ　と。

時に、舍支等は變態を盡すと雖も、而も彼の菩薩には曾て貪染無ければ、各天宮に還つて帝釋に白して言はく。我れ善順の志願を觀るに、堅固にして當に正覺を成すべきこと、疑ある無きなり。所以は何ぞ。彼れは、我等に於て少しの貪愛も無く、但厭離を生ずればなり。と。爾の時に、帝釋は此の言を聞くとも雖も、猶憂惱を懷くこと、箭の身に中るが如くにして、恒に是の念を作さく。彼の人は、必ず當に我れを毀ち奪ふべきこと、疑惑ある無し。我れ今應に往いて、重ねて之れ――諸願の中に於て、的に何を願ふ所なるか。――を試みることを加ふべし。と。是の思を作し已つて菩薩の前に至り、憍慢を捨て去り、頭にて足を頂き禮し、偈を以て問うて曰はく。

仁の今勤めて淨き梵行を修するは　諸の欲願に於て何を求むる所ぞ　日月釋梵天を求めん爲めか　三有の諸王の位を求めん爲めなるか　と。

爾の時に、善順菩薩は偈を以て答へて曰はく。

【六】日光夫人。別の異譯本には「日行王女」とあり。

【七】五髻。頭上の前・後・左右・中の五個所に、髻を結びたるを謂ふ。

【八】但。大正本には「俱」とあれど、他の原本には「但」とあり。而して、此の方宜しきに由り、改めたり。

【九】日、月。「日天子」「月天子」を謂ふ。第四卷、同名の解、參照。

爾の時に、善順菩薩は而ち偈を說いて言はく。

財を積むこと千億なりと雖も　貪著の心をば捨てずんば　智者は此の人を　世に在つて恒に貧苦なりと說かん　彼れに一物無しと雖も　捨離の心に安住せば　智者は斯の人を　世間にて最も富貴なりと說かん　智者は諸の惡を離れて　一切皆端嚴なれど　愚夫は罪を作るに由つて　身を擧つて皆醜陋なり　智者は善を修むることを勸むれども　愚夫は恒に惡を爲す　寧ろ智の毀罵を受くとも　愚の稱讃を用ひざるなり[三]　と。

時に、彼の天帝の化する所の人は、是の言を聞き已るや、悵然として去れり。爾の時に、天帝は復自ら親しく試みんと、倶胝の金を持ちて菩薩の所に至り、是くの如き言を作さく。[四]我れ先に此の舍衛大城の波斯匿王に於て、餘の丈夫と諍論する所ありしが、須く一人の、我が爲めに曲げて證するものを得べし。汝能く我が爲めに證人と爲らば、當に此の金を用ひて以て相ひ奉るべし。と。爾の時に菩薩は、帝釋に告げて言はく。仁者、當に知るべし。夫れ妄語は不善の業たることを。既に自身を誑し、亦天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽をも誑せばなり。妄語の能く一切惡の根本爲るに由り、不善の道に趣き、清淨の戒を毀ち、能く色身を壞つて口氣常に臭く、出す所の言詞は人に輕賤せらるるなり。と。

爾の時に、菩薩は重ねて偈を說いて言はく。

妄語の人は　口氣常に臭く　苦惡の道に入つて　救ひ能ふ者無し　夫れ妄語は　自身を誑し　亦天龍　摩睺羅等を誑す　當に知るべし妄語は　諸惡の本と爲つて　清淨なる戒を毀ち　死して三塗に入ることを　汝設ひ我れに　滿ちたる閻浮金を與ふとも　我れ終まで　妄語を作す能はず　と。

時に、天帝釋は是れを說くを聞き已るや、忽然として現れず。爾の時に、天帝は復、舍支夫人[五]、

【三】寧ろ智の、乃至、用ひざるなり。異譯本に「當に明を受けて師と爲るべく、愚の譽むる所を用ふる勿れ。」とあり。

【四】我れ先きに、乃至、得べし。別の異譯本（佛說須賴經「前凉、支施崙」譯）に「我れ、王、波斯匿に於て、前に諍訟する所あり。仁を引いて一證と爲さん。」とあり。

【五】舍支(Saci)夫人。阿修羅の女にして、帝釋天主の第一の夫人なりと曰はる。

作し、來つて菩薩に語らく。咄なる哉、善順、彼の諸の惡人は、不善の言を以て汝を罵辱し、及び瓦石刀杖の屬を以て、横に相ひ打ち害するに、何ぞ我れをして、汝が爲めに讎報せしめざる。我れ當に汝が爲めに、彼れの命根を斷つべし。と。爾の時に、菩薩は彼の人に告げて言はく。善男子等、是の語を作す莫かれ。若し殺害せば惡業を成就す。假使ひ人あつて、我が此の身に於て節節に支解すること、猶ほ棗葉の如くにすとも、我れは終まで殺害の心を生ぜじ。何を以ての故ぞ。殺害の人は地獄・餓鬼・畜生に墮し、乃至、人身を得と雖も、生む所の父母すら猶愛念せずして、恒に衆人の憎惡する所と爲ればなり。善男子、一切の諸法に凡そ二種あり。一には、善の法、二には不善の法にして、不善の法に由れば惡趣に墮すれども、若し善の法に依らば福利を得るなり。と。

爾の時に、善順は此の義を重ねて述べんと欲して、偈を說いて言はく。

善惡は猶種植のごとし　皆業の生ずる所に隨ふ　何ぞ苦き子の因にして　甘き果を成熟する者あらん　現に法を見るに是くの如くなれば　智者は應に思惟すべし　苦の報は惡の緣に酬い

善を爲せば常に安樂なることを　と。

爾の時、天帝の化する所の人は、是の言を聞き已るや、自ら念ずらく。彼の菩薩をして、殺害の業を爲さしむる能はず。と忽然とし現れず。爾の時に、天帝は復金・銀・寶聚を化作し、諸の丈夫をして菩薩の所に至らしめて、是くの如き言を作さく。汝方便して、此の珍寶を取つて意の用ふる所に隨ふべし。と。爾の時に、菩薩は彼の人に告げて言はく。諸の善男子、是の說を作す莫かれ。所以は何ぞ。夫れ盜の業は、能く衆生をして貧窮下劣にして、依る無く怙む無からしむればなり。假使我れ貧にして命は存し濟さずとも、終まで與へざるをば取る法を行はじ。諸君當に知るべし。凡夫の愚冥なるすら、貪求をば覆ひ蔽ふことを。何ぞ智人にして、與へざるをば取ることを行ふあらんや。と。

巻の第九十五

唐　菩提流志　漢譯

善順菩薩會　第二十七

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に在して、諸の大衆、五百の聲聞・十千の菩薩の與めに恭敬して圍遶せられたり。

時に舍衞城に[一]一の菩薩の、名けて善順と曰へるありしが、已に過去の無量の佛の所に於て諸の善根を種ゑ、承事供養して、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たれば、大慈の心に住して瞋恚せず、大悲に住して弘く濟うて倦むこと無く、大喜に住して善く法界を安んじ、大捨に住して苦樂平等に、量を節して時に食し、欲を少うして足ることを知り、常に衆生に爲つて見ることを樂はれ、恒に五戒及び[二]八齋の法を以て、其の城中に於て憐愍して教化し、然る後に復布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・慈・悲・喜捨の清淨の梵行を勸めたり。

爾の時に、善順菩薩は、衆生をして佛に見え法を聞かしめんと爲して、諸の人衆の前後に圍遶せると與に、將に佛の所に詣らんとせり。時に天帝釋は、淨天眼を以て此の菩薩の、精進に住止し、頭陀を行じ、淨尸羅を具して、弘く濟ふこと堅固なるを見、便ち自ら念じて言はく。今此の善順は、諸の梵行に於て曾て懈怠せざるは、將に帝釋の處を求むる爲めならざるか。或は王位及び欲樂を貪るか。と。是の念を作し已つて、即便に四の丈夫の身を化作し、菩薩の前に至つて、種種の悪言もて菩薩を毀罵し、復刀杖を以て及び瓦石に於て、打擲して害を加へたり。爾の時に、菩薩は慈忍の力に住して、皆之れを忍受し、曾て瞋恨する無かりき。時に天帝釋は、復更に四の大丈夫を化

【一】一の菩薩の乃至曰へるなりしが。異譯本（佛說須賴經「曹魏、白延譯」）には「極貧なる者の、名けて須賴と曰へるあつて、」とあり。

【二】八齋の法。又、八關齋とも八支齋法とも曰ふ。一に、殺さず。二に、盜まず。三に、婬せず。四に、妄語せず。五に、飲酒せず。六に、身に香を塗り、鬘を飾ることをせず。及び自ら歌舞し、他の歌舞を觀聽することをせず。七に、高廣なる床座に眠臥せず。八に、中を過ぎて食せず。是れなり。即ち身の過非を禁ずる七戒と不淨を清むる一齋とを合せて稱する禁の名なり。

り。一切の衆生をして、度を得て無上道を成ぜしめんと欲して、生ずる所の處に在つて、三寶を信敬し、天の香華を以て、恒河沙の等の諸佛世尊を供養し、亦法・僧及び諸菩薩をも供養するに、奉る所の寶をして須彌山の如くならしめ、一切世間の在在處處の有らゆる衆生に、若し須つ所あらば、七寶・房舍・衣服・飮食・醫藥・臥具を悉く當に給與して、乏しき所無からしめ、若し忍辱・精進・持戒を樂ふ者あらば、我れ當に其の樂ふ所に隨つて解說を爲して勝法を成就せしめ、三寶具足して、六波羅蜜を修して、疾く佛道を成ぜしむべし。とて、諸の惡法を離れて善く實義を行ひ、身・口・意の業は菩提より退かずして菩提を樂ひ、在在處處に佛菩薩に見えて常に善根を學び、衆生を善法の中に安止するなり。是に菩薩は、自ら知れる及び他の有つ所の善根もて、智慧に趣向し智慧を思惟するは、一切衆生をして度を得解脫を得しめんと願欲する故にて、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さん故なり。是に菩薩は、趣向し思惟し已つて、一切衆生をして度を得解脫を得しめんと願ずる故にて、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さん故に、是に菩薩は、是くの如き智慧を、若し力の學び能ふ無くば、應に是くの如くに思惟すべし。我れ今當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に無明を斷つべし。我れ今復當に倍精進を加へ、時時漸漸に、此の智慧を學び、此の智慧をして增廣して具足せしむべく、乃至、生有の終まで、懈怠して憂愁を生ぜざらん。と。是くの如くにして、菩薩の、菩提心を發し菩提心を念じ菩提心を修して、菩提を悕望する心は、是れ菩薩の無量無邊なる善智慧なり。何を以ての故ぞ。此の慧の、餘の善慧の中に於て最勝第一なるは、一切世間の衆生をして、〔二〇〕無量の智慧を發起し無學の智慧を發起して、無漏の智慧を生じ無學の智慧を生ぜしむればなり。善臂、是くの如くにして、菩薩は、此の智慧を行ずるに、以て難と爲さずして以て喜樂と爲さば、速疾に般若波羅蜜を具足せん。と。

佛の是の經を說き已りたまふや、善臂菩薩は歡喜して、善い哉善い哉と讚言して、信受し奉行せり。

【二〇】「無量」は從前の例に據れば「無漏」なるべきか。

在在處處の有らゆる衆生にして、修むる所の善根にて、若しくば人中・天上に生れんと欲じ、若しくば聲聞乘に住し、若しくば辟支佛乘に住せんとならば、愛語・布施・利益・同事の若きにて、具足せしめんことを願ず。と。是に菩薩は、是の法を以ての故に、三時の中に於て、讀誦し通利して此の法を思惟するなり。謂はゆる、我れ今一切世間の在在處處の有らゆる[一九]諸佛・佛・法・僧・菩薩に歸依し、頭面に諸佛の威德の能く勝る者無く、其の相の甚だ妙なるに禮敬したてまつる。と。菩薩は常に應に、是くの如き念を諸の佛・法・僧に作すべし。願はくは、世間の在在處處をして、空處ある無く所在の方面に、常に諸佛あらしめて、我れをして勸請して、留住すること一劫に、微妙の法を說きて、諸惡の、若しは已に作り若しは今作るを呵責せしめんこと。と。我れ今已に一切の惡を離るるを得んには、乃至、一念の中間にも、當に願はくは、一切の善根を以て、諸の衆生をして壽命無量にして、一切の諸の善法の中に住して、諸の菩薩の如くに速に法輪を轉ぜしめんことを。諸の聖人をして、戒・定・慧・解脫・解脫知見を得しめんことを。願はくは、佛法をして、常に世に住して衆生を利益し、五道に生ぜる者に悉く善根を得、乃至、諸佛を敬禮せしめんことを。と、常に是の願に住するなり。是に諸の菩薩の有つ所の善にて、願はくは、他の衆生及び其の己身をして、妙なる威德・善妙なる威德を得しめ、若しくば未來・現在の一切世間の佛・法・僧の寶を、住すること一劫にして諸の留難無からしめ、及び諸の菩薩寶に、速に六波羅蜜を具足して、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずるにも、亦留難無からしめんことを。一切の衆生をして、苦惱・怖畏を斷じて喜樂を行ひ、一切の不善根を斷じて一切の善根を成就し、願ふ所の如きに隨つて三乘を成就し、速疾に諸の波羅蜜を成就し、壽命無量にして、解脫を得て無上道を成就し、乃至、諸佛を敬禮せしめんことを欲す。と常に是の願を作すなり。是に菩薩は、一切の衆生をして、諸の苦惱を斷ぜしめんと願じて、若く一切の世間の在在處處の有らゆる諸佛、乃至、法身に、己れの身を以て彼の佛に奉施せんと願ずるな

【一九】諸佛、乃至、菩薩。結局は「三寶」を謂ふ者なれど、本經は斯く五寶に分ちてあり。

すればなり。四攝に安住するは、常に諸の深法の要を聞き受持し分別するを得んことを欲し、一切をして禪定に入らしめんと欲すればなり。自ら己れの樂を捨てて衆生を利益するは、自の力を以て、他の樂ふ所に隨つて三乘に住せしめんと欲すればなり。是の化を作すと雖も、常に自は無上道の中に安住して、壞れず動かざること心金剛の如くなるは、常に無上菩提を得んと願欲して菩提を願求すればなり。是れを大乘と名く。是れを三乘を知ると名くるなり。是に菩薩は是の法を聞き已つて、受持し修學し廣く分別し已るや、卽、方便を知つて、佛・法・僧に於て五體を地に投じ、此れを以て業と爲し、其の作す所に於て無上道を願ふなり。是くの如くに歸依して菩提心を發すに、若しは行若しは住若しは坐若しは臥、若しは飮食・洗浴にも、此の事の中に於て更に餘の心無く、但無上菩提を願ひて、常に是くの如き廣博なる修學を作すなり。是に菩薩は、若しくば始めて定に入り、若しくは定に入り已れるに、常に一切衆生の度を得解脫を得んことを願ずる故にて、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さん故に、世界に於て尊ならんと欲するなり。一切衆生を調伏せんと欲する故にて、一切衆生の中に於て能く勝る者無かんことを欲し、最勝を得んと欲するなり。一切衆生を教誡せんと欲し、一切衆生をして寂滅を得しめんと欲するにて、一切の法に於て正覺を成ずるを得て、一切の佛法を具足せんことを欲し、菩提心を發して常に是くの如き廣博なる修學を作すなり。是に菩薩は、若き一切作す所の善根にて、一切の衆生に、恐怖ある無く三惡道を出でて、無量の苦を滅し諸の煩惱を斷じて、涅槃を得しめんと願ずるなり。現在・未來に、聲聞乘を得んと欲する者に、具足せしめんと願ずるなり。現在・未來に、緣覺乘を得んと欲する者に、具足せしめんと願ずるなり、現在・未來に大乘を得んと欲する者に、具足せしめんと願ずるなり。一切世間の有らゆる現在・未來の諸佛世尊を請じて、世に住すること一劫にして法を說きて、聖人の衆をして佛の在世に隨つて、和合を得しめんことを願ずるなり。是に菩薩は、是くの如くに思惟するなり。若し

非ず我所非ず。若く三世には我非ず我所非ずと見る、是れを實の智慧者と名く。我・我所の是れ我・我所たるを見ざれば、是に卽、諸有の行に於て、我無く我所の行無く、欲想の行を離れ、想行を斷ちて想を滅するなり。是の行を作すと雖も涅槃を證せざる、是れを三世を知ると名く。と。是に菩薩は是の法を聞き已つて、受持し修學し廣く分別し已つて、卽三乘謂はゆる天乘・梵乘・聖乘を知るなり。云何なるは天乘なる。初禪・二禪・三禪・四禪、是れを天乘と名く。云何なるは梵乘なる。慈・悲・喜・捨是れを梵乘と名く。云何なるは聖乘なる。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定、是れを聖乘と名く。是に菩薩は、時時に天乘・梵乘・聖乘を修集し、衆生を敎化して三乘に住せしむれど、是の時に自身は解脱を證せざる、是れを三乘を知ると名く。復次に、三乘、謂はゆる聲聞乘・緣覺乘・大乘を知るなり。云何なるは聲聞乘なる。軟根の解脱にして、一念の中に於て三有の【一八】窟宅を離れんと出世を樂欲し、涅槃を得寂滅の處を見んと欲して、勤めて精進を加ふること、頭の然ゆるを救ふが如くなるなり。若し其の未だ四聖諦を解せざる者は、智箭を以て四諦の的を射んと欲し、證せんと欲し、解せんと欲し、以て深く精進を欲するなり。是れを聲聞乘と名く。云何なるは辟支佛乘なる。中根の解脱にして、寂靜を得んと欲して獨り一處に在り、自ら利益せんと寂靜の定に入り、方便もて十二因緣を分別して、緣覺の道を得んと欲し、緣覺を證せんと欲する、是れを緣覺乘と名く。云何なるは大乘なる。上根の解脱にして、一切の衆生をして、度を得解脱を得しめんと欲して、一切智を得て一切の佛法六波羅蜜を具足することを爲し、一切の世界を利益せんと欲し、一切の衆生の苦惱を斷たんと欲して、一切世界の五欲の樂の中に於てすら、心に尙輕賤すれば、何に況んや、世間の無量の諸苦をや。衆生をして無上の戒を持たしめんと欲し、大乘の經典を聞見するを得て受持・修學・思惟・分別・讀誦して利せ令めんと欲し、勤めて精進を加ふるなり。若し菩薩あつて四攝の法を修めば、應に往いて親近すべきは、衆生をして眞の智慧を攝めしめんと欲

【一八】窟宅。生死、苦惱の生活を謂ふ。

ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老・死滅すと、菩薩は是くの如くに十二因緣の起滅を觀ずと雖も、而も[一五]滅を證せざるなり。菩薩は是くの如くに十二因緣を知るなり。是に菩薩は、是の法を聞き已り、一心に受持し修學し廣く分別し已つて、卽、三世謂はゆる過去・未來・現在を知るなり。云何なるは過去世なる。若し法の生ぜるもの已に滅せば、是れを過去世と名く。云何なるは未來世なる。若し法の未だ生ぜざるもの未だ起らずんば、是れを未來世と名く。云何なるは現在世なる。若し法の生じ已るもの未だ滅せずんば、是れを現在世と名くるなり。是に菩薩は念ずるなり。過去世の諸の不善根の、輕毀して惡む可きをば、背捨して之れより離れ、未來の不善根の、當に不善の果報を受くべきをば、喜ばず愛せず意に適はす可からず、現在の不善根をば、當に起らざらしむべし。と。是に菩薩は、能く身・口・意の業を攝護して、及び[一六]六情の根に常に善業を起して[一七]中間ある無きなり。過去の善根に於ては、是に菩薩は、菩提心もて、菩提を專念し菩提を悕望し菩提を得んと欲して、以て深重に愛樂せしは、一切衆生の度を得解脱を得んことを願じて、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さん故なり。未來世・現在世にても亦是くの如くに、常に是の心を離さずして、終まで懈怠・失念・放逸ならざるなり。過去世の陰・界・入等の若きは、卽是れ滅盡したれば、不實・不在にして我無く我所無し。未來世の陰・界・入等の若きは、是に未だ生ぜず未だ起らざれば、我無く我所無し。現在の陰・界・入の若きは、是に念念住せざるなり。何を以ての故ぞ。世の法は、一の念にも住する者ある無ければなり。若し一の念あらば、是の念の中にも亦生・住・滅あつて、是の生・住・滅も亦復住せず。生・住・滅の中に內・外の陰・界・入あるが如きも、是の內・外の陰・界入も亦生・住・滅あり。若く是くの如くに住せずんば、卽是れ我に非ず我所に非ず。若く過去世は滅盡して不實不在なれば、我非ず我所非ず。若く未來世は未だ生ぜず未だ起らざれば、我非ず我所非ず。若く現在は念念に住せざれば、是に我

【一五】滅。二乘の滅度卽ち厭身滅智（心、身空無に歸する者。）を指す。

【一六】六情の根。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を謂ふ。六根は、情識を生ずるに由つて名く。

【一七】中間ある無きなり。不斷に繼續するを謂ふ。

ず。是くの如くにして四聖諦を知るなり。是の菩薩は是くの如き法を聞き已り、受持し修學して廣く分別の已つて、卽、十二因緣を知るなり。謂はゆる無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老・死に緣たる、是れを十二因緣と名く。若く四聖諦・十二因緣を知らず見ざる、是れを無明と名く。若し身・口・意の業の、若く福業若しは罪業、若しは欲界の[一二]繫・色無色界の繫なるある、是れを行と名く。若く心・意・識ある、是れを識と名く。若く[一三]受・想・思觸・思惟ある、是れを名と名く。若く四大と四大にて造られたる色にて、歌羅羅從りせる、乃至、化生せるあつて、若しは[一四]色を作し色を作せるに非る、是れを色と名く。名と色と合せる故に、是れを名識と名く。若く眼・耳・鼻・舌・身・意なる、是れを六入と名く。若く眼にて色を緣じて眼の識を生じて、三法和合する故に觸を生ずる、是れを觸と名く。若く苦の受・樂の受・不苦不樂の受ある、是れを受と名く。若く愛染するある、是れを愛と名く。若く愛見を有つて戒り取る、是れを取と名く。若く色・受・想・行・識を有つ是れを有と名く。若く此の有の發起する、是れを生と名く。若く此の有の衰變する、是れを老と名く。若く此の有の滅壞する、是れを死と名く。菩薩は是くの如くに十六因緣を思惟し分別するなり。見聞・覺知して、地は是れ我に非れば、愛著を生ぜず。我は地に非れば、愛著を生ぜず。亦悕望も非ず。水・火・風・空・識にも亦是くの如くにするなり。見聞・覺知して、涅槃は我に非れば、愛著を生ぜず。我は涅槃に非れば、愛著を生ぜず。亦悕望も非るなり。是に菩薩は、諸法の因緣より起るを見て三解脫門を知り、廣く修學して諸法の空・無相・無作を見るなり。是に菩薩は、諸法の因緣より起るを見、寂滅の樂を知り、精勤に修學して廣く分別し已れば、則ち無明滅し、無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則

【一二】　繫。繫は「繫縛」の略なり。

【一三】　受、乃至、思惟。卽ち受・想・行・識にして「思觸」とは、謂はゆる有意的行動として、卽ち「行」を指す者とす、

【一四】　色を作し、乃至、作せるに非る。欲、色界と無色界との生身を謂ふ者なり。

專ら我に於て取り、決定して、[一]我は常住にして壞れず。我は卽是れ色なり。我は色に異り。我は卽是れ想なり。我は想に異り。我は是れ想・非想なり。我は想・非想に異り。我は卽是れ陰なり。我は陰に異り。我の中に陰有り。陰の中に我有り。我は卽是れ界・入なり。我は界・入に異り。我の中に界・入有り。界・入の中に我有り。我は卽是れ受なり。我は受に異り。我は卽是に知なり。我は知に異り。我は是れ無受なり。我は無受に異り。我は是れ色の少きなり。我は色の少きに異り。我は是れ色の多きなり。我に色の多きに異り。我は是れ常なり。我は是れ無常なり。我は是れ常・無常なり。我は是れ常に非ず、無常に非ず。我は是れ有邊なり。我は是れ無邊なり。我は是れ有邊・無邊なり。我は是れ有邊に非ず、無邊に非ず。死後は去るが如し。死後は去るが如くならず。死後は亦去るが如く、亦去るが如くならず。死後は去るが如きに非ず、去るが如くならさるに非ず。命は卽是れ身なり。身は卽是れ命なり。此の衆生は何處より來り、去つて何處に至るか。此の諸の衆生は卽是れ斷滅して、相續有るに非ず。自ら作りて自ら受く。他は作りて他は受く。と計し、我有れば卽、我所有り、我所有れば卽是に我有りと計するなり。是くの如くに、我見・身見たる若しは結若しは使、若しくば我・我所の我にて受くる貪・恚・癡を本として、總べての身・口・意の業たる若しは福業若しは罪業、若しは欲界の業、若しは色・無色界の業の若きを攝取する、是れを集の聖諦と名くるなり。云何なるは滅の聖諦なる。若し貪・恚・癡盡き、我・我所盡き、愛・取・有盡きば、是れを滅の聖諦と名く。云何なるは道の聖諦なる。若し苦・集の盡くることを見、一切の有爲の過患を思惟し、涅槃の寂靜なるを見て、作す所已に辦じ、是くの如き法に住する時に、正見に、正思惟に、正語に、正業に、正命に、正精進に、正念に、正定ならば、是れを道の聖諦と名く。是くの如くに四聖諦を知るなり。是の菩薩は四聖諦を分別し思惟する時に、有爲法の、是れ苦・是れ無常・是れ空・是れ無我なるを見、無爲法の、能く覆護と爲つて、是れ舍・是れ依なるを見、是の觀を作すと雖も涅槃を證せ

【一】我が常住にして壞れず、乃至、我有りと計するなり。是れ謂はゆる「長阿含十四、梵動經」に說く所の「有らゆる沙門、婆羅門の末劫、末見に於て、無數種種に、隨意に說く所の彼れは、盡く四十四見の中に入る。」と曰へる者に通ずべきか。

苦ならば卽、無我なりと觀ずる、是れを六界を知ると名く。是の菩薩は、是くの如き法を聞き已り、受持し修學し廣く分別し已つて、卽、五陰、謂はゆる色・受・想・行・識の陰を知るなり。色は、水沫の如くに、卽是に生滅して久しく住るを得ず。受は、水泡の如くに、卽是に生滅して久しく住るを得ず。想は、野馬の如くに、卽是に生滅して久しく住るを得ず。行は、芭蕉の如くに、卽是に生滅して久しく住るを得ず。識は、幻化の如くに、卽是に生滅して久しく住るを得ず。と。是れを五陰を知ると名く。是の菩薩は是の法を聞き已り、受持し修學し廣く分別し已つて、卽、內入を知るなり。謂はゆる眼入、耳・鼻・舌・身・意入、是れを內の六入と名く。眼入は卽是れ苦の法・老の法・死の法として、空にして我無く我所無きに、熾然たる三毒もて、生・老・病・死・憂・悲・苦・惱も、亦能く熾然たる諸の苦惱の法たり。耳・鼻・舌・身・意も亦是くの如くに熾然たる三毒もて、乃至、諸苦なり。と。是れを內の六入を知ると名く。復次に、外の六入を知るなり。眼にて見る所の色、是れを外の六入と名く。耳にて聞く所の聲、鼻にて嗅ぐ所の香、舌にて嘗むる所の味、身にて覺る所の觸、意にて知る所の法、是れを外の六入と名く。眼にて見る所の色の是の外入は、堅牢の性ならず、依止する所無く、亦勢力無く、一切無常にして、實の如くなれども非にして如實ならず、幻の如く化の如し。耳にて聞く所の聲、鼻にて嗅ぐ所の香、舌にて嘗むる所の味、身にて覺る所の觸、意にて知る所の法も亦是くの如し。と。是れを外の六入を知ると名く。是の菩薩は、是くの如き法を聞き已り、受持し修學し廣く分別し已つて、卽、四聖諦を知るなり。謂はゆる、苦の聖諦・集の聖諦・滅の聖諦・道の聖諦、是れを四聖諦と名く。云何なるは、苦の聖諦なる。五陰・六界・內の六入・外の六入の若き、是れを苦と名く。此の苦は無常にして、喩へば、怨賊の如く、癰の如く、箭の如く、獄に閉ぢ繫るるが如く、器の壞敗する如くにして、是に自在ならざれば、卽是れ我無し。と。是くの如くに知り已る、是れを苦の聖諦と名く。云何なるは集の聖諦なる。謂はゆる貪・恚・癡・慢[10]・我慢を、

【一〇】慢(māna)。我慢(asmi-māna)。「他をあなどる」と「我れを高ぶる」との意なるべし。

に界を知るか。二界を知るなり。有爲の界・無爲の界、是れを二界と名く。云何なるは有爲の界なる。若し法にして、生じ住し滅する者ならば、是れを有爲の界と名く。云何なるは無爲の界なる。若し法にして、生・住・滅無くば、是れを無爲の界と名く。是れを有爲・無爲の界を知ると名くるなり。復次に、三界たる善界・不善界・無記界を知るなり。云何なるは善界なる。若し不貪と不貪と共に、若し不恚と不恚と共に、若し不癡と不癡と共ならば、是れを善界と名く。云何なるは不善界なる。若し貪と貪と共に、若し瞋と瞋と共に、若し癡は癡と共ならば、是れを不善界と名く。云何なるは無記界なる。善・不善を除いて、若し餘の法あらば、是れを無記界と名くるなり。復次に三界たる、謂はゆる欲界・色界・無色界を知るなり。云何なるは欲界なる。地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人・四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天にて、若し此の中に於て、欲染の貪著・瞋恚・愚癡もて悕望して、心の作す所の業を得んと欲せば、是れを欲界を知ると名く。云何なるは色界なる。梵天たる梵輔天・梵衆天・大梵天・光天たる少光天・無量光天・光音天、淨天たる少淨天・無量淨天・遍淨天、果實天たる少果天・廣果天・無量果天、無想天・無熱天・無惱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天にて、色染の愚癡もて悕望して、心の作す所の業を得んと欲せば、是れを色界と名く。云何なるは無色界なる。空處天・識處天・無所有處天・非有想非無想處天にて、若し此の中に於て、無色染汙の愚癡もて悕望して、心の作す所の業を得んと欲せば、是れを無色界と名く。是れを三界と名くるなり。復次に、四界の、欲界・色界・無色界・無爲界なるを知るなり。是れを四界を知ると名く。復次に、六界の、謂はゆる、欲界・恚界・害界・出界・不恚界・不害界なるを知るなり。是れを六界を知ると名く。復次に、六界を知るなり。謂はゆる地・水・火・風・空・識の界なり。是れを六界と名く。地大は無常・變壞にして、堅き無く牢き相無し。若し無常ならば卽是れ苦なり。若し是れ苦ならば、卽、無我なり。水・火・風・空・識大も無常・變壞にして堅牢の相無し。若し無常ならば、卽、苦なり。若し

具足せん爲めの故にと、若く思惟するなり。若く思惟し已つて、一切衆生をして、度を得解脱を得しめんと願ずる故にて一切智を得て一切の佛法を具足せんと爲す故に、此の禪定に於て、若し力の學び能ふ無くば、是の菩薩は應に是くの如くに思惟すべし。我れ今應に時時漸漸に、勤めて精進を加へて亂心を遠離し、時時漸漸に、勤めて精進を加へて勤めて一心を學び、此の一心をして增廣・具足せしむるに、乃至、生有の終まで懈怠せずして、愁憂を生ぜざらん。と。是く菩薩の、菩提心を發起し菩提心を念じ菩提心を修して、菩提を希望し菩提を願求する、是れを菩薩摩訶薩の無量無邊なる善根の禪定と名く。一切世間の在在處處の有らゆる衆生をして、無漏の禪定を發起し無學の禪定を發起して、無漏の禪定を生じ無學の禪定を生ぜしめんと欲すればなり。菩薩摩訶薩にして是の禪定を行じて、以て難と爲さずして以て喜樂と爲さば、速疾に禪波羅蜜を具足せん。

善臂、云何に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を具足するか。善臂、若し聰明なる智慧の人あつて、學び已つて能く持ち、聞き已つて誦し習うて、善く諸法の甚深なる相義を學び、亦能く聞く所の法の如きを分別せんと、聞き已つて義を思ふには、是等の如き者あり。菩薩は爾の時に、則ち應に親近し恭敬し供養し尊重し讃歎して、乃至、刀杖にても、應に遠離すべからざるべし。是れ菩薩は、學び問はんとする故に因り、義を了せんとする故に因り、義を思ふ故に因り、師の和上を供養し恭敬する故にて、乃至、死に近くとも、終まで諸の苦惱の事、謂はゆる饑渴・寒熱・蚊虻・毒螫・風吹・日曝・諸の惡觸等・罵詈・誹謗より避難せざるなり。是の菩薩は、正法の中に於ては寶の聚の想を起し、說法の者に於ては寶藏の想を起し、聽法の者に於ては遭ひ難き想を起し、義を問ふ者に於ては壽命の想を起し、多く學べる者の無明を斷除せるに於ては、智慧の想を起し、諸法を分別するに於ては、百千生にて慧眼を生じたる想を起すなり。是の菩薩は、是の諸法を聞き、受持し修學して廣く分別し已るや、陰・界・入・四聖諦・十二因緣・三世・三乘を知ること、是くの如くに知るを得るなり。云何

は好若しは醜なるを觀じ、其の相貌を取つて、[五]第二の勝處の行を成就するなり。是の菩薩の、死の若き・燒き・風吹き・日曝して灰土を成爲し・水に爲つて漂はさるるが如き、碎け滅し、磨り滅するが如き、三有を斷つが若き、[六](に於て)是に內に色想無くして、外に色の少しく若しくは好若しは醜なるを觀じて、其の相貌を取ると名くるものは、第三の勝處の行を成就せるなり。是の菩薩は、內に色の想無くして、外に色の多く若しは好若しは醜なるを觀じ、其の相貌を取つて、第四の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、內に色の相無くして、外に色の靑の無量無邊にして、愛樂にて取る相を觀じて、第五の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、內に色の相無くして、外に色の赤の無量無邊にして、愛樂にて取る相を觀じて、第六の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、內に色の相無くして、外に色の黃の無量無邊にして、愛樂にて取る相を觀じて、第七の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、內に色の相無くして、外に色の白の無量無邊にして、愛樂にて取る相を觀じて、第八の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、[七]是の無量無邊の地の一切の處に入つて、異る相を念ぜずして、初の一切處の行を成就するなり。是の菩薩は、無量無邊の水・火・風と靑・黃・赤・白と虛空と識との一切の處に入つて、異る相を念ぜずして、十の一切入處の行を成就するなり。是の菩薩は、苦の法に入る時に、心に一切の善根謂はゆる大慈・大悲もて正法を攝持し、三寶を斷たざらんと緣ずるなり。莊嚴せる佛身・淸淨なる梵音もて、本昔の誓願にて衆生を敎化せんと、佛世界を淨め、菩提樹に坐し、妙法輪を轉じて、一切の衆生の結使を除斷せんと、其の心に緣ずる所の境界は是くの如きなり。是の菩薩の禪定に入る時には、[八]四識住の處を離れ、[九]地大・水大・火大・風大・空大・識大に依らず、亦今世・後世に依止せず。是くの如き定に入つて、都べて依る所無きなり。是の菩薩の禪に入つて其の心愛樂するは、無上解脫の定に入らんと欲する爲めの故なり。是の菩薩の禪定を修行するは、一切の衆生をして、度を得解脫を得しめんと願ずる故にて一切智を得て一切の佛法を

【五】第二。大正本には只「二」とあれど、他の原本に據り、又後の說述に對して、誤脫なるを知るに由り、加へたり。

【六】「括弧內」の句。當然在るべき者なるに由り加へたり。

【七】是の無量無邊の、乃至、十の一切入處の行を成就するなり。謂はゆる十一切處(一切萬有を總合して、一概念(此れに地、水、乃至、識の十なり。)の對象として觀ずる禪法なり。)に就いて謂へるなり。

【八】四識住。色・受・想・行の四識住なり。即ち此の四蘊は、識蘊の安住し愛著する所なるに由つて名く。

【九】地大乃至識大。謂はゆる「六大」なり。

ずること夢の如くなるを欲するは、念念に滅する故なり。觀ずること癰の如くなるを欲するは、苦に於て倒に中に樂の想を生ずる故なり。觀ずること鉤の如くなるを欲するは、諸の惡法を行じて惡道に墮する故なり。觀ずること灰河の如くなるを欲するは、欲染を增益して足ることを知らざる故なり。是の故を菩薩は是くの如くに觀じ已るや、[一]欲惡・不善の法を離れ、覺有り觀有り、[二]離れて喜樂を生じて、初禪の行を成ずるなり。覺・觀を離れ、內は淨信にして心は一處に在り、覺無く觀無く、定にて喜樂を生じて、二禪の行を成ずるなり。喜を離れ捨を行じて正智を念じ、一心にして身行の樂の、諸の聖人の能く行ずるを能く捨てて、三禪の行を成ずるなり。苦・樂の意を捨て、先つて憂・喜を滅し、捨を行じて淨を念じ、四禪の行を成ずるなり。一切衆生の思惟する樂の想に於て、無量無邊の慈心を成就し、衆生の中の思惟する苦の想に於て、無量無邊の悲心を成就し、衆生の中の思惟する喜の想に於て、無量無邊の喜心を成就し、衆生の中の苦樂を捨つる想に於て、無量無邊の捨心を成就するなり。是の菩薩は[三]色の想を思惟せずして空處の寂靜の行を成就し、空の想を思惟せずして識處の寂靜の行を成就し、識の想を思惟せずして無所有處の寂靜の行を成就し、無所有處の想を思惟せずして非有想・非無想處の寂靜の行を成就するなり。是の菩薩は、入る息出づる息に於て、若しは隨ひ若しは住めて、長時には長を知り短時には短を知つて、入息・出息の寂靜の行を成就するなり。是の菩薩は、思惟して身の不淨なる想を觀じて、不淨の寂靜の行を成就するなり。是の菩薩は、無常を思惟し生・老・病の過を想ひて、無常の想の寂靜の行を成就するなり。食を思惟し、中に無量の過患の想を起して、食不淨の想の寂靜の行を成就するなり。諸の世界の城邑・聚落・種種の嚴飾の中に於て、必ず壞敗に歸する想を思惟し分別して、世間不可樂の寂靜の行を成就するなり。是の菩薩は、內に色の想を有ちて、外に色の少しく若しは好若しは醜なるを觀じ、其の相貌を取つて、初の勝處の行を成就するなり。是の菩薩は、[四]內に色の想を有ちて、外に色の多く若し

【一】欲惡不善の法、乃至、四禪の行を成ずるなり。謂はゆる四禪定の相を謂ふ者なり。
【二】離れて。苦受を離るるを謂ふ。
【三】色の想、乃至、成就するなり。謂はゆる四無色界の生因たる禪定に就いて謂ふ。
【四】內に色の想、乃至、第八の勝處の行を成就するなり。謂はゆる「八勝處」(勝知、勝見を發して、貪愛を捨つる八禪定)に就いて謂ふ。

卷の第九十四

善臂菩薩會　第二十六の二

善臂、云何に菩薩摩訶薩は禪波羅蜜を行ずることを具足するか。菩薩、若し眼に色を見るとも其の相を取らず、或は時に眼根は外緣に爲つて牽るとも、應に正行もて守護して緣に隨はしめず、心を無明に留めて世間に貪著せざるべく、是の戒を護持するなり。爾の時、眼根の戒を得ることを具足せば、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を嘗め、身に觸を覺り、意に法を知るにも、亦是くの如くにするなり。是の菩薩は、若しは行・住・坐・臥にも、若しは法を說くにも、若しは嘿然たるにも、終まで寂定の心を遠離せざるなり。善く手足を護つて、散亂ある無くして常に慚愧を懷き、善く口業を護つて、安庠として直視し、心は常に寂靜にして戲笑を喜ます、善く身・口・意の業を御して、其れをして寂靜ならしむるなり。若しくば、屛隈の處及び現露せる處にも、異る心ある無く、須ふる所の物、衣服・飮食・臥具・醫藥に於て、心常に足ることを知つて、養ひ易く滿し易く使はれ易くし、善く寂靜を行じて憒閙を遠離せしむるなり。利・衰・毀譽・稱譏・苦樂に於て、心異るある無くして高らず下らず。命及び非命にも亦異る心無く、瞋る無く愛る無くして、怨家をも等しく視ること猶赤子の如くにし、忍・不忍に於て心常に平等に、聖の聲・凡の聲・寂の聲・亂の聲にも亦復是くの如くに、憎・愛の色の中に心高下せずして、染・瞋恚・愛・不愛の者を離れ、聲・香・味・觸・法にも亦復是くの如くにするなり。是の菩薩の觀ずること、骨の璅の如くなるを欲するは、邪なる憶想なる故に、此の心を發起するなり。觀じて肉團の如くなるを欲するは、怨憎多き故なり。觀じて炬火の如くなるを欲するは、苦の法に染著して樂を遠離する故なり。觀ずること樹上の果の如くなるを欲するは、多くの人の愛著する故なり。觀ずること假借の如くなるを欲するは、自在を得ざる故なり。觀

する故なれば、我れ今毘梨耶波羅蜜に趣向し已つて、衆生をして度を得解脫を得しめんと願ずる故もて、一切智を知るを得て一切の佛法を具足することを爲さん故に、是くの如き精進を、破らず缺かず荒さざるなり。となり。若し力勢無くして、學ぶことを具足し能はずんば、是に菩薩は、是くの如くに思惟するなり。我れ今勸めて精進を加へて、時時漸漸に、懈怠・懶惰を斷除すべし。彼當に勸めて精進を加へて、時時漸漸に、善く精進を學び、此の精進をして增廣・具足せしむべく、乃至、生有の終まで、懈怠せずして憂愁を生ぜざらん。と。是くの如くに、菩薩の、菩提心を發起し、菩提心を念じ菩提心を修して菩提を悕望する、是れを無量無邊阿僧祇の善精進波羅蜜と名くるなり。何を以ての故ぞ。是くの如き精進の、餘の善法の精進中に於て最勝第一なるは、一切世間の在在處處の有らゆる衆生をして、無漏の精進を發起し、無學の精進を發起して、無漏の精進を生じ無學の精進を生ぜしめんと欲すればなり。善臂、是くの如くにして、菩薩摩訶薩は精進を行ずるに、以て難と爲さずして以て喜樂と爲さば、速疾に毘梨耶波羅蜜を具足せん。』

勤めて精進を加ふること頭の然ゆるを救ふが如くにして、學持し通利し思惟し分別して他の爲めに解說せんと、智慧に精進して、一心に思惟するなり。是の菩薩は、若し一切の衆生の說法する有る處ならば、乃至、刀杖の難にても、其の所に至つて其の說く所を聽かんことを要め、或は衆生あつて、樂報の業の、若しは現世の樂若しは後世の樂なるを修めんには、菩薩は爾の時に、卽、善法の妙義を以て、法の如くに此の善法を佐助するにも、亦復勤めて精進を加ふるなり。是の菩薩は、自ら已れの身を以て、衆生に施して自在を得しむること、譬へば、四大をば、一切衆生は、中に於て自在に須つ所に隨つて用ふるが如くに、菩薩摩訶薩は身を以て人に施して、他をして自在ならしめんと、智慧に精進するなり。乃至、刀杖の難にも、常に佛・法・僧の中及び諸の師長・羸老・病苦・貧窮・無護に於て、增益し供養し恭敬するに、令く勤めて精進を加ふることをして、頭の然ゆるを救ふが如くならしむるなり。衆生の心に隨ひ、布施・愛語・利益・同事もて、隨所に之れを攝め、聲聞乘を得んと欲する者ならば、調伏して聲聞乘に安置し、緣覺乘を得んと欲する者ならば調伏して緣覺乘に安置し、菩薩乘を得んと欲する者ならば、調伏して菩薩乘に安置せんと、智慧に精進すること、頭の然ゆるを救ふが如くなり。是の菩薩は、善法を爲さん故に、六波羅蜜の因緣の故に、寒熱・饑渴・蚊虻・毒螫・風飄・日曝・惡觸・誹謗・罵詈・種種の苦惱・疲極・睡眠を計らず、此の事の中に於て、乃至、形を盡すまで、終に憶念せずして、智慧に精進すること頭の然ゆるが如くにして、乃至、刀杖の難にも亦懈怠せざるなり。是の菩薩は、無上道の因緣と爲さん故に、能く種種の苦、謂はゆる阿修羅・人・三惡道の苦を受くれども、以て難と爲さずして、智慧に精進すること、頭の然ゆるを救ふが如くなり。是の菩薩の牢强なる精進に、意勇んで堅固なるは、世に出で、佛の無上精進の力を成ぜんと欲すればなり。是の菩薩の、毘梨耶波羅蜜を得んと欲して毘梨耶波羅蜜に趣向するは、衆生をして、度を得解脫を得しめんと願ずる故に、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さんと

く自體を辨じ、自果を生ずるを因と爲し、其の因を以て縁と見たる者。）二に、等無間縁（心、心所の續起する上に於て、前心去つて始めて後心生ずるを得て、其の間に何等間雜する者無く、隨つて、前、後の二心の併起する筈無く、各心體の平等に續起する作用に於て、前心を後心の因と見たる者）三に、所縁縁（心法は、必ず縁ずる所の境あるに由り。境を、心の起る縁と見たる者）四に、增上縁（以上の三縁の外の、總べて該の者を生ずるに、與力と不障との作用を爲して、生ずることを增上せしむる者）是れなり。因みに、右は、四縁の普通の解釋に據りたる者なれど、四因、四縁と併稱し、且、第一の因縁中に、前の四因を入る者とせば、別異の一縁を立てざるを得ざれど、今は考へられず。

【一四】 四境界。該の者の生・住・異・滅の四相を謂ふ者なるべし。

況んや、善男子・善女人あつて、佛法の無量無邊なる威德・力勢を具足することを成就せんと欲する者をや。善男子・善女人は【一二】四因・【一三】四緣・【一四】四境界にて、晝夜の中に於て、心放逸し或は餘の念を生ずる若きにも、睡眠する時の若きにも、一一の念中に於て、四無量の無邊の善根を修集せんと、菩提の資用を增益することを發起するなり。我れ今當に知るべし。一一の念中にて、四無量の善根を增益せんと發起せば、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんことは則ち難と爲さざることを。是の緣を以ての故に、我れの菩提を見んことも甚だ得易しと爲す。譬へば、四大海の如きは、若しは南若しは北若しは上若しは下に邊際を得易きも、是くの如き四無量の善根の大海の菩提の資用は、其の邊を得難ければ、我れ今何故に、一一の念中に於ても四無量の善根の大海の菩提の資用を增益せんと發起せざらんや。是の故に、無上道を成ぜんと欲せば、乃至、形を盡すまで應に懈怠すべからざるなり。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。若し獅子・狐・狼・鷲・鵲・烏・鳥・蚊・虻・蠅・蚤あらんに、是等の類の如きすら尙無上道を得。況んや、我れ今は人中に生れたれば、應に懈怠すべけんや。是の故に無上道を成ぜんと欲せば、乃至、形を盡すまで應に懈怠すべからず。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。乃至、百人・千人さへ猶尙無上道を成ずることを得已れり。而して我れのみ今は獨成ずることを得ざらんや。況んや復、十方の恒河沙の等の如き現在・未來の諸佛世尊は、已に成じ當に成じたまふべきをや。是の故に我れ今、乃至、形を盡すまで應に懈怠すべからず。と。是の菩薩は、復應に是くの如くに思惟すべきなり。若し法あつて、是れ佛の說く所、若しくは聲聞の說く、若しくば菩薩の說く、乃至、狂・愚人の、佛と爲らんが故にて說くところにても、謂はゆる檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜なるならば、是の菩薩は、佛法を具足して無上道を成ぜんと欲し、一切智を得んと欲する爲めに、此の法中に於て、

【一二】四因。凡べて有爲法の生ずるに、因には、六因を立つるを普通とす。即ち、一に、能作因（能く法を作す者にして、此れに與力と不障、即ち法を生ずるに力を與ふる者と、障礙を爲さざる者とあり。）二に、俱有因（二個以上の法の、互に相ひ依つて、各存在する者。）三に、同類因（果と同類の者、即ち善果に對する善因の如き。）四に、相應因（心と心所との法の、必ず同時に起るに、各背反せずして相應する者。）五に、遍行因（邪見・疑・無明等の十二は、一切の惑に遍く行き亙つて、其の因となる者）六に、異熟因（果と異なる因を以て果を成熟する者、譬へば、善惡の因を以て、地獄、天上の無記（該の者としては善、惡に非る）の果を成ずるが如き）是れなり。然るに今、四因と曰ふは、此の六因の中の能作因は、夫の「四緣」中の增上緣に通じ（因みに、小乘俱舍にては、此の能作因を省き、他の五因を以て因體と爲せり。）又、遍行因は、同類因より特に煩惱を別に開きて立てし者なれば、同類因中に攝まるべく、斯くして謂はゆる「四因」を立てたるにはあらざるか。

【一三】四緣。一に、因緣（親し

足せん。

善臂、云何に菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜を具足するか。善臂、是に菩薩は、應に是くの如くに思惟すべきなり。今此の十方の一一の方面に無量の世界あり、一一の世界に無量無邊の衆生の集聚あつて、邊際ある無きを、我れ今當に莊嚴を發して、此の衆生をして大利益を得しめ、亦樂をも得しむべし。と。復次に、無量の衆生の利益・快樂の緣とする所の法を觀知せん故に、善根の法を發起せん故に、我れは無量の晝夜に於て、心放逸し或は餘の念を生ずる若きにも、睡眠する時の若きにも、常に念念の中に福德を增長し、一一の念の中に於ても無量無邊の善根・菩提の資用を發起せん。我れ今當に知るべし。一一の念中にも無量の善根を增益せんと發起する故に、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることは則ち難と爲さざることを。今我れ此の緣を以ての故に、我れの菩薩を見すことは甚だ得易しと爲す。是の故に無上道を得んと欲せば、乃至、形を盡すまで應に懈怠すべからず。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。菩薩は無量無邊の世界の衆生の中に於て、能く一つの世界の衆生をして、一切の諸苦を離るる者を得しむる若きにすら、我れ尙一一の念中に於て、無量の善根を發起し增益す。何に況んや、乃ち無量無邊の世界の衆生をして、生・老・病・死・恩愛の別離・怨憎の集會・三惡道の苦を遠離し斷除せしめんをや。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。菩薩摩訶薩の、一念の中に於て、無量無邊の世界の有らゆる衆生をして、一切の諸苦を遠離し斷除せしめんと欲せば、此の菩薩も亦、一念の中に於ても、無量の善根を增益せんと發起するを得よ。況んや、當に未來の無量無邊の阿僧祇劫の無量無邊の世界の衆生をして、生・老・病・死・恩愛別離・怨憎集會・三惡道の苦を遠離し斷除せしめんと欲すべきをや。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は應に是くの如くに思惟するなり。人あつて、聲聞・緣覺の法を得んと欲する若きにすら、是の人は、尙一一の念中に於て、無量無邊の善根を增益することを發起するに、何に

無明の闇障の縠を破らん爲めの故なり。是の菩薩の、忍辱・慈悲の心を受け行ずるは、一切の衆生をして、愛恚を斷たしめんと欲する故なり。耳を割く時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、一切の衆生をして、法を聞きて信ぜしめんと欲する故なり。鼻を割く時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、端嚴無上なる持戒の香を受けん爲めの故なり。足を截つ時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、如來の四神足を得ん爲めの故なり。手を截つ時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、一切の衆生を攝取して寂靜を得んと欲する爲めの故なり。支節を分解する時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、六波羅蜜を具足せしめん爲めの故なり。眼を挑る時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、慧眼を得ん爲めの故なり。首を斬る時にも、亦忍辱を行じて慈悲心を起す若きは、如來の一切智の首を得ん爲めの故なり。是の菩薩は、是くの如き忍辱に趣向するに思惟すらく。一切衆生をして度を得解脱を得しめんと願じて、一切智を得一切の佛法を具足することを爲さん故に、是くの如き忍辱に我れ今趣向するなり。と。思惟し已つて、一切衆生をして度を得解脱を得しめんと願じて、一切智を得佛法を具足することを爲さん故に、是くの如くに忍辱をば、破らず、缺かず荒さざるなり。若し勢力無くして學ぶ能はずんば、是の時に菩薩は、應に是くの如くに思惟すべし。我れ今當に勤めて精進を加へ、時時漸漸に、不忍の法を遠離し斷滅せん。今我れ勤めて精進を加へ、時時漸漸に、勤めて忍辱を學び、此の忍辱をして增廣し具足せしむるに、乃至、生有の終まで、懈怠せずして憂愁を生ぜざらん。と。是くの如くに、菩薩摩訶薩は菩提心を發し菩提心を念じ菩提心を修して、菩提を悕望し菩提を願求するなり。是の菩薩は、正行を發起するに、是等の如き無量無邊阿僧祇の善忍にて、一切世間の有らゆる衆生をして、無漏の忍辱を發起し無學の忍辱を發起し、無漏の忍辱を生じ無學の忍辱を生ぜしめんと欲するなり。善臂、是くの如くにして、菩薩摩訶薩は忍辱を行ずるに、以て難と爲さずして以て喜樂と爲さば、速疾に羼提波羅蜜を具

觸る法・卽是れ苦を受くる法なるに、我れ今云何ぞ、自ら此の命の壞の法・滅の法・盡の法に於て、而ち瞋恚を生じ他を侵害して、怨家を繫縛せんや。何を以ての故ぞ。是の己れの物に卽して卽是れ法界なるは、卽是れ自性なればなり。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。[一〇]内の眼・耳・鼻・舌・身・意は、我に非ず我所に非ず[一一]外の眼・耳・鼻・舌・身・意も亦我に非ず我所に非ざれば、云何ぞ明智の人は、此の六根の我に非ず我所に非ざる中の莊嚴に於て愛著し、瞋恚を生じて害を他の人に加へんや。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。人中は苦少けれども餓鬼には苦多く、畜生の中の苦は轉た復增多く、地獄の苦惱は無量無邊にして計倍すべからず。人中の少苦すら尙受くるを欲せざるに、何に況んや、未來世の中に於て、三惡道の無量なる苦惱を受けられんや。是の故に、我れは今應に瞋を生じて害を他に加ふべからず。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。我れ今一人を利益し能ふ若きにすら、尙應に瞋つて害を他に加へて怨家を繫縛すべからず。何に況んや、我れ甚深の法義を以て、一切世間の無量の衆生を利益せんと、大莊嚴を發せるに當つてをや。大莊嚴し已つて記別を受くるを得ば、大乘に趣いて無上の佛法を具足することを得るを、是の佛法の中にては、應に忍ばずして他を侵害し憎嫉し鬪訟すべからず。此の中にて、應に忍辱を行じて、他を利益し、善く鬪訟を和げ、嫉妬を懷かざるべければなり。と。善臂、若くに善男子・善女人あつて、乃至、阿鼻地獄にて諸の苦痛を受くとも、怨家の許に於て、尙應に瞋を生じ害を加へて侵し毀るべからず。何に況んや、人中にて少苦惱を受けたるにて、當に瞋を生じて他を害すべけんや。是の善男子・善女人の、他に爲つて、瞋り罵詈し訶責し誹謗し輕毀し惡名を稱揚せらるとも、是くの如き諸惡を悉く應に之れを忍んで、慈悲心を起すべきは、純淨無垢にして如來の心を得んと欲する故なり。是の菩薩の、諸の鞭杖・恐怖・繫縛・囚執を受くとも、此の事の中に於て、悉く應に之れを忍んで慈悲心を起すべきは、一念の中間に於て、一切の

【一〇】内。己身を謂ふ。
【一一】外。己身外の他身を謂ふ。

綺語を説き、若しくば恐怖・繫縛・囚執・鞭杖・刑戮と、種種の苦を以て菩薩に加ふる有りとも、菩薩は爾の時にも、亦復還し報ずる心を生ぜざるなり。若しくば命根及び一切の物、乃至、妻子を奪ひ、若しくば兩舌・惡口・妄語・綺語を説き、恐怖・繫縛・囚執・鞭杖・刑戮すとも、是の菩薩は、是くの如き諸事を思惟するなり。是れ我が惡行・不善の業報にして、自ら作りて自ら受くるなり。或は過去世或は現在世に、若く先に作り已つて、今果報を受くるなり。我れ今云何ぞ、自の果報に於てして他を瞋らん。と。復次に、善臂、菩薩は是くの如くに思惟するなり。若し他の人あつて、我が命根及び諸の財物、乃至、妻子を奪ひ、若しくば兩舌・惡口・妄言・綺語を説き、恐怖・繫縛・囚執・鞭杖・刑戮する有りとも、我れは此の中に於て、應に瞋害を他に加へて怨家を繫縛すべからず。何を以ての故ぞ。我れ今現世に少しき苦惱を受くるすら、尙愛し喜ばず、意に適ふ可からず。云何ぞ瞋を生じ害を他に加へて、當來の世に於て、諸の罪報の無量無邊百千萬億の苦惱の、甚だ多く喜ばず愛せず意に適ふ可からざる諸の果報を受けんや。と。復次に、善臂、菩薩は是くの如くに思惟するなり。命根有る故に命根を斷截し、財物有る故に財物を剝奪し、妻子有る故に其の妻子を奪ひ、耳根有る故に兩舌・惡口・妄言・綺語を聞き、此の身有る故に恐怖・繫縛・囚執・鞭杖・刑戮有り。今我れ自ら命根・耳根・身を受けて苦入[九]を受くるにても、云何ぞ瞋を以て害を他に加へんや。と。復次に、善臂、菩薩摩訶薩は是くの如くに思惟するなり。眼根は即是れ地大なれど、是の自物に即して即是れ法界なるは、即是れ自性なり。濕性の水・熱性の火・動性の風も、是の已れの物に即して即是れ法界なるは、即是れ自性なり。是くの如くに、一切の命は、即是れ壞の法・滅の法・盡の法に、是くの如くに一切の諸根は、是れ苦の法たる是れ苦の觸るる法・是れ苦を受くる法に、一切の身は、即是れ苦の法たる是れ苦の觸るる法・是れ苦を受くる法なるも、是の已れの物に即して即是れ法界なるは、即是れ已れの性なり。我が今の此の命は、即是れ壞の法・滅の法・盡の法にして、苦の法たる此の六根は即是れ苦の

【九】苦入。苦の處即ち苦の境界を謂ふ。

を見ば、隨つて戒を持つは、無上の神足力を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、他心を護る身・口・意業の戒を受持するは、如來の無量に他心を知る力を得ん爲めの故なり。是の菩薩は、若し放逸にして念を失せる者、謂はゆる現在・未來の三乘の義を失せる者を見ば、念を起して持ちて失はざらんことを願ふ故に、是の菩薩は法を聽き法を集め法を說く戒を持つは、四無礙辯を具足することを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、一切の身・口・意業の善根を持ち攝受奉行するは、一切衆生をして度を得解脫を得しめんと欲して、一切智を得て一切の佛法を具足することを爲さん故なり。是くの如くに、善根を一切衆生の爲めに受け行じて、衆生をして解脫を得しめん爲めに、一切智を得て一切の佛法を具足せんと願ずる故に、是くの如き持戒を、缺かず破らず荒さざるなり。若し力勢の修學し能ふ者無くんば、是の菩薩は、應に是くの如くに思惟すべし。今我れ當に勤めて精進を加へて、時時漸漸に、諸の不善の法を遠離し殺害せん。我れ今復倍精進を加へて、時時漸漸に、善く持戒を學んで增上し滿足せしむるに、乃至生有の終まで、懈怠せずして憂愁を生ぜざらん。と。善臂、是くの如くに、菩薩摩訶薩の、菩提心を發起し菩提心を念じ菩提の道を修して、菩提を悕望し菩提を願求する、是れを無量無邊の持戒の善根と名くるなり。何を以ての故ぞ。此くの如き持戒は、一切の善戒の中にて最勝第一なるは、是の戒を受持して、一切世間の有らゆる衆生をして、無漏の戒を發起し無學の戒を發起し、無漏の戒を生じ無學の戒を生ぜしめんと欲すればなり。善臂、是くの如くにして、菩薩摩訶薩は、此の持戒に於て以て難しと爲さずして、以て喜樂と爲さば、速疾に尸波羅蜜を具足せん。

善臂、云何に菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜を具足するか。是に菩薩は、自の眷屬若しくば他の衆生の、來つて菩薩の命を奪ふ者の若きに、菩薩は爾の時に、此の事の中に於て、終まで瞋り報ゆる心を生ぜざるなり。或は他の人あつて、來つて菩薩の財物、乃至、妻子を奪ひ、若しくば兩舌・惡口・妄語・

中に於て、五體もて一切世間の在在處處の過去・未來・現在の無量無邊の諸の佛・法・僧菩薩に歸命する戒を受持するは、菩提樹下の師子座の處の破壞す可からざるを得、專ら信・精進・念・定・慧に住して、法の定を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、掃灑して塔を遶る戒を受持するは、一切の佛法を具足することを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、法を讃ずる戒を持つは、無上の法輪を轉ずることを得ん爲めの故なり。是の菩薩の僧を讃ずる戒を持つは、大衆の圍遶を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時に三寶に歸依する戒を持つは、一切の衆生をして、無上の歸依を得しめんと欲する故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、一切の世間をして、常に佛・法・僧菩薩を有ちて空しからざらしめんと願ずる者の戒を受持するは、無上菩提の樂を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、一切諸佛の一切の說法を勸請[七]する戒を受持するは、十住[八]を得て法雨を雨さん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、諸罪を懺悔して諸惡穢汚を捨出する戒を受持するは、一切の愛の習氣を斷滅することを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、一切の善根を和合する戒を受持するは、一切の波羅蜜をして滿足せしめん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、一切世間の在在處處の過去・未來・現在の諸佛・聲聞・緣覺・聖衆の菩薩より下六趣の衆生に至るまで、有つ所の善根の願を念ずる戒を受持するは、無上菩提の資用を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、菩提を願求する戒を受持するは、無上菩提の正決定を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の中に於て、一切の善の根たる無上道の戒を受持するは、如來の力・無所畏を畢定することを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、父母・師長に供給する戒を受持するは、勝る無き法の定を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、若し恐畏・貧窮の人を見ば、不恐怖・供施の戒を受持するは、破壞無き難論の方便を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、縣官・盜賊・水火より救護する戒を受持するは、諸力の波羅蜜を得ん爲めの故なり。是の菩薩は、若し佛・緣覺・聲聞・菩薩の神足の變化

【七】勸請。本來は「勸め請ふ」義にして、佛の說法或は住世等を希願するを謂ひ、轉じて、諸尊を奉安する義に用ひらる。

【八】十住。菩薩乘の階位、五段二級の中の第二段にして、旣に佛地に住する聖位なり。此れに十級あり。一に、發心住二に、治地住三に、修行住四に、生貴住五に、方便具足住六に、正心住七に、不退住八に、童眞住九に、法王子住十に、灌頂住是れなり。

故なり。是の菩薩の不鞭杖の戒を持つは、諸魔・結使の留難を遠離して、法の定を得んと欲する爲めの故なり。是の菩薩の不刑戮の戒を持つは、身・口・意をして[四]不護の業を得しめん爲めの故なり。是の菩薩の不兩舌の戒を持つは、不壞の[五]和合衆を得ん爲めの故なり。是の菩薩の不惡口の戒を持つは、五種の梵音聲を得ん爲めの故なり。是の菩薩の不綺語の戒を持つは、發言して法を說くに障礙無きことを得ん爲めの故なり。是の菩薩の死を畏るる衆生を求むる戒を持つは、一切の衆生をして、生・老・病・死を脫し憂・愁・悲惱・恐怖をば斷たしめんと欲する故なり。是の菩薩の他の物を愛護して漏失せしめざる戒は、無上菩提覺の定を得ん爲めの故なり。他の衆生の婦女・妻子の、或は拘錄せらるる有らば、爾の時に菩薩は、中に於て救脫するは、不缺法の定を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、若しくば他に勸めて放たしむるは、心自在を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、若しくば自ら放ち或は他に勸めて放たしむるは、菩提樹下に坐して一切の魔・結使を破壞せん爲めの故なり。是の菩薩の、若しくば獄に繫がれたる衆生を見て、若しは自ら放ち若しは他に勸めて放たしむるは、心自在の障礙無きを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、若しくば、衆生の當に鞭杖を得べきを見て、若しは自ら放ち若しは他に勸めて放たしむるは、四つの無所畏を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、若しくば、衆生の當に刑戮せらるべきを見て、若しは自ら放ち若しは他に勸めて放たしむるは、[六]四種の法身を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、不誑の戒を持つは、菩提樹下の師子座の處に坐するに、一切の魔・結使は難を留むる能はずして、法の定を得ることの爲めの故なり。是の菩薩の、善く鬪諍を和げて專ら歡喜を生ぜしむるは、不壞の大聖衆を得ん爲めの故なり。是の菩薩の、愛語の戒を持つは、一切衆生をして、耳に好語を聞きて心に歡喜の樂を得しめんと欲する故なり。是の菩薩の、愛語に隨つて說くは、言をして虛しからさらしめんと欲する故なり。是の菩薩の、佛の文詞を讚ずる戒を持つは、聖人の威德もて大衆を成就することを得ん爲めの故なり。是の菩薩の、三時の

【四】不護の業。防護警誡せずとも安全なる行動を謂ふ。

【五】和合衆。「和合僧伽」(Samagra-saṃgha)。の譯にして「和合僧」とも曰ふ。第一卷「僧」の解、參照。

【六】四種の法身。一に、自性法身（諸佛の眞身にして、理、智の法性、自然、常住なるを謂ふ。）二に、受用身此れに又、二あり。一に、自受用身（理、智相應して、自受法樂の用を爲す者を謂ふ。）二に、他受用身（十地の菩薩の受用に應現する者を謂ふ。）三に、變化法身（地前の菩薩、二乘及び凡夫の爲めに示現する丈六の應身を謂ふ。）四に、等流法身（佛界以外の九界に等同して流現し、各界の有情身なる者を謂ふ。）以上は、皆眞如法性の法爾、無爲なる作用なるに由り、何づれも法身と稱する者とす。尙、第一卷「法身」の解、參照。

善臂、云何に菩薩摩訶薩は尸波羅蜜を具足するか。善臂、是に菩薩は、一切の衆生に於て、乃至、形を盡すまで、自ら殺生せず、他をして殺さざらしめんと不殺生を願じ、自ら偷盜せず、人をして盜まざらしめんと不偷盜を願じ、自ら邪婬せず、人をして邪婬せざらしめんと不邪婬を願じ、自ら妄語せず、人をして妄語せざらしめんと不妄語を願じ、乃至、形を盡すまで、自ら飮酒せず、人をして飮酒せざらしめんと不飮酒を願ずるなり。是くて菩薩は、此の五戒の中に於て常に堅く持ちて、專念に緩めず缺かず、勤めて精進を加へ、是くの如くにして他の人の繫縛・囚執・鞭杖・刑戮を恐怖する此の事の中に於て、永く斷ちて遠離するなり。兩舌・惡口・妄語・綺語に及ぶまで、亦復是くの如し。是の菩薩は、是くの如くに思惟するなり。我れ應に一切の衆生に於て、愛念の心を生ずること、猶父母の一子を愛念するが如くならん。若し我が父母にして、種種の苦の事、弓箭・刀杖を以て害を我れに加ふとも、我れは是の中に於て、終まで報を生ぜざらん。我れ一切の衆生に於ては、應に父母の一子を愛念するが如きこと、譬へば、父母・妻子の別離旣に久しくして、一旦相ひ見るや、其の心歡喜踊躍すること量無きが如くならん。と。是くの如くに菩薩は、一切衆生を見て其の心の歡喜することも、亦復是くの如きなり。是の菩薩の不殺の戒を持つは、衆生をして、無學の不殺戒に住することを得しめんと欲する故なり。是の菩薩の不盜の戒を持つは、衆生をして、無學の不盜戒に住することを得しめんと欲する故なり。是の菩薩の不邪婬の戒を持つは、衆生をして、無學の不婬戒に住することを得しめんと欲する故なり。是の菩薩の不妄語の戒を持つは、衆生をして、無學の實語戒に住することを得しめんと欲する故なり。是の菩薩の不飮酒の戒を持つは、衆生をして、無學の不飮酒戒に住することを得しめんと欲する故なり。是の菩薩の不恐怖の戒を持つは、〔三〕金剛定を成就するを得ん爲めの故なり。是の菩薩の不繫縛の戒を持つは、一切の衆生をして、結使の縛を斷たしめんと欲する故なり。是の菩薩の不囚執の戒を持つは、衆生をして五道を出でしめんと欲する

【三】金剛定。「金剛喩定」と同じ。第三卷、同名の解、參照。

し。我れ今當に勤めて精進を加へて、時時漸漸に、慳貪・悋惜の垢を斷除すべし。我れ當に勤めて精進を加へて、時時漸漸に、財を捨てて施與することを學び、常に我が施心をして增長・廣大ならしめ、乃至、生有の終まで、懈怠せずして心常に歡喜すべし。と。是くの如くに、菩薩の、菩提心を發し菩提心を念じ菩提心を修して、菩提を悕望し菩提を願求する、是れを菩薩の無量阿僧祇なる大施・大捨・大出と名くるなり。何を以ての故ぞ。是くの如き布施は、諸の施の中に於て最勝第一なるは、我れをして、未來の世に、一切の世間の有らゆる衆生の中に於て、法の雨を雨し、甘露の雨を雨し、法の雨を施し、甘露の雨を施し法の雨を出し、甘露の雨を出さしめよ。と。なればなり。善臂、菩薩摩訶薩は、是くの如くに施を行ずることをば、以て難しと爲さずして以て喜樂と爲さば、速疾に、檀波羅蜜を具足せん。善男子、菩薩は自ら身體支節を以て乞ふ者に施して、若しくは自ら割き、若しくは他をして割かしむることを能くせされ。何を以ての故ぞ。若し是の業を成さば、彼の乞ふ者をして、大地獄に於て無量の罪を受けしむる故なり。菩薩摩訶薩は、應に自ら身體支節を惜むべからず。所以は何ぞ。乞ふ者をして、廣大なる不善の業を遠離せしめんと欲する故なり。若し乞士あつて、來つて菩薩に從つて乞うて、須つ所のものを索めば、是の時に菩薩は、若し自ら財無くんば、應に强ゐて父母・妻子・眷屬・親戚・奴婢に逼つて其の財物を取り、其の貧匱をして、持ちて以て人に施さしむべからず。何を以ての故ぞ。菩薩摩訶薩は、一切の衆生の中に於て、平等なる慈悲心を行はんと欲する故なり。若くなれば、菩薩摩訶薩は、父母・妻子・眷屬・親戚・奴婢に逼つて、財物をば持ちて惠施に用ひずして、菩薩は爾の時に、衆生の中に於て慈悲心を得るなり。善男子、菩薩は應に他の衆生に於て慳悋の心を有ち、以て他の衆生に迫つて財を取つて、惠施すべからず。諸佛世尊の讃歎せさる所なればなり。何に況んや、自ら支節を割きて他の人に施すことをや。是れを菩薩は檀波羅蜜を具足すと名く。

聴かしむることを爲す故なり。有つ所の物を速に以て人に施すは、神通の捷疾を得る力を爲す故なり。布施の清淨なるは、無上道の中に於て難を留めざることを爲す故なり。常に施して絶えざるは、無斷の辯才を得る力を爲す故なり。意に隨ひ布施するは、衆生をして、大悲を得しむることを爲す故なり。人に逼らずして求めたる財を持ちて、布施に用ふるは、諸魔・外道をして壞亂する能はずして、自然に無上道を成ずるを得ることを爲す故なり。菩薩の布施は、應に上に説く所の如くにして惠施を行ずべきなり。若し菩薩の、上の如き施を作さんと欲する者にして、或は自ら財無くば、當に心の施を生じて、無量無邊なる一切衆生の、力有るにも力無きにも、上の如くに、是の我が善行・是の我が妙勝・是の我が寶物を布施して、能く一切世間の衆生の有つ所の快樂をして、悉く成就することを得しむるに、謂はゆる和合の樂もて、能く一切を捨てて狐疑ある無きを得、諸の有つ所の願を悉く皆成就して安樂の行を得しめ、若しくば、諸の世間の有つ所の衆生の、悕望して須つ所の物を得んと欲するを、我れ當に之れを滿足して與ふべきこと、珍寶・金銀・衣服・錢財は猶山の如くに積み、飮食の具は大巨海の如くに無量無邊なるを開示することを得んと欲すべし。是に菩薩は、晝夜、各三時[三]の中に於て、己が作す所の財施・法施を以て得る所の果報もて、一切の衆生と之れを共にして、過去・未來・現在の一切に行を有つ衆生をして、妙國界及び出世の樂を生ぜしめんと願ずるなり。是の人は、是くの如き布施を作すと雖も、終まで其の果報を求むることを悕望せずして、是くの如き方便を開示するは、衆生を化して善法に入れん爲めなり。是の菩薩の布施する時には、一切の衆生をして、度を得解脱を得しめんと願じて、一切智を得て一切の佛の法を具足することを爲さん故に、若くに布施するなり。布施し已つて、亦衆生の度を得解脱を得んことを願ひて、一切智を得て一切の佛の法を具足することを爲さん故に、此くの如くに布施するに、若し力ある無くして、之れを學ぶ能はず財を捨つる能はずんば、是に菩薩は應に是くの如くに思惟すべ

【三】三時。晝夜を各三分したる時刻を謂ふ。「六時」の解、參照。

きと、或は一錢を分つて十六分と爲し、一分を持ちて施に用ふると、其の心の歡喜は等しうして差別無きなり。善男子、是に菩薩は、諸の食を乞ふ者に於て、食を須つに食を施すは、一切智を具足する力を爲す故なり。飮を須つに飮を施すは、衆生の渇愛を斷つ力を爲す故なり。衣を須つに衣を施すは、無上の慚愧の衣を得ることを爲す故なり。乘を須つに乘を施すは、菩薩の乘・佛の乘を得ることを爲す故なり。香を須つに香を施すは、正覺持戒の香を得ることを爲す故なり。華を須つに華を施すは、如來七覺の花を得ることを爲す故なり。[一]末香を須つ者に施すに末香を以てするは、一切衆生の不善の香を除滅するを得ることを爲す故なり。塗香を須つ者に施すに塗香を以てするは、缺戒無き香身を得ることを爲す故なり。蓋を須つに蓋を施すは、衆生の煩惱の火を斷つことを爲す故なり。革屣を須つ者に施すに革屣を以てするは、無量の智慧の樂を受くることを爲す故なり。床を須つに床を施すは、衆生をして、釋梵の聖床の快樂を得しむる力を爲す故なり。坐處を須つ者に施すに坐處を以てするは、菩提樹下に坐して、諸魔結使の其の坐處を壞亂し能はざるを爲す故なり。舍を須つに舍を施すは、衆生をして、覆護の處を得て怖畏する所無く、無我を得しむる力を爲す故なり。好き園觀を以て佛僧に奉施するは、無上なる寂靜の禪定を得る力を爲す故なり。妙なる供具・種種の莊嚴を持ちて諸佛の塔廟に施すは、三十二相・八十種好の大丈夫を得る力を爲す故なり。佛塔及び闇道の中に於て、燈を然して明を施す若きは、無量なる佛眼の明を得ることを爲す故なり。種種の妓樂を以て三寶を供養するは、無量の天耳を得ることを爲す故なり。衣鉢を以て施すは、無上端嚴なる持戒を得ることを爲す故なり。扇・澡盥を以て持ちて人に施すに用ふるは、衆生をして涼清淨を得しむることを爲す故なり。紙・筆・墨及び高座を以て施すは、無上の大智慧を得ることを爲す故なり。病者に藥を施すは、衆生の結使の病を除くことを爲す。故なり地を以て他に施すは、衆生をして、三乘分の甘露界を得しむることを爲す故なり。塔を造り像を形るは、衆生をして正法を

【一】末香。抹香なり。沈檀を擣き碎きて粉末と爲せる者にして、像塔に散布する用に供す。

卷の第九十三

姚秦　鳩摩羅什　漢譯

善臂菩薩會　第二十六の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の迦蘭陀竹園に在せり。爾の時に、菩薩摩訶薩の善男子あつて、名けて善臂と曰ひしが來つて佛の所に至り、頭面にて佛足を禮し、禮し已つて、却いて一面に坐せり。

爾の時に、世尊は善臂菩薩に告げて言はく。善男子、是に六波羅蜜を、菩薩は常に當に具足すべし。何等か六なる。檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜なり。善男子、是の六波羅蜜を菩薩は常に具足すべし。善臂、云何に菩薩は檀波羅蜜を行ずることを具足するか。善臂、菩薩は諸の聚落に於て、正命にて財を求めて邪命の求に非ず、隨順して逆はず、衆生を困逼せず、以て財物を求めて布施を行ずるなり。恭敬・供養・名稱等の爲めにする故に非ずして、布施を行ふなり。羞畏の故に非ず、果報の故に非ず、生天の故に非ず、諛諂の故に非ざるなり。持戒と毀戒とに於て毀と譽とを起さず、或は是の識る所にも識る所に非ざるにも、而ち其の中に於て平等の心を以て供養して、恭敬し尊重し讃歎するなり。亦持戒と毀戒と、若しは親と不親と、識る所と識らざると、若しは怨と怨に非ざるとに於て、恒に深重なる敬愛・信樂を以てするなり。是に菩薩は其の有つ所に隨ひ、常に應に惠み施すべきこと、少なるあらば少なるを施し、多なるあらば多なるを施し、麁なるあらば麁なるを施し、細なるあらば細なるを施し、妙なるあらば妙なるを施し、不妙なるあらば不妙なるを施すなり。上饌・甘饌の飲食の、價直十萬なるを持ちて人に施すに用ふる若

まず樂んで守護する心なり。四には、一切の法に於て、勝忍の執著する無き心を發生するなり。五には、利養・恭敬・尊重を貪らざる淨き意樂の心なり。六には、佛の種智を求めて、一切の時に於て忘失する無き心なり。七には、諸の衆生に於て、尊重・恭敬して下劣にする無き心なり。八には、世論に著せずして、菩提分に於て決定を生ずる心なり。九には、諸の善根を種ゑて、雜染ある無き清淨の心なり。十には、諸の如來の諸相を捨離せるに於て、隨念を起す心なり。彌勒、是れを、菩薩は十種の心を發し、是の心に由る故にて、當に阿彌陀佛の極樂世界に往生するをべしと名くるなり。彌勒、若し人此の十種の心の中に於て、隨つて一心を成じて、彼の佛世界に往生せんと樂欲せんに、生ずるを得ざる若きは、是の處ある無きなり。と。

爾の時に、尊者阿難は、佛に白して言はく。希有なり、世尊。乃ち能く如來の眞實の功德を開示し演說して、菩薩の殊勝なる志樂を發起したまへることや。世尊、當に云何に此の經に名けて、我等は云何に受持すべきか。と。佛、阿難に告げて言はく。此の經を名けて菩薩の殊勝なる志樂を發起すと爲し、亦、彌勒菩薩の問ふ所のものと名け、是の名字を以て汝當に受持すべし。と。佛の此の經を說き已りたまふや、彌勒菩薩及び諸の聲聞・一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

頗は菩薩あつて、是くの如き諍論の過失を說きたまへるを聞かば、能く憂悔を生じて煩惱を離るるや、不や。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、後の末世の五百歲の中に於て、少しく菩薩あつて、能く憂悔を生じて煩惱を捨離せんも、多く菩薩あつて、其の心剛强にして相ひ尊敬せず、增上慢を懷きて互に相ひ是非し、是くの如き甚深の義趣、殊勝なる功德を說けるを聞き、復受持・讀誦・演說すと雖も、是の菩薩の業障の深重なるに由つて、殊勝なる功德を生ずるを得る能はざるや、便ち是の經に於て、疑惑して信ぜず、復受持して人の爲めに演說せざらん。時に、魔波旬は是の事を見已るや、誑惑を爲さん故に、比丘の像と作り、來つて其の所に到り、是くの如き言を說かん。此の諸の經典は、皆是れ世俗の、文詞を善くする者の製造する所にして、是れ如來の宣說せる所に非ず。何を以ての故ぞ。此の經に說く所の功德利益を、汝は皆得ざればなり。と。魔波旬の是くの如き誑惑に由り、此の空性の義利と相應せる甚深なる契經に於て、心に疑惑を生じ、諸の諍論を起して、復と受持・讀誦・演說せざるなり。彌勒、彼れ愚人は、了知する能はずして、自業に由る故にて彼の殊勝なる功德を獲る能はざれども、自業にして消え已らば、決定して當に是くの如き功德を得べきことを了知する能はざるなり。と。

　爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、佛の說きたまふ所の如くんば、阿彌陀佛の極樂世界の功德利益は、若し衆生あつて、十種の心を發し、一一の心に隨つて、專念に阿彌陀佛に向はば、是の人命終るや、當に彼の佛の世界に往生することを得べし。となり。世尊、何等を名けて、十種の心を發すと爲し、是の心に由る故にて、當に彼の佛の世界に往生するを得べきか。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、是くの如き十の心は、諸の凡愚・不善なる丈夫の、煩惱を具する者の發し能ふ所に非ず。何等を十と爲すか。一には、諸の衆生に於て、大慈の損害する無き心を起すなり。二には、諸の衆生に於て、大悲の逼惱する無き心を起すなり。三には、佛の正法に於て、身命を惜

はず　或は聞けども耳に入らずして　常に諸の善友に離るる　是れを戲論の過と名く　惡知識に値遇して　道に於て出離し難く　常に不順の語を聞く　是れを戲論の過と名く　彼れの生ずる所の處に隨つて　常に疑惑の心を懷き　法に於て了する能はざる　是れを戲論の過と名く　常に八難の中に生じて　無難の處を遠離し　無利益を具足する　是れを戲論の過と名く　善に於て障礙多く　正しき思惟を退失し　[二七]受くる所に怨嫉多き　是れを戲論の過と名く　是くの如き諸の過失は　皆戲論に因つて生ずれば　是の故に智ある人は　速疾に當に遠離すべし　是くの如き戲論の者は　大菩提を證し難ければ　是の故に智ある人は　亦應に親近すべからず　戲論諍論の處には　多く諸の煩惱を起せ　ば智者は應に遠離すべく　當に百由旬を去るべく　亦彼れに於て近く　諸の舍宅をも造立せざれ　是の故にて出家の人は　應に諍論に住すべからず　汝等田宅　妻子及び僮僕　乃至榮位等無くば　何に緣つてか諍論を興さんや　出家して寂靜に住し　身に法服を被らば　諸仙　咸く敬事すれば　當に忍辱の心を修すべきなり　是くの如き戲論の者は　毒害の心を增長して　當に惡趣に墮すべければ　是の故に應に忍を修すべきなり　囚禁及び繫縛　刑害而して捶楚　是等の如き諸苦は　皆諍論に由つて生ず　是くの如き戲論の者は　常に惡知識に遇ひて　名稱增長ならず　曾て歡喜の心無し　若し諍論を捨てば　其の便を伺ひ能ふもの無く　眷屬も乖き離れず　當に善友に遇ふべきなり　[二八]乘に於て清淨を得　業障盡きて餘無く　魔軍を摧伏せんには　勤めて忍辱の行を修めよ　諍論には諸過多く　無諍には功德を具すれば　若し修行する者あらば　當に忍辱に住すべし　と。

爾の時に、彌勒菩薩は復佛に白して言はく。希有なり、世尊。乃ち能く是くの如き過失を善く說きて、諸の菩薩をして、覺悟の心を生ぜしめたまふことや。世尊、後の末世の五百歲の中に於て、

【二七】受くる所に怨嫉多き。異譯本に「諸の行中に於て、怨讐多く、」とあり。

【二八】乘に於て清淨を得。異譯本に「安樂乘中にて當に淨を得べく、」とあり。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、如來は善く初業の菩薩の憒閙・世話・睡眠・衆務を樂む過失を說きたまへり。世尊、云何なるを名けて戲論の中の過と爲し、若し觀察する時は、諸の菩薩をして、當に寂靜に住し、諸の諍論無きを得べからしむるか。と。佛言はく。彌勒、初業の菩薩の戲論の過失は、無量無邊なり。我れ今略して說くも二十種あり。云何なるを名けて、二十種の過と爲すか。一には、現在の生に於て諸の苦惱多きなり。二には、瞋恚を增長して忍辱を退失するなり。三には、諸の怨對に爲つて惱害せらるるなり。四には、魔及び魔民は皆歡喜を生ずるなり。五には、未だ生ぜざる善根は皆悉く生ぜざるなり。六には、已に生ぜる善根を能く退失せしむるなり。七には、諸の鬪諍・怨競の心を增すなり。八には、地獄惡趣の業を造作するなり。九には、當に醜陋・不善の果を得べきなり。十には、舌柔軟ならず言詞謇澁するなり。十一には、受くる所の敎法をば憶持する能はざるなり。十二には、未だ聞かざる經に於て、之れを聞くとも悟らざるなり。十三には、諸の善知識は皆悉く捨て離るるなり。十四には、諸の惡知識に速に當に値遇すべきなり。十五には、道を修行すとも出離を得難きなり。十六には、意を悅さざる語を數數常に聞くなり。十七には、在在の生るる所にて諸の疑惑多きなり。十八には、常に難處に生じて正法を聞かざるなり。十九には、白法を修行すとも多く障礙あるなり。二十には、受用する所に於て諸の怨嫉多きなり。彌勒、是れを菩薩の、戲論に耽著する二十種の過と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

現生に常に苦惱し　忍を離れて瞋恚多く　怨讎は害心を生ずる　是れを戲論の過と名く　魔
及び魔の眷屬は皆歡喜の心を生じ　諸の善法を喪失する　是れを戲論の過と名く　未だ生ぜ
ざる善は生ぜず　常に鬪諍に住して　惡趣の業を造る　是れを戲論の過と名く　身形は醜陋
多く　下劣の家に生れ　發言は常に謇澁する　是れを戲論の過と名く　法を聞くとも持つ能

の者に非ずと說かん。彌勒、若し勤めて智斷の行を修する者、智の出生する者、智の成就する者あつて、世業を作し衆務を營まずんば、我れは是の人を、如來の教に住すと說かん。若し菩薩あつて、樂うて世業を作し、衆務を營み、應にすべからざる所を爲さば、我れは是の人を、生死に住すれば、是の故に菩薩は應に親近すべからずと說かん。彌勒、若し菩薩あつて、多く衆務を營まば、七寶の塔を造つて、遍く三千大千世界に滿すとも、是くの如き菩薩は、我れをして歡喜を生ぜしむる能はず。亦我れを供養し恭敬するにも非るなり。彌勒、若し菩薩あつて、波羅蜜相應の法に於て、乃至、一の四句偈を受持して、讀誦し修行し人の爲めに演說せば、是の人をば、乃ち我れを供養すと爲さん。何を以ての故ぞ。諸佛の菩提は多聞より生じて、衆務よりして生ずるを得ざればなり。彌勒、若し菩薩あつて、勤めて衆務を營み、彼の讀誦し修行し演說する諸菩薩等をして、衆務を營ましめば、當に知るべし。是の人は、業障を增長して諸の福利を無くすることを。何を以ての故ぞ。是くの如くに說く所の三種の福業は、一切皆智慧よりして生ずればなり。是の故に、彌勒、事を營む菩薩は、彼の讀誦し修行し演說する諸菩薩の所に於て、應に障礙して留難を作すことを爲すべからず。讀誦し修行し演說する菩薩は、禪定を修する諸菩薩の所に於て、應に障礙して留難を作すことを爲すべからず。彌勒、[二六]一閻浮提の營事の菩薩の若きは、一の讀誦し修行し演說する菩薩の所に於ては、應當に親近し供養し承事すべし。一閻浮提の讀誦し修行し演說する諸の菩薩等の若きは、一の勤めて禪定を修する菩薩に於ては、亦當に親近し供養し承事すべし。是くの如き善業をば、如來は隨喜し如來は悅可す。若し勤めて智慧を修むる菩薩に於て承事し供養せば、當に無量の福德の聚を獲べきなり。何を以ての故ぞ。智慧の業は無上最勝にして、一切の三界の行ずる所のものに超過したればなり。是の故に、彌勒、菩薩あつて精進を發起せば、智慧の中に於て當に勤めて修習すべしと。

【二六】一閻浮提の、乃至、承事すべし。異譯本に「譬へば、閻浮提に、事業を營む者皆中に滿ちて、其の數無量なる如きも、勤めて誦念する一の菩薩の所に於て、應に勤めて給事すべし。」とあり。

名く　尊者の教を受けず　違ひ拒んで輕賤し　清淨なる戒を毀犯する　是れを衆務の過と名く　其の心に憶想多く　勤めて世業を營んで　智斷[24]を修する能はざる　是れを衆務の過と名く　貪心恒に熾盛にして　諸味に樂著し　曾て知足の心無き　是れを衆務の過と名く　利を得れば歡喜を生じ　利無ければ便ち憂惱し　貪り悋んで仁心無き　是れを衆務の過と名く　惱害して慈愍無く　諸の惡業を增長し　愛の蔓にて相ひ纏縛する　是れを衆務の過と名く　師長に遠離し　惡知識に親近し　持戒の人を擯斥する　是れを衆務の過と名く　晝夜に餘の想無く　唯衣食を求めんことを念じ　諸の功德を樂はざる　是れを衆務の過と名く　常に世間の智を問ひ　出世の言を樂まず　邪說を耽愛する　是れを衆務の過と名く　自ら衆務を知るを恃み　諸の比丘を輕んじ慢ること　猶狂醉の人の如くなる　是れを衆務の過と名く　常に他の短を伺ひ求め　自ら其の過を見ずして　有德の人を輕んじ毀る　是れを衆務の過と名く　是くの如き愚癡の者は　善方便を有つこと無く　法を說く者を輕んじ慢る　是れを衆務の過と名く　是くの如き下劣の業は　諸の過失を具足すれば　何ぞ智慧ある人にして　愛樂して修習せんや　清淨なる殊勝の業は　諸の功德を具足する　是の故に智ある人は　愛樂して常に修習するなり　若し下劣の業を樂まば　智者は當に訶責すべし　人の多財を捨てて少分を貪求するが如しとして　是の故に明智の人は　當に下劣の業を捨つべく　應に勝上なる法の　諸佛の常に稱歎するものを求むべきなり　と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。希有なり、世尊。彼の諸の菩薩の、殊勝なる精進の業を捨離して、乃ち下劣の事を發起することや。當に知るべし。是の人は、甚だ少智にして、覺慧微淺なりと爲すことを。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、我れ今實言を汝に告ぐ。若し菩薩あつて、諸行を修せず、煩惱を斷たず、禪・誦を習はず[25]、多聞を求めずんば、我れは是の人は出家

【二四】智斷。智德と斷德とを謂ふ。智德は眞理を照了し、斷德は煩惱を斷盡すれば、即菩提と涅槃となる。

【二五】禪、誦を習はず。異譯本に「禪定無く、讀誦あること無く、」とあり。

して、衆務を營まずして佛道を勤修せしむるなり。彌勒、云何なるを名けて、二十種の過と爲すか。一には、世間の下劣の業に耽著するなり。二には、諸の讀誦・修行の比丘の輕賤する所と爲るなり。三には、亦禪定を勤修する比丘の訶責する所と爲るなり。四には、心に常に無始より生死流轉する業を發起するなり。五には、虛しく居士及び婆羅門の淨心なる信施を食ふなり。六には、諸の財物に於て、心に取著を懷くなり。七には、常に樂んで世間の事務を廣く營むなり。八には、其の家業を念じて常に憂嘆を懷くなり。九には、其の性狠戾にして、言を發するに麁獷なるなり。十には、心常に憶念するは家業を勤修することとなり。十一には、諸味に愛著して貪の欲を增長するなり。十二には、利養無き處には歡喜を生ぜざるなり。十三には、多く惱害・障礙の業を生ずるなり。十四には、常に優婆塞及び優婆夷に親近することを樂むなり。十五には、但衣食を念じて晝夜を度るなり。十六には、數世間に作る所の事業を問ふなり。十七には、常に非法の語言を發起することを樂むなり。十八には、衆務を營むことを恃んで憍慢を起すなり。十九には、但人の過を求めて、自の觀察せざるなり。二十には、法を說く者に於て、心に輕賤を懷くなり。彌勒、是れを菩薩の、衆務を營む二十種の過と爲す。と

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

下劣の業に安住して　殊勝の行を遠離し　大なる利益を退失する　是れを衆務の過と名く
讀誦を樂む比丘　及び禪定を修する者の　一切皆訶責する　是れを衆務の過と名く　常に生
死の業を行つて　解脫の因を捨離し　虛しく信施を受くる　是れを衆務の過と名く　樂んで
諸の財寶を受けて　憂惱を生ずるを得ず　下劣の行ひ住する　是れを衆務の過と名く　是の
人多く愛染して　婬女の家に往來すること　鳥の樊籠に入るが如くなる　是れを衆務の過と名
く　常に家業を憂へ嘆き　恒に熱惱の心を懷き　出す言を人の信ぜざる　是れを衆務の過と

つて迷惑を起し　煩惱の中に住して　其の心安樂ならざるは　是れ睡眠を樂む過なり　功德皆損減して　常に憂悔の心を生じ　諸の煩惱を增長するは　是れ睡眠を樂む過なり　諸の善友より遠離し　亦正法をも求めず　常に非法の中に行くは　是れ睡眠を樂む過なり　法の樂を欣求せず　諸の功德を損減し　白法より遠離するは　是れ睡眠を樂む過なり　彼の人は心怯弱にして　恒に歡喜に於て少く　支分多く羸瘦するは　是れ睡眠を樂む過なり　自ら身の懈怠なるを知るや　精進の者を嫉妬して　樂うて其の過惡を說くは　是れ睡眠を樂む過なり　智者は其の過を了して　常に睡眠を離るれど　愚人は見の網を增して　利無く功德を損ずるなり　智者は常に精進して　勤めて清淨の道を修め　苦を離れて安樂を得るを　諸佛は稱嘆する所なり　世間の諸の技藝　及び〔三三〕出世の工巧は　皆精進の力に由れば　智者は應に修習すべきなり　若し人菩提に趣かんには　睡眠の過を了知して　精進力に安住せんと　覺悟して慚愧を生ぜよ　是の故に諸の智者は　常に精進の心を生じ　睡眠を捨離して　菩提の種を守護するなり　と。

爾の時に、彌勒菩薩は而ち佛に白して言はく。希有なり、世尊。睡眠に樂著すれば、乃ち是くの如き無量の過失あることや。若し聞く者あつて、憂悔・厭離の心を生じて精進を發起せずんば、當に知るべし。是の人は、甚だ大愚癡なることを。若し菩薩あつて、阿耨多羅三藐三菩提を志求せんと欲する者を爲し、是くの如き眞實なる句義の功德利益を說くを聞きながら、諸の善法に於て懈怠を生じ、精進を起さずとも菩提分に住すとは、是の處ある無きなり。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、云何なるを名けて、衆務の中の過と爲し、若し觀察する時は、諸の菩薩をして、衆務を營まずして佛道を勤修せしむるか。と。佛言はく。彌勒、初業の菩薩は、應當に樂んで衆務を營む二十種の過を觀察すべく、若し觀察する時は、能く菩薩を

【三三】出世の工巧。　異譯本には「出世間の諸の能處、」とあり。

初業の菩薩は、應當に睡眠の過失に二十種あることを觀察すべく、若く觀察する時は、能く菩薩をして精進の意樂を發起して倦むこと無からしむるなり。彌勒、云何なるを名けて、睡眠を樂む二十種の過と爲すか。一には、懈怠・懶惰なるなり。二には、身體沈重なるなり。三には、顏色憔悴するなり。四には、諸の疾病を增すなり。五には、[一九]火界羸弱なるなり。六には、食は消化せざるなり。七には、體に瘡疱を生ずるなり。八には、修習を勤めざるなり。九には、愚癡を增長するなり。十には、智慧羸劣なるなり。十一には、皮膚闇濁なるなり。十二には、[二〇]非人は敬はざるなり。十三には、行を爲すこと愚鈍なり。十四には、煩惱は纏縛するなり。十五には、隨眠心を覆ふなり。十六には、善法を樂まざるなり。十七には、白法は減損するなり。十八には、下劣の行を行ふなり。十九には、精進を憎み嫌ふなり。二十には、[二一]人に輕賤せらるるなり。彌勒、是れを菩薩の睡眠を樂む二十種の過と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

身重くして儀檢無く　懈怠にして堪任少く　顏色に光澤無きは　是れ睡眠を樂む過なり　彼の人は[二二]常に病に惱み　風黃多く積集し　四大互に違反するは　是れ睡眠を樂む過なり　飲食は消化せず　身體に光潤無く　聲嘶きて清徹ならざるは　是れ睡眠を樂む過なり　其の身に瘡疱を生じ　晝夜常に昏睡し　諸蟲機關に生ずるは　是れ睡眠を樂む過なり　精進を退失し　諸の財貨に乏少に　夢多くして覺悟する無きは　是れ睡眠を樂む過なり　癡の網常に增長し　諸見に樂著すること熾盛にして療治し難きは　是れ睡眠を樂む過なり　諸の智慧を損減し　愚癡を增長し　志意常に下劣なるは　是れ睡眠を樂む過なり　彼れ阿蘭若に住すれども　常に懈怠の心を懷きて　非人其の便を得るは　是れ睡眠を樂む過なり　蒙憒にして正念を失ひ　諷誦すれども通利せず　法を說くに廢忘多きは　是れ睡眠を樂む過なり　癡に由

【一九】火界。謂はゆる元氣又は活動力を指す。

【二〇】非人。異譯本には「人」とあり。

【二一】人に輕賤せらるるなり。異譯本には「大衆に於て、他に輕賤せらるゝに至る。」となり。

【二二】常に、乃至、積集し。異譯本には「涕、唾、風等及び黃癊、彼れは、身體に於て多饒と有り。」とあり。

りて憂苦を生ずる　是れを世話の過と名く　疑惑の心動搖すること　猶風の草を吹くが如くにして　智慧堅固ならざる　是れを世話の過と名く　譬へば倡妓の人の　他の勇健を讃說するが如くに　彼の人も亦復然る　是れを世話の過と名く　世の語言に隨逐し　諸の欲境に染著し　常に邪道を行ふ　是れを世話の過と名く　希求の心は遂げず　諂曲にして諍論多く聖行を遠離する　是れを世話の過と名く　愚人は少利を得んと　其の心常に搖動すること猿猴の躁擾するが如くなる　是れを世話の過と名く　智慧は退失すること多く　覺悟の心ある無く　愚者に攝持せらるる　是れを世話の過と名く　眼耳に迷惑し　乃至意にも亦然く常に煩惱と俱なる　是れを世話の過と名く　愚人は世話を樂み　壽を盡すまで常に空しく過ぐれども　一義を思ふことの　利を獲ること邊ある無きに如かず　譬へば甘蔗の味の　皮節を離れずと雖も　亦皮節從りして　勝味を得ざるが如し　皮節は世話の如く　義理は猶勝味のごとし　是の故に虛言を捨てて　實義を思惟せよ　智慧の諸の菩薩は　能く世話の過を知つて　常に愛樂して　第一義の功德を思惟するなり　法味及び義味　解脫の第一味を　誰れか智慧ある者にして　心に欣樂を生ぜざらん　是の故に應に　無利なる諸の言話を棄捨し常に樂んで　殊勝なる第一義を思惟することを勤むべし　是くの如き第一の法は　諸佛の讃歎する所なれば　是の故に明智の人は　當に勤めて修習することを樂むべし　と。

爾の時に、彌勒菩薩は復佛に白して言はく。希有なり、世尊。乃ち能く世話の過失と勝義を思惟する利益功德とを善く說きたまふことや。世尊、何ぞ菩薩にして、如來の眞實なる智慧を求めながら、而も復虛誑なる世話を樂むものあらんや。と。

爾の時に、彌勒菩薩は、而して佛に白して言はく。世尊、云何なるを名けて睡眠の中の過と爲し、若し觀察する時は、菩薩は應當に精進を發起して　[18]熱惱を生ぜざるべきか。と。佛言はく。彌勒、

【一八】熱惱。異譯本には「疲倦」とあり。

能く菩薩をして、決定の義に住し、是の義を觀るに由つて、熱惱を生ぜざらしむるなり。彌勒、云何なるを名けて、世話を樂む二十種の過と爲すか。一には、心に懈怠を生じて多聞を敬はざるなり。二には、諸の諍論に於て多く執著を起すなり。三には、正念たる理の如き作意を失ふなり。四には、應にすべからざる所を爲して、身は多く躁動するなり。五には、[一二]速疾に高下して法の[一三]忍を壞るなり。六には、心常に剛强にして[一四]禪定の智慧をば曾て熏習せざるなり。七には、時に非ずして語り、言論に纒はらるるなり。八には、堅固に聖智を證すること能はざるなり。九には、天龍に爲つて恭敬せられざるなり。十には、辯才者に爲つて常に輕賤を懷かるるなり。十一には、[一五]身證者に爲つて訶責せらるるなり。十二には、正信に住せずして常に悔恨を懷くなり。十三には、心に疑惑多く搖動して安からざるなり。十四には、猶倡妓の如くに、音聲を隨逐するのみなり。十五には、諸欲に染著し境に隨つて流轉するなり。十六には、眞實を觀ずして正法を誹謗するなり。十七には、希求する所有れども、常に稱ひ遂げざるなり。十八には、其の心調はずして人に棄捨せらるるなり。十九には、法界を知らずして惡友に隨順するなり。二十には、[一六]諸根を了せずして煩惱に繫屬するなり。彌勒、是れを菩薩の世話を樂む二十種の過と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

多聞に於て憍慠に　諸の諍論に執著し　念を失して正しく知らざる　是れを世話の過と名く
正思惟を遠離し　身心寂靜ならずして　法忍を退失する　是れを世話の過と名く　其の心調順ならず　奢摩他　及び毘鉢舍那を遠離する　是れを世話の過と名く　師長を尊敬せず世論を愛樂し　智慧堅固ならざる　是れを世話の過と名く　諸天は恭敬せず　龍神も亦復然かく　辯才を退失する　是れを世話の過と名く　聖者の常に訶責する　是くの如き耽著の人の[一七]壽命に於て唐捐なる　是れを世話の過と名く　諸行は皆缺滅して　大菩提を遠離し　命終

【一二】速疾に、乃至、壞るなり。異譯本に「行ずる所の處に、身は周正ならずして、法の忍を失ふなり。」とあり。
【一三】忍。忍は「安忍」の義なり。第一卷「忍」の解、參照。
【一四】禪定の、乃至、熏習せざるなり。異譯本に「奢摩他、毘婆舍那を遠離し」とあり。
【一五】身證者。身に道を實證せる人を謂ふ。
【一六】諸根を、乃至、繫屬するなり。異譯本に「諸の煩惱に隨ひ、諸根に牽かれて、調伏せざる故なり。」とあり。
【一七】壽命に於て唐捐なる。異譯本に「彼れの壽は、虛然として利ある無し。」とあり。

應に座を敷いて坐せしめ　互に諸の法要を說くべく　人身は甚だ得難ければ　分[九]に隨つて白法を行ひ　讀誦及び禪定せんと　汝應に是くの如くに問ふべし　如來は涅槃に入らば　遺法は當に滅壞すべく　比丘は放逸多くして　衆を樂み閑靜を棄て　飮食利養の爲めに　晝夜に世話を談ずる　愚人なれば　[一〇]夢中に於ても　驚怖して漂溺すれば　自ら、毀犯多くして　當に三惡道に墮すべきを知つて　應に歡喜の心を生じて獨り閑寂に處り　若しくば阿蘭若に在つて　無上道を志求すべし　應に人の過を見て　自ら最も尊勝なりと謂ふべからず　驕恣は放逸の本なれば　下劣の人をも輕んずる莫かれ　彼れも遺法の中に於て　漸次に解脫すればなり　比丘は戒を破ると雖も　深く三寶を信ずるものにして　是れ則ち解脫の因なれば　應に其の過を見るべからず　貪瞋を摧伏することは難ければ　放逸なるに驚く勿かれ　[一一]餘習の法として應に爾れば　是の故に說くことを須ひざれ　若し淸淨の比丘なりとも　他人の過失を伺ふことは　是れ最も非にして眞實には　正法を修すと名けざれば　理の如くに修行せん者は　當に須く自ら觀察すべく　道を求めん諸の比丘は　惡言論を捨離し　常に歡喜の心を以て　獨り閑靜に處るべきなり　と。

爾の時に、彌勒菩薩は復佛に白して言はく。希有なり、世尊。憒鬧に耽著せば、乃ち是くの如き無量の過失あつて、功德を退失して利益ある無く、煩惱を增長して諸の惡趣に墮し、白法を遠離すれば、何ぞ菩薩の、善法を求むる者にして、是の過失を聞いて、獨り閑靜に處ることを樂まざるものの有らんや。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、云何なるを名けて世話の中の過と爲し、若し觀察する時は、菩薩は應に決定の義に住し、是の義を觀るに由つて熱惱を生ぜざるべきか。と。佛言はく。彌勒、初業の菩薩は、應當に世話の過失に二十種あることを觀察すべく、若し觀察する時は、

〔九〕分に隨つて、乃至、問ふべし。異譯本に「汝、頗は、白法を增長するや、不や。と、讀誦及び禪定中に、比丘は、應に是くの如き問を作すべし。」とあり。

〔一〇〕夢中に於ても、驚怖して漂溺し。異譯本には「睡眠にも、夢中に於て耕犂及び苗稼を見ることより動かず。」とあり。

〔一一〕餘習の法。性癖、習慣を謂ふ。

に離るるなり。八には、非法の中に於て尊重して修習するなり。九には、正法を捨離するなり。十には、天魔・波旬は而ち其の便を得るなり。十一には、不放逸に於て未だ曾て修習せざるなり。十二には、放逸の行に於て常に染著して懐くなり。十三には、諸の覺觀多きなり。十四には、多聞を損減するなり。十五には、禪定を得ざるなり。十六には、智慧を有つ無きなり。十七には、速疾にして、諸の梵行に非るを得るなり。十八には、佛を愛せざるなり。十九には、法を愛せざるなり。二十には、僧を愛せざるなり。彌勒、是れを菩薩は憒鬧の二十種の過を觀ずと爲す。と

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

諸の貪瞋を捨離して　憒鬧に任せざれ　若し彼に專ら住すること有りとも　是の過をば應に作すべからず　憍慢及び覺觀は　皆憒鬧より生するに　壞行無戒の人は　憒鬧を稱嘆す　愚人は世論を樂みて　第一義より退失し　放逸にして覺觀多きも　是の過をは應に作すべからず

比丘にして多聞を捨て　言論は理の如くならず　諸の禪定を損減し　常に世間を思惟して

思惟に耽著せば　何んぞ寂靜を得ん　其の心常に散逸して　永く正觀を離れ　速に非梵行を得　諠雜にして、儀檢無く　亦曾て佛を愛し　及び聖衆を愛せず　離欲の法を棄捨し、非法の言に耽著するのみ　我れ嘗て千身の　支分及び頭目を捨てて　無上道を求めん爲めに　法を聞いて厭足無かりしに　是の諸の非法の人は　少しく聞いて便ち厭ひ捨つ　我れ昔國王と作りしも　四句の偈を求めん爲めに　妻子及び財寶をば　悉く皆能く施與したれば　何ぞ智者にして　勤めて法を聽かざる有らんや　我れ常に一切の　非法の戲論を捨てて　百千劫に於ても　得難き解脱を爲したる故に　汝等應に欣樂して　微妙の法を志求すべし　若し解脱の

最勝なる功德を樂まば　世間の諸の事業をば　皆應に問ふべからざる所なり　衣食には勝れたる利無く　亦涅槃をも證せざれば　當に　[八]最勝なるを稱嘆すべく　善來の諸の比丘には

【八】最勝。「菩提、涅槃」を指す。

計度思惟して安樂は滅するが故に。と觀ずべし。當に、利養は、乃至、禪定・[四]解脫・三昧・三摩鉢底を、心婬女の如くに能く退失するが故に。と觀ずべし。當に、利養は智斷を捨離して、地獄・餓鬼・畜生・[五]閻摩羅界の諸の惡道に墮するが故に。と觀ずべし。當に、利養は提婆達多・[六]烏陀洛迦と法住を同じくして、惡道に墮するが故に。と觀ずべし。彌勒、初業の菩薩は、是くの如くに利養の過失を觀察して、少欲を樂み熱惱を生ぜざれ。何を以ての故ぞ。彌勒、少欲の菩薩は、一切の過に於て皆悉く生ぜず、諸佛の淸淨なる法器と爲るに堪へ、而して[七]在家・出家に繫屬せずして、眞實・最勝なる意樂に住すればなり。卑下を爲さず、亦驚怖もせず。諸の惡道墮落の畏を離るる故なり。能く映蔽するもの無し。耽味を捨る故なり。衆魔の境界より解脫を得る故なり。一切の諸佛に稱讚せられ、諸天及び人も亦當に愛羨すべければなり。諸の禪定に於て、而ち染著して邊際に住することをせざる故なり。其の心質直にして諂曲ある無く、五欲の中に於ても亦放逸ならずして、其の過を見る故なり。說の如くに修行して能く聖種に住すれば、同梵行の者も亦當に愛樂すべければなり。彌勒、若し菩薩の智慧聰敏なるあらば、此の功德に於て能く是くの如くに知つて、勝れたる意樂を以て當に利養を捨て、勝れたる意樂を以て少欲に住すべし。貪愛を斷つことを爲さんとして發起するが故なり。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、云何なるを名けて憒鬧の中の過と爲し、若し觀察する時は、菩薩は獨り閑靜に處つて熱惱を生ぜざるか。と。佛言はく。彌勒、初業の菩薩は、應當に憒鬧の過失に二十種あることを觀ずべし。若し觀察する時は、能く菩薩をして、獨り閑靜に處つて熱惱を生ぜざらしめん。彌勒、云何なるを名けて、憒鬧を樂む二十種の過と爲すか。一には、身業を護らざるなり。二には、語業を護らざるなり。三には、意業を護らざるなり。四には、貪欲は多饒なるなり。五には、愚癡を增長するなり。六には、世話に耽著するなり。七には、出世の語

【四】 解脫。禪定の解脫なり。第四卷「解脫煩惱」の解、參照。

【五】 閻魔羅界。「閻魔王界」と同じ。第一卷、同名の解、參照。

【六】 烏陀洛迦（Udraka Rāmaputra）。鬱頭藍弗とも書す。釋尊の、一度道を問はれし仙人なり。非想定を得、五神通を具し、日日王宮に飛入して食せしが、非を行ひて神通を失せりと傳ふ。

【七】 在家・出家に繫屬せず。異譯本に「出家及び在家の欺慢する所に隨はず。」とあり。

る慧力を增長せしめ能ふことも、亦是の處無ければなり。彌勒、是の故に、菩薩は、未だ慧力を得ずして得んと欲せば、應に諸法を捨つべく、當に須く捨離すべし。應に諸法を修むべく、當に須く修習すべきなり。何を以ての故ぞ。菩薩の智慧は因緣より生ずれば、若し因緣無くんば、終まで生ずる能はずして、因緣和合して、爾く乃ち生ずることを得ればなり。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、云何なるを名けて、利養の中の過と爲し、若し觀察する時は、菩薩をして、少欲を樂み熱惱を生ぜざらしめ能ふか。と。佛言はく。彌勒、初業の菩薩は、當に、利養は貪欲を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は正念を壞失し瞋恚を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は其の得失を念じて愚癡を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は能く高下・嫉妬の心を生ずるが故にと觀ずべし。當に、利養は親友の家に於て慳悋耽著して誑惑を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は愛味を成就し諂曲を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は四聖の種を捨てて慚愧無き故に。と觀ずべし。當に、利養は一切諸佛の許可せざる所にして、數憍逸を習ひ高慢を生ずる故に。と觀ずべし。當に、利養は勝福田に於て輕慢を起して魔の黨と爲る故に。と觀ずべし。當に、利養は衆惡の根本にして諸善をば壞るが故に。と觀ずべし。[一]當に、利養は貪著する所多きこと猶霜・雹のごときが故に。と觀ずべし。當に、利養は親友の家に於て顏色を瞻候ひ憂惱を生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は愛する物の損壞せば、憂ひて心亂るるが故に。と觀ずべし。當に、利養は四念處に於て忘失する所多くして、白法羸るが故に。と觀ずべし。當に、利養は四正勤に於て多く退失を有ち、能く一切の他の論をして勝らしむるが故に。と觀ずべし。[二]當に、利養は自ら已に神通智慧を得たりと言ひて、違背の生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は先後の得失にて怨憎の生ずるが故に。と觀ずべし。當に、利養は互に相ひ瞋り嫌ひ其の過惡を說きて、多く[三]覺觀するが故に。と觀ずべし。當に、利養は活命の爲めに諸の世業を營み、

【一】當に利養は、貪著する所多きこと。異譯本には「當に利養は、諸の善根を摧折すること、」とあり。
【二】當に、乃至、觀ずべし。異譯本に「當に利養は、最も障礙を有つて、諸の神通を得ざる故を觀ずべし。」とあり。
【三】覺觀。覺知と觀察となり。是れ定心を妨ぐる心の動きなり。新譯には「尋、伺」と曰ふ。第一卷、同名の解、參照。

巻の第九十二

發勝志樂會　第二十五の二

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は佛に白して言はく。世尊、初業の菩薩は、既に出家し已つて、未だ慧力を得ずして得んと欲せば、當に何の法を捨つべく當に何の法を修すべくば、未だ生ぜざる慧力を能く出生せしめ、已に生ぜる慧力を能く增長せしむるか。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、初業の菩薩は既に出家し已つて、慧力をして增長を得しめんと欲せば、當に利養に於て其の過失を知つて、應に須く捨離すべく、憒鬧・世俗の言話を好み、睡眠に耽著し、廣く衆務を營み、諸の戲論を樂む若き、是くの如き過失を皆應に遠離すべし。是の故に、應に利養を捨てて少欲を修し、諸の憒鬧を捨てて寂靜を樂み、諸の世話を捨てて實の義を觀じ、初夜・後夜に睡眠を遠離して、觀察・思惟して行の修習に隨ひ、衆務及び諸の戲論を捨てて、出世の道を修めて、衆生を慈念すべきなり。彌勒、初業の菩薩は、既に出家し已つて、未だ慧力を得ずして得んと欲せば、是の法を應に捨つべく、是の法を應に修むべし。何を以ての故ぞ。彌勒、彼の諸の菩薩は、既に出家し已つて、未だ慧力を得ずして得んと欲する者にして、利養を捨てず少欲を修めずして、未だ生ぜざる慧力を當に出生せしむべく、已に生ぜる慧力を增長せしめ能ふことは、是の處ある無ければなり。憒鬧を捨てず寂靜に任せずして、未だ生ぜざる慧力を當に出生せしめ、已に生ぜる慧力を增長せしめ能ふことも、亦是の處無ければなり。世話を捨てず實義を觀ぜずして、未だ生ぜざる慧力を當に出生せしめ、已に生ぜる慧力を增長せしめ能ふことは、是の處ある無ければなり。初夜・後夜に睡眠に耽著して、曾て覺悟して念を思惟に繫がず、衆務を捨てず、諸の戲論を好んで、出世の道に於て修行する能はず、諸の衆生に於て慈念を生ぜずして、未だ生ぜざる慧力を當に出生せしめ、已に生ぜ

さればなり。鈍行の菩薩は、善巧ある無きこと諸の凡夫と同じければ、出離する能はざれど、彌勒、慧行の菩薩は、一切の重罪を、智慧力を以て悉く能く摧破すれば、亦彼れに因つて惡道には墮せざるなり。彌勒、譬へば、人あつて、大火の聚に於て投ずるに、薪木を以て數數之れに添ふるに、是くの如くに添へ已れば、其の焰は轉熾に、須臾に明を增して、盡滅することある無きが如し。彌勒、慧行の菩薩も亦復是くの如くに、智慧の火を以て煩惱の薪を燒き、數數煩惱の薪木を添ふるに、是くの如くに添へ已るや、智慧の火は轉更に明を增して、盡滅ある無きなり。彌勒、是くの如くに、是くの如き慧行の菩薩の智慧の力の善巧方便は、了知せられ難きなり、と。

非法と相應なりや。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、若し正說ならば、則ち義利と相應し法と相應す。能く菩薩の菩提分の法をして圓滿を得しむる故なり。佛言はく。彌勒、菩薩は菩提分を圓滿せんと欲する爲めの故に生死を攝取す。と說き、諸の煩惱は能く菩薩の利益の事を爲す。と說く若き、是くの如き辯才は、諸佛如來の宣說する所なり。何を以ての故ぞ。彌勒、此の諸の菩薩は、法の自在を得たれば、起す所の煩惱に過失ある無ければなり。是れを菩薩の善巧方便と爲し、諸の聲聞・緣覺の境界に非ざるなり。彌勒、若し煩惱あつて、他の爲めに利益の事を作す能はず、亦菩提分の法を滿す能はずして發起する者ならば、[三〇]義利と相應せず、法と相應せず、但下劣の善根の因と爲らば、菩薩は中に於て、寧ろ身命を捨つとも、亦彼の煩惱に隨つて行ふべからず。何を以ての故ぞ。彌勒、異る菩薩あつて、智力を得たる故に、諸の煩惱に於て現に攀緣するあり。異る菩薩あつて、智力無き故に、諸の煩惱に於て執著を增上すればなり。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、我れの、佛の說きたまふ所の義を解する如くんば、若し諸の菩薩にして、後の末世の五百歲の中に於て、諸の業障の纏縛を離れ、自ら損害する無くして解脫を得んと樂欲せば、是の人は當に菩薩の行の中に於て深く信解を生じ、他の過失に於て分別を生ぜずして、如來の眞實なる功德を志求すべきなり。と。佛言はく。是くの如し、是くの如し。彌勒、是の故に、當に諸の菩薩等の方便行の中に於て、深く信解を生ずべし。何を以ての故ぞ。[三一]慧行の菩薩の方便の行は、信解し難き故なり。[三二]彌勒、譬へば、須陀洹の人の示す凡夫の行の如し。是くの如きは、凡夫と須陀洹との位は各差別すれば、凡夫・愚人は貪・瞋・癡に纏はる故を以て諸の惡道に墮し、而して須陀洹は貪・瞋・癡に於て善く了達し能ひて、終に三惡道に墮落せざるのみ。彌勒、慧行の菩薩も亦復是くの如くに、貪・瞋・癡の習氣に於て未だ斷たざれども、彼れ亦餘の初業の菩薩と別なり。何を以ての故ぞ。其の心は煩惱に爲つて覆はれざること、初業の諸の菩薩等に同じから

【三〇】義利と、乃至、因と爲らば。
異譯本には只「善根門の因と爲らずんば、」とあり。

【三一】慧行の、乃至、信解し難きなり。
異譯本に「方便智の行の菩薩の、善巧方便は、知ることを得られ難きなり。」とあり。

【三二】譬へば、乃至、行の如し。
異譯本に「譬へば、須陀洹の人の、凡夫の行中に於て、其の須陀洹地を現すが如し」。とあり。

彌勒、是れを一切諸佛の宣說する所の四種の辯才と爲す。彌勒、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして、法を說かんと欲する者は、應當に是くの如き辯才に安住すべく、若し善男子・善女人等にして、信順の心を有たば、當に是の人に於て、佛の想を生じ教師の想を作し、亦是の人に於て、其の法を聽受すべし。何を以ての故ぞ。是の人の說く所は、當に知るべし。皆是れ一切の如來の宣說する所の一切の諸佛の誠實の語なればなり。彌勒、若し此の四辯才を誹謗して、佛の說に非ずと言ひ、尊重恭敬の心を生ぜざる有らば、是の人は、怨憎を以ての故に、彼の一切の諸佛如來の說く所の辯才に於て皆誹謗を生ずるものにて、法を誹謗し已るや、法を壞る業を作り、法を壞り已るや、當に惡道に墮すべきなり。是の故に、彌勒、若し淨信なる諸の善男子あつて、正法を誹謗する業の因緣を解脫せんと欲するを爲さば、人を憎嫉する故を以て法を憎嫉せざれ。人の過失の故を以てして、法に於て過を生ぜざれ。人に於ける怨の故を以てして、法に於ても亦怨まざれ。彌勒、云何なるを名けて、四種の辯才の、一切諸佛の遮止する所と爲すか。謂はゆる、非利益と相應して、利益と相應せず。非法と相應して、法と相應せず。煩惱と相應して、煩惱の滅盡と相應せず。生死と相應して、涅槃の功德と相應せざるものなり。彌勒、是れを一切諸佛の遮止する所の四種の辯才と爲す。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、佛の說きたまふ所の如くに、辯才にして、生死を增長するある若きは、諸の如來の宣說する所に非ずんば、云何ぞ。世尊は、諸の煩惱は能く菩薩の利益の事を爲す。と說き、又復生死を攝取して能く菩提分の法を圓滿す。と稱讚したまふか。是等の辯の如きは、豈如來の說きたまふ所に非ずや。と。佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。彌勒、我れ今汝に問はん。汝の意に隨つて答へよ。說いて、菩薩は菩提分を圓滿し成就せんと欲する爲めの故に生死を攝取す。と言ひ、又復說いて、諸の煩惱を以ひて利益の事を爲す。と言ふある若きは、是くの如くに說く者は、利益と相應するを爲すや、非利益と相應なりや。法と相應するを爲すや、

【一九】云何ぞ世尊は、諸の煩惱は、乃至、稱讚したまふか。異譯本に「云何ぞ世尊は、諸の煩惱は、諸の菩薩の爲めに而ち利益を作す。と說き、亦復、生死流轉は、菩提分の法を滿足す。と讚說したまふか。」とあり。

の中に於ては、當に辯才及び陀羅尼に於てしても、是の法に於て信受する能はざるべし。世尊、譬へば、人あつて、渇乏して水を須ひんと、泉池に往き詣つて之れを飲まんと欲するに、是の人先に來つて諸の糞穢を此の水中に投じたるを、後に覺知せずして、其の水を飲まんと欲し、便ち取つて之れを嗅ぎ、既に臭を聞き已るや、其の水を飲まずして、彼れの自ら汙せるに、更に其の過を說きて、乃至、歎いて、奇なる哉、此の水甚だ大に臭穢なりと言ひ、是の人、過失をば都べて覺知せずして、是の水に於て反つて怨咎を生ずるが如し。世尊、泉池の如きは、當に知るべし。卽是れ法を持てる比丘の、佛の神力に由り、此の法眼に於て善く解說し能ふものなることを。又復、彼の愚癡の人の如きは、若く泉池に於て自ら糞穢を投じ、後に覺知せずして水を飲まんと欲する者なることを。世尊、最後の末世の五百歲の中に、諸の無智なる諸の菩薩等あることも亦復是くの如し。彼の正法及び法を持てる者に於て、誹謗を生じ、已に復是の人に於て法味を聽受すとも、彼の人自ら失して都べて覺知せず、疑惑の過・汙染の意根を以て、彼の法を持てる者は、當に戲弄せられ或は譏笑を受くべく、乃至、歎じて、奇なる哉、此の法は諸の過失に爲つて染汙せられたりと言ひて、彼の無智の人は、此の正法及び是の法師に於て、聽受する能はずして、其の短を伺ひ求めて謗言汙辱し厭離の心を生じて之れを捨て去るなり。と。

爾の時に、世尊は彌勒菩薩を讃じて言はく。善い哉、善い哉。彌勒、善く是くの如き譬喩を演說し能ひたることや。伺ひ求めて、其の短を說き能ふ者無きに。彌勒、是の因緣を以て、汝は應當に四つの辯才の、一切諸佛の宣說する所を有ち、四つの辯才の、一切諸佛の遮止する所を有つべし。云何なるを名けて、四つの辯才の、一切諸佛の宣說する所を有つと爲すか。謂はゆる、利益と相應して、不利益と相應するに非ず。法と相應して、不法と相應するに非ず。煩惱の滅盡と相應して、煩惱の增長と相應するに非ず。涅槃の功德と相應して、生死の過漏と相應するに非ざるものなり。

異譯本には、此れに當る文に「乃ち諸の邊に於て、善根を生ずることを求むるか。當に陀羅尼を求めて、以て自ら護るべし。若し是くの如くならずんば、彼の持法の諸の法師の邊に於て、誹謗を起して穢汚を生ずべし。」とあり。

理に於て少しく聞いて多く解し、辯才・智慧皆悉く具足せん。彼の諸の菩薩は、是の法の中に於て精勤に修習して陀羅尼を得るや、無礙の辯才もて、四衆の中に於て正法を宣說するに、佛の威德の加被力を以ての故に、佛の說く所の[二〇]修多羅・祇夜・授記・伽陀・優陀那・尼陀那・阿波陀那・[二一]伊帝越多伽・[二二]闍多伽・[二三]毘佛略・[二四]阿浮陀達摩・[二五]優波提舍に、皆辯才の無礙自在なるを得ん。彌勒、彼の諸の二十の善巧の菩薩は和上・阿闍梨の所より聞くを得たる無量百千の[二六]契經を皆能く受持して、當に是の言を說くべし。我が此の法門は、某和上・阿闍梨の所により親しく自ら聽受したれば、疑惑ある無し。と。彌勒、彼の時の中に於て、當に在家・出家の諸の菩薩等あつて、智慧・善巧方便ある無くして、此の正法を受持せる菩薩の說く所の法に於て、却つて譏笑・輕毀を生じて、是くの如き法は、皆汝等の善巧なる言詞にて、意に隨ひ製造せるに由り、實には如來の宣說したまふ所に非ざれば、我等は中に於て、信樂して希有の心を發す能はず。と謗言せん。彌勒、當に爾の時に無量の衆生は、是の法師に於て誹謗を生じ、之れを捨てて去り、互に相ひ謂うて言ふべし。是の諸の比丘には、軌範ある無く、諸の邪說多く、契經に依らず、戒律に依らざること、猶倡妓の戲弄の法の如し。汝等、中に於て、信樂を生じ希有の心を生ずる莫かれ。正法に非ざればなり。と。彌勒、彼の諸の愚人は、魔に爲つて持せられ、是の法の中に於て解了する能はずして、如來の演說する所に非ずと謂ひ、是の持法の諸の比丘の所に於て誹謗を生じて、法を壞る業を作すや、是の因緣を以て、當に惡道に墮すべきなり。是の故に、彌勒、若し諸の智慧善巧の菩薩にして、正法を護らんと欲せば、當に其の德を隱すべく、[二七]分別多き諸の衆生の所に於て、應に須く護念して、汝に於て不善の心を生ぜしむる莫かるべし。と。

　爾の時に、彌勒菩薩は而ち佛に白して言はく。希有なり、世尊。後の末世の五百歲の中に於て、諸の菩薩あつて、甚だ無智なる爲め、大衆の中に於て、正法及び法を持てる者を誹謗すれば、[二八]復其

【二〇】修多羅、乃至、優波提舍。佛の經典全部を、種に由つて分類したる者にして、此れを「十二部經」と曰ふ。

【二一】伊帝越多伽(Itivṛttaka)。「本事經」と譯す。第四卷、同名の解、參照。

【二二】闍多伽(Jātaka)。「本生經」と譯す。第四卷、同名の解、參照。

【二三】毘佛略(Vaipulya)。「方廣經」と譯す。第四卷、同名の解、參照。

【二四】阿浮陀達摩(Adbhūta-dharma)。「未曾有經」と譯す。第四卷、同名の解、參照。

【二五】優波提舍(Upadeśa)。「論議經」と譯す。第四卷、同名の解、參照。

【二六】契經。總に契ひ、事に契ひ、義に契ふ義にして、佛の經典を謂ふ。因みに、前に擧げられたる十二部經中の修多羅を、特に契經と譯すれど、今、此所の契經は廣義を用ひて、十二部經全部を指す者とす。

【二七】分別多き、乃至、莫かるべし。異譯本に「種種に行を有つ衆生に於て、應に須らく護持すべく、彼等をして、障礙の想を生ぜしむる勿れ。」とあり。

【二八】復其の中に於ては、乃至、信受する能はざるべし。

を愛すと爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ諸の空性に於て勝解無き者は能く生死を出離し、[一六]執著多き者は諸行を離る。と說言せざるなり。彌勒、我れ、[一七]菩提分に於て有所得に住するをば、名けて證智と爲す。と。說言せざるなり。彌勒、我れ、勢力無き者は忍辱成就し、[一八]嬈觸無き者は忍辱の甲を被、少煩惱の者を律儀清淨と名け、邪方便の者を說の如くに修行すと爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ言說を愛する者をば一心に住すと爲し、好く世務を營むは法に於て損ずる無く、志樂清淨なるは諸の惡趣に墮し、智慧を修習するをば憒閙の行と爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ、[一九]方便の相應を名けて諂曲と爲し、利養を求めざるを而も妄語と爲し、執著無き者を正法を誹謗すとし、正法を護る者を而ち身命を惜むとし、行ふ所下劣なるを勝慢無しと爲す。と說言せざるなり。是くの如くに、彌勒、後の末世の五百歲の中に於て、當に菩薩の、鈍根・小智・諂曲・虛誑にして、賊行に住するもの有るべければ、汝應に之れを護るべし。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、最後の末世の五百歲の中には、唯此の六十の諸菩薩等のみ業障に纏はるるや。復更に餘の菩薩ありと爲すや。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、後の末世の五百歲の中に於て、諸の菩薩あつて、多く業障の纏覆する所と爲り、是の諸の業障は、或は消滅するあり、或は復增長せん。彌勒、此の五百の諸菩薩の中に於て、二十の菩薩の業障の微少なるあつて、後の五百歲に還り來つて、此の城邑・聚落・廛市・山野に生れ、種姓は尊豪にして、大なる威德・聰明なる智慧・善巧なる方便・心意の調柔なるを有ち、常に慈愍を懷きて饒益する所多く、顏貌端嚴に、辯才清妙にして、數術・工巧を皆能く知れども、自ら其の德を隱して頭陀功德の行に安住し、在在の生るる所にて、家を捨てて道を爲め、已に無量阿僧祇俱胝劫の中に於て阿耨多羅三藐三菩提を積集するや、正法を護持せんと、身命を惜まずして阿蘭若空閑の林中に住し、常に勤めて精進して、利養を求めず、善く一切衆生の心行に入り、呪術・言論を悉く能く了知し、諸の義

【一六】執著多き者は、諸行を離る。異譯本に「染著せざる者は、以て修行淨しと爲すと、」とあり。

【一七】菩提分に於て、乃至、證智と爲すと說言せざるなり。異譯本に「我れ、行に染著する者をば、菩提分を滿たすと爲すと說かざるなり。我れ、所得に住する者をば、以て證智と爲すと說かざるなり。」とあり。

【一八】嬈觸無き者は、乃至律儀清淨と名け等。異譯本に「我れ、人に觸るる無き者をば、忍力の鎧と爲すと說かざるなり。我れ、本性の少煩惱なる者をば、戒清淨なりと爲すと說かざるなり。」とあり。

【一九】方便の相應。異譯本に「方便と相應する行」とあり。

彌勒、是の諸の法師は、自ら供養・給侍・尊重を求め、[一三]同住及び近住に於けるを攝受するにも、法及び利益の事の爲めならずして之れを攝受するなり。是の諸の法師は、自ら飮食・衣服・臥具を求めんとて、詐つて異相を現して王城・國邑・聚落に入るものにして、實には、諸の衆生を利益し成熟せん爲めにて法施を行ふにはあらざるなり。所以は何ぞ。彌勒、我れ、希求を有つ者は法施の清淨なるを爲す。とは說言せざるなり。何を以ての故ぞ。若し心に希求を有たば、則ち法に平等無ければなり。我れ、貪汙の心の者は能く衆生を成熟す。と說言せざるなり。何を以ての故ぞ。「自ら成熟せずして能く他を成熟するは、是の處ある無ければなり。彌勒、我れ、其の身を尊重し供養し安樂にせんと、[一四]不淨の物を貪著し攝受する者は、利益の事を爲す。と說言せざるなり。何を以ての故ぞ。自身の安穩豐樂を求めん爲めに衆會を攝受すとも、其れをして正信に安住せしめ能はざればなり。彌勒、我れ、矯詐の人は阿蘭若に住し、[一五]薄き福德の者は而ち少欲を爲し、勝味を貪る者をば滿足し易しと名け、多く美饍を求むる者は以て乞食を爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ、種種の上妙なる衣服を乞ひ求めば、是等の如きを糞掃衣を持つと謂ふ。と說言せざるなり。彌勒、我れ、在家・出家の、識知無き者は憒閙を離るることを爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ、諂曲の人は佛の興世に値ひ、他の短を求むる者は理の如き修行を爲し、多く損害する者は戒蘊淸淨なりと名け、增上慢の者をば多聞第一と爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ、朋黨を好む者をば律儀に住すと名け、心の貢高なる者をば法師を尊敬すと名け、綺語・輕弄をば善き說法と爲し、俗と交り雜るを能く僧衆に於て諸の過失を離る。と說言せざるなり。彌勒、我れ、勝れたる福田を簡ぶをば、施して報を望まずと爲し、恩の報を求むる者を善く諸事を攝むと爲し、恭敬・利養を求むるを志樂淸淨なりと爲し、妄計多き者をば以て出家と爲す。と說言せざるなり。彌勒、我れ、彼我を分別するを戒を樂持すと名け、尊敬せざる者を名けて法を聽くと爲し、世典の呪詛・言論に樂著するをば、以て法

【一三】同住、乃至、攝受するなり。異譯本に「侍者及び弟子等を畜ふも、而も法の爲めにせずして、都べて、他の人を利益する事無し。」とあり。

【一四】不淨の物。異譯本には「種種の物」とあり。

【一五】薄き福德の者は、而ち少欲を爲し。異譯本に「薄福の人をば、少欲の行を爲すと」とあり。

重せしむるなり。【一〇】身・口・意の清淨なる律儀を得るなり。一切の惡道の怖畏を超過するなり。命終の時に於て、心に歡喜を得るなり。正法を顯揚して異論を摧伏するなり。【一一】一切の豪貴・威德・尊嚴も猶自ら覬ひ望む所ある能はざるなり。何に況んや、下劣少福の衆生をや。諸根成就して、映蔽し能ふもの無きなり。具足して殊勝なる意樂を攝受するなり。奢摩他・毘婆舍那を得るなり。難行の行をば皆圓滿するを得るなり。精進を發起して普く正法を護るなり。速疾に不退轉地に超え能ふなり。一切の行中に隨順して住するなり。彌勒、是れを菩薩は當に二十種の利を成就し得べく、名聞・利養の果報に著せずして饒益の事を行ずるを而ち上首と爲し、常に衆生の爲めに希望無き心を以て清淨に法を說くと爲すなり。

佛、彌勒に告ぐらく。汝觀ぜよ。未來の後の五百歲には、諸の菩薩の甚だ無智爲るあつて、法施を行ふ時に、若し利養あらば歡喜の心を生ずれども、若し利養無くんば歡喜を生ぜず。彼の諸の菩薩は、人の爲めに法を說くに、是くの如き心を作さん。云何にせば、【一二】當に親友・檀越をして我れに歸屬せしむべきか。と。復更に念じて言はん。云何にせば、當に在家・出家の諸の菩薩等をして、我が所に於て淨信心を生じ、恭敬して衣服・飲食・臥具・湯藥を供養せしむべきか。と。是くの如くに、菩薩は財利の故を以て人の爲めに法を說き、若し利養無ければ心に疲厭を生ずることを。彌勒、譬へば、人あつて、淸淨を志樂せるに、或は死蛇・死狗・死人等の屍の、膿血爛壞せるを其の頭に繫著せば、是の人憂惱して深く厭患を生じ、違逆の故を以て、迷悶して安からざるが如し。彌勒、當に知るべし。後の末世の五百歲の中に於て、說法の人も亦復是くの如くに、諸の一切利養無き處に於ては、其の心に順ぜず、滋味ある無ければ、便ち厭倦を生じて棄捨し去り、彼の諸の法師は是くの如き念を作さん。我れ此の中に於て法を說くとも益無し。何を以ての故ぞ。是の諸の人等は、我が須つ所の衣服・飲食・臥具・醫藥に於て憂念せざれば、何の緣にて此に於て徒に自ら疲勞せんや。と。

【一〇】身・口・意の清淨なる律儀を得るなり。異譯本には、之れを三つに開きて「當に身密を得べきなり。當に口密を得べきなり。當に意密を得べきなり。」とせり。斯くせば、正に二十種の數となる。

【一一】一切の豪貴、乃至、衆生をや。異譯本に「大威德を具せる勝れたる人すら敬仰す。況んや、餘の凡庶をや。」とあり。

【一二】當に。大正本には「常」にとあれど、他の原本には「當」とあり。是れ然るべきに由り、改めたり。

世の五百歳の時に於て、自ら無惱にして解脱せんと欲する者、一切の諸の業障を除滅せんとする者は、應當に憒閙の處を捨てて、阿蘭若寂靜の林中に住すべし。應に修すべからざるに而も修行する者、及び諸の懈惰・懈怠の屬に於て皆當に遠離すべし。但自ら身を觀じて他の過を求めず、恬默を樂んで般若波羅蜜多相應の行を勤行せよ。若し彼の諸の衆生等に於て、深く憐愍を生じて饒益する所多からんと欲せば、應に希望無き心を以て清淨に法を說けよ。復次に、彌勒、若し菩薩は希望無き心を以て法施を行はん時に、名聞・利養の果報に著せず、饒益の事を以て上首と爲して、常に衆生の爲めに廣く正法を宣べば、當に二十種の利を成就するを得べし。云何なるを名けて、二十種の利と爲すか。謂はゆる、正念は成就するなり。智慧は具足するなり。堅く持つ力を有つなり。清淨なる行に住するなり。覺悟の心を生ずるなり。出世の智を得るなり。衆魔に爲つて便を得られざるなり。貪欲を少くなり。瞋恚ある無きなり。亦愚癡ならざるなり。諸佛世尊に憶念せらるるなり。非人は守護するなり。無量の諸天は其の威德を加ふるなり。眷屬・親友をば沮壞し能ふ無きなり。[九]言說する所あれば人必ず信受するなり。怨家に爲つて其の便を伺ひ求められざるなり。畏るる所無きを得るなり。諸の快樂多きなり。諸の智人に爲つて稱歎せらるるなり。善く法を說き能ひて衆人は敬仰するなり。彌勒、是れを菩薩は當に二十種の利を成就するを得べく、名聞・利養の果報に著せず、饒益の事を行ずるを而ち上首と爲し、常に衆生の爲めに希望無き心を以て清淨に法を說くと爲すなり。復次に、彌勒、若し菩薩は希望無き心を以て法施を行ふ時に、名聞・利養の果報に著せず、饒益の事を以て而ち上首と爲して、常に衆生の爲めに廣く正法を宣べば、又二十種の利を成就し能ふなり。云何なるを名けて二十種の利と爲すか。謂はゆる、未だ生ぜざる辯才を而ち能く生ずることを得るなり。已に生ぜる辯才は終まで忘失せざるなり。常に勤めて修習して陀羅尼を得るなり。少功用を以て善く無量の衆生を利益し能ふなり。少功用を以て、諸の衆生をして、增上心を起して恭敬尊

【九】　眷屬、乃至、能ふ無きなり。異譯本に「凡べて、親友とする所を、人の壞り能ふ無きなり。」とあり。

て、菩薩の道を行ずるに、此の願を護持せば、寧ろ身命を捨つとも、終まで缺滅して其れをして退轉せしめざるなり。と。爾の時に、彌勒菩薩は復佛に白して言はく。世尊、若し菩薩あつて、後の末世の五百歳の中に於て、法の滅せんと欲する時に、幾の法を成就せば、安隱に惱無くして解脱を得んか。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、若し菩薩あつて、後の末世の五百歳の中に於て、法の滅せんと欲する時に、當に四法を成就すべくば、安隱無惱にして解脱を得ん。何等を四と爲すか。謂はゆる、諸の衆生に於て其の過を求めざるなり。諸の菩薩の違犯する所あるを見るとも、終まで擧げ露さざるなり。諸の親友及び施主の家に於て執著を生ぜざるなり。永く一切の麤獷の言を斷つなり。彌勒、是れを、菩薩は後の末世の五百歳の中の法の滅せんと欲する時に於て四法を成就し、安穩無惱にして解脱を得と爲すなり。と。

爾の時に、世尊は此の義を重ねて宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

他の過失を求めず　亦人の罪をも擧げず　麤語慳悋を離れば　是の人は當に解脱すべし　と。

彌勒、復菩薩あつて、後の末世の五百歳の中に法の滅せんと欲する時に於て、當に四法を成就すべくんば、安穩無惱にして解脱を得ん。何等を四と爲すか。謂はゆる、應に懈怠の人に親近すべからざるなり。一切の憒閙の衆を捨離するなり。獨り閑靜に處るなり。常に勤めて精進して善方便を以て其の身を調伏するなり。彌勒、是れを菩薩は後の末世の五百歳の中の法の滅せんと欲する時に於て四法を成就し、安穩無惱にして解脱を得と爲すなり。と。

爾の時に、世尊は此の義を重ねて宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

當に懈怠を捨て　諸の憒閙を遠離し　寂靜にして常に足ることを知るべくんば　是の人は當に解脱すべし　と。

爾の時、世尊は此の偈を說き已つて、彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、是の故に、菩薩は後の末

ばざらしめば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、晝夜六時に禮事を勤めずんば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、此の弘誓を護持せんと欲する故の爲めに身命を惜まざらん。世尊、若し爾らずんば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し聲聞及び辟支佛に於て、輕んじ慢る心を以て、彼等に於ては我れに勝らず。と謂はば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し善く其の身を摧伏して、下劣の想を生ずること、旃陀羅及び狗犬に於けるが如くなる能はずんば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し自をば讃歎して他に於て毀呰せば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し鬪諍の處を怖畏して百由旬を去ること、疾風の吹くが如くならずんば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し持戒・多聞・頭陀の少欲知足・一切の功德に於て、身自ら炫曜せば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、修むる所の善本をば、矜り伐らず、行ふ所の罪業をば慚愧して發露せん。若し爾らずんば、如來を欺誑すと爲さん。と。

爾の時に、世尊は諸の菩薩を讃ずらく。善い哉、善い哉。善男子、善く是くの如き覺悟の法を說けり。善く是くの如き廣大なる誓願を發せり。能く是くの如き決定の心を以て其の中に安住せば、一切の業障は皆悉く消滅し、無量の善根も亦當に增長すべし。と。佛は復、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。彌勒、若し菩薩あつて、諸の業障を清淨にせんと欲することを爲さば、當に是くの如き廣大なる誓願を發すべし。と。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、頗し善男子・善女人等あつて、此の願を護持せば、當に不退轉を圓滿し得べきか。と。佛、彌勒菩薩に告げて言はく。若し善男子・善女人等あつ

して目無く、殘業の故を以て、在在の生るる所にて、常に多く蒙鈍にして、正念を忘失して善根を障覆し、福德微少に、形容醜缺し、人見ることを喜まずして誹謗し輕賤し戲弄し欺嫌し、常に邊地に生じ、貧窮・下賤にして財寶を喪失し、資生艱難にして衆人に尊重・敬愛せられざりき。[八]此れより歿し已つて、後の末世の五百歳の中に於て、法の滅せんと欲する時に、還、邊地・下劣の家に於て生れ、匱乏・饑凍して人に誹謗せられ、正念を忘失して善法を修めず、設ひ修行せんと欲すとも諸の留難多く、暫く智慧の光明を發起すと雖も、業の障の故を以て、尋いで復還つて沒せん。汝等、彼の五百歳よりして後は、是の諸の業障は爾く乃ち消滅すれば、後に於て阿彌陀佛の極樂世界に生ずるを得、是の時、彼の佛は、當に汝等の爲めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。と。

爾の時に、諸の菩薩等は、佛の說く所を聞きて、身を擧つて毛竪ち、深く憂悔を生じて便ち自ら涙を拭ひ、前んで佛に白して言はく。世尊、我れ今其の過咎を悔ゆることを發露す。我等の、常に菩薩乘の人に於て、輕んじ慢り嫉み恚りたる、及び餘の業障を、今佛前に於て罪の如くに懺悔す。我等、今日、世尊の前に於て弘誓の願を發さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、違犯有るを見て其の過を擧げ露さば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、戲弄し譏嫌し恐懼し輕賤せば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し在家・出家の菩薩乘の人の、五欲の樂を以て遊戲・歡娛して見に受用するを見たる時なりとも、終まで彼れに於て其の過を伺ひ求めずして、常に信敬を生じて教師の想を起さん。若し爾らずんば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、親友の家及び諸の利養を慳んで、彼れの身心を惱し、其れをして逼迫せしめば、我等は則ち如來を欺誑すと爲さん。世尊、我れ今日より未來の際に至るまで、若し菩薩乘の人に於て、一の麁言を以ても、其れをして悅

【八】此れより歿し已つて。異譯本に「汝等、此に身を捨て命終つてより」とあり。

無障礙智・解脫知見を成就し、[四]方便力を以て善く一切衆生の行ずる所を知りたまへば、當に汝等の爲めに、其の根性に隨ひ、種種に說法したまはん。と。是の時に、五百の衆中に六十の菩薩あつて、彌勒菩薩と與に佛の所に往き詣り、五體を地に投じ、頂にて佛足を禮し、悲感して淚を流し、自ら起つ能はず。彌勒菩薩は、敬を修むること已に畢り、退いて一面に坐せり。

爾の時に、佛は諸の菩薩に告げて言はく。善男子、汝等應に起つべし。復と悲號して大熱惱を生ずる勿かれ。[五]汝は往昔に於て惡業を造作するに、諸の衆生に於て、暢悅の心を以て瞋罵し毀辱し障惱し損害し、自の分別に隨つて業報の差別を了知する能はざりき。是の故に、汝等今業障の纏覆する所と爲つて、諸の善法に於て修行する能はざるなり。と。時に、諸の菩薩は是の語を聞き已るや、地よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛に白して言はく。善い哉、世尊。願はくば、我等の爲めに此の業障を說きたまはんことを。我等罪を知らば、當に自ら調伏すべく、我れ今日より更に敢て作らじ。と。爾の時に、佛は諸の菩薩に告げて言はく。善男子、汝曾て往昔、倶留孫如來の法中に於て出家して道を爲めしも、自ら多聞にして淨戒を修持せるを恃んで、常に憍慢傲逸の心を懷き、又頭陀の少欲知足を行ぜしも、是の功德に於て、復執著を生じたり。爾の時に、二つの說法の比丘あつて、諸の親友・名聞・利養多かりしを、汝は是の人に於て、慳嫉の心を以て妄言して、婬欲の事を行ふと誹謗せり。是の時に、法師の親友・眷屬に、汝の離間して其の重過を說けるに由り、皆疑惑して信受を生ぜざらしめたれば、彼の諸の衆生は、是の法師に於て隨順する心無くして、諸の善根を斷ちたり。是の故に、汝等は斯の惡業に由り、已に六十百千歲の中に於て阿鼻地獄に生じ、餘業未だ盡きずして、復四十百千歲の中に於て[六]等活地獄に生じ、餘業未だ盡きずして、復二十百千歲の中に於て黑繩地獄に生じ、餘業未だ盡きずして、復六十百千歲の中に於て[七]燒熱地獄に生じ、彼より歿し已り、還つて人と爲るを得たれども、五百世の中、生の盲に

【四】方便力を以て、乃至、知りたまへば。異譯本に「巧に、一切衆生の心行を知りたまへば」とあり。

【五】汝は、乃至、損害し。異譯本に「汝等、時に於て、歡喜踊躍して、他の人を罵詈し毀辱し破壞し」とあり。

【六】等活地獄。略して「活地獄」とも曰ふ。第四卷、同名の解、參照。

【七】燒熱地獄。略して「炎地獄」とも曰ふ。第四卷、同名の解、參照。

卷の第九十一

發勝志樂會　第二十五の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は波離捺城の仙人の住處たる施鹿苑の中に在して、大比丘の衆の千人を滿足せると與にして、復五百の諸の菩薩衆ありき。

是の時、衆中に多く菩薩あつて、業障深重に、諸根闇鈍に、善法微少にして、憒鬧を好み、世事を談說し、睡眠を耽樂し、諸の戯論多く、廣く衆務を營み、種種に貪著して應にすべからざる所を爲し、正念を忘失し、邪慧を修習し、精勤に下劣に、迷惑の行を行ひたり。

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は會中に在りしが、諸の菩薩の是くの如き不善の行を具足せるを見て、是の念言を作さく。此の諸の菩薩は、無上菩提の圓滿なる道分に於て、皆已に退轉したれば、我れ今當に是の諸の菩薩をして、覺悟開曉して歡喜の心を生ぜしめん。と。是の念を作し已つて、卽、晡時に於て、禪定より起つて其の所に往き到り、共に相ひ慰問し、復種種の柔軟なる言詞を以て法要を說き、其れをして歡喜せしむることを爲し、因つて之れに告げて曰はく。諸の仁者、云何にして汝等は無上菩提の圓滿なる道分に於て、增長を得て退轉せざるか。と。是の諸の菩薩は、同聲に白して言はく。尊者、我等今無上菩提の圓滿なる道分に於て、復た增長すること無く、唯退轉あるのみ。何を以ての故ぞ。我れ心常に疑惑に爲つて覆はれて、無上菩提に於て、云何に我等は當に佛と作るべきか、佛と作らざるか。を解了する能はず。墮落の法に於ても、亦云何に我等は當に墮落すべきか、墮落せざるか。を了する能はず。是の因緣を以て、善法をば生ぜんと欲すれども、常に疑惑の纏覆する所と爲ればなり。と。爾の時に、彌勒菩薩は而ち之れに告げて曰はく。諸の仁者、共に往いて如來・應供・正遍知の所に詣るべし。而して彼の如來は、一切の知者・一切の見者にして、

【一】波離捺城。波羅奈城と同じ。第一卷、同名の解、參照。

【二】施鹿苑。卽ち鹿野苑にして、略して、鹿林とも曰ふ。第一卷、同名の解、參照。

【三】道分。謂はゆる「三十七分法」にして、第一卷「三十七道品」の解（八十九頁）參照。

名けて、汝應に受持すべし。と。佛の此の經を說き已りたまふや、尊者優波離・諸の比丘衆・文殊師利幷に諸の菩薩摩訶薩及び一切世間の天・人・阿修羅等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

師子　善く相應せる如實の法を說きたまへりと　　一切の諸法は虛空の如くなるを　百千の名句義を安立して　或は說き名けて禪解脫と爲し　或は根力と名け或は菩提と　而も此の根力は本より無上にして　禪定の菩提も亦有に非ず[三五]　無色無形にして取る可からざれど　但方便を以て衆生に示すのみ　我れ修行すれば證する所有りて說けど　當に知るべし一切の相を遠離したるものなることを　若し中に於て得る所有りと謂はば　是れ則ち沙門の果を證せるには非ず　諸法の自性は有る所無ければ　當に何處に於て證を得と言ふべき　說いて證を得とする所は無得爲りと　是くの如くに了知するを乃ち得と名く　衆生は果を得て殊勝と名くれども　我れは衆生は本より不生なりと說く　尙衆生として得べきすら無し　云何ぞ當に果を得る者あるべき　譬へば良田も種子無くんば　中に於て終まで芽の生ずること有らざるが如く是の衆生の如きも得可からざれば　當に何所に於てして證を言ふべき　一切の衆生は性寂滅にして　其の根本を得る者ある無し　若し能く是くの如き法を了知せば　斯の人は滅度して永く餘無けん　過去の無數百千の佛も　能く衆生を度する者あること無し　若し此の衆生にして眞實に有らば　畢竟じて涅槃を得能ふ無ければなり　一切の諸法は皆寂滅にして　未だ曾て法として生ず可き者あらず　若し能く是くの如くに諸法を見ば　彼の人は已に三界を出でたるなり　是れ則ち無礙なる佛の菩提にして　中に於ては究竟して有る所無し　若し能く是くの如き法を了知せば　我れは名けて離欲の人と爲すと說かん　と。

爾の時、世尊は此の偈を說き已るや、二百の比丘の增上慢の者は、諸漏永く盡きて心に解脫を得、六萬の菩薩は無生忍を得たり。

爾の時に、優波離は佛に白して言はく。世尊、當に何と此の經に名け、我等は云何に奉持すべきか。と。佛は優波離に告ぐらく。此の經をば名けて、決定せる毘尼と爲し、亦、心識を摧滅す。と

【三五】無色無形にして、乃至、示すのみ。異譯本には「是れ色性に非ざれば、取る可からず。智力を以て世間に現示するなり。」とあり。

我れ菩提心を發趣すれば　世間を利益すること最も殊勝なりと說けども　而も實には菩提は不可得にして　亦菩提を發趣する者も無し　心性は淸淨にして常に光明に　眞實無僞にして塵染無きに　凡夫は分別して貪著を生ずるにて　而も彼の煩惱は本來は空なり　諸法の自性は常に空寂なれば　何ぞ貪欲及び瞋癡あらん　貪を生じ欲を離るるを見さる處を　爾く乃ち名けて涅槃を得たりと爲す　諸法の虛空の如くなるを了知せば　常に世間に處るとも畏るる所無く　其の心未だ曾て染著を生ぜず　是れに由つて大菩提を成就せん

〔三三〕無數劫に於て衆行を修めて　無量の諸の衆生を度脫すれども　衆生の自性は不可得にして實には衆生の度す可き者無し　譬へば世間の大幻師の　無邊なる千億の衆を化作し　還つて復此の諸の化人を害するに　此の幻化に於て增損無きが如し　一切の衆生は幻化の如く　其の邊際を求むるに得可からず　若し是くの如き無邊の性を知らば　斯の人は世に處つて疲厭無きなり　諸法の如實の相を了知して　常に生死卽涅槃を行ぜば　諸欲の中に於て實には染る無ければ　調伏せる衆生をば欲を離れたりと言はん　大悲もて諸の衆生を利益すれども　而も實には人無く壽者無ければ　衆生を見ずして利益することは　當に知るべし此の事甚だ難しと爲すことを　空拳を以て小兒を誘ひ　物有りと示し言うて歡喜せしめ　手を開くに拳は空にして見る所無ければ　小兒は此に於て復號啼するが如し　是くの如くに諸佛は思議し難く

善巧に衆生の類を調伏するに　〔三四〕法の性は有る所無きを了知して　假名をば安立して世間に示すなり　大慈悲を以て勸說して言はく　我が法中に於ては最も安樂なれば　汝應に出家して恩愛を捨つべく　當に沙門の殊勝なる果を得べしと　既に出家を已へて勤めて修習し修行する所の如くに涅槃を得て　復諸法の如實の相を觀るに　實には諸べて果として得可きもの無し果は有る所無くして而も證を得るや　此に於て方に希有の心を生じて　快き哉大悲なる人

【三三】無數劫に於て、乃至、度す可き者無し。
異譯本に「我れ多劫に於て諸行を修し、無邊の諸の衆生を度脫すれども、而も諸の衆生は生じて盡きず、亦未だ曾て增減する時あらず。」とあり。

【三四】法の性は、乃至、示すなり。
異譯本に「已に遠離、空無の法を解し、而して能く世間に示現するなり。」とあり。

を見ば　何が故に緣を待つて方に能く了せんや　眼は常に彼の光明に因つて　能く種種に靑黃の色を見れば　當に知るべし見る性は衆緣に依ることを　是の故に知る眼にて見る能はざることを　設ひ諸の悅意の聲を聞くありとも　聞き已るや卽滅して住る無く　其の去く處を推すに得可からず　分別の故を以て聲の想を生ずるのみ　一切の諸法は但言聲にして　文字は中に於て假に安立するのみなれば　是の聲には法と非法とある無きに　凡愚は知らずして妄に著を生ずるなり　我れ世間の爲めに布施を歎ずれども　而も施の根本は不可得なり　〔三〕說く所無き中に而も演說する　是の故に佛の法は思議せらず　我れ常に淨戒を持つを歎說すれども　亦衆生の、戒を破る者も無く　破戒の性は猶虛空のごとくにして　淸淨なる持戒も亦是くの如し　我れ忍辱を說いて最勝と爲せども　無見無生を忍の性と爲し　實に少法の瞋る可き者無く　是れに由つて說いて殊勝忍と名く　我れ晝夜に常に精進して　寤寐に恒に覺するを無上と爲すと說けど　多劫を經て勤めて修行すと雖も　然も作す所に於ては增減無し　禪定解脫及び三昧と　世間の如實の門を開示すれども　法性は本來動く所無く　隨順して假に諸の禪定を說くのみ　觀察し覺了するを智慧と名け　諸法を了知するを智人と名くれど　諸法の自性は有る所無く　亦觀察し了知する者も無し　我れ常に苦行を修し　頭陀寂靜の法を愛樂するものを歎說すれども　能く諸法の不可得なるを知らば　是れを淸淨なる知足の人と名く

我れ地獄の諸苦の事　死して大怖の惡道の中に入ることを說き　無量の衆生は厭心起せども實に惡趣の來往す可きもの無し　刀杖鉾矟の衆の苦果も　亦造作し能ふ者ある無く　分別に由る故にて有りと見　無量の楚毒其の身に迫るなり　園林に種種の妙華敷き　宮殿に衆寶相ひ輝映するも　亦人の能く作る者ある無く　皆、分別の妄心より生ずるなり　虛僞の法誑ける世間に　凡夫は繫著して顚倒を生ずること　猶諸の幻焰を分別するに　此れに於ける取捨

【三】說く所無き中に、乃至、思議せられず。異譯本に「佛の說く所の法は思議し難し。不可得なりと雖も、而も演說すればなり。」となり。

應に作すべからず。とするを增上慢と名く。此れは是れ深法にして、此れは深法に非ず。とするを增上慢と名く。此れは是れ近法にして、此れは近法に非ず。とするを增上慢と名く。此れは是れ正道にして、此れは是れ邪道なり。とするを增上慢と名く。我れは阿耨多羅三藐三菩提に於て疾く得と爲すや、疾く得ざるや。とするを增上慢と名く。一切の諸法の不可思議なるを能く知る者無きに、我は能く了知す。とするを增上慢と名く。乃至、不可思議なる阿耨多羅三藐三菩提に於て、思惟を起して大執著を爲す。是れを菩薩の增上慢の者と名く。と。爾の時に、優波離は佛に白して言はく。世尊、云何にせば、比丘は增上慢を離るるか。佛、優波離に告ぐらく。若し一切の不思議の法に於て、執著する所無くば、是れを究竟せる無增上慢と名く。と。

爾の時に、世尊は、此の義を重ねて宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

一切の戲論は心に從つて起れば　應に法と非法とを分別すべからず　是くの如くにして法の不思議を見ば　彼の人の世に處ること常に安樂なり　凡夫は迷惑して心の轉ずるに隨ひ　多劫に諸有の中に輪廻すれど　若し法性の皆無性なるを知らば　是れを眞實の不思議と名く　若し比丘あつて諸佛を念ぜば　善思惟に非ず正念に非ず　佛に於て妄に分別の想を生ずとも　而も此の分別には眞實無し　若し空法を思惟するあらば　是くの如き凡夫は邪道に住するなり　但文字を以て空を說けども　文字の與る空は何ぞ得可けん　若し寂靜の法を思惟するありとも　是の心は有るに非ずして本より無生なり　心行たる覺觀は皆戲論なれば　無念なるを名けて諸法を見ると爲す　一切の諸法に思念無く　有心有念は盡く皆空なり　若し人空を觀察することを愛樂すとも　此の無念に於ても念を生ずること勿かれ　法は草木に同じく知覺無く　若し心を離れば得可からず　衆生の自性は有る所無く　一切の諸法皆是くの如し　日光に因つて眼は能く見れど　夜は緣離れたれば覩る所無きが如し　若し眼にして自ら能く色

に依つて成道したまへり。若し善男子にして、是の法の中に於て善き觀察せずんば、則ち如來の淨戒を遠離すと爲す。と。

時に、優波離は佛に白して言はく。世尊、文殊師利の說く所の法は不可思議なり。と。爾の時に、世尊は優波離に告げて言はく。〔三〇〕文殊師利の說く所の法は、不可思議なる無礙の解脫に依る。是の義を以ての故に、凡べて法を說く所に諸の心相を離れたり。謂はく、〔三一〕心解脫の增上慢の人に、增上慢を離るるを得しむる故なり。と。優波離は佛に白して言はく。世尊、云何なるは聲聞及び菩薩乘の增上慢の者ぞ。佛、優波離に告ぐらく。若し比丘あつて、是の思惟——我れ貪欲を斷つ。——を作さば、增上慢と名く。我れ瞋恚及び愚癡を斷つとせば、增上慢と名く。貪欲の法の異るは諸佛の法と異り。とするを增上慢と名く。瞋恚の法の異るは諸佛の法と異り。とするを增上慢と名く。愚癡の法の異るは諸佛の法と異り。とするを增上慢と名く。得る所有り。と謂ふを增上慢と名く。證する所有り。と謂ふを增上慢と名く。解脫有り。と謂ふを增上慢と名く。諸法の空を見る。を增上慢と名く。無相を見る。を增上慢と名く。無願を見る。を增上慢と名く。無生を見る。を增上慢と名く。作す所無きを見る。を增上慢と名く。諸法有り。と見るを增上慢と名く。法の無常を見る。を增上慢と名く。諸法空なれば何を用つてか修習せん。と謂ふを增上慢と名く。優波離、是れを聲聞乘の人の增上慢の者と名く。云何なるを名けて、菩薩乘の人の增上慢の者と爲すか。若し諸の菩薩にして、是の思惟——我れ當に發心して一切智を求むべし。——を作さば、增上慢と名く。我れ當に六波羅蜜を修行すべし。とするを增上慢と名く。唯、般若波羅蜜に依つて解脫を得、更に餘の法にて解脫を得る無し。とするを增上慢と名く。此の法は甚深にして、此れは甚深に非ず。とするを增上慢と名く。此の法は是れ淨にして、此の法は淨に非ず。とするを增上慢と名く。此れは諸佛の法、此れは緣覺の法、此れは聲聞の法。とするを、增上慢と名く。此の法は應に作すべく、此れは

〔三〇〕文殊師利の、乃至、得しむる故なり。異譯本に「文殊師利の說く所の法は、解脫に依る。解脫に依る所にて、心に去來無し。是の故に、文殊師利の、一切の法を說いて心に去來無きは、心解脫に於て增上慢を生ぜる者に、彼の人の增上慢を除かん爲めの故なり。」とあり。

〔三一〕心解脫。心と貪愛等を離れて、煩惱を起さざる者を謂ふ。

け、大墮落と名け佛の法中に於ては是れ大なる留難なり。優波離、若くなれども諸の菩薩にして、毘尼の中に於て、善方便無くして貪と相應して犯さば、便ち怖畏を生ぜよ。瞋と相應して犯さば、怖畏を生ぜざれ。若し諸の菩薩にして、毘尼の中に於て、善方便有つて貪と相應して犯さば、怖畏を生ぜざれ。瞋と相應して犯さば、大怖畏を生ぜよ。と。

爾の時に、文殊師利法王子は大衆の中に在りしが、佛に白して言はく。世尊、一切の諸法は、畢竟じて毘尼なり。何の調伏する所ぞ。と。佛は文殊師利に告ぐらく。若し諸の凡夫にして、諸法の究竟して毘尼なるを了知せば、如來は終に調伏を說かざれども、知らざる故を以て、如來は諸法の畢竟じて毘尼なるを覺了せしめん爲めに、漸次に諸の毘尼の法を說くことを爲すなり。と。爾の時に、優波離は佛に白して言はく。世尊、如來は此の決定せる毘尼を說きたまへども、文殊師利は、是の法の中に於て未だ說く所あらず。善い哉、世尊、願はくば、文殊師利をして、少しき解說を爲さしめたまはんことを。と。佛は文殊師利に告ぐらく。汝、今當に究竟せる毘尼の善巧の義を說くべし。是れ優波離の願うて聞かんことを樂欲すればなり。と。

爾の時に、文殊師利法王子は優波離に語つて言はく。一切の諸法は畢竟じて寂滅なれば、心の寂滅なる故を究竟毘尼と名く。一切の諸法に我は得可からざれば、染著する無き故を不悔毘尼と名く。一切の諸法は本性淸淨なれば、顚倒する無き故を最勝毘尼と名く。一切の諸法は如如の實際なれば、諸見を離るる故を淸淨毘尼と名く。一切の諸法は不來・不去なれば、分別する無き故を不思議毘尼と名く。[二七]一切の諸法は無住・無著なれば、念念の滅する故を淨諸趣毘尼と名く。[二八]一切の諸法は虛空の際に住すれば、諸相を離るる故を自性遠離毘尼と名く。一切の諸法は去・來・今無ければ、得可からざる故を三世平等毘尼と名く。[二九]一切の諸法は安立すべからざれば、心平等なる故を永斷疑惑毘尼と名く。優波離、是れを法界の究竟せる毘尼と名け、諸佛世尊は此れ

【二七】一切の諸法は、乃至、名く。異譯本に「一切の諸法は、無住、無染なれば、留住することを作さずんば、乃ち能く諸法の淸淨なるを見ることを得。」とあり。

【二八】一切の諸法は、乃至、名く。異譯本に「一切の諸法は、虛空の際に住すれば、諸處の所を離れれば、乃ち能く所作の淸淨なるを見ることを得。」とあり。

【二九】一切の諸法は、乃至、名く。異譯本に「一切の諸法は、諸の施設を離れたれば、心に行ずる所無くんば、乃ち能く疑の結を斷ずるを見ることを得。」とあり。

て盡護と爲すなり。何を以ての故ぞ。優波離、大乘を求むる者は、阿耨多羅三藐三菩提の甚だ得難しと爲すに於て、大莊嚴を具して乃ち能く成就すればなり。是の故に、菩薩は無量の阿僧祇劫に於て往來・生死すと雖も、終まで厭離の心を生ぜざるなり。是の義を以ての故に、如來は觀察して、大乘の人の爲めには、應に一向に厭離の法を說くことをすべからず、應に一向に速に涅槃を證する法を說くべからずして、應當に慈・喜と相應せる甚深微妙なる無染の法・憂悔を遠離し繫著無き法・無障無礙なる性空の法を說くことを爲すべく、菩薩は聞き已つて、生死の中に於てして厭倦する無く、決定して無上菩提を圓滿するなり。と。

爾の時に、優波離は佛に白して言はく。世尊、若し菩薩あつて、貪心と相應して戒を犯し、或は菩薩あつて、瞋心と相應して戒を犯し、或は菩薩あつて、癡心と相應して戒を犯さんに、世尊、是の菩薩の如きは、三犯の中に於て、何者を重しと爲すか。と。爾の時に、世尊は優波離に告げて言はく。若し諸の菩薩にして大乘を修行せんに、恒沙の劫の如きに、貪心と相應して戒を犯す者は、其の罪は尙輕きも、若し一瞋心にして戒を犯さば、其の罪は甚だ重し。何を以ての故ぞ。貪に因つて戒を犯すものは、衆生を攝受すれど、瞋に因つて戒を犯すものは、衆生を棄捨すればなり。優波離、有つ所の諸結にして、能く衆生を攝めば、菩薩は此れに於て應に畏を生ずべからさるも、有つ所の諸結にして、能く衆生を捨てば、菩薩は此れに於て應に、怖畏を生ずべきなり。優波離、佛の先に說くが如く、貪欲は捨て難くして、過爲るや微細なり。瞋恚は捨て易くして、過爲るや麤重なり。癡は捨離し難くして、過も復麁重なり。優波離、煩惱の中に於て、若し捨離し難き小犯の罪ならば、是れ諸の菩薩は應當に堪忍すべく、若し捨離し易き大犯の罪ならば、是くの如き煩惱をば、乃至、夢中にも應に忍受すべからず。是の義を以ての故に、大乘の人の、貪に因つて戒を犯すを、我れ是の人を說いて、犯を爲すと名けず。瞋に因つて戒を犯すを、大犯戒と爲し、大過患と名

乘の人は盡護の戒を持つなり。云何なれば、名けて菩薩は開遮の戒を持ち、聲聞乘の人は唯遮の戒を持つと爲すか。若し諸の菩薩の、大乘の中に於て發趣して修行するに、[二二]日の初分の時に戒を犯す所ありとも、日の中分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の[二三]戒身は壞れず。若し日の中分に戒を犯す所ありとも、[二四]日の後分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の戒身は壞れず。若し日の後分に戒を犯す所ありとも、夜の初分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の戒身は壞れず。若し[二五]夜の初分に於て戒を犯す所ありとも、夜の中分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の戒身は壞れず。若し夜の中分に戒を犯す所ありとも、[二六]夜の後分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の戒身は壞れず。若し夜の後分に戒を犯す所ありとも、日の初分に於て一切智心を離れずば、是くの如き菩薩の戒身は壞れざるなり。是の義を以ての故に、菩薩乘の人は開遮の戒を持ちたれば、設ひ犯す所ありとも、應に念を失ひ妄に憂悔を生じて自ら其の心を惱すべからざれど、聲聞乘に於ては、犯す所あれば、便ち聲聞の淨戒を破壞すと爲すなり。何を以ての故ぞ。聲聞は、戒を持ちて煩惱を斷除すること、頭の然るを救ふが如くにし、有つ所の志樂は、但涅槃を求むればなり。是の義を以ての故に、聲聞乘は唯遮の戒を持つと名く。復次に、優波離、云何なれば、菩薩は深入の戒を持ち、聲聞の人は次第の戒を持つか。菩薩乘の人は、恒沙の劫に於て五欲の樂を受くれども、遊戲自在にして、未だ曾て菩提の心を捨離せざれば、是くの如き菩薩をば、戒を失せりとは名けず。所以は何ぞ、菩薩は善く菩提に安住する心を守護し能ひて、乃至、夢中にも一切の結使は其の患を爲さず。而も是の菩薩の有つ所の煩惱は、漸漸に當に盡くべくして應に一生にて便ち諸結を盡すべからざればなり。聲聞乘の者は、善根を成熟すること頭然を救ふが如くにし、乃至、一念も生を受くることを喜ばず。是の義を以ての故に、大乘の人には、深入戒を持ち、開遮ありと說き、不盡護と名くれども、聲聞乘の人には、次第戒を持ち、名けて唯遮と曰ひ、名け

【二二】日の初分。謂はゆる晝の三時の中の「晨朝」なり。
【二三】戒身。謂はゆる「戒の四科」中の戒體を謂ふ者にして、戒の行相にあらざる實體なり。
【二四】日の後分。「日沒」なり。
【二五】夜の初分。謂はゆる夜の三時の中の「初夜」なり。
【二六】夜の後分。謂はゆる「後夜」なり。

ば、是の說言を爲さん。寧ろ身命を捨つとも終まで戒を捨てじ。と。世尊、若しは佛の在世に、若しは滅度の後に、云何なるを名けて聲聞・緣覺の波羅提木叉と爲し、云何なるを名けて菩薩乘の者の波羅提木叉と爲さんか。世尊は、我れを持律の中に於て最も第一と爲すと說きたまへど、我れ當に云何に能く毘尼の善巧の義を了すべきか。若し我れ佛より親しく聞き、受持して畏るる所無きに逮ばば、然る後に乃ち能く他の爲めに廣く說かん。と。今此に、大衆、諸來の菩薩及び比丘僧は悉く皆集會したり。善い哉、世尊、惟願はくば、廣く決定せる毘尼を說いて、疑悔を斷除したまはんことを。と。

爾の時に、世尊は優波離に告ぐらく。汝、今當に知るべし。聲聞と菩薩との、清淨戒を學んで發心する所、修行する所は異ることを。優波離、聲聞乘の持つ清淨戒を有つことは、菩薩乘に於ては大破戒と名け、菩薩乘の持つ清淨戒を有つことは、聲聞乘に於て大破戒と名く。云何なれば、名けて聲聞乘の人は淨戒を持つと雖も、菩薩乘に於ては大破戒と名くと爲すか。優波離、聲聞乘の人は、乃至、應に更に[一八]後身を受けん。と一念をも起すべからず。是れを聲聞の持つ清淨戒と名く。然れども、菩薩に於ては大破戒と名くるなり。云何なれば、菩薩の清淨戒を持つを聲聞乘に於て大破戒と名くるか。菩薩摩訶薩の大乘を修行するや、能く無量阿僧祇劫に於て身を受くることを堪忍して、厭患を生ぜざるなり。是れを菩薩は清淨戒を持つと名くれども、聲聞乘に於ては大破戒と名くるなり。是の義の故を以て、菩薩乘の爲めに不盡護の戒を說けども、聲聞乘の爲めには盡護の戒を說き、諸の菩薩の爲めに[一九]開遮の戒を說けども、諸の聲聞の爲めには[二〇]唯遮の戒を說き、菩薩乘の爲めに[二一]深心の戒を說けども、聲聞乘の爲めには次第の戒を說くなり。云何なれば、菩薩は不盡護の戒を持ち、聲聞乘の者は盡護の戒を持つか。菩薩乘の人は、淨戒を持つと雖も、諸の衆生に於て應當に隨順すべく、聲聞乘の人は應に隨順すべからず。是の故に、菩薩は不盡護の戒を持ち、聲聞

【一八】後身。死後、次生の身を謂ふ。

【一九】開遮の戒。異譯本には「開通の戒」とあり。

【二〇】唯遮の戒。異譯本には「不開通の戒」とあり。

【二一】深心の戒。異譯本には「深入の戒」とあり。

し殊勝三昧に入らば、則ち轉輪王の身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。若し熾然威光三昧に入らば、則ち帝釋・梵王の殊妙なる色身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。菩薩若し一向三昧に入らば、則ち聲聞の身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。菩薩若し清淨三昧に入らば、則ち辟支佛の身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。菩薩若し寂靜三昧に入らば、則ち諸佛の色身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。菩薩の是くの如くに一切の法に自在なる三昧に入り、其の志樂に隨ひ、種種の身を現して衆生を成熟せんとて、或は帝釋の身を現し、或は梵王の身を現し、或は轉輪聖王の身を現すは、皆諸の衆生を成熟せん爲めの故なれど、[一六]而も法界に於て亦動く所無きなり。何を以ての故ぞ。菩薩は復衆生に隨順して、種種に示現すと雖も、身の相及び衆生の相を見ずして、得る所無き故なり。舍利弗、意に於て云何。師子王の大に哮吼する時の如きに、諸の小野干は堪任し能ふや、不や。舍利弗言はく。不なり、世尊。と。又、舍利弗、大香象の其の負ふ所の重の如きを、驢は堪任するや、不や。不なり、世尊。又、帝釋及び梵天王の威德の自在なる如きを、貧賤の人は堪任し能ふや、不や。不なり、世尊。又、大力の金翅鳥の翺翔して運動する如きを、諸の餘の小鳥は堪任し能ふや、不や。不なり、世尊。と。佛言はく。舍利弗、是の諸の菩薩の有つ所の善根の勇猛の力、――出離の智に依つて諸の罪垢を淨め、憂悔を遠離し、諸佛を見るを得、及び三昧を得る、――も亦復是くの如し。斯くの如き罪障は、諸の凡夫・聲聞・緣覺の除滅し能ふ所に非ざるに菩薩は、若し能く彼の佛名を稱せば、晝夜に常に是の三種の法――、能く諸罪を滅し、憂悔を遠離し、諸の三昧を得る、――を行ずるなり。と。

爾の時に、[一七]優波離は禪定より起つて、往いて佛の所に詣り、頂にて佛足を禮し、右に遶ること三帀し、却いて一面に住り、佛に白して言はく。世尊、我れ靜處に於て獨り坐し思惟して、是くの如き念を作せり。世尊の說きたまふ所の波羅提木叉の淸淨の戒學は、聲聞・緣覺・菩薩乘の爲めなれ

【一六】而も、乃至、動く所無きなり。異譯本に「諸の法界に於て、而も動轉せざるなり。」とあり。

【一七】優波離(Upali)。佛の悉多太子たりし時の執事たりしが、後、佛弟子となりて、持戒第一と曰はれたり。

方僧の物を、若しは自ら取り、若しは他に敎へて取らせて、取るを見て隨喜したる、五無間罪をば、若しは自ら作り、若しは他に敎へて作らせて、作るを見て隨喜したる、十不善道をば、若しは自ら作り、若しは他に敎へて作らせて、作るを見て隨喜したる、作る所の罪障の、或は覆藏するあり、或は覆藏せざるも、應に地獄・餓鬼・畜生・諸の餘の惡趣・邊地・下賤及び彌戾車に墮すべく、是等の如き處に作る所の罪障をば、今、皆懺悔す。今、諸佛世尊は、當に我れを證知したまふべし。當に我れを憶念したまふべし。我れ復諸佛世尊の前に於て、是くの如き言を作す。若しは我が此の生、若しは餘の生に於て、曾て布施を行じ、或は淨戒を守り、乃至、畜生に一搏の食を施與したる、或は淨行を修めて有つ所の善根・衆生を成就して有つ所の善根・菩提を修行して有つ所の善根及び無上智にて有つ所の善根の一切を合集し校計し籌量して、皆悉く阿耨多羅三藐三菩提に迴向すること、過去・未來・現在の諸佛の作したまへる迴向の如くに、我れも亦是くの如くに迴向す。

衆罪をば皆懺悔し　諸福をば盡く隨喜し　及び諸佛の功德にて　願はくば無上智を成ぜんことを　去來現在の佛　衆生に於て最も勝れたまへる　無量の功德海に　我れ今歸命し禮したてまつる　と。

是くの如くに、舍利弗、菩薩は應當に一心に此の三十五佛を觀じて上首と爲すべく、復應に一切の如來を頂禮すべく、應に是くの如き淸淨なる懺悔を作すべし。菩薩にして、若し能く此の罪を滅除せば、爾の時に、諸佛は卽其の身を現じて、一切の諸の衆生を度せん爲めの故に、是くの如き種種の相を示現し、而も法界に於て亦動く所無くして、諸の衆生の種種なる樂欲に隨ひ、悉く圓滿して皆解脫を得しむるなり。

復次に、舍利弗、菩薩は若し大悲三昧に入らば、則ち地獄・畜生・閻魔界を示現して、衆生を成熟し能ふなり。菩薩若し大莊嚴三昧に入らば、則ち長者の身を示現して、衆生を成熟し能ふなり。若

する者二、布施に關する者二、合せて十三なり。此れを「十三僧殘」と曰ふ。

【四】五無間。「五無間業」と同じ。第一卷、同名の解、參照。

【五】四方僧。此處にては當僧團に屬せざる諸方の僧團を謂ふなるべし。

犯す者は、惡趣に墮して速に除斷すべく、癡に因つて犯す者は、當に[11]八種の大地獄の中に墮すべくして、解脫すべき難ければなり。

復次に、舍利弗、若し菩薩あつて、[12]波羅夷を犯さば、應に清淨なる十比丘の前に對して、質直の心を以て殷重に懺悔すべく、[13]僧殘を犯せる者は、五淨僧に對して、殷重に懺悔せよ。若し女人を染心にて觸るる所を爲し、及び相ひ顧みるに因つて愛著を生ぜば、應に一二の淸淨なる僧の前に對して、殷重に懺悔すべし。舍利弗、若し諸の菩薩にして、[14]五無間を成就し、波羅夷を犯し、或は僧殘戒を犯し、塔を犯し、僧を犯し、及び餘の罪を犯さば、菩薩は、應當に三十五佛の前に於て、晝夜獨り處つて、殷重に懺悔すべく、應に自ら稱して云へ。我れ某甲、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す。

南無釋迦牟尼佛　南無金剛不壞佛　南無寶光佛　南無龍尊王佛　南無精進軍佛　南無精進喜佛　南無寶火佛　南無寶月光佛　南無現無愚佛　南無寶月佛　南無無垢佛　南無離垢佛　南無勇施佛　南無清淨佛　南無清淨施佛　南無娑留那佛　南無水天佛　南無堅德佛　南無栴檀功德佛　南無無量掬光佛　南無光德佛　南無無憂德佛　南無那羅延佛　南無功德華佛　南無蓮華光遊戲神通佛　南無財功德佛　南無德念佛　南無善名稱功德佛　南無紅炎帝幢王佛　南無善遊步功德佛　南無鬪戰勝佛　南無善遊步佛　南無周帀莊嚴功德佛　南無寶華遊步佛　南無寶蓮華善住娑羅樹王佛

是等の如き一切世界の諸佛世尊は、常に世に住在したまへば、是の諸の世尊は、當に我れを慈念したまふべし。若しは我が今生に、若しは我が前生に、無始の生死より已來作る所の衆罪の、若しは自ら作り、若しは他に敎へて作らせて、作るを見て隨喜したる、若しは塔若しは僧若しくは[15]四

【一一】八種の大地獄。一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に號叫、五に大叫、六に炎熱、七に大熱、八に無間、是れなり。但し、經論に依り、多少其の名を異にせり。

【一二】波羅夷(Pārājika)。戒律中の最も重き罪にして、多義あれども、普通は、斷頭(後に如何なる行法を爲すとも、之れを救うて再び比丘と爲し能はざるに由ると曰ふ。)と譯す。一に、婬戒(人、畜其の他に向つての婬事)二に、盜戒(人、畜及び三寶其の他の物に關する重盜)三に、殺戒(人命を奪ふ者)四に、大妄語戒(利養の爲めに、自ら聖者なりと僞言する者)是れなり。

【一三】僧殘(Saṃghāvaśeṣa)。波羅夷に次げる重罪にして、之れを犯す者にして、僧衆に依つて懺悔法を行はざれば、比丘の資格に於て、同じく死地に入る者とせらる。語の意は、種々の解あれど、「善見論」に據れば、「僧伽初殘」と譯し、衆僧集つて、先づ覆藏羯磨の作法を行ひ(是れ初なり)終りに、出罪羯磨の作法を行ふ(是れ殘なり)義なりとせり。而して、戒種は、婬事に關する者五、房舍居宅に關する者二、誹謗に關する者二、僧衆の不和に關

の中に安住せしむるなり。所以は何ぞ。唯如來の智慧のみにて解脱して涅槃を究竟するあれど、更に餘の乘にして度脱を得ること無ければなり。是の義を以ての故に、名けて如來と爲すなり。如來は實の如くに[八]如を覺了せるが故に如來と名け、諸の衆生の種種の欲樂を知つて、悉く示現し能ふ故に如來と名け、一切の善法の根本を成就し、一切の不善の根本を斷つが故に如來と名け、衆生に解脱の道を示現し能ふ故に如來と名け、衆生をして、邪道を遠離して正道に住せしめ能ふ故に如來と名け、諸法の眞實なる空の義を演說する故に如來と名くればなり。舍利弗、菩薩は、是くの如くに諸の衆生の種種なる志樂を知り、應に隨ひ法を說きて解脱を得しめ、諸の愚夫の爲めに實智を開示し、法界を動さずして能く種種なる幻化の莊嚴を現して、諸の衆生をして、次第に當に涅槃の岸に趣くを得べからしむるなり。

復次に、舍利弗、在家の菩薩は、慈愍・不惱害の心に住して、應に二つの施を修むべし。何者を二と爲すか。一には、法施、二には、財施なり。出家の菩薩は、應に四つの施を修むべし。何等を四と爲すか。一には、筆施、二には、墨施、三には、經本施、四には、說法施なり。無生法忍の菩薩は、應に三つの施に住すべし。何等を三と爲すか。謂はゆる、王位の布施、妻子の布施、頭目[九]支分の悉皆の布施なり。是くの如くに施す者を名けて大施と爲し、極妙の施と名く。舍利弗、佛に白して言はく。世尊、是の諸の菩薩は、貪・瞋・癡に於て怖畏せざるか。と。佛、言はく。舍利弗、一切の菩薩に二つの犯戒あり。何等を二と爲す。一には、瞋と相應せる犯にして、二には、癡と相應せる犯なり。是くの如き二犯を大破戒と名く。舍利弗、貪に因つて犯す者は、過を爲すこと微細にして捨離すべき難く、瞋に因つて犯す者は、過を爲すこと麤重にして、捨離すべき易く、癡に因つて犯す者は、過を爲すこと深重にして、復捨離し難し。所以は何ぞ。[一〇]貪の結は、諸有の種子と爲つて、生死の蔓莚を連持して絕たざる、是の義の故を以て、微細にして斷ち難く、瞋に因つて

【八】如。異譯本には「如如」を用ひてあり。

【九】支分。四肢卽ち手足を謂ふ。

【一〇】貪の結は、乃至、絕たざる。異譯本に「愛は、能く生死の枝條を增長して、亦、種子と爲る。」とあり。

曰はく。我れは、諸の衆生をして生死を越度せしむることに堪任し能ふ。と。網明童子は曰はく。我れは後の末世に於て、諸の衆生の爲めに光明を示現して、煩惱を滅除することに堪任し能ふ。と。

爾の時に、舍利弗は、諸の菩薩の是等の如き勇猛なる弘誓を作して、衆生を成熟せんとするを聞き、未曾有と歎じて、佛に白して言はく。希有なり、世尊。此の諸の菩薩摩訶薩の、不可思議に大悲の方便善巧を具足して、勇猛精進にて自ら莊嚴せることは、一切の衆生は測量し能ふ無く、沮壞すべからずして、有らゆる光明も障蔽し能ふ無し。世尊、我れ當に是の諸の菩薩の未曾有の事、謂はゆる來つて頭・目・耳・鼻・身・髓・手・足一切の諸物を求索するあるをも堪任して、悋惜する所無きことを稱讃すべし。世尊、我れ常に思惟す。若し人あつて、能く是くの如き諸菩薩等を逼迫すとも、其の若しは內若しは外の一切の財物を求索するに從うて、心に怯弱無きは、當に知るべし、皆是れ不可思議解脫の菩薩なればなり。と。佛、舍利弗に告ぐらく。是くの如し、是くの如し、汝の言ふ所の如し。是の諸の菩薩の智慧・方便・三昧の境界は、一切の聲聞及び辟支佛の知る能はざる所なり。舍利弗、此の諸の菩薩摩訶薩は、能く諸佛の神通變化を現して、衆生の諸の欲樂する所を滿足し、而も諸法に於て心に動く所無し。若し衆生あつて、居士と爲つて憍慢放逸することを樂まんに、菩薩は爾の時に、成熟を爲さん故に、大居士威德の身を現して、法を說くことを爲すなり。若し衆生あつて、大勢力を恃んで自ら憍慢せんに、菩薩は爾の時に、調伏を爲さん故に、那羅延大力の身を現して、法を說くことを爲すなり。若し衆生あつて、涅槃を志求せんに、菩薩は爾の時に、度脫を爲さん故に、聲聞の身を現して法を說くを爲すなり。若し衆生あつて、緣起を觀ずることを樂まんに、菩薩は爾の時に、度脫を爲さん故に、緣覺の身を現して法を說くことを爲すなり。若し衆生あつて、菩提を志求せんに、菩薩は爾の時に、度脫を爲さん故に、卽、佛身を現して佛智に入らしむるなり。是くの如くに、舍利弗、是の諸の菩薩は、種種なる方便にて衆生を成就して、悉く佛の法

【七】緣起。「十二因緣」を指す。

めに、一切の法に於て無爲の道を示すことに堪任し能ふ。と。無畏菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の種種の志樂に隨ひ、皆能く示現することに堪任し能ふ。と。寶勝菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に妙珍の寶聚を示すことに堪任し能ふ。と。妙慧菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の見る者をして、歡喜をば皆成熟を得しむることに堪任し能ふ。と。寶藏菩薩は曰はく。我れは、衆生を度脫して諸の障礙を離すことに堪任し能ふ。と。寶賢菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生をして、自ら宿命を識ることをば皆成就を得しむることに堪任し能ふ。と。寶手菩薩は曰はく。我れは、諸の珍寶を以て衆生に惠施して、安樂を得しむることに堪任し能ふ。と。勝意菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生をして永く貧窮を離れしむることに堪任し能ふ。と。喜見菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に一切に樂具を施すことに堪任し能ふ。と。金剛菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の爲めに正道を開示することに堪任し能ふ。と。[四]福相菩薩は曰はく。我れは、衆生を悅可して度脫を得しむることに堪任し能ふ。と。[五]法起菩薩は曰はく、我れは、衆垢を淨除して法を演說することに堪任し能ふと。無垢菩薩は曰はく。我れは、衆生を愛護して悉く成熟せしむることに堪任し能ふ。と。法現菩薩は曰はく。我れは、常に正法を以て衆生を度脫することに堪任し能ふ。と。空寂菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生をして煩惱の毒を滅せしむることに堪任し能ふ。と。月勝菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の爲めに法の方所を示すことに堪任し能ふ。と。師子意菩薩は曰はく。我れは、常に法施を以て衆生を利益することに堪任し能ふ。と。童子光菩薩は曰はく。我れは、[六]卑下の處より衆生を拔出することに堪任し能ふ。と。覺吉祥菩薩は曰はく。我れは、正道を開示して惡趣の門を閉づることに堪任し能ふ。と。金光菩薩は曰はく。我れは、身相を示現して衆生を成熟することに堪任し能ふ。と。吉祥菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生と與に、常に利益を作すことに堪任し能ふ。と。持世菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の爲めに地獄の門を閉づることに堪任し能ふ。と。甘露菩薩は

【四】 福相菩薩は乃至堪任し能ふ。異譯本には「現德色菩薩は言はく。我れは、多く求むる衆生に、其の求むる所に隨ひ、皆能く給足することに堪忍し能ふ。」とあり。

【五】 法起菩薩は、乃至、堪任し能ふ。異譯本には「法出曜菩薩は言はく。我れは、常に清淨なる諸法の行を說くことに堪任し能ふ。」とあり。

【六】 卑下の處、謂はゆる「三塗」を指す者なるべし。異譯本にも「卑下の處」とあり。

恒に安樂を以て衆生を成熟することに堪任し能ふ。と。月幢菩薩は曰はく。我れは、諸の功德を以て衆生を成熟することに堪任し能ふ。と。[二]善眼菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に自性の安樂を與ふることに堪任し能ふと。觀自在菩薩は曰はく。我れは、諸の惡趣に於て、衆生を拔濟することに堪任し能ふ。と。得大勢菩薩は曰はく。我れは、諸の惡趣の未だ度せざる衆生を度することに堪任し能ふ。と。普賢菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生をして、過去の經歷を憶念して受くる苦を、便ち解脫を得しむることに堪任し能ふ。と。善數菩薩は曰はく。我れは、一切の調じ難き衆生を調伏することに堪任し能ふ。と。妙意菩薩は曰はく。我れは、小法を樂ふ者をば、度して成熟せしむることに堪任し能ふ。と。善順菩薩は曰はく。我れは、下劣・少智の衆生を成熟することに堪任し能ふ。と。光積菩薩は曰はく。我れは、畜生の趣に墮せる者を拔濟して、解脫を得しむることに堪任し能ふ。と。不思議菩薩は曰はく。我れは、愍念して餓鬼の衆生に解脫を得しむることに堪任し能ふ。と。大威力菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の爲めに惡趣の門を閉づることに堪任し能ふ。と。無諍論菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に解脫の道を示すことに堪任し能ふ。と。賢吉祥菩薩は曰はく。我れは、究竟して衆生の苦惱を斷除することに堪任し能ふ。と。月光菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に畢竟の安樂を與ふることに堪任し能ふ。と。日光菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の未だ成就せざる者に於て、成熟を得しむることに堪任し能ふ。と。無垢菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の有つ所の志樂をして、皆圓滿を得しむることに堪任し能ふ。と。斷疑菩薩は曰はく。我れは、一切の下劣の衆生を度脫することに堪任し能ふ。と。[三]無畏菩薩は曰はく。我れは、衆生を攝受するに、稱讚して利益することに堪忍し能ふ。と。慧勝菩薩は曰はく。我れは、隨順して、種種の勝解の衆生に皆成熟を得しむることに堪任し能ふ。と。光明菩薩は曰はく。我れは、恒に正勤を以て衆生を拔濟することに堪任し能ふ。と。無量菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生の爲

【二】善眼菩薩は、乃至、堪任し能ふ。異譯本(佛說決定毗尼經「燉煌三藏譯」)には「妙目菩薩は言はく。我れは諸の衆生に、安樂の根本を與ふることに堪任し能ふ。」とあり。

【三】無畏菩薩は、乃至、堪忍し能ふ。異譯本に「住無畏菩薩は言はく。我れは、常に讚歎を以て、衆生を饒益することに堪忍し能ふ。」とあり。

卷の第九十

優波離會　第二十四

唐　菩提流志　漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘の衆千二百五十人と俱にして、菩薩摩訶薩は五十萬人なりき。

爾の時に、世尊は〔一〕龍象王の如くに顧視觀察して、諸の菩薩摩訶薩に告げて言はく。善男子、汝等誰れか後の末世に於て正法を護持して、如來の百千萬億那由他阿僧祇劫に集めし所の阿耨多羅三藐三菩提の法を攝受し、祕密の種種なる方便に安住して、衆生を成熟し能ふか。と。爾の時に、彌勒菩薩は、卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して白して言はく。世尊、我れは後世の時に於て、如來の百千萬億那由他阿僧祇劫に集めたまへる所の阿耨多羅三藐三菩提の法を護持することに堪任し能ふ。と。師子慧菩薩は曰はく。我れは、祕密なる種種の方便に安住して、衆生を成熟することに堪任し能ふ。と。無盡意菩薩は曰はく。我れは、廣大なる願を以て、無盡なる諸の衆生界を度脫することに堪任し能ふ。と。跋陀羅菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生をして、我が名を聞くを得ば皆悉く成熟して、空しく過ぐる者無からしむることに堪任し能ふ。と。妙德菩薩は曰はく。我れは、諸の衆生に於て、願求する所に隨ひ悉く滿足せしむることに堪任し能ふ。と。無畏菩薩は曰はく。我れは、無邊なる世界の衆生を攝受して、饒益を作すことに堪任し能ふ。と。金剛菩薩は曰はく。我れは、惡趣の中に於て、諸の衆生を度して解脫を得しむることに堪任し能ふ。と。除障菩薩は曰はく。我れは、衆生の煩惱の繫縛を解脫することに堪任し能ふ。と。智幢菩薩は曰はく。我れは、衆生の無明の闇蔽を滅除することに堪任し能ふ。と。法幢菩薩は曰はく。我れは、常に法施を行ひて、衆生を度脫することに堪任し能ふ。と。日幢菩薩は曰はく。我れは、

【一】龍象王。第四卷「龍象」の解、參照。

ることに住したりき。迦葉、異念を作す莫かれ。爾の時の大精進菩薩摩訶薩は、豈異人ならんかと。我が身是れなり。迦葉、是の故に、菩薩摩訶薩は應に大精進菩薩摩訶薩を學ぶべく、亦應に餘の諸の大菩薩をも學ぶべし。迦葉、當に來るべき末世の後の五百歳に、菩薩を求むる諸の善男子あれど、方便心無くして諸の貪著多く、墻壁の下に於て如來の像を畫きて利養を求めて、彼れは是の說を作すなり。我れ獨供養して、人は供養する無し。と。少善を修むるを以て自ら高つて人を慢り、此の供養に因り以て自ら活命するなり。迦葉、彼の時の衆生は、三昧を修せず正典を誦せずして、但此の業を作し、此の業に因る故にて施主の邊に於て、衣服・飲食・臥具・湯藥を獲得し、以て自ら活命するなり。迦葉、汝、彼の破戒の菩薩の、不淨の戒に住しながら自ら多聞なりと稱するを觀ぜよ。迦葉、彼の破戒の人は、經典を誦せずして形像に供養し、因つて自ら活くるなり。と。

爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、希有なり。世尊、希有なり。善逝、世尊の廣く愚癡の凡夫の諂曲の失を說きたまふことや。世尊、若し善男子・善女人あつて、是くの如き說を聞かば、何ぞ清淨の戒に住せざるあらんや。世尊、願はくば、未來に於て此の法の久しく住して、彼の善男子・善女人をして、聞き已つて、如來は我れを知り我れを覺したまふ。と慚愧して、作る所の邪の法を永く休息せしめたまはんことを。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告ぐらく。如來の說く所は、善男子の、我が此の法を聞き、修行して惡を離るる爲めなれば、我れ此の人の爲めに是くの如き法を說くなり。と。爾の時、世尊の此の經を說き已りたまふや、摩訶迦葉・彌帝棣菩薩・文殊師利童子・一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜せり。」

【八】彌帝隸(Maitreya)菩薩。彌勒菩薩に同じ。

る者は、住する者非ず、去非ず來非ず、生非ず滅非ず、垢非ず淨非ず、色非ず非色非ず、貪と盡と非ず、瞋と盡と非ず、癡と盡と非ず、陰・界・入非ず、初非ず中非ず後非ずして、一切の諸法も亦復是くの如くに、如來の身相も亦復是くの如し。此の畫像の如きは、覺非ず作非ずして、一切の諸法も亦復是くの如くに、如來の身相も亦復是くの如し。此の畫像の如きは、見非ず、聞非ず、嗅非ず、嘗非ず、觸非ず、知非ず、出る息非ず入る息非ずして、一切の諸法も亦復是くの如くに、知る者ある無し。此の畫像の如きは、欲界の攝に非ず、色・無色界の攝に非ずして、一切の諸法も亦復是くの如し。此の畫像の如きは、初非ず中非ず後非ず、此非ず彼非ず、行非ず非行非ず、取非ず捨非ず、作非ず、誦非ず、實非ず虛非ず、生死非ず涅槃非ずして、一切の諸法も亦復是くの如くに、如來の身相も亦復是くの如し。と。菩薩は、是くの如くに如來の身を觀じて、結跏趺坐して日夜を經るや、五通を成就し、四無量を具し、無礙辯を得、普光三昧を得て大光明を具し、天眼の人眼に過ぎたるを成就し、此の天眼を以て東方の阿僧祇の佛を見、淨き天耳を得て諸佛世尊の說く所の法を悉く能く聽受したるが、天耳淨きが故に、一一の諸佛の說く所の法をば聽聞し受持するに、相ひ障礙せざりき。迦葉、時に大精進は、勤行精進すること七日を滿足して、智を以て食と爲して世の供を食はざりしが、一切の諸天は華を散じて供養したり。迦葉、時に大精進は、袈裟を被らず、亦佛をも見ず、禁戒をも受けずして、心に但憶念して薩婆若を學びたるなり。迦葉、菩薩は應に如來の身を觀ずるに、觀に非ず非觀に非るべし。迦葉、菩薩は應に是くの如くに如來の畫像を觀ずること、大精進菩薩摩訶薩の如來の像を觀じ、是くの如くに觀じ已つて大智慧を成じ、此の智慧を以て悉く十方の阿僧祇の佛を見、佛の說法を聞きたるが如くなるべし。迦葉、爾の時に、大精進菩薩は山よりして出で來り、村落に至つて人の爲めに法を說きしが、一會の說法に、二萬の衆生は阿耨多羅三藐三菩提に住し、無量阿僧祇の衆生は聲聞・緣覺の功德に住し、父母・親屬は皆阿耨多羅三藐三菩提を退かざ

覺智を成じて　苦の衆生を救濟せんとなれば　三千大千界に　珍寶其の中に滿ちたる　及び諸の上妙の土にも　其の心は貪著せざるなり　汝等愚癡の心にて　作す所の不善の業を　汝當に自ら過を悔ゆべし　菩薩は俗に處らざればなり　と。

迦葉、時に大精進菩薩の父母・眷屬・知識及び諸の婇女は、天神の語を聞きて悉く皆過を悔い、菩薩に告げて言はく。意に隨つて出家して、汝當に飮食して殞絶せしむる勿かるべし。と。迦葉、時に大精進は食はざること七日なりしが、光明暉悅して顏色變ぜず、唯心に正遍知の身を憶念したれば、一切の諸天は華を散じて供養せり。時に大精進は、七日を過し已つて、諸の家業を捨つること涕・唾を棄つるが如くにせり。爾の時に、父母・同友・知識及び諸の婇女の八萬四千は、皆悉く悲泣しつつ隨つて之れを送れり。爾の時に、大精進菩薩は疊に畫ける像を持ちて、深山の、寂靜にして人・禽獸無き間に入り、畫像を開現し、草を取つて座と爲し、畫像の前に在つて結跏趺坐し、身を正しくし念を正しくして如來を觀じ、諦に觀察し已つて、是くの如き念を作さく。如來の是くの如く希有微妙なること、畫像すら尙爾く端嚴・微妙なり。況んや復、如來・正遍知の身をや。と。復是の念を作さく。云何にして佛を觀ぜんか。と。爾の時に、林神は彼の菩薩の心の念ずる所を知り、菩薩に白して言はく。善男子、汝是の念を作せり。云何にして佛を觀ぜんかと。若し佛を觀ぜんと欲せば、當に畫像を觀ずべし。此の畫像の如來に異らざるを觀ずる、是れを觀佛と名け、是くの如くに觀ずる者を、名けて善觀と爲す。と。時に大精進は、是くの如き念を作さく。我れ今云何に此の畫像と如來と等しきことを觀ぜんか。と。復是の念を作さく。如來の像は、覺非ず知非ず。一切の諸法も亦復是くの如くに、覺非ず知非ず。是の像の如きは、但名字のみあつて、一切の諸法も亦復是くの如くに、但名字のみあり。是の名字の如きは、自性空寂にして有つ所無く、如來の身の其の相も是くの如し。此の畫像の如きは、證非ず得非ず果非ずして、證非る者・得非る者・得果非

亦言說をもせざりき。迦葉、大精進菩薩は、是くの如くに默然として第二日を過したれば、爾の時に、父母は母の知識[七]五百人等と、百味の食を持ち、其の所に來り至つて諸の呪術を誦して、其の飡食せんことを望めども、尙顧視だもせず。況んや、復之を食ふことをや。迦葉、時に大精進は、第三日に於て、父の親しく五百の種種の食を持ち、之れを勸めて食せしむるにも、亦復是くの如くに默然として語らず、飮まず食はず、亦顧視だもせず。第四日に於て、五百の同友は、百味の食を持ち、諸の呪術を誦して、己が志に從はしめんとせる時にも、大精進は默然として住し、第五日に於て、爾の時に、父母は悉く寶藏の金・銀・瑠璃・種種の寶物及び諸の婇女八萬四千の上妙に嚴飾せるを出し、將ゐて其の所に至り、父親・母親及び其の同友各五百人は、大精進に勸めて是くの如き言を作さく。汝當に家に在つて此の財寶を以て布施して、自ら福を作すことを恣にし、諸の婇女と共に相ひ娛樂せよ。と。時に大精進は、大衆の中に於て默然として住し、曾て瞻眄せず。第六日に於て、諸の憶想を斷ち、食念を起さずして、但如來・應・正遍知を念じたり。迦葉、爾の時に、父母及び其の知識、八萬四千の諸の妙なる婇女は、同時に悲泣して大精進を禮したるが、時にも大精進は亦顧視せざりき。

迦葉、爾の時に、大精進菩薩の住する所の處に一の宅神あつて、虛空の中に於て大神力を現して、頌を說いて曰はく。

精進の心堅固にして　動し難きこと須彌の如くなるは　出家の心を捨てずして　菩提を得んと爲す故なり　大地は傾け動すべく　火をば水に在つて居くべく　是等の如きは轉ずべくとも
菩薩は動すべからざれば　汝等勤苦して　不善の業を作すこと莫かれ　衆生は慧眼無くして　久遠に生死に處るを　諸の群生を利せんと爲し　是の故に菩提を求め　其の心出離して
必ず無上道を成ぜんと樂ふなり　世間の報の爲めならずして　菩薩の道を行じ　願はくば大

【七】知識。「知人」の意なり。別に又「學者」の意に使用せらるる事も多し。

を解かば、得る所の福德は無量無邊なり。迦葉、云何に如來の身を觀ずるか。迦葉、若し菩薩は如來を觀ぜんと欲せば、當に大精進なる菩薩を學ぶべし。迦葉、乃往に、古昔の無數阿僧祇劫に、佛世尊あつて、號して光明如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・可化丈夫調御所・天人師・佛婆伽婆と曰へり。迦葉、光明如來の般涅槃の後に、一の菩薩の大精進と名くるあり。婆羅門種にして、端正無比なりき。迦葉、光明如來の正法の中には、諸の比丘の少欲知足なるあつて、如法の行に住したり。迦葉、彼の諸の比丘は、皆悉く如來の形像を造立せしが、爾の時に、一の比丘あつて、白疊の上に於て如來の像を畫き、衆彩の莊嚴悉く皆具足せるをば、持ちて大精進菩薩の所に至れり。爾の時に、大精進菩薩は此の畫像を見て、心大に歡喜して、是くの如き言を作さく。如來の形像の妙好なること乃ち爾り。況んや復、如來・正遍知の身をや。願はくば、我れ來世に是くの如き妙色の身を成ずるを得んことを。と。爾の時に、大精進菩薩は是くの如き念を作さく。我れ今居家に住在する能はず。若し家に在らば、是くの如き身を成ずること能はじ。と。迦葉、爾の時に、大精進菩薩は年始めて十六なりしが、諸根具足し、父母の所に至り、頭面にて敬禮して父母に白して言はく。我れ今如來の正法に於て出家して、道を學ばんと欲すれば、願はくば、隨喜を爲したまはんことを。と。父母は答へて言はく。是の說を作すこと莫かれ。何を以ての故ぞ。我れ今年老いて唯汝一子のみなれば、汝若し出家せば、我等は當に死すべければなり。と。大精進の言はく。我れ當に方便して父母をして存せしめて、我れは出家を得べし。と。父母は問うて言はく。何の業を作さんと欲するか。と。子は父母に白さく。我れ今日より、諸味を食はず、床坐に昇らず、酥油を食はず、漿水を飲まず、善の若き惡の若きを口に言說せずして、乃ち出家を得るに至らん。と。迦葉、大精進菩薩は是くの如くに誓ひ已り、默然として住し、是くの如くに默然として一日食はず。爾の時に父母は、諸の呪術を誦し、百味の食を持ちて之れに授與したれども、亦食ふことを肯ぜず、

【六】可化丈夫調御師とは普通調御丈夫と譯したるも原語の上よりかくは譯したるなり、卽ち Puruṣadamya-sārathiḥ の puruṣadamya を可化丈夫、sārathiḥ を調御師としたるなり。

後の五百歳に於て、諸の比丘あつて、身を修めず、心を修めず、戒を修めず、慧を修めずして、疊上・墻壁の下に於て如來の像を造り、之れに因つて自活し、此の業の故を以て、自ら高りて人を慢らん。と。爾の時に、迦葉は佛に白して言はく。世尊、[五]波斯匿王の、如來の像を造れることは、福を得ること多きや、不や。と。佛、迦葉に言はく。福を得ること甚だ多し。波斯匿王は、如來の像を造り無價の衣を施して、衣服・飯食の報を求めざれど、迦葉、彼の愚癡の人は、活命の爲めの故に形像を造立するなり。迦葉、畜生を賣る若きすら、猶尙不善なり。況んや彼の癡人は、如來の像を作り、白衣の前にして之れを衒賣し、以て自ら活命することをや。迦葉、譬へば、人あつて、幼小無知にて、甘露を捨棄して毒藥を飲むが如し。迦葉、彼の愚癡の人も亦復是くの如くに、如來の像を造り、資生の爲めの故にして便ち之れを賣る。是れを名けて毒と爲すなり。迦葉、言ふ所の毒とは正法の中に於ける貪、是れ其の毒なり。迦葉、彼の愚癡の人は、貪心の故を以てして瞋恚を起し、遞に相ひ鬪諍し互に相ひ誹謗して、各我れは供養を行ずと言ひ、彼の諍論に因つて地獄に墮するなり。迦葉、譬へば、人あつて、巧なる方便無くして敵に入つて戰ふ時に、持つ所の刀劍にて、反つて自ら傷くるが如し。迦葉、愚癡の人も亦復是くの如し。方便の故無くして、法に因る故にて地獄に墮するなり。迦葉、若し善男子、善女人あつて、七寶を以て如來の塔を造つて莊嚴し、一一の寶塔の高廣・嚴好なるを成就すること須彌山の如くにして、恒沙の諸佛世界に遍滿すること、譬へば甘蔗・竹・葦の如くならんに、迦葉、汝が意に於て云何。彼の善男子、善女人の福を得ること多きや、不や。迦葉、佛に白して言はく。世尊、如來の像を造くること四指の如き者も、福を得ること無量なり。況んや復、像を造ること須彌山の如くなるをや、得る所の功德は思量すべからず。佛、迦葉に告ぐらく。若し菩薩あつて、內に佛身を觀じて深法忍を得ば、功德は彼れより勝ること無量無邊なり。迦葉、若し復人あつて、淨戒に住して、四句の偈を以て他人の爲めに說いて其の義趣

【五】波斯匿(Prasenajit)王。舍衞國の王にして、和悅又は月光と呼び、釋迦佛と同日に生まる。憍薩羅國の勝光王と曰ふ者是れなり。其の第二の夫人末利の娘は、有名なる勝鬘夫人なり。

に與へて著せしむるに、彼れ見て貪を生じ卽便に之れを著て、若しは七日に至り若しは八日に至るに、其の身熾然として猶火の聚の如くなる如し。彼の呪し已つて之れを取つて人に與ふるに、彼の人見已つて、便ち貪を生じて著るが如くに、比丘も亦爾り。好き衣服を見、受け取つて著、若しは七日に至り若しは八日に至り、若しは舍內に在り若しは巷中に在り若しは林中に在るに、彼れの著る所の衣は、熾然として火の如くに、人の善根を燒くなり。迦葉、汝が意に於て云何。彼れの著る袈裟に利益ありや、不や。迦葉、佛に白して言はく。世尊、益する所無きなり。佛、迦葉に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。我が袈裟は、戒・定・慧・解脫・解脫知見たる無量阿僧祇の善根にて集めし所なれば、迦葉、當に來るべき世に於て、愚癡の人あつて、聖人の衣を著て、沙門に似せ像りて村邑の中に入るに、信心の婆羅門・長者・居士あつて、法服を被るを見て沙門なりと謂ひ、皆共に尊重し供養し讃嘆せん。彼の愚癡の人は、袈裟に因る故にて供養を得て、便ち歡喜を生ずれども、身壞れ命終るや地獄に墮し、地獄に生じ已るや、大熱鐵の銕をば以て衣服と爲し、鐵丸を呑み噉ひ、洋沸せる鐵を飲み、熱鐵の牀に坐するなり。迦葉、汝袈裟の威德の是くの如くにして、彼の愚癡の人は、袈裟を著て、受樂・放逸にして自ら惡業を作り、身壞れ命終つて地獄に墮することを觀ぜよ。迦葉、我れ常に說いて言ふ。寧ろ燒熱せる鐵銕を以て衣と爲すとも、破戒の身を以てして袈裟を著ざれ。寧ろ熱鐵を呑むとも、破戒の身を以て人の信施を食はざれ。と。迦葉、汝破戒の人は他の信施を食はば、是くの如き過あることを觀ぜよ。是の故に、汝等、應當に淸淨なる戒法を修學すべきなり。迦葉、汝が意に於て云何。天の若き、龍の若き、夜叉の若き、乾闥婆の如き、阿修羅の若き、迦樓羅の若き、緊那羅の若き、摩睺羅伽の若き、人の若き、非人の若きは、如來の色身の像を作し能ふや、不や。迦葉、佛に白して言はく。不なり、世尊の如來の色像は不可思議にして、色像無き故なり。是の故に、此等は皆作す能はず。佛、迦葉に告ぐらく。當に來るべき世の

養することを。涅槃の爲めにせず、離欲の爲めにせずして供養を修すれば、自ら禁戒を犯して愚癡・無智なることを。如來の舍利は、戒・定・慧・解脫・解脫知見を具せるの熏修する所なるを、活命の爲めの故に供養尊重して貪・瞋・癡を具することを。佛・如來・應・正遍知の、貪・瞋・癡を離るることに於て有ちたまふ所の舍利をば、活命の爲めの故にして供養と興せば、自身は慳貪・嫉妬・瞋恚・懈怠・亂心・愚癡を具足することを。若しくば、大施主の正しく一心に住せるにも、活命の故に化することを爲して如來の舍利を供養せしむることを。迦葉、我れ初始めて發心せる諸の善男子・善女人等を教化せん爲めに、神通力を以て此の舍利を留め、供養する者をして、人・天の樂を受けて未來の因と爲し、乃ち涅槃に至らしめんとせるに、彼れ愚癡の人は、我が法中に於て出家を得たりと雖も我が法を解せず、出家の行を捨てて但塔廟・舍利を供養し、自活の爲めの故に、衣鉢を得んが爲めの故に、利養の爲めの故に、名聞の爲めの故に、此の事を爲さん故に舍利を供養するなり。何等を名けて比丘の業と爲すか。迦葉、上に說く所の沙門の業の如きに、則ち二種あり。一には、禪を修するなり。二には、習誦するなり。是くの如く說く者は、道に入ることを爲させん故にして、究竟の說には非ず。迦葉、若し作す業に能く業を盡す有らば、沙門の業と名く。作無く、誦無く、禪無く、作無く無作無く、念無く不念無く、盡無く、生無く、三脫門を證して三界に住せず、來無く去無きは、是れ沙門の業なり。彼れ衆生等は、斯の正業を離れて更に餘の業を習へども、彼の福業は、在家の人を化せんが爲めにして、是くの如くにして在家は如來の敎に順ぜば、當に阿那含果を得べきも、彼れ愚人の輩は、我が法中に於て出家を行じながら、尙隨順の法を修行せず。況んや復、能く得ることをや。得るある若き者は、是の處あること無し。迦葉、當に來るべき世の後の五百歲に於ては、相似の沙門あつて、衣服・形貌は沙門に似せ像れども、戒は相ひ似ず、定は相ひ似ず、慧は相ひ似ざるなり。迦葉、譬へば、人あつて、善く醫方及び諸の呪術を知り、即ち呪術を以て一袈裟を呪して、人

見・斷見・常見・我見・我所見・有見・無見を以て如來を供養せず。眞の如來の身をば、無相の相と名くれば、相を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、無願の相と名くれば、願を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、有無き相と名くれば、有を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、不動の相と名くれば、動の相として供養を修すべからず。眞の如來の身をば無行の相と名くれば、行を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、離貪の相と名くれば、貪を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、離瞋の相と名くれば、瞋を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、離癡の相と名くれば、癡を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身には、戒・定・慧・解脱・解脱知見を具すれば、破戒・亂心・愚癡を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身は、慈・悲・喜・捨あれば、瞋心・惱心・妬心・散心を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身には、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を具すれば、慳・破戒・瞋恚・懈怠・亂・癡を以てして供養を修すべからざるなり。と。迦葉、達摩・善法は、大衆の中に於て此の法を說ける時に、四百二十萬の衆生は無生法忍を得、八萬四千の衆生は清淨智なる阿那含果を得、二百三十萬の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。迦葉、汝、達摩・善法の二比丘等の是くの如き淨心を觀ぜよ。迦葉、汝、應に彼れ正士の甚深の忍及び巧方便を學ぶべし。迦葉、彼の二比丘の、大衆の中に於て此の法を說ける時に、諸の比丘は此の法を聞き已つて、皆深忍に住し、悉く少欲知足の行を行じて、舍利及び佛の塔廟を供養せざりき。何を以ての故ぞ。彼の諸の比丘は、悉く深法を樂みたればなり。迦葉、彼の七日の後に、一切の佛塔は悉く皆隱沒し、及び諸の舍利の、器中に在る所のものも、亦悉く隱沒したり。迦葉、汝應に是くの如くに、彼の正士の甚深の忍を學ぶべし。と。

佛、迦葉に告ぐらく。當に知るべし。末世の後の五百歲に、諸の菩薩及び諸の比丘あつて、身を修めず、心を修めず、戒を修めず、慧を修めずして、活命の爲めの故に、佛の塔及び佛の舍利を供

や、供養することをや。若し佛を供養せば、當に自身を供養すべし。諸比丘の言はく。云何なれば、自身を供養するか。二比丘は言はく。應に如來・應・正遍知の自身を供養したまへるが如くなるべく、一切衆生の供養する所も、佛の學びたまへる所の如く、應に是くの如くに學ぶ——禁戒を護持し、諸の善法を集め、諸法を思惟すれども法の相を取ること莫く、——べし。若し能く是くの如くに自をば供養せば、當に天・人に供養せらるるを得べければ、若し佛の舍利を供養せんと欲せば、當に自をば供養すること、佛如來の諸の功德を具して、舍利に供養を得たまへるが如くなるべし。若し能く是くの如き功德を成就せば、佛を供養すと名く。想を起さざる相を、佛を供養すと名く。若しは多若しは少と分別を生ぜざるを、佛を供養すと名く。後世に去るに非ず今世に來るに非ず、此岸非ず彼岸非ず、常非ず斷非ず、取非ず捨非ざる、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。增非ず減非ず、生非ず滅非ず、盡非ず不盡非ざる、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。心非ず心數の法非ず、憶想非ず、我非ず、取非ず、受非ず、諍論非ず不諍論非ず、毀非ず讃非ず、二非ず、入非ざる、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。亦有爲も非ず、亦無爲も非ざる、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。身に作す所無く、口に作す所無く、意に作す所無く、身・口・意に於て不可得を求むる、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。過去の想無く、未來・現在の想も得可からずして、依る無く著する無く、求むる所無き想をも亦分別せざる、是れを則ち名けて如來を供養すと名く。佛の想無く、法の想無く、僧の想無く、人無く、自無く、他の想無き、是れを則ち名けて如來を供養すと曰ふ。眞の如來の身をば、無生の相と名くれば、生を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、無作の相と名くれば、作の相を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、無二の相と名くれば、應に二相として供養を修すべからず。眞の如來の身をば、無漏の相と名くれば、有漏を以てして供養を修すべからず。眞の如來の身をば、名けて空の相と曰へば、身見・命

迦葉、爾の時、諸天及び諸比丘・百千の大衆の此の語を説ける時に、達摩・善法の二比丘は衆人に問うて言はく。汝が意に於て云何。云何なる供養かを以て欲火を離れ、悉く出家するを得たり。後の諸の衆生の既に出家し已るや、種植を須ひずして、其の地に自然に諸の粳米を生じ、諸樹に自然に諸の衣服を生じ、一切の諸天は供侍し給使したり。迦葉、爾の時に達摩・善法の二比丘は、勇猛に精進して、其の六十三億歳の中に於て坐せず臥さずして、但勤めて精進して薩婆若を求め、薩婆若を念じたり。六十三億歳に於て勤精進し已るや、遍至三昧を得、坐する所の地を金剛處――其の地は皆是れ金剛にて成ぜられたれば、――と名けて、十方の一切の諸佛の説法を悉く聞きて受持し、聞き已つて復能く他の爲めに解説せり。迦葉、時に四天下の一切の衆生にして若し聲聞乘を修學する者あらば、一の衆生として凡身にて命終する者無く、極めて懈怠なる者も阿那含を得、此より命終して淨居天に生れて、彼と共に行を同うし、緣覺を求むる者は、此より命終して他方の無佛の處に生ずるに當り、大種姓に生れて諸根具足し、過去世の善根力の故を以て、欲火を離れて出家を行じ、七日の後緣覺道を成じて、無量無邊の衆生を利益して般涅槃に入り、菩薩乘の者は、五通を成就し、[四]四無量・無礙の是れ眞に如來を供養するものにして、何事の故を以て、如來は舍利に而も供養を得たまふか。と。諸比丘の言はく。戒・定・智慧・解脱・解脱知見を修めたまへる故に、舍利は供養を得るなり。二比丘は言はく。戒・定・智慧・解脱・解脱知見を修めたまへるならば、是れ眞の供養は、舍利に供するには非るなり。諸比丘の言はく。是くの如し、是くの如し。汝の言ふ所の如しとして、云何なるは戒の相にして、禪定・智慧・解脱・解脱知見は復何等の相なるか。達摩・善法の二比丘は言はく。無作の相は是れ戒の相にして、乃至、解脱知見の無作の相は、是れ知見の相なり。と。迦葉、時に二比丘は衆人に語つて言はく。意に於て云何。無作は無作を供養し能ふや、不や。諸比丘の言はく。不なり。達摩・善法の二比丘は言はく。眞の供養とは、佛の想無く、佛を見る無し。何に況ん

【四】四無量無礙の辯才。「四無量心」と「四無礙辯」を曰ふ者なるべし。

も終に無上菩提を捨てじ。と。是の念を作し已つて、出家せんと發心し、十五日に於て四天下に遊び、此の偈を說いて言はく。

我が父及び親屬は　皆悉く已に出家し　無量億の衆生も法の爲めに亦出家せり　我れも今出家を樂ひて　五欲に住することを樂まず　一心に出家を求めて　導師の所に詣らんと欲す
若し出家して　諸の欲火を離れんと發心する者は　應に速に我れに隨つて去くべし　難を離ることは甚だ得難ければなり　出家の心を發さず　欲火に遠離せず　安心して居家に在らば
安んぞ實の法に住せんや　と。

迦葉、時に、彼の太子の此の偈を說ける時に、四天下の中に、一の衆生として在家を樂む者無く、皆悉く發心して出家を願求せり。迦葉、時に妙華如來は、諸の衆生の心の、信淸淨に出家を求むるを知り已るや、妙華如來は、四天下の一切の城邑・村落に於て、悉く佛及び比丘僧を作化したれば、迦葉、時に四天下の一切衆生は、一人の在家に住する者ある無く、淨信心辯才を具して、陀羅尼を得たり。迦葉、異念を作す莫かれ。爾の時の尼彌大王は、豈異人ならんか。と。則ち我が身是れなり。時の太子は、今の彌勒菩薩是れなり。迦葉、異見を作す莫かれ。何を以ての故ぞ。達摩童子は、今の文殊師利是れなり。善法童子は虛空藏菩薩是れなればなり。迦葉、汝彼の佛國土の淸淨なることは、是くの如き善根の衆生の生ぜる所の處なることを觀ぜよ。と。

爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、妙華如來の壽命は幾時なりしか。佛、迦葉に告ぐらく。妙華如來の壽命は八劫なりき。迦葉、妙華、如來の般涅槃の後に、正法世に住すること一劫を滿足し、一切の諸天は舍利を供養して、在家の人無かりき。迦葉、時に二比丘は、少欲知足にして、舍利に供ぜず佛塔を禮せざりしが、迦葉、爾の時に、諸天・新學の比丘・百千の大衆は、各相ひ謂うて言はく。此の二比丘は、邪見にして佛舍利を信ぜず、供養を興さず、佛塔を禮せず。と。

ば　如來の讃ずる所なり　大智慧を成就し　諸の繋縛を遠離し　一切の諸著を離れて　乃ち無上道を證せんには　速に寂靜の處に住せよ　諸の欲愛を斷除し　一切の毒熾の心を　悉く滅して餘ある無く　諸佛如來の　實の如くに諸法を知りたまへるを學ばんには　速に在家を遠離して　阿蘭若の法に住せよ　若し佛道を求め　遠離の行を修せんと欲せば　應に阿蘭若を學ぶべく　應に在家を樂むべからず　此れは是れ諸佛の境にして　聖人の住する所の處なれば　能く此の道に住する者は　則ち能く菩提を得ん　欲の等の、衆生を惱すを　若し遠離せんと求むる者は　應に在家の法を離れて　阿蘭若を修習すべし　甘露の法を證し　無上の法輪を轉じて　諸の魔怨を摧伏せんと欲せば　當に阿蘭若を習ふべし　と。

迦葉、爾の時に達摩・善法の二童子は、此の頌を說き已つて城よりして出で、往いて妙華如來の住する所の處に詣り、到り已るや頭面にて足を禮し、右に遶ること三帀して、白して言はく。世尊、我等、今は如來の所に於て出家せんことを欲求す。唯願はくば、世尊、哀愍して聽許し、出家を得しめたまはんことを。と。迦葉、爾の時に妙華如來は、二童子の信心淸淨にして出家の法を求むるを知り、是の時如來は、卽、出家して比丘の法に住することを聽したり。迦葉、爾の時に大王は、二童子の出家を得たるを聞き已るや、卽、太子を以て王位を紹がしめ、王は九百九十九の子、八萬四千の夫人、五千の大臣及び諸の人民と與に、淨信心を以て欲火を離れて、家を捨てて出家せんとて、一切倶に往いて妙華佛に詣り、到り已るや頂にて佛足を禮して、妙華佛に白して言はく。世尊、我等も出家せんことを欲求す。願はくば、佛、聽許して出家を得しめたまはんことを。と。迦葉、時に妙華佛は、諸の大衆の心の信淸淨なるを知り、悉く、出家して比丘の法に住することを聽したり。迦葉、爾の時に大王の第一の太子は、位に登ること七日にして、內に自ら思惟すらく。我れ我れも終に薩婆若心を捨てじ。何ぞ是の王位、寶財の如きを用つて、欲の爲めに縛られんや。我れ

迦葉、爾の時、妙華如來の二童子の爲めに此の法を說ける時に、衆中の十千の衆生は無生法忍を得、尼彌大王幷に千子・五千の大臣に及ぶまで、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

佛、迦葉に告ぐらく。爾の時に、妙華如來は、飯食既に訖つて鉢を澡洗し、已にして大衆の中に於て大王に告げて言はく。尼彌大王、我れ今法を說かん。と。王及び大衆は、佛の說法を聞かんとて踊躍し歡喜せり。迦葉、爾の時に、達摩・善法の二童子は、佛の說法を聞きて、淨信心を以て欲火を離れ、出家を求めんと欲し、城よりして出で來つて佛所に至りしが、佛所に至らんとし、已にして頌を說いて曰はく。

一切諸の如來の　出家の法を讃歎したまふは　在家には垢穢多くして　白淨の法を壞滅すればなり　不善の法を增長し　善法を毀滅して　在家には過失多けれども　出家は染汚を離れたり　設使ひ百億劫　欲を受くとも厭き足る無き　在家は死滅の如くにして　海の衆流を受けて　厭き足ることある無きが如く　凡夫も亦是くの如くに　欲を受けて厭き足ること無し　火の乾草を燒きて　厭き足る時無きが如く　凡夫も亦是くの如くに　欲を受けて厭き足ること無し　貪欲の網に縛られて　世間を滅壞する　是の故に應に縛を離るべく　出家を發さん爲めの故に　在家は衆過を具へて　無上道を得ざれども　出家して遠離を修せば　爾く乃ち菩提を得ん　過去の諸の如來は　已に涅槃に入りたまへども　阿蘭若の法に住せば　大菩提を獲得せん　是の故に諸佛を學んで　阿蘭若に趣向し　愛を捨て居家を離れば　然る後に安隱を得ん　一切の三千界に　珍寶其の中に滿ちたるに　此の珍寶の聚を以て　在家して諸佛に施すとも　無惱の心を以て　在家の過を知り　諸佛如來の　出家して智慧を求めたまへるを學び　既に出家を求め已るや　諸の欲火を遠離せんと　足を擧げて七步を行くことの勝れる若きは　三千の施を以てせる　三千の功德も　此の一分に如かざれば　是の故に出家の者を

復此の想を觀ずるに　此の想何處に生ずる　是の故に無想なりと知ると說きたまふ　佛の功德の　第一の法を演說したまへるを讚歎し　其の心異念ならずして　正法を聽受せん　說く名字は盡くる無しとも　自性の體は成ぜざれば、境界の實無きことを觀ぜば　其の心は則ち解脫せん　若し是くの如き想　我れ法を說く者を爲すを起さば　彼れは則ち魔に縛せられたるにて　法の相を知らざるなり　若し菩提を得　及び聲聞者を求め　緣覺の菩提を求めんと欲せば、當に此の法を修學すべし　一つの解脫に於て說く　智慧すら邊量無ければ　下劣の願を作す勿く　當に上の菩提を願ふべし　若し是くの如き身　相好を自ら莊嚴すること　佛の金色の身の如くなるを求めば　當に上の菩提を求むべし　作つて一切の法を生ぜんとするも　作る者は得可からず　諸法は緣從り生じて　自性の自性たるもの無ければなり　と。

迦葉、時に二童子の、虛空の中に在つて此の偈を說ける時に、尼彌大王は城よりして出で、及び諸の地神・虛空の諸神も皆悉く來集せり。爾の時に、衆中の八萬四千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、阿僧祇の衆生は善根を種ゑたり。迦葉、爾の時に達摩・善法の二童子は、等しく空中より下つて妙華如來の所に詣り、白して言はく。世尊、我等は佛に歸依し法に歸依し僧に歸依して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、比丘の形を以て菩薩の道を行ぜん。世尊、眞發心の者は一切法の無生なるを信ず。世尊、眞發心の者は諸法に著せず。何を以ての故ぞ。世尊、若し著するあらば則ち[三]善法は生ぜざればなり。是の故に、世尊は、著心を離れば彼の無生を得。と說きたまふ。世尊、此の無生も亦應に是れ無生と說くべからず。何を以ての故ぞ。言說を有つ者は則ち生滅あれど、若し淨智を具せば則ち生滅無く、生滅無き處は是れ畢竟の盡なればなり。是の故に、世尊、平等の際を以て阿耨多羅三藐三菩提の心を發して法を念ぜずば、亦法の得も無く亦不得も無きなり。是くの如くならば、平等を得つつ平等を得る無し。何を以ての故ぞ。一切の諸法は本性淨なるが故なり。と。

【三】善法。善法の「善」は、大正本には無けれども、是れ有るは、意義通じ易きに出り、宮內省本に據つて補ひたり。

根の功德の勝れたること、前の善根は、百分して一にも及ばず、千分して一にも及ばず、百千分して一にも及ばず、億分して一にも及ばず、百億分して一にも及ばず、千億分して一にも及ばず、百千億分して一にも及ばず、百千那由他億分して一にも及ばず、乃至、阿僧祇分しても亦一にも及ばざるなり。と。迦葉、爾の時に、妙華如來は二童子に告ぐらく。善男子、菩薩は四法を具足せば、如來の無上の行を成ずることを得。何等を四と爲す。一には、無上の處を行ずるなり。二には、無上の法を說くなり。三には、無上の物を施すなり。四には、無上の法を信ずるなり。善男子、是れを四法と名け、菩薩にして此の四法を成就せば、如來の無上の行を成ずることを得ん。と。

迦葉、時に、妙華如來の、二童子の爲めに是の法を說ける時に、彼の二童子は此の法を聞き已るや、踊つて空中に在ること高さ七多羅樹にして、同聲にて佛を讃ずらく。

如來は諸行を知りたまひて　衆生に施を行じつつ　施に著せずして　此に無上の施を施し
能く無上の忍　此の中には我　衆生命及び人ある無きを成ぜんとして　希有に大精進せよと敎へたまふ　是の法　甚深の忍を成就し　及び無上の行を得る如くんば　無上の菩提を得て
永く諸の煩惱を滅し　大智慧淸淨にして　更に後有を受けじと演說したまふ　遠離の行に於て　阿蘭若に住して　空解脫を修しつつ　亦分別をも生ぜざらしめ　常に布施を勸行して　分別を生ぜざるは　此れは是れ無垢の際にして　諸の名字を遠離すと說きたまふ　淸淨の尸羅にて寂滅の處を行ぜ令むるは　此れは是れ第一の戒にして　寂滅の處を覺知しつつ　常に忍を修行して　衆生を分別せざるは　此れは是れ淸淨の忍なれば　一切の分別を離れて　堅固の精進を修せば　一切の有爲を離ると說きたまふ　佛は此の精進にて　能く遠離の法を成じ　一切の事を焚燒し　諸の有無を斷ち　此の無分別の禪にて　諸の煩惱を起さずして　此れに非ず亦彼れにも非ず　中間も亦住せず　此の第一の智慧にて　三世を遠離し　寂滅の想を修習すれど

爾の時に、摩訶迦葉及び諸の大衆は、一時に同聲にて佛に白して言はく。世尊、我等も彼の人の、發心して深忍を成就し、諸法の空なるを信じ、遠離・寂滅・自性清淨なるを隨喜す。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告げて言はく。迦葉、爾の時に達摩・善法の二童子は、妙華如來に白して言はく。世尊、菩薩は何等の法を具せば、施して報を望まず、嫉妬を生ぜず、心慳悋ならず、貪著を生ぜず、人の施を行ふを見て、心に希望せずして、如來の無上の行を成就し、深法忍を得て無上の智を成ずるか。と。迦葉、爾の時に、妙華如來は達摩・善法の二童子に告げて言はく。善男子、菩薩は四法を具足せば、施して報を望まず、嫉妬せず、慳悋ならず、貪を生ぜず、人の施を見て希望せずして、如來の無上の行を成就し、甚深の忍を得て無上の智を見さん。何等を四と爲す。一には、諸法の空なるを信ずるなり。二には、遠離するなり。三には、深忍なるなり。四には、正念なるなり。善男子、菩薩にして此の四法を具せば、施して報を望まず、心に嫉妬せず、慳悋ならず、貪を生ぜず、人の施を見て希望せずして、如來の無上の行を成就し、深忍を成就して無上の智を具せん。善男子、復、四法あつて、若し菩薩にして此の四法を具せば、施して報を望まず、心に嫉妬せず、慳悋ならず、貪を生ぜず、人の施を見て希望せずして、如來の無上の行を成就し、深忍を成就して無上の智を滿さん。何等を四と爲す。善男子、菩薩は多聞を求め、多聞を得已つて城邑・聚落に遊んで法を說きて希望する所無く、乃至、一言の善讃をも受けずして、心に貪る所無きなり。諸佛は、一切の施の中にて諸法は第一なりと說かるれば、第一の施に住し其の心歡喜して、世間の財物の布施を求めざるなり。何を以ての故ぞ。善男子、十方の無數阿僧祇の諸佛世界の諸佛如來及び比丘僧は、世間の資生の具を求めざればなり。若く菩薩あつて、清淨の戒に住して正法を修し、大悲の心を具して利養を求めざるは、一切諸佛の憶念する所なれども、若し能く一四句の偈――說偈の文字に皆自性空にして、一切の諸法も亦復是くの如くに皆自性空なる、――を說くあらば、此の善男子の善

らんに、是くの如き三千大千世界の一切の衆生の有つ所の福德も、菩薩の、遠離を修行して淨心に住し、正念と相應じて、諸法の空にして來無く去無きを解する、是くの如き少忍の功德の勝れるに如かずして、前の功德は、百分して一にも及ばず、千分して一にも及ばず、億分して一にも及ばず、百億分して一にも及ばず、千億分して一にも及ばず、百千億分して一にも及ばず、百千那由他億分して一にも及ばず、乃至、算數も其の一にも及ばざるなり。善男子、恒河沙の等の一切の世界の有らゆる衆生の一一の衆生にして、悉く福德を作ること尼彌王の如くにして、彼の諸の衆生の作る所の福德は、恒河沙劫に至るまで常に福德を修する如くんば、善男子、意に於て云何。彼の善男子は福を得ること多きや、不や。と。迦葉、爾の時に、善慧菩薩は妙華如來に白して言はく。希有なり、世尊。如來の說きたまふ喩は思議す可らずして、此の善根の如きも思議す可らず。と。迦葉、爾の時に妙華如來は善慧菩薩に告ぐらく。善男子、我れ今汝に告げん。智慧人あつて深忍を成就せば、能く此の語を信ぜん。彼の一切衆生の集むる所の善根は、此の二童子の、淨心を以ての故に、如來の足を禮せるの勝れるに如かずして、前の一切衆生の善根は、百分して一にも及ばず、千分して一にも及ばず、百千分して一にも及ばず、億分して一にも及ばず、百億分して一にも及ばず、千億分して一にも及ばず、百千億分して一にも及ばず、百千億那由他分にして一にも及ばず、乃至、算數・譬喩も及ぶ能はざる所なり。といふことを。と。迦葉、爾の時に妙華如來の大衆の中の八萬四千の比丘は、同聲にて發言すらく。世尊、我等は彼の人の功德を隨喜す。深法忍を成就して諸法の空なるに信じ、心に遠離を樂しみて阿蘭若に趣き、足を擧ぐること七歩にして阿耨多羅三藐三菩提の心を發して智慧を成就せることをば、我等は隨喜す。と。迦葉、爾の時に、妙華如來は諸の比丘を讃ずらく。善い哉、善い哉、諸善男子。汝等、此の隨喜の業の不思議の善根を以て、當に恒河沙の等の轉輪聖王と作り、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし。と。

如き念を作さく。菩薩の神力は甚だ希有と爲す。未だ一切智を得ざる神力すら、乃ち爾く大聲聞の神力にても動かしむること能はず。況んや佛道を成ぜるをや。是の故に、我等應に菩薩の道を行ずべく、願はくは、如來の無上の智を證せんことを。と。迦葉、爾の時に、四百二十萬の衆生は是の念を作し已つて、無上菩提の心に於て堅く住することを得たり。迦葉、爾の時に、彼の衆に一の菩薩の名けて、善慧と曰へるあつて、大衆の中に在りしが、座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ佛足を頂禮して、妙華如來に白して言はく。世尊、唯願はくは、世尊の、二童子を起して、彼れの問ふ所の如きを、願はくは、佛、解說したまはんことを。と。佛、迦葉に告ぐらく。爾の時に、妙華如來は虛空の中より大音聲を出せるに、其の聲遍滿して乃ち十方恒河沙の等の諸佛の世界に至り、聲の至る處の世界は地皆六種に震動し、大光明を放てるに遍く十方を照せり。迦葉、時に二童子は此の聲を聞き已るや、地よりして起ちしが、迦葉、童子の起てる時に、此の三千大千世界に於ける人・天の妓樂は、鼓たざるに自ら鳴り、虛空の中に於て衆の妙華を雨せり。迦葉、時に二童子は、地より起ち已つて如來の所に至り、右に遶ること三匝して佛足を頂禮し、合掌恭敬して如來を瞻仰せり。迦葉、爾の時に、妙華如來は善慧菩薩に告げて言はく。善男子、此の二童子は我が足を禮し已つて、是くの如き問を作せり。世尊、頗は布施の功德善根にして、此の尼彌大王の功德善根に勝れる者ありや。と。此の二童子は我が足を禮し已り、問を發して住せるなり。と。迦葉、爾の時に、善慧菩薩は妙華如來に白して言はく。世尊、願はくは、佛の、二童子の問を解說したまはんことを。諸の天・人をして、安樂を得しめん故に。と。爾の時に、妙華如來は善慧菩薩に告ぐらく。善男子、汝今諦に聽け。當に汝が爲めに說かん。善男子、尼彌國王の作す所の功德は、若し菩薩あつて、阿蘭若に住して遠離の行を行じ、少しく諸法を知つて無生忍を得ば、功德は彼れに勝ること無量無邊なり。善男子、若し三千大千世界の一切の衆生の、一一の衆生の作る所の功德にして尼彌王の如くな

禮せる時に、大千世界は悉く皆震動せり。迦葉、爾の時に、妙華如來の侍者の弟子に、通達法と名けしが、座よりして起ち佛足を頂禮して、佛に白して言はく。世尊、何の因緣の故にて大地は震動し、何の因緣を以て、此の二王子は佛を禮して住するか。と。爾の時に、妙華如來は通達法に告ぐらく。善男子、何ぞ此の問を用ふるか。若し佛如來は、此の王子の淨心・深忍・大悲の心にて如來の足を禮するを說かば、一切の天・人は皆當に迷沒すべければなり。と。迦葉、爾の時に、妙華如來は一の聖聞の、神足の弟子の那羅延に告げて言はく。善男子、汝、神力を示して二童子を起せ。と。迦葉、爾の時に、那羅延比丘は座よりして起ち、卽右手を以て一童子を捉へ、復左手を以て一童子を捉へ、扶けて起たしめんと欲して動す能はず。時に、那羅延は大神通を盡し、二童子を扶けて其れをして起たしめんと欲すれども、彼れを動す能はざること、一毛を分つて千萬分と爲したる如きにも、一分をも動す能はず。迦葉、爾の時に、三千大千世界の地は皆震動し、山河・石壁も悉く亦大に動けども、而も彼の二童子を動す能はず。迦葉、爾の時に、那羅延は、妙華如來の威神力の故を以て、下方の恒河沙の等の諸佛の世界をして悉く皆震動せしめたれども、而も亦彼の二童子の毛の一分をも動かさざりき。迦葉、爾の時に、那羅延比丘は妙華佛を禮して白して言はく。世尊、我れ將ど神通力を失はざるか。何を以ての故ぞ。世尊、此の二童子は、生れてより來未だ久しからずして、佛前に在つて頭面を地に著けたるのみなるに、我れ神力を盡して起たしむること能はざればなり。と。爾の時に、妙華如來は那羅延比丘に告げて言はく。善男子、汝は通を失はざれども、善男子、菩薩の境界は不可思議にして、一切の聲聞・緣覺の動す能はず思量する能はざる所なり。善男子、三千大千世界に滿ちたる一切の衆生は、大神力を具すること汝の如くに異らずして、億劫に至る若きにも、此の二童子を動して起すこと能はざるなり。と。迦葉、爾の時、妙華如來の此の語を說ける時に、衆中の四百二十萬の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、彼の諸の衆生は是くの

を畏れ、衆生を利せんが爲めに、發心して阿蘭若處に向ひ、足を擧ぐること七歩せんに、前の功德に勝ること無量無邊なり。迦葉、意に於て云何。〔二〕如來は衆生を化せん故に、此の說を作すや。迦葉、此の見を作す莫かれ。如來は實說するなり。所以は何ぞ。如來は現に見て、明了に知れる故なり。と。

佛、迦葉に告ぐらく。過去の無量無邊・不可思議・無數阿僧祇劫に、爾の時に佛の、妙華如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛婆伽婆と號するあつて、其の劫をも亦妙華と名けたり。迦葉、妙華如來に九十六億百千の聲聞の大衆ありき。爾の時に、轉輪聖王の、名けて尼彌と曰へるあつて、法の如くに世を治して、四天下に主たり。迦葉、時に尼彌大王は、千子をば具足して勇健威猛なりき。迦葉、爾の時に大王は千子を具し已れるに、復二子あつて、結跏趺坐して忽然として化生せしが、一を達摩と名け、二を善法と名けたり。迦葉、爾の時に、大王は妙華如來及び比丘僧を請じ、八萬四千歲を滿して、衣服・臥具・飲食・湯藥を供養し、諸の家事を捨てて唯供養を修せしが、七日の後に、一切の比丘に、各新衣・種種の飲食を施すこと、心の樂ふ所に隨ひ、廣く精舍を造つて心の樂に隨つて住せしめ、一一の比丘に、給使七人もて百味の食を施せり。迦葉、爾の時に、大王は精舍を造立すること方八十由旬にして、彩畫微妙なること世間に出過せしが、妙華如來及び比丘僧は、彼の精舍に坐せるに、地下より衆の妙華を出し、彼の精舍をして、華、膝に至らしめたり。迦葉、爾の時に、大王は不思議の功德の精舍に於て、妙華如來を供養すること、八萬四千歲を滿して、恭敬し供養し尊重し讃歎せり。迦葉、爾の時に、大王は如來を供養すること八萬四千歲を滿し已れる最後の一日に、妙華如來は飯食の後に、達摩・善法の二子、眷屬及び諸の四衆は、妙華如來・正遍知の所に至り、頭面にて禮を作して、佛に白して言はく。世尊、頗は布施の功德善根にして、此の尼彌大王の功德善根に勝れる者ありや、不や。と。迦葉、時に二王子の如來を

【二】如來は、乃至、此の說を作すや。「如來は衆生を濟度せん爲めに、方便の假說を以て言ふや。」との意なり。

卷第八十九

摩訶迦葉會　第二十三の二

爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、當に來るべき末世の後の五百歳には、何等の菩薩は諂曲を行ふか。と。爾の時に、世尊は迦葉に告げて言はく。迦葉、多く衆生あつて諂曲を行ひ、惡友に親近し、少しく經を讀誦して衣食を求むることを爲すなり。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。善い哉、世尊。唯願はくは、世尊の、多人を利益せんとて、彼の諂曲にして修行を勸めざる菩薩の過を說き、彼の菩薩をして、此の過を聞き已つて、自ら心行を攝めて、淸淨なるを得しめたまはんことを。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告げて言はく。迦葉、當に來るべき末世の後の五百歳には、諸の菩薩あつて惡友に親近し、少しく經を讀誦し、唯、舍利を供養する業を作し、香華・瓔珞・旛蓋・燈明を以て、如來の舍利の塔廟を供養するのみ。迦葉、我れ在家の無智の衆生に善根を種ゑしめん爲めに、舍利を供養せんことを說けるに、彼の諸の癡人は、我が意を解せずして、但此の業を作すのみ。我れ一切の天・人の中に於て、常に此の法――奢摩他・毘婆舍那を修し、以て自ら調伏せば、世間に當に信樂する婆羅門・居士あつて、舍利を供養すべし。――を說けるに、迦葉、彼の諸の癡人は、讀誦・修禪・智慧を捨てて舍利を供養し、之れに因つて活命するなり。迦葉、若し菩薩あつて、三千大千世界に滿して、上梵天に至れる香華・燈明の、一一の燈炷の須彌山の如くなるを以て、是等の如きを以て如來を供養せんに、若しくば、菩薩あつて、淨心にて戒を持ち、師尊の所に於て一四句の偈を受持し讀誦し、淨心にて修行すること、乃至、七步するあらんに、功德は彼れに勝ること無量無邊なり。迦葉、若し菩薩あつて、三千大千世界に滿ちたる華香・末香を以て、百千歳に於て、晝夜[一]六時に如來を供養せんに、若しくば菩薩あつて、憒鬧を捨て、深く三界

【一】六時。印度の古昔に於て、一日を、晝三時(晨朝、日中、日沒)夜三時(初夜、中夜、後夜)に分ちたるを謂ふ。又別に一年をも六時に分ちたり。

云何に修行せんか。と。文殊師利は諸比丘に告げて言はく。汝等應に是くの如くに觀ずべし。一法の合も無く一法の散も無く、一法の生も無く一法の滅も無ければ、一法をも受けず一法をも捨てず、一法をも增さず一法をも減ぜず。と。若し是くの如くに行ぜば、法に於て得る無く、得る無ければ則ち去る無く、去る無き故に來る無く、來る無ければ則ち住する無し。比丘、是れを無來・無去・無住・無不住と名く。と。爾の時、文殊師利の是の法を說ける時に、五百の比丘は、諸漏の中に於て、心に解脫を得たり。

て當に淨く戒を持ちて人の施を食ふべく、當に邪念を捨て諸佛の法を念ずべく、人見を離れて空行を行じ、妄覺を離れて無相の行を行じ、身の諂曲を離れて當に三業淸淨の行を行ずべく、財利を求めて法を演說することせずして大悲の心を以て正法を說き、財物を以てして親友を作ることせずして法を以て親友とし、自の利を爲さずして他人を利し損害せざらしめんことを爲し、阿蘭若に行いて諂曲を離れ、諂曲を作さずして乞食を行じ、諂曲を行はずして糞掃衣を著くべければなり。所以は何ぞ。〔三〕十二頭陀を具せん者は、一切の世間の利養を求めざればなり。と。爾の時に、世尊は彌勒菩薩摩訶薩を讚じて言はく。善い哉、善い哉。彌勒、汝、佛の功德を求めて心に厭足無く、師子吼を作すことや。已に過去の佛の所に於て諸の善根を種ゑたれば、能く此の法を說き、此の功德を說くなり。と。

　爾の時、彌勒菩薩摩訶薩の此の法を說ける時に、衆中の五百の比丘は、座より起ち去らんとせり。爾の時に、摩訶迦葉は諸の比丘に問はく。今說法を聽きて、汝等比丘は何の所に詣らんと欲するか。と。諸の比丘は言はく。大德迦葉、彌勒菩薩摩訶薩の說く所の法の如きは、甚深にして得難ければ、我等は是くの如き念を作せり。我等は此の法を修得し能はざれば、俗に還歸せんことを欲す。と。何を以ての故ぞ。信施の食をば消され難きが故なり。と。爾の時に、文殊師利菩薩は諸比丘を讚ずらく。善い哉、善い哉。是れ汝に應ずる所なり。若し信施の食を消す能はずんば、寧ろ一日に百の數も俗に歸るべく、應に破戒して人の信施を受くべからず。と。爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく。世尊、何等の人は應に信施を受くべきか。と。爾の時に、世尊は文殊師利菩薩に告ぐらく。善男子、若し禪解脫を修するあらば、我れ彼の人に、信施の食を受くることを聽さん。と。爾の時に、文殊師利は五百の比丘に告ぐらく。汝等、今は應に速に修行すべし。佛の世には値ひ難ければ、當に佛の法に住すべし。と。爾の時に、五百の比丘は文殊師利に問うて言はく。文殊師利、我等は

【三】十二頭陀。第一卷「頭陀」の解、參照。

とを修行すべし。何に況んや、菩薩なるをや。何を以ての故ぞ。〔九〕世尊、應に瞋恚を捨てて忍辱を行じ、諂曲を離れて清淨心を行じ、有爲を遠離して無我・無取の行を行じ、財寶を貴ばずして當に法行を重んずべく、衣食を求めずして當に法財を求むべく、嫉妬を捨離して、人の巨富を見ば心に歡喜を助け、唯名を求めて以て沙門と爲るに非ずして、當に沙門の一切の功德を學ぶべく、我れ口に說くに非ずして當に實行を修すべく、利養を捨て、少欲知足にて佛の功德を求め、財利の爲めに聚落に入らずして、薩婆若を念じて聚落に入り、衣食の爲めに村邑に入つて諂曲の行を行はずして、當に正行を行じ四聖種を讃ずべく、凡夫下劣の心を學ばずして當に佛行を學ぶべく、他の過を觀ぜずして但自ら調伏して、奢摩他・毘婆舍那を修め、三業の惡を離れて常に三業清淨の行を修め、破戒を離れて當に波羅提木叉を學ぶべく、佛・法・僧に依つて自ら活命せずして如來の眞實の功德を讃歎し、施を求むる爲めならずして、法を求めん爲めの故に常に正法を讃じ、如法の行を修して聖僧を讃歎し、不退の僧に依つて世間有爲の僧に依らず、一切世間の身を資くる具を求めずして唯正法を求め、世事を求めずして出世の法を求め、諂曲を離れて眞實の行を行じ、一處を樂まずして當に野鹿の依り止まる所無きが如くにし、世間の樂を離れて佛の功德を求め、當に睡眠を離れて〔一〇〕初夜・〔一一〕後夜に經典を讀誦すべく、憒鬧を捨てて當に遠離を行ふべく、諸の功德に於て厭想を生ぜずして、諸の功德を求めて心暫くも息まず、當に狗法を離れて當に師子の吼ゆる所の法を行ふべく、究竟の友と爲つて應に暫友なるべからず、〔一二〕捨てて反す無くして復當に報恩を行ふべく、財利を以てして親友を作らずして當に淨心を以てして親友を作り、虛誑の心を捨てて眞實の行を行ひ、下劣の法を捨てて當に無上の佛身を成就せんことを求むべく、如來の所に於て當に恭敬を行ふべくして憍慢を起さず、兩舌・心口の相違を捨てて當に誠實無二の言を行ふべく、菩薩として諂曲を行ふことを作さずして、當に淨心を以て奢摩他・毘婆舍那を行じ、我慢を捨てて當に恭敬を行ふべく、不淨の食を離れ

〔九〕「世尊」の下に、「我れ」の如き語ある文意なるべし。

〔一〇〕初夜。夜を初・中・後の三時に分ちて、夜の始まる時刻を謂ふ。

〔一一〕後夜。夜を三時に分ちて、夜の終はる時刻を謂ふ。

〔一二〕捨てて反す無く。の上に當に「怨は」の如き語有る意なるべし。

勒、言ふ所の毒とは、正法の中に於て戒律を犯す、是れを名けて毒と爲すなり。彌勒、汝等、毒を食ふ人と作る莫かれ。佛、彌勒に告ぐらく。復、四法あつて、能く菩薩をして薩婆若を離れしむ。聲聞果をも離るれば、況んや薩婆若をや。何等を四と爲す。一には、恩を知らざるなり。二には、諂曲なるなり。三には、妄語するなり。四には、戒を犯すなり。彌勒、此の四種の法は、能く菩薩をして薩婆若を離れしむ。亦聲聞をも離るれば、況んや薩婆若をや。彌勒、復、四法あつて、菩薩は、應に急に走つて捨離すること百由旬を過すべし。何等を四と爲す。一には、利養なり。二には、惡友なり。三には、惡衆なり。四には、同じく一處に在つて、或は戲笑を作し、或は瞋り、或は闘ふなり。當に速に捨離して百由旬を過すべし。菩薩は、餘の菩薩に於て應に惡心なるべからず。彌勒、若し菩薩あつて、三千大千世界の一切の衆生を打罵し割截せば、彌勒、汝が意に於て云何。菩薩は是の一切衆生を打罵・割截することを以て、罪を得ること多きや、不や。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、一の衆生を打つすら、罪を得ること尙多し。何に況んや、三千大千世界の一切の衆生なるをや。何を以ての故ぞ。世尊、一切の菩薩は、衆生に於て應に瞋恚の心をも起すべからざればなり。と。爾の時に、世尊は彌勒に告げて言はく。若し菩薩あつて三千大千世界の一切の衆生を打罵し割截するありとも、罪を得ること尙少し。若し菩薩あつて、餘の菩薩に於て瞋恚の心を起さば、菩提より退くこと復爾所の劫なり。彌勒、譬へば、木柱は、若し草土を以てせば斬截する能はざれども、必ず利斧を以て乃ち能く之れを斬るが如し。菩薩の善根も亦復是くの如し。餘は盡す能はざれども、若し菩薩に於て瞋恚の心を起さば、能く諸善を滅するなり。彌勒、是の故に菩薩は應に恭敬を學び、初發心の諸の菩薩に於ても等しく心に尊重を生ずること、世尊の想の如くなるべし。と。

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は佛に白して言はく。世尊、我れ當に一切の衆生を尊重し恭敬するこ

を具足するなり。十三には、無相の行を行ずるなり。十四には、空の行を行ずるなり。十五には、無願の行を行ずるなり。十六には、無願の境界を成ずるなり。十七には、一切の衆生を捨てさるなり。十八には、大悲を修行するなり。十九には、聲聞・緣覺の乘を念ぜざるなり。二十には、心に如來の智慧を成就することを樂ふなり。是れを菩薩摩訶薩の二十種の業と名け、菩薩は此の二十業を成就して、能く道場に坐するなり。彌勒、菩薩摩訶薩に四種の畢定の誓あり。何等を四と爲す。一には、畢定して、成佛して法輪を轉ぜんとなり。二には、生死の衆生に解脫を得しめんとなり。三には、無量の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に住せしめんとなり。四には、自身の樂を捨てて、諸の衆生をして無漏の樂を得しめんとなり。是れを四種の畢定の誓と名く。佛、彌勒に告ぐらく。譬へば、二人の、善く醫方を解し、善く呪術を解し、善く毒藥を別ち善く甘露を識れるが如きに、爾の時に、一人は、大衆の中に於て、卽毒藥を取つて、自ら之れを食うて希有の相を現しが、食し已るや、苦を受けて身安隱ならざれば、復甘露の呪術を求めて、毒氣を除かんことを望みたり。爾の時に、彼の人の求は得る能はず、毒氣熾盛にして、遂に便ち命終れり。時に、第二の人は、是くの如き言を作さく。我れ今毒藥を食ふ能はず。毒藥を食はざれば甘露を須ひず。處衆に希有の想を作させ、身をして苦惱せしむるを欲せざればなり。と。彌勒。當に來るべき末世の後の五百歳には、諸の在家・出家の菩薩あつて、亦復是くの如くに、是くの如き言を作さん。我が說く法の如きは能く諸罪を除く。と。是くの如くに語り已つて、轉惡業を集め、復是の言を作さん。我れ還懺悔す。と。我れ彼の人を正法の中に於て名けて死人と爲す。と說かん。何故に死と名くるか。謂はく。正法に於て墮落し退沒する、是れを名けて死と爲すなり。彌勒、復菩薩あつて、其の心淸淨にして、是くの如き言を作さん。我れ罪を作らざれば、懺悔するを須ひず。我れ當に過去、未來の一切の諸罪を懺悔すべきも、現在は作らず。と。亦彼の人の如くに、毒藥を食はず甘露を須ひさるなり。彌

薩は生死の流に逆らひて、其れをして不動の涅槃に住せしむればなり。彌勒、譬へば、人あつて、勇猛大力なること轉前に勝り、四大海及び諸河の水を取り、悉く還して阿耨大池に置かんに、彌勒、意に於て云何。是の人の作す所を希有と爲すや、不や。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、是の事の如きは甚だ希有と爲す。と。佛、彌勒に告ぐらく。菩薩の精進の難作の希有なることは、復此れに過ぎたり。菩薩の、大悲心を以て一切衆生を化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしむる是の事は、難と爲せばなり。能く佛、法及び僧を信じ有つ若き、此の事も難と爲す。善惡の業果を能く信ずることを有つ若き、此の事も難と爲す。貪・瞋・癡の起るを、能く滅せ令むる者、是の事も難と爲す。能く親屬を捨て、少欲心を發して出家を求め[七]行いて七歩に至る、此の事も難と爲す。身に袈裟を披り、正法の中に於て正信にて出家して、欲火を離るる、此の事も難と爲す。禁戒を犯さざる、此の事も難と爲す。能く憒閙を離れて遠離の行を修する、此の事も難と爲す。諸法の空なるを信ずる、此の事も難と爲す。深法の中に於て柔順の忍を得る、此の事も難と爲す。三解脱門を證する、此の事も難と爲す。須陀洹果、乃至、阿羅漢果を證する、此の事も亦難し。何を以ての故ぞ。彌勒、謂はゆる難とは、正法の中に於て、信の出家を以て、沙門の果を得ることなればなり。彌勒、當に來るべき末世の後の五百歳には、諸の衆生あつて、菩薩の心を發し、正法の中に於て出家學道すとも、空しく得る所無くして、菩薩の業を捨てて凡愚の行を作さん。彌勒、何等か是れ菩薩の業なる。彌勒、菩薩の業には二十の法あり。若し菩薩あつて、此の二十法を成就せずば、則ち道場に坐するを得る能はず。何等か二十なる。一には、慳心を離るるなり。二には、布施を修するなり。三には、熱惱を離るるなり。四には、淨戒を修するなり。五には瞋恚を離るるなり。六には、忍辱を修するなり。七には、懈怠を離るるなり。八には、大精進するなり。九には、亂心を離るるなり。十に慧を念じて[八]無依定を修するなり。十一には、甚深の忍を修するなり。十二には、般若波羅蜜

【七】行いて七歩に至る。俗に謂ふ「一歩踏み出したる」如きに當る。

【八】無依定。無依は無著と同じ。色・聲・香・味・觸・法の皆空寂なるを觀じて、一切萬境に依著せざる所に一心を定むる意なるべし。

り。世尊、甚だ大なり。善逝。と。佛、彌勒に告ぐらく。菩薩摩訶薩の精進の力は、復彼れに勝りたり。菩薩は願を發して、一切衆生を度して皆涅槃の樂に住するを得しめんと許すればなり。彌勒、譬へば人あつて、三千大千世界の一切衆生の有つ所の作業に於て、彼の人一時に悉く能く成就するが如し。彌勒、汝が意に於て云何。此の人の作す所の事業を、寧大と爲すや、不や。彌勒、佛に白さく。甚だ大なり、世尊。と。佛、彌勒に告ぐらく。菩薩の作す所の事業は、復此れに過ぎたり。菩薩は、三界の衆生にして苦惱を受くる者をば、我れ解脫せしめんと發言すればなり。彌勒、譬へば、長者に、唯一子あつて、容顏端正にして、年幼稚に在つて、父母に孝順なりしが、長者及び子・妻・妾・眷屬・奴婢・財物は悉く王の獄に入りたり。爾の時に、大王は長者に語つて言はく。此を去ること一百由旬にして、城あつて某と名く。汝去ること七日にして令く彼の城に至り、復行くこと七日にして還つて我が所に至れ。汝能く是くの如くにせば、汝の妻子・眷屬・財物を捨てて悉く皆汝に還し、及び官物を賜はん。若し七日を過ぎて彼の城より此に至らずば、當に汝の命及び汝の一子を斷ち、親屬・財物を悉く官に入るべし。と(言ふが)如し。佛、彌勒に告ぐらく。意に於て云何。是くの如くなれば、長者は勉力、勤進して、自身を愛する爲め、一子を愛する爲め、妻・妾・奴婢・財物を惜む爲めに、而ち彼の城より勤苦して此に至るや。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、我れの、佛の說かるる義を解する如くんば、彼の人は、飲食・睡眠を念ぜず、唯速に行かんことを念ぜん。何を以ての故ぞ。世尊、是の人の如きは、自ら命を惜む故に、是の故に速に行くものなればなり。と。佛、彌勒に告ぐらく。若し一切の衆生の勤行・精進すること、悉く彼の人の如しとて、一切衆生の是くの如き精進を菩薩の精進に比せんと欲するに、百分して一にも及ばず、千分して一にも及ばず、百千分して一にも及ばず、億分して一にも及ばず、百千億分して一にも及ばず、百千億那由他、乃至、不可數分して一にも及ばざるなり。何を以ての故ぞ。彌勒、一切衆生は生死の流に順ふを、菩

爾の時に、世尊は彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、如來に、光の名けて、一切功德莊嚴と曰へるあつて、右の掌中に在り。我れ此の光を以て、能く三千大千世界の衆生の須つ所の一切の樂具を悉く皆充足せしめ、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を與へ、衣を須つには衣を與へ、乘を須つには乘を與へ、寶を須つには寶を與ふる是等の如き事を、我れ悉く能く與ふ。彌勒、一切衆生は、此の樂を得と雖も、生死の中に於て解脫する能はず。彌勒、是の故に、如來は衆生に世間の樂具を施さずして、但出世の無上の法寶を與へ、衆生聞き已つて、畢竟じて苦を離るるなり。是の故に、彌勒、汝等悉く應に如來の無上の法施を學んで、世間の資生の施を重んずる莫かるべきなり。彌勒、當に來るべき末世の後の五百歲に、正法の滅せん時に、諸の比丘あつて、自ら菩薩と稱しつつ、身に不善を作し、口に不善を作し、意に不善を作し、身に禁戒を犯し、口に禁戒を犯し、意に禁戒を犯して、不善の業を造れば、沙門の果無きなり。彌勒、我れ菩提心を發せる善男子・善女人の爲めに、菩薩の善根を說かん。地獄・畜生・餓鬼及び餘の難處に墮せざらんとする善男子・善女人は、應に慙愧を具足して、常に生死を畏れ、諸有の生處に常に怖畏を懷きて、我れ當に云何にして諸の三界・六道の衆生をして速に解脫を得しむべきか。と勤精進すべし。何を以ての故ぞ。彌勒菩薩摩訶薩は、願を發して、三界・六道の一切の衆生を度して解脫を得しめ、安隱ならざる者には安隱を得しめ、未だ涅槃せざる者には涅槃を得しめんと許するものなればなり。彌勒、我れ一切世界の、若しは天、若しは人、若しは魔、若しは梵、若しは沙門・婆羅門の中を觀るに、一人として、能く是の如き重擔を荷負すること、菩薩の如き者あるを見ざるなり。彌勒、譬へば、人あつて頂に三千大千世界の山河・石壁を戴くが如し。人あつて、告げて言はく。善男子、汝、今此の三千大世界を以て頂に戴くこと、劫若しは一劫を減じ、若しは百千劫に頂戴して息まざれ。と。彌勒、汝が意に於て云何。是くの如き人を大力と爲すや、不や。彌勒、佛に白して言はく。世尊、甚だ大な

【六】許。は「期」に通ず。

定・智慧の法を說くべきなり。佛、彌勒に告ぐらく。若し三千大千世界に滿ちたる珍寶・樂具をば、善男子・善女人の、此の珍寶・樂具を以て諸の衆生に施す若きと、若しくは、善男子・善女人あつて、他人の爲めに一四句の偈を說きて、其れをして聞くを得しむるとは、彼の善男子・善女人の得る所の功德は、前の功德に勝ること無量無邊阿僧祇の數なり。佛、彌勒に告ぐらく。此の比丘の村邑に入るを觀るに、大利益あれば、彌勒、若し城邑に入らば、三寶を讃歎することを遠離して世事を論說するを得る勿かれ。何を以ての故ぞ。彌勒、金・銀・瑠璃・眞珠・碼碯・珊瑚の諸寶及び諸の樂具の若きは、人をして生・老・病・死・憂・悲・苦・惱を離れしむる能はずして、彌勒、唯正法のみあつて、能く大に生・老・病・死・憂・悲・苦・惱を離るることを利益すればなり。是れを如來の微密の法と名く。と。

爾の時に、世尊は而ち頌を說いて曰はく。

三千大千世界に　珍寶其の中に滿ちたる　此れを以て布施に用ふとも　得る所の功德は少く
一偈の法を說くが若き　功德は甚だ多しと爲す　三界の諸の樂具をば　盡く持ちて一人に施すとも　一偈の施の　功德の最勝たるに如かざるは　此の功德は彼れに勝りて　能く諸の苦惱を離せばなり　と。

佛、彌勒に告ぐらく。若し菩薩摩訶薩あつて、無邊の世界に滿ちたる珍寶を以て諸佛如來に施すとも、若し菩薩あつて、大悲の心を以て、一の衆生の爲めに四句の偈を說かば、功德は彼れに勝れり。と。

爾の時に、世尊は而ち頌を說いて曰はく。

若し恒沙の世界に　珍寶其の中に滿ちたるをば　以て諸の如來に施すとも　一法の施には如かず　寶を施すことは福多しと雖も　一法の施に及ばずして　一偈の福すら尙勝れば　況んや多くの思議し難きをや　と。

は、諸の比丘あつて、自ら菩薩なりと言ひ、衣食の爲めの故に、聚落に入つて、衆生を敎化せんが爲めに聚落に入らず。唯財物の爲めに遞に相ひ誹謗して、自ら得れば便ち喜び、他の利を得るを見れば、愁憂し瞋恚し、自ら求めて得ざれば便ち愁憂を生じ、他の得ざるを見れば便ち歡喜を生ぜん。彌勒、汝、彼の人の是くの如き顚倒を觀ば、菩薩の法の爲めに、有つ所の樂具を應に悉く捨てて、一切の衆生に與ふべし。何を以ての故ぞ。大悲心を以ての故に、廣大なる願を發して、諸の衆生をして悉く樂を得しめん故なり。彌勒、譬へば長者居士に、唯一子の、顏貌端正にして父の命に敬順なるあつて、之れを愛すること甚だ重かりしに、少の因緣を以て、繫れて牢獄に在るに、父時に之れを聞き、親しく自ら獄に入るが如し。彌勒、汝が意に於て云何。是くの如くに長者の牢獄に入るは、何事の爲めの故ぞ。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、子を見ん爲めの故として獄中に入つて、出解脫を求むるなり。佛、彌勒に告ぐらく。牢獄と言ふは卽是れ生死にして、長者居士を諸菩薩に喩へ、一子と言ふは、諸菩薩摩訶薩の如きは、諸の衆生に於ては一子の想の如ければなり。彌勒、彼の長者居士の牢獄に入る如きは、其の子を見、愍んで之れを救はん爲めなり。菩薩摩訶薩も亦復是くの如くにして、聚落に入るは飲食・衣服・臥具の爲めならずして、衆生を化して解脫を得しめん爲めなり。佛、彌勒に告ぐらく。當に來るべき末世の後の五百歲には、諸の比丘あつて、身を修めず、心を修めず、戒を修めず、慧を修めずして、彼の諸の比丘は、聚落に入るや、諸の香華を持ち人に與へて信を作し、以て衣服・臥具・飲食を求めん。佛、彌勒に告ぐらく。比丘の法は、應に是くの如くに[五]下賤の業を作さんとて村邑に入るべからず。若し村邑に入らば、應に法を求め善知識を求むることを爲して、諂曲を懷く莫く、憍慢を起す莫かるべし。應に法語を作して、世事を說く莫く、田宅・苦樂・得失・王事・賊事・城邑・聚落・軍衆の事を說く莫く、男女・婚會の事を說く莫かるべし。唯應に法を說きて、佛の功德を讚じ、正法を歎說し、聖僧を歎說し、布施・持戒・忍辱・精進・禪

【五】下賤。大正本には「不賤」とあれど、誤植なることを確めたるに由り改めたり。

ず。慈愍を讃嘆しながら、自は瞋恚を行ひ、忍辱を讃嘆しながら、自は不忍を行ひ、四攝を讃嘆しながら、自は布施・愛語・利益・同事を行ふ能はず。但言語あるのみにて、菩薩の行を學樂・精進すること能はざるなり。彌勒、往昔、過去の無量無邊・不可稱計・不可思議の阿僧祇劫の爾の時に、佛の號して、智上如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛婆伽婆と曰へるありき。彌勒、彼の佛は五濁惡世に出でしが、時に佛の法中に一の菩薩比丘の、樂精進と名けたるあり。[四]念・慧を具足し、少欲知足にして如來の教に順じ、諸の村邑に遊んで人の爲めに法を說き、國王・大臣・一切の人民に知識し尊重・恭敬せられたり。時に彼の比丘は、城邑に入らんと欲して先づ自ら觀察すらく、若く尊重・愛語・讃歎を得ん。と。然る後に城に入つて、復邪見・不信の處に遊びしが、彼に於ては善語・供養を得ずして、唯瞋恚・罵詈・撾打を得たり。而も彼の比丘は、忍辱の鎧を被、大悲に安住して、衆生を捨てず、亦瞋恚せず悔心を生ぜざりしかば、彌勒、樂精進菩薩の化する所の衆生は、悉く比丘の爲めにとて施主と作り、衣食・臥具・湯藥を奉施したりき。佛、彌勒に告ぐらく。意に於て云何。時に彼の比丘は、餘の家に至らずして嫉妬を有ちしや、不や。彌勒、佛に白さく。不なり、世尊。佛、彌勒に告ぐらく。汝、樂精進菩薩の利益の心を觀ぜよ。少欲知足にして、大悲もて城邑・聚落を觀察して、食を得ざる處には、則ち止つて入らずして、邪見の人を化し、餘の比丘に爲つて檀越と作れるには、更に重ねて入らず。諸の邪見・不信の家を化して、其れをして正信ならしむるには、瞋恚・打罵をも心に瞋恨せざりき。是くの如くに、彌勒、過去の世の諸の大菩薩の、村邑に入れるは、衆生を化せんが爲めにして、自治せんが爲めならざりき。彌勒、異觀を作す莫かれ。爾の時の樂精進菩薩は、豈異人ならんや。我が身是れなり。彌勒、是の故に、菩薩若し村邑に入つて衆生を化せんと欲せば、當に樂精進菩薩摩訶薩を學ぶべく、復應に餘の大菩薩の行を學んで、狗の法を學ぶ莫かるべし。佛、彌勒に告ぐらく。當に來るべき末世の後の五百歲に

【四】念・慧。「定・慧」を謂ふ者なるべし。或は又「念」を「心の執持」の義に取り、「智慧の執持」と見るを得べし。

其の過惡を說きたまはば、我れは聞くことを得已つて自ら心行を攝め、彼れ愚癡の人も如來の說を聞きて、或は、如來は我れを知りたまへり。如來は我れを覺したまへり。と、信解することを得ればなり。と。爾の時に、世尊は彌勒に告げて言はく。善い哉、諦に聽きて善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに、彼の癡人の過を說くべし。彌勒、當に來るべき末世の後の五百歲に、諸の衆生あつて、自ら稱說して、我れは是れ菩薩なり。と言ふ彼の諸の惡欲を、我れ今之れを說かん。彌勒、四法を具する者は自ら菩薩と稱せん。何等を四と爲す。一には、利養を求むるなり。二には、名聞を求むるなり。三には、諂曲なるなり。四には、邪命なるなり。彌勒、此の四法を具する是の故に、自ら我れは是れ菩薩なりと稱するなり。佛、彌勒に告ぐらく。當に來るべき末世の後の五百歲には、自ら菩薩と稱して狗の法を行はん。彌勒、譬へば、狗あつて、前に他の家に至り、後の狗の來るを見て、心に瞋嫉を生じ、啀喍して之れに吠え、內心に想を起して、是れは我が家なりと謂ふが如し。佛、彌勒に告ぐらく。當に來るべき末世の後の五百歲にも、亦復是くの如くに、自ら菩薩と稱して狗の法を行ひ、他の施主の家中に至つて己が家の想を生じ、既に此の想を起すや便ち貪著を生じ、前に他家に至つて後の比丘を見るや、目を瞋して之れを視、心に嫉恚を生じて鬪諍を起し、互に相ひ誹謗して、某甲の比丘には是くの如き過あり、某甲の比丘には是くの如き過あれば、汝、某甲の比丘に親近する若くんば、則ち衆人に爲つて輕賤せられ、罪垢を增長せんと言はん。是くの如き人の、心に嫉妬を生じて、餓鬼の因・貧賤の因を行ずるは、自活を爲さん故に、妄に己身を稱して以て菩薩と爲し、衣食を爲さん故に、如來の智慧・功德を讃嘆して、餘の衆生をして信仰を生ぜしめつつ、內には自ら戒を犯し、惡欲・惡行するものなり。佛、彌勒に告ぐらく。汝、來世に是等の如き大怖畏の事あるを觀ぜよ。師子の獸は、應に師子吼して師子の業を作し、野干鳴して野干の業を作すに非ざるべきに、能く一切の財物を捨つることを讃嘆しながら、而も自は慳悋して貪を離るること能は

の集むる所なる、——其の指掌の色の猶蓮華の如くなるを伸べ、以て彌勒菩薩摩訶薩の頂を摩でて、是くの如き言を作さく。彌勒、我れ汝に付囑す。當に來るべき末世の後の五百歳の正法滅する時に、汝當に佛・法・僧の寶を守護して、斷絶せしむる莫かるべし。と。爾の時、如來の金色の手を伸べて彌勒菩薩の頂を摩せる時に、此の三千大千世界に於て六種に震動し、光明遍く三千大千世界に滿ちたり。爾の時に、地天及び虛空天より上阿迦膩吒天に至るまで、悉く皆合掌して、彌勒菩薩摩訶薩に白して言はく。如來は法を以て聖者に付囑したまふ。惟願はくは、聖者、一切の諸の天・人を利することを爲さん故に、此の正法を受けたまはんことを。と。

爾の時に、彌勒菩薩は座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言はく。世尊、我れ一一の衆生を利益せん爲めにすら、尙無量億劫の苦を受く。況んや復、如來の我れに正法を付したまふをや。而ち當に受けざるべけんや。世尊、我れ今受持して、當來の世に於て、如來の無量阿僧祇劫に集めたまへる所の阿耨多羅三藐三菩提を演說せん。と。彌勒菩薩の此の語を說ける時に、三千大千世界は六種に震動せり。爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は復佛に白して言はく。世尊、應に餘の衆生に於て、諍論及び增上慢を起すべからず。何を以ての故ぞ。世尊、正事業の者とは、正法を護るを謂へばなり。世尊、若くにして聲聞・辟支佛は菩薩の重擔を荷負する能はず。と。爾の時に、世尊は彌勒菩薩摩訶薩を讃じて言はく。善い哉、善い哉。彌勒。汝の今日我が前に於て師子吼を作して、如來の正法を受持し守護するに至れるが如くに、是の恒河沙の等の過去の諸佛・前の諸大菩薩の如きも、亦復是くの如くに師子吼を作して正法を守護せり。と。爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は佛に白して言はく。世尊、惟願はくば、當來の世の愚癡人の輩の、自ら菩薩と稱し自ら沙門と稱して、名利の爲めの故に、施主・知識・親屬を惱亂することを說きたまはんことを。惟願はくば、世尊の、其の過惡を說きたまはんことを。何を以ての故ぞ。若し世尊にして

葉を讃じて言はく。善い哉、善い哉。迦葉。我れ已に了知すれども、而も故に汝に付するは、彼れ癡人をして、此れを聞くことを得已つて、悔心を生ぜしめんとてなり。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、我れ今更に第二の喩を說かんと欲す。世尊、譬へば、人の身力盛壯にして諸の患苦無く、一切の病を離れ、壽命無量にして、百千萬歲大種姓に生れて財寶を具足し、善く淨戒を持し、大慈悲を有ち、內に歡喜を懷きて能く一切衆生の煩惱を捨て、其の心勇猛にして、多人を利益して安樂を得しめんとて、天人を利益するあらんに、時に一人あつて、寶物を齎し持ち、其の所に來り至つて、之れに語つて言はく。我れ緣事あつて當に他方に至るべければ、寶を以て相ひ寄す。當に好く守護すべし。若しは十年にして還り、若しは二十年なりとも、我が來る時を待ち、當に相ひ還さるべし。と。其の人、寶を得、藏積して守護し、彼の人の行きて還れるに、卽便に之れを歸すが如し。世尊、菩薩摩訶薩も亦復是くの如し。若し法の寶を以て諸の菩薩に付さば、無量千億那由他劫にも終まで、失壞する無く、無量無邊の衆生を利益して、佛種を斷たず、法輪を斷たず、僧寶をば具足せん。世尊、是くの如き事は、我れ持する能はずして、唯菩薩の乃ち能く受くるに堪ふるあるのみ。世尊、此に彌勒菩薩摩訶薩は、倶に此の會に在れば、如來は之れに付したまはば、當來の世の後の五百歲の法の滅せんと欲する時に於て、如來の無量阿僧祇劫に集めたまひし所の阿耨多羅三藐三菩提の法をば、悉く能く守護して流演し廣說せん。何を以ての故ぞ。世尊、此の彌勒菩薩摩訶薩は、當來の世に於て當に阿耨多羅三藐三菩提を證すべければなり。世尊、譬へば、國王の第一の太子の、灌頂して位を受くるや、當に王事を爲すこと如法にして世を治し、王の諸の群臣は悉く皆朝宗すべきが如し。世尊、彌勒菩薩摩訶薩も亦復是くの如くに、法王の位を治して正法を守護するなり。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉を讃じて、善い哉、善い哉。汝の說く所の如し。と。爾の時に、世尊は卽右の手の、猶金色の如くなる、——微妙なる光明は、無量阿僧祇劫の善根

ぐらく。彼の諸の癡人は、假使ひ千佛世に出興して、種種に神通・說法して、彼の愚癡の人を教化すとも、彼れの惡欲に於て息ましむべからざるなり。迦葉、當に來るべき末世の後の五百歲に、諸の衆生の、善根を具足し、其の心清淨にして、能く佛恩を報ぜんとて、我が法を守護する有らん。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、我れ寧ろ頂に四大天下の一切の衆生・山河・石壁・城邑・聚落を戴せて、一劫を滿し若しくは一劫を減ずとも、彼の愚癡なる衆生の不信の音を聞く能はざるなり。世尊、我れ寧ろ一つの胡麻の上に坐すること、一劫を滿し若しくは一劫を減ずとも、彼の不信なる癡人の破戒の音を聞く能はざるなり。世尊、我れ寧ろ大劫火の中に在つて、若しは行き若しは立ち若しは坐し若しは臥すこと、百千億歲すとも、彼の不信なる癡人の破戒の音を聞く能はざるなり。世尊、我れ寧ろ一切衆生の瞋恚・罵辱・撾打・加害を受くとも、彼の不信なる癡人・偷法の大賊の禁を毀る聲を聞く能はざるなり。世尊、我れ少行を修して智慧微淺なれば、斯くの如き重擔を我れは堪ふる能はず。世尊、唯菩薩のみ能く斯くの如き重擔を荷負するに堪ふるあらん。世尊、我れ此の中に於て譬喩を說かんと欲す。世尊、譬へば、人の年耆ゆること極老にして、年百二十に、身は長病に嬰り、臥して牀席に在つて、起ち止ること能はざるあらんに、時に一人の巨富饒財なるあつて、珍寶を齎し持ち、病人の所に至つて之れに語つて言はく。我れに緣事あつて、當に他方に至るべければ、寶を以て相ひ寄す。我が爲めに守護せよ。或は十年にして還らんも、若しくは二十年なりとも、我が還る時を待つて汝當に我に歸すべし。と。彼の老病人は、臥して牀席に在つて、子息ある無く、唯獨一の身なれば、彼の人去り已つて未だ久しからざる間の時に、彼の病人は命終に至れるに因つて、寄する所の財物悉く皆散失し、彼の人行き還つて求索するに、所無きが如し。世尊、聲聞の人も亦復是くの如し。智慧微淺にして修行甚だ少く、又、伴侶無く、久しく世間に住在すること能はざれば、若し正法を付すとも、久しからずして散滅せん。と。爾の時に、世尊は迦

なる煩惱に復四種あつて、彼の煩惱を具せば、重擔を負ふが如くにして地獄に入らん。何等を四と爲す。一には、他の得利を見て、心に嫉妬を生ずるなり。二には、經の禁戒を聞き、而も反つて毀犯するなり。三には、佛語に違反しながら、覆藏して悔いざるなり。四には、自ら戒を犯すを知りつつ、他の信施を受くるなり。迦葉、是れを四種の微細なる煩惱と名け、出家の人にして此の煩惱を具せば、重擔を負ふが如くにして地獄に入るなり。迦葉、四種の相似の沙門あり。何等を四と爲す。一には、惡戒なるなり。二には、我見なるなり。三には、正法を誹謗するなり。四には、斷見なるなり。是れを四種の相似の沙門と名く。迦葉、出家の人に、四つの放逸あつて地獄に入るなり。何等を四と爲す。一には、多聞放逸にして、自ら多聞を恃んで放逸を生ずるなり。二には利養放逸にして、利養を得る故にて放逸を生ずるなり。三には、親友放逸にして、親友に依恃して放逸を生ずるなり。四には、頭陀放逸にして、自ら頭陀を恃み、自ら高つて人を毀るなり。是れを則ち名けて四種の放逸と曰ふ。迦葉、出家の人にして、四放逸を具せば地獄に墮するなり。と。

爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、當に來るべき末世の後の五百歳に、相似の沙門あつて、身に袈裟を被つつ、如來の無量阿僧祇劫に修集したまへる所の阿耨多羅三藐三菩提を毀滅せんか。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告ぐらく。汝此れを以て如來に問ふこと莫かれ。何を以ての故ぞ。迦葉、彼の愚癡の人の實に、有つ過惡を如來は說かざるなり。惡欲を以ての故に、其の心に妄に邪行・諂曲を執し、一切の魔事を皆悉く信受すれども、彼の愚癡の人の實に有つ過惡を如來は說かざるなり。と、爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、惟願はくは、如來の久しく世間に住したまひて、我が爲めに說法したまはんことを。と。佛、迦葉に告ぐらく。如來は久しからずして當に般涅槃すべし。迦葉、佛に白して言はく。世尊、惟願はくは世尊の世に住したまふこと一劫若しくば一劫を減じて、正法を守護したまはんことを。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告

て罪を得ること多きや、不や。迦葉、佛に白さく。甚だ多し、世尊。甚だ多し、善逝。と。佛、迦葉に告ぐらく。若し衆生あつて、未だ聖果を得ずして、自ら凡夫なるを知りながら、利養の爲めの故に、自ら阿羅漢果を得たりと稱して、人の信施を受けて、乃至、一食すとも、罪は彼れよりも多きなり。迦葉、寧ろ三千大千世界の衆生の一切の樂具を奪ふとも、應に自ら、我れは聖果を得たりと稱して、人の信施を受くること、乃至、一食だもすべからず。迦葉、我れ沙門の法を觀ずるに、中に更に、罪の、妄に聖果を得たりと稱する者より重きは有る無し。迦葉、聲聞の人に四つの惡欲あり。何等を四と爲す。一には、未來世の佛を見んことを求むるなり。二には、轉輪聖王と作らんことを求むるなり。三には、刹利大姓に生れんことを願ふなり。四には、婆羅門大姓に生れんことを願ふなり。是れを四種の惡欲と名く。若し求むる所あらば、乃至、涅槃にも亦惡欲と名け、是れを如來の祕密の說と名く。迦葉、聲聞の人に、四種の性の、一切の時、一切の事に於て、應に作すべからざる所のもの有り。何等を四と爲す。一には、我に著するなり。二には、人に著するなり。三には、戒を犯すなり。四には、未來の佛法を求むるなり。此の四種の性は、聲聞の人の、一切の時、一切の事に於て、應に作すべからざる所なり。迦葉、若し沙門・婆羅門あつて、淨戒を持たば、我れは、彼れの爲めに阿耨多羅三藐三菩提を說けども、終まで彼れ惡欲の人の爲めに說かざるなり。持戒の人の、心諂曲ならずして涅槃を求むる者の爲めに、其れをして安隱ならしめんとて、是の故に說くことを爲すなり。迦葉、我れ今更に說いて、諸の行者をして、聞き已つて歡喜せしめん。迦葉、若し復人あつて、一切の樂具を以て、四天下の一切の衆生を供養すること、若しは一劫若しは一劫を減ぜんに、迦葉、若し復人あつて、一器の水を以て、戒を持てる(三)正命の人に施さんに、彼の善男子・善女人の得る所の功德は、前の布施に勝れること無量無邊ならんも、是に惡欲の人にして、若し人の施を受けば、人を傷害すること、一切の惡友・怨敵に過ぎん。迦葉、出家の人の微細

【三】正命。身・口・意の三業を淸淨にし、正法に順じて生活するを謂ふ。第一卷「八正道」の解。參照。

くんば、迦葉、汝が意に於て云何。此の人、罪を得ること寧多しと爲すや、不や。迦葉は佛に白して言はく。甚だ多し。世尊。と。佛、迦葉に告ぐらく。若し凡夫あつて、未だ聖果を得ずして自ら凡夫なるを知りながら、利養の爲めの故に、自ら我れは　須陀洹果を得たりと稱して、若し一食をも受けんか、罪は彼れよりも多きなり。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。希有なり、世尊。如來は此の律儀の法を說きたまふに、誰れか此の法を聞きながら、未だ聖果を得ざるに、自ら道を得たりと說きて一盞の水をも受けんや。と。佛は迦葉に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の說く所の如し。若し生死を離れんと欲せば、應に是くの如くに行ふこと、頭の然ゆるを救ふが如くなるべし。迦葉、若し復人あつて、身に大力を具して、四天下の衆生の資身の具に於て、加ふるに刀杖を以ひて、悉く皆奪ひ取らんに、迦葉意に於て云何。彼の人は、此の劫奪の因緣を以て、罪を得ること多きや不や。迦葉、佛に白さく。甚だ多し、世尊。甚だ多し、善逝。と。佛、迦葉に告ぐらく。若し凡夫人にして、未だ聖果を得ざるに、利養の爲めの故に、自ら我れは斯陀含果を得たりと稱して、一食の施を受けんか、罪は彼れよりも多きなり。迦葉、若し復人あつて、千の世界の有らゆる衆生の一切の資具・金・銀・瑠璃・眞珠・珂貝・琥珀・珊瑚・種種の諸寶・無價の寶の衣・騎乘・宮殿・飲食の具に於て、刀杖もて害を加へて、悉く皆劫奪せんに、迦葉、意に於て云何。彼の人は、是の劫奪の因緣を以て罪を得ること多きや、不や。迦葉、佛に白さく。甚だ多し、世尊。甚だ多し、善逝。と。佛迦葉に告ぐらく。若し衆生あつて、未だ聖果を得ずして、自ら凡夫なるを知りながら、利養の爲めの故に、自ら我れは阿那含果を得たりと稱して、人の信施を受けて、乃至、一食すとも、罪は彼れよりも多きなり。迦葉、若し復人あつて、身に大力を具へて、中千の世界の一切の衆生若しくは天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の一切の樂具に於て刀杖もて害を加へて、悉く皆劫奪せんに、迦葉、意に於て云何。彼の人は、是の加害の因緣を以

【三】須陀洹果。「預流果」と同じ。第一卷同名の解、參照。

ん。我れは道果を得たる聖人なりと。是の人、若しは靜室に在り若しは窟中に在りながら、貪心にて、一切の施主の我れに衣鉢を施さんことを思念しつつ、是くの如き念を作さん。如來は我れを知らず、我れを覺せず、我れを見ず。と。迦葉、比丘の、若しは靜室に在り若しは窟中に在り、若しは行き若しは坐し若しは臥しつつ、若しは貪欲を念じ、若しは瞋恚を念じ、及び餘の種種なる諸の惡をば覺觀せんか、住する所の處に隨ひ、其の中の諸神は、彼の比丘の心を知つて愁憂を生じて、是くの如き念を作さん。此の諸の比丘の非法・非宜なる、正法の中に於て出家を得已りながら、是くの如き不善の法を思惟するか。と。迦葉、彼れ諸神等は、彼の比丘の各方便を作つて安隱ならざらしむることを知るなり。迦葉、彼れ諸天神の、少善根を以て得たる少智慧にてすら、尙他の心を知るなり。況んや、復如來の、百千萬億阿僧祇劫に具に智慧を行ぜるものをや。迦葉、如來は知らざる所無く、見ざる所無く、覺せざる所無く、證せざる所無し。迦葉、如來は無礙の智慧を具足したれば、三世の法に於て皆悉く了知せり。是の故に、迦葉、善男子・善女人の、正法の中に於て出家を得たる者は、應に是の念を作すべし。諸佛如來は悉く我が心を知れば、十方世界の現在の諸佛も亦我が心を知りたまへり。佛法に於て沙門の賊と作る莫からん。と。迦葉、云何なるを沙門の賊と名くるか。沙門の賊に四種あり。何等を四と爲す。迦葉、若し比丘あつて、法服を整理して像を比丘に似せ、而も禁戒を破つて不善の法を作さば、是れを第一なる沙門の賊と名く。二には、日暮の後に於て、其の心に不善の法を思惟せば、是れを第二なる沙門の賊と名く。三には、未だ聖果を得ずして自ら凡夫なるを知りながら、利養の爲めの故に、自ら我れ阿羅漢果を得たりと稱せば、是れを第三なる沙門の賊と名く。四には、自をば讃じて他を毀らば、是れを第四なる沙門の賊と名く。迦葉、是れを四種の沙門の賊と名く。迦葉、譬へば、人あつて、大勢力を具して、閻浮提の一切衆生の有つ所の珍寶たる金・銀・瑠璃・眞珠・珊瑚・琥珀等の寶を、刀杖もて害を加へて皆悉く奪ひ取るが如

――律儀の戒を具し正法の教を具したる――を學び、清淨の戒に於て微細も犯さざるべく、應に是くの如くに學ぶ――正法に隨順して諂曲の心を離れ、貪欲を遠離して慙愧を具足し、常に生死を畏れて遠離を樂求し、生死を厭離して常に涅槃を念じ、若しは樹下若しくば山巖の間に在り、若しは靜室に在り、若しは窟中に在つて、初より正意を修めて如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛婆伽婆の、生にして種性を具足し、善根を具足し、無量の淨戒・無量の三昧・無量の智慧・無量の解脫・無量の解脫知見を具足し、一切の無邊なる佛法の不可思議なるを具足し、無等無邊の功德を具足し、實語・眞語にて、言ふ所に二無くして衆生を誑さず、大醫王と爲つて能く毒箭を拔き、不請の友と爲つて大慈悲を具し、大導師と爲つて甚深の法を說きて甚深に入らしめ、寂滅の法を說きて寂滅を得しめ、衆生を空無して相無く相を斷ち、願無く願を離れ、戲論ある無く、諸の戲論を離れ、甚深にして見難く覺し難く其の性遠離して有無を離れ、行無く行を斷ち、說無く說を離れ、無相平等に、離垢清淨に、取無く捨無くして、能く諸苦を滅し、能く渴愛を斷じて、涅槃に至らしむるを念ず。――べし。迦葉、比丘は是くの如くに、一日若しくは一日を過し、靜室に在つて心に如來を念じて、是の思念を作せ。我れ人身を得、出家の道を得、比丘の法を得て如來に親近したれば、應に懈怠すべからず。所以は何ぞ。此の修戒に於て當に道果を得べく、是の因緣を以て、未來世に於て若し佛は出世したまはば、當に佛――佛の出世の難きこと優曇華の如くなる、――見ゆるを得べければなり。と。迦葉、比丘の修行は應に慧命須菩提の修行する所(の如く)なるべし。迦葉、如來・應・正遍知をば見聞することを得難く、正法の中に於てして出家するを得て比丘の戒を具することも、甚だ希有と爲せばなり。善男子・善女人の、正法の中に於て出家する者は、二つの事の爲めの故なり。何等を二と爲す。一には、道果を現得せん爲めの故なり。二には未來の佛に見えん爲めの故なり。迦葉、諸の癡人あつて、袈裟を受著しつつ如來に違背しながら、自ら謂は

卷の第八十八

元魏　月婆首那　漢譯

摩訶迦葉會　第二十三の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、婆伽婆は〔一〕舍婆提城の祇樹給孤獨園に在して大比丘僧五千人と倶なりき。菩薩摩訶薩は八千人倶にして、其の名を文殊師利菩薩、觀世音菩薩、大勢至菩薩、德藏菩薩、彌勒菩薩と曰ひ、是等の如き菩薩摩訶薩は、而ち上首たり。

爾の時に、世尊は百千の大衆の與めに恭敬し圍遶せられて、說法を爲したまへり。爾の時に、摩訶迦葉は大衆の中に在りしが、座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌し恭敬して、佛に白して言はく。世尊、我れ少しく如來・應・正遍知に問ひたてまつらんと欲す。若し佛聽許したまはば、乃ち敢て諸問せん。と。佛は迦葉に告ぐらく。汝の問ふ所を恣にせよ。如來は悉く能く汝が爲めに分別して、汝の疑心を斷じて歡喜を得しめん。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、若し善男子、善女人あつて、涅槃を正法の中に求めんと欲して出家せば、當に云何に學び、云何に行じ、云何に觀を修すべきか。と。爾の時に、世尊は摩訶迦葉に告ぐらく。善い哉、善い哉。迦葉、汝今善く如來に是くの如き義を問ひ能ひたり。汝の問ふ所の如きは、一切の諸天、世人を利して、安樂を得しむることを爲せばなり。汝、今諦に聽きて、善く之れを思念せよ。吾れ當に汝が爲めに分別して解說すべし。と。爾の時に、摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、是くの如くに願樂して、聞かんと欲す。と。

佛は迦葉に告ぐらく。善男子、善女人は涅槃を正法の中に求めんと欲して出家せば、應に淨戒、

〔一〕舍婆提（Śrāvastī）城。舍衞城に同じ。

轉輪王と作り、名けて善見と曰ひ、無量の供具を以て彼の佛如來を恭敬し供養して、菩提を助くる法を具足し圓滿すべし。當に彼の土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成じて、普光明如來・應・正等覺と號すべし。阿難、彼の善見王は、其の長子を立てて王位を紹がせ已つて、彼の佛の所に於て出家して道を修むるに、彼の佛世尊は涅槃に臨む時に、便ち授記——此の善見菩薩は、我が滅後に於て、次いで當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし。——を與へ、佛は授記し已るや、便ち涅槃に入らん。と。爾の時に、舍利子は商主天子に告げて言はく。如來は、已に汝に菩提の記を授けたまへり。と。天子は言はく。大德、佛の如きは、人を化せんとする所にて授記を與へたまひ、我れにも亦是くの如くにしたまへど、眞如の性の不增・不減なるが如くに、如來の授記にも亦增・減無し。と。

爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。是くの如き法門をば、汝當に受持して、廣く人の爲めに說くべし。無量の衆生を利益し安樂にし、未來の諸の菩薩を攝受する故なり。と。阿難は佛に白して言はく。世尊、我れ已に頂受したれば、當に何と之れに名け、云何に奉持すべきか。佛、阿難に告ぐらく。此の經を名けて、大神變を說くと爲し、亦文殊師利の說く所の密語と名け、亦商主天子の問ふ所と名け、是くの如くに受持せよ。阿難、若し善男子・善女人にして、能く此の經に於て信受し讀誦し、他の爲めに廣く說かば、則ち已に一切の功德を攝むと爲さん。と。佛の、此の經を說き已りたまふや、慧命阿難幷に餘の比丘・商主天子及び無量無邊なる阿僧祇那由他の諸の天子等・文殊師利、及び無量阿僧祇の十方世界より諸べて來つて集會せる菩薩摩訶薩の衆、及び一切世間の天・人・阿修羅等は、佛の所說を聞き、歡喜して奉行せり。

由つて尊は微笑したまへるか　導師の示現したまふ所　是れ必ず因縁あらん　善い哉梵音を
演べて　衆をして　咸く歡喜せしめたまはんことを　と。

佛は阿難に告ぐらく。我れ此の法門を說ける時に、七萬二千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、三萬二千の菩薩は無生忍を獲たり。阿難、汝是の商主天子を見たりや、不や。阿難白して言はく。唯然く、已に見たり。佛言はく。阿難、此の商主天子は、已に曾て無數の諸佛を供養し、無量の衆生を阿耨多羅三藐三菩提に勸發せしめたり。阿難、此の商主天子は、三百阿僧祇劫を過ぎて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得、功德王光明如來・應・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號し、國を清淨と名け、劫を無垢と名けん。其の土は皆七寶を以て成ぜられ、地の平なること掌の如く、八つの階道あつて、寶網にて彌く覆ひ、種種に莊嚴せん。彼の佛刹土には、聲聞・辟支佛の名及び餘の外道・[一七]勒迦・波利羅婆若迦等ある無く、諸の魔事の、正法を壞る者無く、亦八難及び諸の非法・苦惱の聲無く、心の念ずる所に隨ひ飲食は自然ならん。彼の土の衆生の衣服・珍玩は、猶他化自在の諸天の如く、身は皆金色にして、三十二相にて、阿耨多羅三藐三菩提に住せん。是の故に、名けて清淨世界と爲す。彼の功德王光明如來の壽は四十小劫にして、彼の佛の法中に六十二倶胝の菩薩あつて、願力の故を以て、佛の涅槃に隨はん。阿難、若し菩薩あつて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、是くの如き忍を得ば、一切當に清淨世界に生じて、功德王光明如來に爲つて阿耨多羅三藐三菩提の記を授るべし。と。

爾の時に、會中に、天子の名けて觀察と曰へるありしが、天の曼陀羅華を以て如來の上に散じて、是くの如き言を作さく。若し功德王光明如來の無上道を成ぜん時には、我れ當に彼の清淨世界に生じ、轉輪王と爲つて、彼の佛世尊・諸菩薩衆に承事し供養し、次いで佛處を補ひて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。と。佛、阿難に告ぐらく。此の觀察天子は、當に彼の功德王光明如來の法中に於て

【一七】勒迦・波利羅婆若迦。Lokāyata, Parivrājaka の音譯にして所謂順世外道と普行外道となり。

す。云何なるを名けて、得る所有る者と爲すか。我・我所の二相の得可きを見るを、得る所有りと名く。衆生・壽者・養育と我・人の二相の得可きを見るを、得る所有りと名く。何をか、得る所無しと謂ふ。我の自性及び我所の性を見て、無二なりと了知するを、得る所無しと名く。是れを則ち名けて、忍を成就すと爲す。天子、菩薩にして、無數の劫に於て此の忍を修行する、是れを如來の最大なる神變と名くるなり。と。此の忍を說ける時に、三千大千の世界は六種に震動し、大光遍く一切の世界を照し、百千の音樂は鼓たざるに自ら鳴り、虛空の中に於て衆の妙華を雨し、四萬二千の衆生は皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、九萬の菩薩は隨順法忍を得、佛の神力を以て、此の娑婆世界をして、然燈佛の、蓮華城に入れる時の如くに、等しうして異るある無からしめたり。爾の時に、世尊は卽便に微笑せるに、無量百千の種種なる色は佛の口より出で、遍く無量無邊の世界、乃至、梵世を照し、日月の光明をば悉く復た現さず。佛を遶ること三帀し、還つて頂より入れり。

爾の時に、慧命阿難は、卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して恭敬して、卽、佛前に於て偈を說いて言はく。

我れは問ひたてまつる光莊嚴に　光明は與に等しきもの無く　諸の煩惱の闇を破したまふ　微笑したまへるは何の因緣ぞや　衆の魔怨を摧破し　諸の外道を降伏したまふ　我れは問ひたてまつる十力の者に　何の緣にて微笑を現したまへるか　如來の殊妙の色は　三十二相を具したまひて　十方の尊敬する所なり　微笑したまへるは何の因緣ぞや　智の海智慧の樹　諸の群生を開導したまひて　功德に邊ある無し　何の緣にて微笑を現したまへるか　名稱は三世に遍く　垢を離れ三明を具し　已に三解脫に度りたまふ　何の緣にて微笑を現したまへるか　生死を破したまふ醫王　足下には輞輪具り　金剛の身は壞れず　微笑したまへるは何の因緣ぞや　誰れか能く此の忍を具し　誰れか此の淨行を修して　佛の功德を志求し　是れに

天子に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の言ふ所の如し。我れ昔此の行を得たる時に、燃燈世尊は我れに授記を與へたまひ、我れ時に無生法忍を獲得せり。是れを如來の最大神變と名け、久しく清淨の業を成就せる者の若きは、乃ち能く此の菩薩の行を修習せるなり。と。

爾の時に、商主天子は佛に白して言はく。世尊云何なるを名けて無生と名け、云何にせば當に此の無生法忍を得べきか。と。佛言はく。無生とは、先に生ずるに有つて後に生ずること無しと說くに非ずして、本より自ら生ぜざる故に無生と名くるなり。先に起る有つて後に起ること無しと說くに非ずして、本來起らざる故に無起と名くるなり。先に相有つて後に相無しと說くに非ずして、本來相無き故に無相と名くるなり。先に作す有つて後に作すこと無しと說くに非ずして、本より自ら作すこと無き故に無作と名くるなり。先に衆生有つて後に空なりと說くに非ずして、衆生の性は空なる故に說いて空と爲すなり。是くの如くに、無生・無滅にして本より染る所無き、是れを無生と名くと了知せよ。云何なるを忍と爲す。是くの如くに、一切の衆生・一切の刹土は本來不生なりと忍可する、是れを名けて忍と爲す。是くの如くに、一切の聲聞・辟支佛は本來不生なりと忍可する、是れを名けて忍と爲す。是くの如くに、一切の菩薩・一切の諸佛は本來不生なりと忍可する是れを名けて忍と爲す。是くの如くに、一切の諸法は本來不生なりと忍可する、是れを名けて忍と爲す。天子、諸法は不生なる故を以て、刹那刹那に空なり。刹那に空なる故を以て、名けて無相と爲し、刹那に無相なる故に、色は刹那に空なり。色は刹那に空なる故に、受・想・行・識も刹那に空なり。識は刹那に空なる故に、界も刹那に空なり。界は刹那に空なる故に、處も刹那に空なり。若し刹那に空ならば、則ち有る所無し。有る所無き故に、則ち染る所無し。染る所無き故に、則ち自性は離れ、自性離るる故に、是れを一切の法は本來寂靜なりと名く。能く是くの如くに忍して平等に入る、是れを則ち名けて、無生忍を得て菩提の記を受くと爲すなり。此の忍を得る者を、得る所無しと爲

責する故なり。非法を離るるは是れ菩薩の行にして、善根を積集する故なり。悋惜無きは是れ菩薩の行にして、身命を捨つる故なり。諸惡を滅するは是れ菩薩の行にして、熱惱無き故なり。著する所無きは是れ菩薩の行にして、愛・非愛を離れたる故なり。壞らるる無きは是れ菩薩の行にして、正しく煩惱を觀ずる故なり。怖畏せざるは是れ菩薩の行にして、無邊の生死に入る故なり。大精進は是れ菩薩の行にして、一切の衆生を荷負する故なり。退轉せざるは是れ菩薩の行にして、昔の願を成滿する故なり。衆寶の行は是れ菩薩の行にして、三寶を攝むる故なり。一切行は是れ菩薩の行にして、[16]助道の法を勤修する故なり。障礙無きは是れ菩薩の行にして、二邊を離るる故なり。過失無きは是れ菩薩の行にして、智者の讃する所なる故なり。安住の心は是れ菩薩の行にして、一切の衆生を念ずる故なり。分別する無きは是れ菩薩の行にして、一切を等しく觀る故なり。善丈夫なるは是れ菩薩の行にして、荷擔して倦む無き故なり。勇猛なるは是れ菩薩の行にして、一切の煩惱を摧破する故なり。堅固なるは是れ菩薩の行にして、作す所を中に廢せざる故なり。勝出するは是れ菩薩の行にして、精進して退かざる故なり。隨順するは是れ菩薩の行にして、諸の同侶に於て違逆する無き故なり。歡喜は是れ菩薩の行にして、惡を行ふ者に於て歡喜せしむる故なり。信樂は是れ菩薩の行にして、佛を見、法を聞き、師に事へて欣悦する故なり。金剛の甲冑なるは是れ菩薩の行にして、律儀を毀らざる故なり。佛土を莊嚴するは是れ菩薩の行にして、其の心を淨むる故なり。一切に超過するは是れ菩薩の行にして、最上の乘に入る故なり。恩を知り恩を報ずるは是れ菩薩の行にして、佛種を斷たざる故なり。智慧方便は是れ菩薩の行にして、攝受して斷つこと無き故なり。と。此の菩薩の行を說ける時に、五百の菩薩は無生法忍を得たり。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白して言はく。快き哉、善く此の菩薩の行を說けることや。若し諸の菩薩にして、是くの如き行を能くせば、則ち已に如來の記別を受けたりと爲さん。と。佛は

【一六】助道の法。謂はゆる「三十七道品」を指す。

れども、二相の故無し。有爲の界は是れ佛の境界なれども、三相の故非ず。天子是れを佛の境界と名く。是くの如き境界は、一切の界に入つて、若しは邊・無邊を皆悉く攝受す。菩薩は善く是の境界に入る故にて、常に世間の一切の境界に行き、魔界を超過し、佛界・魔界を實の如くに寂靜平等なりと了知する、是れを則ち名けて最大の神變と爲すなり。復次に、菩薩は、平等に住せずして、平等の法を以て衆生を成熟するなり。云何なるは平等及び非平等なる。一切諸法の自性は空寂なり。と、是くの如くに了知するを平等に住すと名け、諸法の性空に入る能はざるを非平等と名く。菩薩は【一五】是くの如き衆生を成熟し、而も亦空平等に住せざる故なり。一切の諸法の無願平等・無作平等・無生平等・無滅平等・離染平等・寂靜平等・無性平等・滅平等・涅槃平等なるを、彼れ是の平等の法を了知せざれば、菩薩は是くの如き衆生を成熟して、亦平等に住せざる故なり。是の故に、菩薩は平等に住せず、平等を離れず。是れ菩薩の行なり。と。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白して言はく。願はくば、我が爲めに諸の菩薩の行を說かんことを。と。文殊師利の言はく。天子、菩薩の行は不可思議なり。天子言はく。云何にして、菩薩の行は不可思議なるか。文殊師利言はく。貪行は是れ菩薩の行なるに、貪は不可思議なる故なり。瞋行は是れ菩薩の行なるに、瞋は不可思議なる故なり。癡行は是れ菩薩の行なるに、癡は不可思議なる故なり。慳悋せざるは是れ菩薩の行なるに、施の相無き故なり。戒を毀らざるは是れ菩薩の行なるに、戒の相を取らざる故なり。恚害せざるは是れ菩薩の行なるに、忍の相無き故なり。懈怠せざるは是れ菩薩の行なるに、精進の念を離れたる故なり。散亂ならざるは是れ菩薩の行なるに、定に住せざる故なり。愚癡を離るるは是れ菩薩の行なるに、智の想を作さざる故なり。煩惱無きは是れ菩薩の行なるに、斷ずる所無き故なり。貪愛無きは是れ菩薩の行なるに、身の相を離れたる故なり。悲愍の心は是れ菩薩の行なるに、女人の慈を捨つる故なり。染汙無きは是れ菩薩の行にして、五欲を呵

【一五】是くの如き衆生。前句の「非平等なる者」を指す。

無し。是の故に言說を毀らば、涅槃に至るを得。是の義を以ての故に、一切の諸法は本來解脫して、復と解脫せざるなり。又問ふ。是の義は云何。答へて曰はく。已に解脫せる者は、寧更に解脫せんや。又問ふ。正法を謗らば豈地獄に入らざるか。答へて曰はく。若し已に解脫せば、則ち諸垢を離る。云何ぞ地獄に趣かんや。天曰はく。文殊師利、汝の說く所の如きには、讃助する者無けん。答へて曰はく。空・無相・願の中に何を讃助する所ぞ。又問ふ。空行を修する者は、當に何所に住すべきか。答へて曰はく。當に慈に住すべし。所以は何ぞ。衆生は幻の如くに自性空なるが故なり。天曰はく。文殊師利、云何に諸の衆生界を了知するか。答へて曰はく。一切衆生は因緣從り起つて不斷・不常なりと見る。是の故に衆生界を遍く知るなり。又問ふ。衆生界とは何の義と爲すか。答へて曰はく。衆生界は卽是れ法界なり。又問ふ。云何なるは法界なる。答へて曰はく。自性空なる界を名けて法界と爲す。又問ふ。何をか空なる界と謂ふ。答へて曰はく。一切の境界に超過せるは、是れ虛空なる界なり。又問ふ。何等か是れ界を超過せる。答へて曰はく。是れ佛の境界なり。又問ふ。何をか佛の境界と謂ふ。答へて曰はく。眼の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、眼と眼の色と眼の識との境界の故に非ず。耳の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、耳と耳の聲と耳の識との境界の故に非ず。乃至、意の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、意と意の法と意の識との境界の故に非ず。色の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、色の境界の故に非ず。受・想・行・識の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、受・想・行・識の境界の故に非ず。無明の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、無明の界の故に非ず。乃至、老・病・死の界は是れ佛の境界なり。然れども、佛の境界は、老・病・死の境界の故に非ず。欲界は是れ佛の境界なれども、貪相の故無し。色界は是れ佛の境界なれども、貪を對除する故非ず。無色界は是れ佛の境界なれども、無明の見の故に非ず。無爲の界は是れ佛の境界な

せりや。答へて言はく。是くの如し。又問ふ。汝の意は云何。答へて曰はく。我れ佛の法及び一切衆生を捨てず。是の故に慳を爲すなり。天曰はく。文殊師利の說く所の義の如くんば、亦戒を破るか。答へて言はく。是くの如し。天曰はく。汝の意は云何。答へて曰はく。夫れ戒を破る者は則ち惡趣に墮す。我れ苦の衆生を度脫せん爲めの故に惡趣の中に入る。故に戒を破ると名く。又問ふ。汝は害心を起せりや。答へて言はく。是くの如し。天曰はく。汝の意は云何。答へて曰はく。夫れ害心とは名けて不愛と爲す。我れ煩惱及び二乘に於て都べて愛する所無し。故に害心と名く。又問ふ。汝は懈怠なりや。答へて曰はく。是くの如し。又問ふ。汝の意は云何。答へて曰はく。我れ身・口・意の業を起さず、進み求むる所無く、取らず捨てず。故に懈怠と名く。又問ふ。汝は散亂なりや。答へて言はく。是くの如し。天曰はく。汝の意は云何。答へて曰はく。夫れ散亂とは、解脫に住せざる心を謂ふに非ずや。天曰はく。是くの如し。答へて曰はく。我れ一切衆生を成熟せん爲めの故に解脫に住せず。故に亂心と名く。又問ふ。汝は無智なりや。答へて曰はく。是くの如し。又問ふ。汝の意は云何。答へて曰はく。夫れ無智とは、諸の愚惑に同じて生死を怖れざるなり。豈爾らずや。天曰はく。是くの如し。答へて曰はく。我れ生死に於て驚かず怖れずして、愚惑の衆生を成熟せんと欲する爲めの故に、其の事業を同じうす。故に無智と名く。天曰はく。汝は世間に爲つて供養に堪ふる者なりや。答へて曰はく。我れ一切に於て殺害の心を生ずればなり。又問ふ。汝の意は云何。答へて曰はく。我れ彼の貪欲・瞋・癡を殺害する故に、世間に爲つて供養に堪ふる者なり。天曰はく。汝の說く所の如くんば、諸の世間をして悉く當に驚怖せしむべし。答へて言はく。天子、若し實際は驚怖せば、則ち世間は驚怖せん。何を以ての故ぞ。一切の世間は卽、實際なる故なり。又問ふ。若し復人の、此の說を誹毀するあらば、當に何の所にか至るべき。答へて曰はく。當に涅槃に至るべし。又問ふ。何の意を以てなるや。答へて曰はく。聖解脫の中には文字あること

にして、而も著する所無きなり。云何なるは天耳なる。答へて曰はく。一切の聲を聞きながら、諸の聲の相を離るるなり。云何なるは他心なる。答へて曰はく。諸心の生滅・流注を了知するなり。云何なるは宿命なる。答へて曰はく。不動の實際として、前際を了知するなり。云何なるは神通なる。答へて曰はく。魔業を動さずして諸魔を摧破するなり。云何なるは調伏なる。答へて曰はく。能く一切の調伏し難き者を調ずるなり。云何なるを護と爲す。答へて曰はく。諸根の爲めに擾亂せられざるなり。云何なるは調順なる。答へて曰はく。一切諸法の動す能はざる所なり。云何なるは寂靜なる。答へて曰はく。煩惱の火に處り而も燒かれずに、煩惱の者を度せんとして法を演說するなり。云何なるは淨信なる。答へて曰はく。若し佛身は是れ色相の法なりと說くとも、終まで信受せずして壞る所と爲らざるなり。云何なるは菩薩の善巧方便なる。答へて曰はく。若し衆生の煩惱過失を見るとも、菩提に等しうする、是れを菩薩の善巧方便と名く。と。此の法を說ける時に、萬二千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、五百の菩薩は無生法忍を得たり。爾の時に、世尊は讃じて言はく。善い哉、善い哉。文殊師利。善く諸の菩薩の行を演說し能ひたれば、則ち已に一切の菩薩の無量の功德を攝めたりと爲す。と。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白うて言はく。仁は往昔に於て、幾の佛世尊を恭敬し供養して、是の辯才を得たるか。と。文殊師利の言はく。譬へば、幻人の心の數の已に滅したるが如し。天曰はく。衆生の心相すら尙得可からず。何に況んや、幻人にして心有つて滅せんや。答へて曰はく。諸佛如來の性相は是くの如し。我れ是の法に依つて如來を供養したり。天曰はく。仁者は檀波羅蜜を行ぜること久近と爲すや。答へて曰はく。佛の化する所の人に、若し問ふことあつて、久近に檀波羅蜜を行ぜりやと問ふ如くんば、當に云何に答ふべきか。天曰はく。答ふ可き無きなり。文殊師利言はく。我れも亦是くの如ければ、云何ぞ乃ち久近の行を問はんや。天曰はく。汝は慳に住

く。佛の說く所に依つて、一切の衆の邪異の論を摧滅する、是れを法を說くと名く。又問ふ。云何に律を說くか。答へて曰はく。自ら戒に住して、能く衆生の煩惱惡業を斷ずる、是れを律を說くと名く。又問ふ。云何に具足して衆生を利益するか。答へて曰はく。集むる所の善根を一切に迴向する、是れを具足して衆生を利益すと名く。又問ふ。云何なるは直心なる。答へて曰はく。貪・瞋・癡・諂曲の衆生に於て恚の礙を生ぜざるなり。又問ふ。云何なるは不諂なる。答へて曰はく。言ふ所誠實なるなり。又問ふ。云何なるは離誑なる。答へて曰はく。諦に思うて後に言ふなり。又問ふ。云何なるは離慢なる。答へて曰はく。一切の衆生に於て貢高を起さざるなり。又問ふ。云何なるは大施なる。答へて曰はく。集むる所の得難き無上菩提をすら猶衆生に施す。何に況んや、世間の有つ所の物をや。又問ふ。云何なるは具戒なる。答へて曰はく。乃至、命を失ふとも、終まで菩提の心を捨てざるなり。又問ふ。云何なるを忍と爲す。答へて曰はく。能く逼迫を忍んで他を逼惱せざるなり。又問ふ。云何なるは精進なる。答へて曰はく。諸法の少しも得可き無きを簡擇するなり。又問ふ。云何なるは禪定なる。答へて曰はく。欲を見ざる界なり。又問ふ。云何なるは智慧なる。答へて曰はく。分別する所無きなり。又問ふ。【一四】云何なるは住慈なる。答へて曰はく。衆生界の空にして有る所無きを觀るなり。云何なるは住悲なる。答へて曰はく。諸法の空なるを知り而も精進を捨てざるなり。云何なるは住喜なる。答へて曰はく。大寂に住し法を樂求して厭ふこと無きなり。云何なるは住捨なる。答へて曰はく。世法に染らずして能く世間を救ふなり。云何なるは身の清淨なる。答へて曰はく。意に隨ひ身を生じて、一切衆生に於て平等に示現するなり。云何なるは語の清淨なる。答へて曰はく。凡べて說法する所は、終まで空しく過たずして、悉く一切の衆生を滿足し能ふなり。云何なるは意の清淨なる。答へて曰はく。一切衆生の有つ所の心念を、一心の中に於て悉く了知し能ふなり。云何なるは天眼なる。答へて曰はく。能く一切の色相を見ること光明

【一四】「云何なるは住慈なる。」以下の四節。「四無量心」に住するに就いて曰ふ。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白して言はく。希有なり、希有なり。是の菩薩の智は、三界の中に於て最も殊勝と爲し、少荘嚴を以てして成就し能ふべからず。若し是の智慧を發生し能はば、大神變と爲さん。文殊師利、云何にせば、菩薩は此の法に於て具足し莊嚴し能ふか。文殊師利の言はく。天子、若し一切衆生の本來寂滅なるを聞きて驚怖を生ぜずんば、是れを菩薩は具足し莊嚴すと名く。天言はく。文殊師利、云何なるを菩薩と名くる。答へて言はく。若し菩提を行じて住する所無くば、是れを菩薩と名く。又問ふ。云何なるを摩訶薩と名くる。答へて曰はく。已に諸行に度つて大智を圓滿せるを摩訶薩と爲す。又問ふ。云何なるを說いて殊勝なる衆生と爲すか。答へて曰はく。智慧を以ての故に法に著せず。方便力を以て一切を攝受す。是の故に說いて殊勝なる衆生と爲す。又問ふ。云何なるを名けて清淨なる衆生と爲すか。答へて曰はく。一切の煩惱と與に住せざらんが故に、衆生の煩惱の病を除かんが爲めの故に、大精進を發す。是れを清淨なる衆生と名く。又問ふ。云何なるを名けて、極清淨なる衆生と爲すか。答へて言はく。若し一切の衆生を度脫せんが爲めに淨く【二三】道品を修せば、是れを極清淨なる衆生と名く。又問ふ。云何なる菩薩を世の導師と爲すか。答へて曰はく。若し能く行ずる所の道に安住して、無量無邊の衆生を成熟せば、是れを導師と名く。又問ふ。云何に菩薩は調伏に住するか。答へて曰はく。若し應ずる所に於て衆生を調伏して、能く究竟の調伏に安住せしめば、是れを調伏と名く。又問ふ。云何なるは、菩薩として得たる勇猛なるか。答へて曰はく。若し能く一切衆生を成熟せんと、魔怨を摧破して生死を出でしめば、是れを勇猛と名く。又問ふ。云何に菩薩は沮壞せられ難きか。答へて曰はく。若し能く往昔の誓願を成滿せんとして聲聞・緣覺の道證を求めずんば、是れを菩薩は沮壞せられ難しと名く。又問ふ。云何に菩薩は一切に勝出するか。答へて曰はく。智の方便を以て正法を護持して衆生を成熟し、一切の天・人の瞻仰せざる靡き、是れを勝出と名く。又問ふ。云何に法を說くか。答へて曰は

【二三】道品。「三十七道品」を謂ふ。

法を了知するが故に。方便の智なり。衆生を成熟するが故に。[二]慈の智なり。諸有を抜くが故に。悲の智なり。疲倦無きが故に。喜の智なり。法を愛樂するが故に。捨の智なり。佛の法を成就するが故に。觀察の智なり。[三]念處に住するが故に。[四]正勤の智なり。平等に順ずるが故に。[五]神足の智なり。作用無きが故に。[六]信の根・力の智なり。一切の著を離るるが故に。精進の根・力の智なり。一切の煩惱を摧破するが故に。念の根・力の智なり。念を失はざるが故に。定の根・力の智なり。一切の法に平等なるが故に。慧の根・力の智なり。諸根の性を知るが故に。[七]菩提分の智なり。自然の覺なるが故なり。[八]道の智なり。諸の惡趣を抜くが故に。[九]盡の智なり。善根盡くる無きが故に。[一〇]無生の智なり。無生の忍を得るが故に。[一一]念佛の智なり。佛身を成就するが故に。念法の智なり。法輪を轉ずるが故に。念僧の智なり。平等の衆に入るが故に。念捨の智なり。一切の衆生を捨てざるが故に。念戒の智なり。一切の願を圓滿にする故に。念天の智なり。一切の惡を離るるが故に。衆生の根の智なり。無量を了知するが故に。圓滿の智なり。戒に於て缺くる無きが故に。衆生の業の智なり。實の如くに相應する故に。處・非處の智なり。處を見ざるが故に。十力の智なり。諸の聲聞・緣覺を攝するが故に。[一二]無畏の智なり。障・非障を了知するが故に。過去世に無礙なる智なり。著する所無きが故に。未來世に無礙なる智なり。一切の法に趣く所無きが故に現在世に無礙なる智なり。住する所無きが故に。一切衆生の受くる無量身の智なり。語言從り生ずるが故に。一切衆生の言音の差別の智なり。心從り生ずるが故に。一切衆生の心の動く所の智なり。能く覺了する故に。過失無き智なり。一切衆生の過失を了知するが故に。卒暴無き智なり。能く一切の諸の鬪諍を息むるが故に。失念せざる智なり。亂心の衆生を安住せしむる故に。衆生を攝する智なり。諸の懈怠を攝むるが故に。佛の不共の智なり。應化を知るが故に。大方便の智なり。般若に依るが故に。天子、是れを諸の菩薩の智と名く。是の智を以てするが故に、當に如來の無礙の大智を得べきなり。と。

【二】「慈の智なり。」以下の四句。「四無量心」に就いて曰ふ。

【三】念處。「四念處」なり。

【四】正勤。「四正勤」なり。

【五】神足。「四神足」なり。

【六】「信の根力」以下の五句。「五根・五力」に就いて曰ふ。

【七】菩提分。「七菩提分」なり。

【八】道。「八聖道」なり。

【九】盡の智。「盡智」なり。

【一〇】無生の智。「無生智」なり。

【一一】念佛、乃至、念天。謂はゆる六念なり。六念とは、一に、念佛（佛と同じからんと念ず。）二に、念法（如來の十二部經を解了して衆生に施さんと念ず。）三に、念僧（戒定慧の僧行を修せんと念ず。）四に、念捨（善施を以て衆生を攝取せんと念ず。）五に、念戒（精進に戒を護らんと念ず。）六に、念天（善根の果界たる天處に生ぜんと念ず。）（但し、二乘は、三界の諸天及び淨天に生じ、菩薩は、第一義に生ずる者と曰はる。）是れなり。

【一二】無畏。「四無所畏」なり。

魔を摧伏する故に則ち障礙無く、障礙無き故に則ち現前に一切の佛法を得ることを爲せばなり。是くの如くに、天子、一切法の無生・無作に於て開示し演說する、是れを則ち名けて大神變を說くと爲すなり。と。

爾の時に、舍利弗は、文殊師利に白して言はく。我が問ふ所の如きに、仁者は皆祕密を以て說くか。と。文殊師利は舍利弗に言はく。一切の諸法は、文字の合集・假名の安立にして、文字は盡くること無ければ、樂に隨つて諸法の無性を說くに、應に解することを得べきが如くにするなり。舍利弗、一切の法は、自性離れて積集する無く見る所無ければ、但、樂欲に隨ひ、應ずるが如くに演說するなり。而して此の法は、從つて來る所無く亦去く所も無く、方に在らず方を離れず、集る無く散ずる無ければ、文字を以て說くが若きも、一切の佛の法・一切の衆生の法は、身從り出でず心從り出でずして、因緣從り生ずるなり。彼の文字の、積集することある無きが如くに、心・心所の法も亦積集する無く、心・心所の積集ある無きが如くに、一切の煩惱障礙も亦積集する無く、煩惱障礙の積集ある無きが如くに、智慧も亦積集する所無し。是の故に、煩惱・智慧二ながら倶に捨離し、煩惱・智慧の住する所無き故、是れを則ち名けて大神變を說くと爲すなり。と。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白して言はく。何等か是れ菩薩の智なる。と。文殊師利は言はく。苦の智なり。諸蘊を厭はざる故に。集の智なり。善根を積集する故に。滅の智なり。有生を示す故に。道の智なり。惡道を離るる故に。因の智なり。作す所壞れざる故に。緣の智なり。生死を斷つ故に。佛の智なり。入證せしむる故に。〔一〕緣生の智なり。著する所無き故に。蘊の智なり。蘊の魔を除く故に。界の智なり。法界に平等なる故に。處の智なり。善く空の聚を觀ずる故に。施の智なり。非時無きが故に。戒の智なり。諸の破戒を攝むるが故に。忍の智なり。衆生を守護するが故に。精進の智なり。善業を作すが故に。禪定の智なり。定心を離れざるが故に。智慧の智なり。諸

【一】緣生。有爲法の、因緣にて生ずる義なり。

卷の第八十七

大神變會　第二十二の二

爾の時に、世尊は大衆の中に於て、商主天子を讃ずらく。善い哉、善い哉。汝の言ふ所の如し。天子、汝は文殊師利の說く所の神變を聞き、而して能く餘の神變を了知して更に驚怖する無し。何を以ての故ぞ。一切世間の大に驚怖する者は、謂はゆる、常の想の中に於て無常の想を說き、樂の想の中に於て苦の想を說き、我の想の中に於て無我の想を說き、淨の想の中に於て不淨の想を說き、有の想の中に於て無の想を說き、諸見の中に於て空の想を說き、寂靜の想の中にて無の想を說き、三界の中に於て無願の想を說き、我・我所に於て無著の想を說くことなればなり。若し是の中に於て驚かず怖れずんば、是れを則ち名けて正調伏に住すと爲すなり。何を以ての故ぞ。若し驚怖を生ぜば、則ち是の法に於て受持すること能はずして、謂はゆる我及び我所に執著すれども、若し執著する無くんば則ち住する所無く、住する所無くんば則ち動する所無く、動する所無くんば則ち來・去無く、來・去無くんば則ち受くる所無く、受くる所無くんば則ち取る所無く、取る所無くんば則ち顚倒する無く、顚倒する無くんば則ち邪見無く、邪見無くんば則ち正信無く、正信無くんば則ち正見無く、正見無くんば則ち正定無く、正定無くんば則ち亂心無く、亂心無くんば則ち處に住する無く、處に住する無くんば則ち建立する無く、建立する無くんば則ち識の相無く、識の相無くんば則ち思惟する無く、思惟する無くんば則ち得る所無く、得る所無くんば則ち攀緣する無く、攀緣する無くんば則ち分別する無く、分別する無くんば則ち自・他を見ず、自・他を見ざる故に則ち相續無く、相續無き故に則ち熱惱無く、熱惱無き故に則ち煩惱の因無く、煩惱の因無き故に光明を見るを得、光明を見る故に則ち智慧を得、智慧を得る故に廣大心を得、廣大心を得る故に魔は便を得ず、

ず、障礙の根に非ず、惡作の根に非ず、生・滅の見の根に非ず、斷・常の見の根に非ず、我見・人見[二三]衆生見・壽者見の根に非ず、蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔の根に非ざるなり。彼の善根とは妄念の根に非ず、無明の根に非ず、行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老・死・憂・惱の根に非ざるなり。彼の善根とは欲界・色界・無色界の根に非ず、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の根に非ず、慈・悲・喜・捨の根に非ず、聲聞・緣覺の證する所の根に非ざるなり。菩薩の善根とは謂はゆる、心住する所無き一切智の根、自作・他作無き根、忍辱調伏の根、身・口・意を莊嚴する根、大慈・大悲の根、一切の衆生を成熟する根、一切の法を攝受する根、一切の佛法を成就する根、三寶の種を斷たざる根、一切の所有を捨てて果報を求めざる根、衆善を積集して釋・梵[二四]を求めざる根、大精進を發して小乘を樂はざる根、禪定を修習して味著せざる根、捨つる所無きを以て、智慧を行ずる根、遍く諸行に入つて方便を修むる根、十力・四無畏を具足する根、陀羅尼・無礙の辯を得る根、神通力を獲て佛土を淨むる根、菩提樹[二五]に趣き法輪を轉ずる根なり。と。文殊師利の、此の三種の決定の義を說き已るや、一切の大衆は、咸く善い哉と稱し、種種の花を以て世尊及び文殊師利の上に散じて、是くの如き言を作さく、若し佛刹の中に文殊師利無くんば、佛は出世したまはじ。文殊師利非ずんば、一切衆生の廣大なる善根を成熟すること能はじ。若し文殊師利の說く所の法門を聞くことを得るあつて、驚かず怖れずんば、一切の魔業の障礙を遠離し、此の大乘に於て淸淨なる光明を得ん。と。

【二三】人見。我を持てる實の人々有りと固執する者にして、又、人我見とも曰ふ。

【二四】釋・梵。帝釋と梵天との略なり。

【二五】菩提樹。「佛果證得」の義に用ひたり。

す。魔道を超過するを名けて梵行と爲せども、我れは常に諸の魔道の中に安住す。是の故に、我れは梵行を久修せず。善法を成就するを名けて梵行と爲せども、我れは善惡に於て都べて得る所無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。聲聞・緣覺の、正位に住する所を名けて梵行と爲せども、我れには證する所無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。涅槃の道を修むるを名けて梵行と爲せども、我れは涅槃に於て願求する所無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。復次に、舍利子、汝の我れを說く所の、多く佛を供養す。とは、汝は如來をば供養す可しと謂ふか。所以は何ぞ。如來には色非ずして、亦見る可からざれば、云何にして如來を供養することを得ん。如來には受非ずして、一切の受を息め、如來には想非ずして、一切の結を離れ如來には行非ずして、畢竟じて作無く、如來には識非ずして、心意を出過したれば、云何ぞ如來を供養することを得べけんや。復次に、如來は性空に行みたれば、眼・色の界に非ず。無相の際に住したれば耳・聲の界に非ず。二相を離れたれば、鼻・香の界に非ず。知る可き相無ければ、舌・味の界に非ず。障礙の相無ければ、身・觸の界に非ず。平等に入れば、意・法の界に非ず。云何ぞ如來を供養することを得べけんや。又、如來をば名けて法界と爲し、名けて如如と曰ひて、實際に入りて大空に住し、本性を動せずして、諸の戲論を斷ち、攀緣する所無くして識に住せず、三界に依らず、亦今世・後世に住せず、常寂極寂にして身口意を離れ、形無く相無く、毀無く譽無く、漏無く失無く、猶虛空の一切處に遍するが如くなり。云何ぞ如來を供養することを得べけんや。復次に、舍利弗、汝の說く所の如く、諸の善根を種う。とは、此の善根とは、身見の根に非ず、貪・瞋の根に非ず、顚倒の根に非ず、五蘊・六入・七識住の根に非ず、八邪・九惱[一八]・十不善の根に非ざるなり。彼の善根とは、戒學の根に非ず、心學[一九]の根に非ず、慧學の根に非ず、正趣道[二〇]の根に非ず。明解脫[二一]の根に非ず、四諦・六通の根に非ず、九次第定・[二二]十無學の根に非ず、五根・五力・七菩提分・八聖道の根に非ざるなり。又善根とは、結使の根に非

【一八】九惱(Nava āghātavatthūni)。自己並に自己の好愛する者に、不利を爲せり、爲す、爲すならんと不快を懷き、自己の好愛せざる者に、利益を爲せり、爲す、爲すならんと不快を懷きて、惱むを謂ふ。

【一九】心學。「定學」に同じ。

【二〇】正趣道。謂はゆる「聖性離生」を謂ふ者なるべし。第三卷「正定聚」の解、參照。

【二一】明解脫。涅槃の果德を指す者なるべし。小乘にては阿羅漢果を謂ふ。

【二二】十無學(Dasa asekha dhammā)。普通は、八正道に正智・正解脫の二つを加へたる者を謂ひ、阿羅漢の得る十種の勝德と爲す。

爾の時に、等須彌如來は、念大悲王子を讃じて言はく。善い哉、善い哉。善男子、汝、平等の法を見たる故に大悲に住せり。出家の正しき信は、在家の菩薩に於て最も殊勝と爲し、出家の功德と等しうして異るあること無し。と。爾の時に、淨莊嚴王は、卽、念大悲を立てて王位を紹がせ、九百九十九の王子と與に、佛に從つて出家せり。既に出家し已るや、等須彌如來は是の神變の法の如きを說くことを爲せしが、後に於て久しからずして五神通を獲、一念總持の多聞智慧を得たり。時に、念大悲は、十五日に於て灌頂の位を受け、亦是の法を以て、四天下の一切衆生の爲めに宣示教化したるに、九十二倶胝の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、悉く等須彌如來の法中に於て、出家して道を修め、大乘に住して不退轉を得たり。

舍利弗、汝是の法の、無量の功德にて、一切の善根の衆生を成熟することを觀ぜよ。舍利弗、彼の淨莊嚴王とは、豈異人ならんや。今の商主天子是れなり。法速疾菩薩とは、今の文殊師利是れなり。彼の千子とは、此の賢劫の中の千佛是れなり。念大悲王子とは我が身是れなり。舍利弗、是の諸の菩薩は、深心に正行して放逸ならざりし故に阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。と。此の往昔の修行の法を說ける時に、三萬二千の天・人は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

爾の時に、舍利弗は文殊師利に語つて言はく。仁と商主天子とは梵行を久しく修し、多く佛を供養して、諸の善根を種ゑたり。と。文殊師利の言はく。大德、夫れ梵行とは八聖道と名け、是れ有爲の法なるに、我れは卽無爲なり。是の故に、我れは梵行を久修せず。夫れ梵行とは、行ずる所有るに名くるに、我れには行ずる所無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。又、梵行とは二相を爲むるに名くるに我れには二相無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。又、梵行とは、煩惱を滅するに名くるに、我れには煩惱無く亦滅する所も無し。是の故に、我れは梵行を久修せず。五欲に馳騁するに梵行を說けども、我れは五欲に於て本より行ふ所無し。是の故に、我れは梵行を久修せ

【一七】念總持。憶念・總括・受持の義にして、此所にては、四種總持の中の聞總持・義總持の二つを曰ふ者なるべし。

ずる所に順ぜよ　家を捨てば惱縛を離れ　惱を除かば魔縛を離れ　心解け行無染ならば　久しからずして菩提を證せん　と。

爾の時に、淨莊嚴王は此の偈を聞き已るや、自在王の位に於ける一切の愛欲を皆悉く捨離して、卽、佛に白して言はく。世尊、我れ願はくは、佛の善法律の中に於て出家して受戒せんことを。と。時に等須彌如來は告げて言はく。大王、出家せば患無ければ、我れ常に勸讃す。居家に樂著するは我が許す所に非ず。汝、王位に於て猶愛著あらば、我れ當に汝に敎へて法の如くにして住せしむべし。と。

爾の時に、淨莊嚴王は千子に告げて言はく。汝等、誰れか能く王業を紹繼するぞ。と。諸子は咸く言はく。我等も亦出家を樂ふ。願はくば、聽許を垂れたまはんことを。と。父王は告げて言はく。汝等若し悉く出家せば、此の四天下の國土人民をば、誰れか當に養育すべき。若し汝等にして大悲堅固ならば、應に王と作つて、普く衆生をして善法に安住せしむることを爲すべし。と。時に千子の中に、一の王子の、念大悲と名くるありしが、卽、偈頌を以て父王に答へて言はく。

父王は佛法に於て　諸の功德を得る所にて　我れ王位を受くることを悲むも　亦當に是くの如くに學ぶべし　我れ常に梵行を修め　形を盡すまで八戒を持ち　我れ當に飮酒せず　香華を塗飾せず　身より莊嚴の具を去り　金の床座に臥さず　足は金屣を躡まず　首に寶冠を飾らず

天の妙衣を著けず　諸の妓樂を觀ず　奇なる鳥獸を翫ばず　宮女の人を從へさるべし

四天下を周巡して　十善の道を宣行し　家の過患を訶責して　出家の法を讃歎し　自在の憍慢を捨てて　佛法僧に親近し　菩提心より退かずして　常に三界を厭ひ　施愛利益　同事を以て衆生を攝めて　普く大乘に於て　悉く當に成熟することを得べからしめ　晝夜六時の分に　當に佛の所に往き　法を聽聞せん爲めの故に　彼の如來を供養したてまつるべし　と。

と非友とに於て心平等なる故なり。深心を勤め修するは是れ菩薩の行なり。果報平等にして求むる所無き故なり。多聞して厭ふ無きは是れ菩薩の行なり。說法と聽法と俱に平等なる故なり。法を慳悋せざるは是れ菩薩の行なり。平等に說法して希求せざる故なり。正法を攝受するは是れ菩薩の行なり。平等に諸の佛法を成熟する故なり。常に實智を求むるは是れ菩薩の行なり。第一義諦の性は平等なる故なり。其の心を謙下するは是れ菩薩の行なり。[一六]等心にて諸の衆生に謙下する故なり。普く一切の諸善功德を攝むるは是れ菩薩の行なり。功德に平等にして念ずる所無き故なり。と。

爾の時に、淨莊嚴王は、是くの如き諸の菩薩の行を說くを聞き、歡喜踊躍して愛樂の心を生じ、即衣服・嚴身の具を脫して、法速疾菩薩に與へたり。時に王の千子も亦各身の莊嚴の具を脫し、用つて菩薩に上り、是くの如き言を作さく。願はくば、一切の衆生をして、菩薩の行を成じて是の辯才を得しめたまはんことを。我等今は快く善利を得たり。是くの如き眞の善知識に見えて、恭敬し供養することを得たれば。と。

爾の時に、法速疾菩薩は淨莊嚴王に告ぐらく。汝の供養する所のものは甚だ下劣と爲す。當に知るべし。復殊勝なる供養あることを。と。時に法速疾菩薩は、偈を以て頌して曰はく。

大千界の衆生の　皆菩提に發趣して　假令ひ一劫を盡して　男女以に奉施すとも　若し人道意を
發し　信を以てして出家し　佛に隨つて修學せんに　其の福は彼れよりも勝れり　過去未來
世の　一切の諸の如來にして　家を捨てずして　無上道を成ずるを得たるもの有ること無し
三世の一切の佛は　出家の法を稱讚したまへば　若し佛を供養せんと樂はば　當に佛に依つて
出家すべし　設ひ恒沙の界に滿ちたる　珍寶もて佛を供養すとも　一日の中　出家して寂靜
を修するに如かず　彼れ則ち菩提に近かば　魔軍の衆を摧破し　出家して放逸ならずば　白
法は恒に增長せん　衆の善根を壞らず　諸の煩惱を遠離し　家業の累を捨てて　道聖の讚

【一六】等心。平等心の略にして、一切衆生に於て、怨親の思無きを謂ふ。

に於て願求する所あらば、徒に自ら疲勞するのみ。何を以ての故ぞ。菩提の性の如くに菩薩は應に行ずべく、能く是くの如くに行ずるを、名けて正行と爲せばなり。と。爾の時に、淨莊嚴王は法速疾菩薩に白して言はく。願はくば、我が爲めに菩薩の正行を說きたまはんことを。と。法速疾言はく。大王、諸の所有を捨つるは是れ菩薩の行なり。衆生平等もて分別無き故なり。頭陀學戒は是れ菩薩の行なり。戒性平等もて行ずる所無き故なり。瞋・熱惱を離るるは是れ菩薩の行なり。忍性平等もて心の相無き故なり。堅固勇猛なるは是れ菩薩の行なり。精進平等もて心の行を離れたる故なり。三昧解脫なるは是れ菩薩の行なり。禪定平等もて緣ずる所無き故なり。聞慧の資糧は是れ菩薩の行なり慧性平等もて念ずる所無き故なり。[一五]梵住に於て生くるは是れ菩薩の行なり。染淨平等もて二つ倶に離るるが故なり。諸の神通を起すは是れ菩薩の行なり。神通平等もて念を生ぜざる故なり。辯才を具足するは是れ菩薩の行なり。法義平等もて心の相を離れたる故なり。勝解を成就するは是れ菩薩の行なり。法界平等もて動く所無き故なり。七覺分を修するは是れ菩薩の行なり。觀照平等もて懈怠せざる故なり。四攝の法を起すは是れ菩薩の行なり。諸法平等もて其の事に同ずる故なり。心を衆生に等しうするは是れ菩薩の行なり。心性平等もて分別する無き故なり。佛土を莊嚴するは是れ菩薩の行なり。淸淨平等もて虛空の如くなる故なり。三十二相は是れ菩薩の行なり。法の無相なるを觀じて平等に入る故なり。身・口・意を淨むるは是れ菩薩の行なり。三業の性を離れて平等なる故なり。衆生に隨喜するは是れ菩薩の行なり。一切の衆生に、等しく無我なる故なり。生死を厭はざるは是れ菩薩の行なり。夢の如くにして性平等なるを了知する故なり。常に善業を修むるは是れ菩薩の行なり。業平等ならば業報無きを知る故なり。堅固に修行するは是れ菩薩の行なり。一切の法の幻化の如くなるを觀ずる故なり。衆苦に安んじ忍ぶは是れ菩薩の行なり。平等ならば苦は生ぜざるを了知する故なり。善友に親近するは是れ菩薩の行なり。友

【一五】梵住。「四梵住」なり。又「四梵行」「四無量心」とも曰ふ。

永く退失ある無けん　衆生の心の　其の性は虚空の如くなるを了知しつつ　深く菩提の種を植ゑ　無邊の福德を得ん　我が今の志樂の如きは　唯佛のみ能く證知したまひて　天人乾闥婆は　知り能ふ者ある無し　我れ今は終まで　諸天の勝妙の報を求めずして　我れ當に智慧を得ること　佛人中の尊の如くなるべし　我れ百千歳に於て　親近して佛を供養せるは　菩提に發趣せん故に　此の無邊の業を修せるなり　我れ今千子　及び後宮眷屬と　願うて常に佛を供養し　菩提を成熟することを爲さん　我れ今善利を得たり　善く諸佛に見え　善く此の法を聞くを得て　菩提を愛樂すればなり　菩提を愛樂する若きは　則ち法を愛樂するを爲し　衆生を憐愍する故に　佛乘を捨てざるなり　と。

爾の時に、衆の中に、菩薩の、法速疾と名くるありしが、淨莊嚴王に語つて言はく。大王、汝は如來の神變に隨順せず、亦無上菩提に發趣せるにも非ず。何を以ての故ぞ。大王、菩提とは、法界に住するものにして、來らず去らず、知る無く行ずる無く、色に非ず相に非ず、取らず捨てず、虛空に畫くが如くに觸礙する所無く、本性淸淨なればなり。大王、菩提とは、一切の處に入るものなり。諸法は平等なる故なり。菩提は分別無し。諸相を離れたる故なり。菩提は寂靜なり。相を止息せる故なり。菩提は性淨なり。計著を離れたる故なり。菩提は不動なり。雜亂無き故なり。大王、菩提とは、心の平等なるに名く。起る所無き故なり。菩提とは、衆生の平等なるに名く。本より無生なる故なり。菩提とは、不生の生に名く。因緣は無性なる故なり。菩提とは顯示すべからず。心・意・識を離れたる故なり。大王、菩提は行ずる所無し。諸の境界を過ぎたる故なり。菩提には戲論無し。尋・思の相を離れたる故なり。菩提は空と爲す。性相は空なる故なり。菩提は無相なり。一切の相を離れたる故なり。菩提は無願なり。住する所無き故なり。菩提は無作なり。業報無き故なり。菩提は無爲なり。[一四]三相を離れたる故なり。大王、菩提とは性相是くの如くなれば、若し此の法

【一四】 三相。謂はゆる「有爲の三相」卽ち生相・住異相・滅相の三なるべし。

ざるが如くに　佛の世に處りたまふや　染著せらるる無し　師子王の　林野に吼ゆるが如くに　人中の師子は　性空に於て吼えたまふ　一切の法の　非有非無なるを說きて　邊見を離れしめたまへば　師子吼と名く　一切の相の　若しは生若しは滅なるに於て　無生滅を說きたまへば　師子吼と名く　此岸を分別し　或は彼岸を示せども　諸法に住したまはざれば　師子吼と名く　二相の　是れ染是れ淨なる　諸法の、性は淨なることを分別したまへば　師子吼と名く　貪瞋癡の行の　分別從り生ずるを　分別を起したまはざれば　師子吼と名く　生死の法は　無常無我なるをば　顚倒する從りして起ることを說きたまへば　師子吼と名く　生死と涅槃とは　本來寂靜にして　是れ大菩提〔一三〕（なりと說きたまへば）　師子吼と名く　諸見に縛せられて　世間に流轉せるに　性空を開示したまへば　師子吼と名く　如來導師の現ずる所の神變をば　悉く能く開示したまへば　師子吼と名く　一切の違順に於て　其の心傾動せずに　常に平等に住するを　隨順法忍と名く　佛の說きたまふ所の　甚深なる寂靜の法に隨順し　亦中に於ても證せざるを　隨順法忍と名く　諸の過惡を遠離し　善法を增長すれども　中に於て著する所無きを　隨順法忍と名く　諸法空の聲　一切見の聲を說けども二つ俱に著する所無きを　隨順法忍と名く　無邊なる佛法の聲　種種なる煩惱の聲に　聲の分別を起さざるを、隨順法忍と名く　施戒多聞　精進及び定慧を　法の如くにして修行するを　隨順法忍と名く　菩提心を捨てずして　一切は　清淨菩提の道なるを觀ずるを　隨順法忍と名く　如來の自意語にて　諸の佛法を開示したまふを　此れに於て疑惑無きを　隨順法忍と名く　若し我れ菩提を證せば　當に大師吼して　此の神變を演說すること　今佛の說きたまへるが如くなるべし　我れ不思議なる　無上の大福田に於て　已に種子を植ゑたれば終まで退轉ある無けん　假令ひ大地は壞れ　大海は悉く枯竭すとも　我が種うる所の善根は

〔一三〕「括弧内の句」。は當然在るべき者を、偈頌の限られたる字句のために、省かれたる者なれば、補ひたり。

薩を教化せんと欲する爲めの故に、大衆の中に於て種種の神變を現したり。

爾の時に、淨莊嚴王は、前んで佛に白して言はく。世尊、頗は神變の能く此れに過ぐるもの有りや。と。佛は大王に告ぐらく。如來には復殊勝なる神變あり。謂はゆる過去は已に滅し、現在は住らず、未來は未だ生ぜずして、心、心所無きを了知しながら、而も三世の心・心所の法を說き、一味の中に於て[三]三つの解脫を說き、一つの滅證に於て四つの聖諦を說き、諸法の空・無相・[四]願を開示して顚倒せる苦惱の衆生を成熟し、無相・無爲を說いて菩提を成就し、[五]不取・不捨なるに於て檀波羅蜜を說き、無住・無作なるに於て尸波羅蜜を說き、無我の法なるに於て羼提波羅蜜を說き、身心寂靜なるに毘離耶波羅蜜を說き、不亂・不攝なるに禪波羅蜜を說き、彼・此の岸を離れたるに般若波羅蜜を說き、動く所の念無きに而も方便を行じ、[六]依怙の相を離れたるに慈を修習し、無作の法を以て悲を修習し、欣悅を離れたるを以てして喜を修し、法に任せざるを以てして捨を修し、見る所無きを以てして天眼を起し、聞く所無き故にて天耳を起し、攀緣する所無くして他心智を起し、前際を離れながら宿命智を起し、身心動かずして[七]神足を起し、法に任せずして[八]念處を修し、無生滅を以てしながら四正勤を修し、[九]根に非ざるに根を說き、[一〇]力に非ざるに力を說き、諸法は寂靜なるに[一一]菩提の分を說き、法に差別無きに[一二]八の聖道を說き、寂靜に任せざるに奢摩他を修し、法相を遠離せるに毘鉢舍那を修し、本來寂滅なるに而も涅槃を說くなり。と。彼の佛世尊は、淨莊嚴王・千子・眷屬の爲めに此の神變の法を說ける時に、八萬四千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、淨莊嚴王及び千子は法忍を證せしが、佛の神力を以て、卽佛前に於て、偈を以て讃じて曰はく。

須彌山の　大海に映るが如くに　如來の威光は　諸の大衆を蔽ひたまふ　日の初めて出でて
一切の闇を破るが如くに　世尊の毫相は　遍く佛刹を照したまふ　月の圓滿にして　光明
の熾盛なるが如くに　佛德は圓滿にして　慧光は普く照したまふ　譬へば蓮華の　水に著か

【三】三つの解脫。謂はゆる「三解脫門」なり。
【四】願。願は「無願」の略なり。
【五】不取・不捨なるに於て、乃至、般若波羅蜜を說き。「六波羅蜜」に就いて曰ふ。
【六】依怙の相を乃至捨を修し。「四梵行」に就いて曰ふ。
【七】神足。「四神足」なり。
【八】念處。「四念處」なり。
【九】根。「信・勤・念・定・慧の五根」なり。
【一〇】力。「五力」なり。
【一一】菩提の分。「七助道法」又「七菩提分」にして「七覺支」とも曰ふ。
【一二】八の聖道。卽ち「八正道」にして又「八支」とも曰ふ。

ぎたるに、佛あつて等須彌如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名けて世に出現し、國を安樂と名け、劫を歡喜と名けたり。舍利弗、彼の佛世界の一切の衆生は、安樂を具足して、乃至、少しの苦惱の聲もあること無く、彼の佛國土は四寶にて成ぜられたり。金・銀・瑠璃及以び頗梨なり。地の平なること掌の如くに、清淨にして柔軟なること天の妙衣の如く、諸の難處無く、天・人充滿し、安穩熾盛にして快樂無量なる、是の故に名けて安樂世界と爲せり。彼の佛の法中は、純ら是れ菩薩にして、精進勇猛に、智慧光明に、修多羅王の陀羅尼を得て辯才無盡に、善巧方便もて分別して說法し、神通智慧もて魔怨を摧破し、解脫無礙に定忍を成就し、善く根性を知つて、病に應じて藥を與へ、大福德智慧の資糧を具して、諸の衆生の不請の友と爲り、神通力を以て遍く佛刹に遊び、智行の海に入つて施・戒・智慧・多聞に安住し、無邊の善根を方便もて迴向し、十力・四無所畏・一切の佛の法に住し、三昧諸禪解脫に遊戲せしが、彼の佛世尊は、是等の如き諸の大菩薩を以て眷屬と爲せり。彼の世界に於て、轉輪王の、淨莊嚴と名くる有りしが、正法にて世を化し、四天下に王として、七寶をば具足せり。王に千子ありしが、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、淨莊嚴王及び其の後宮も、亦皆已に阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。彼れ等須彌如來の壽は七十俱胝歲なりしが、爾の時に、淨莊嚴王は、百千歲の中に於て彼の佛如來及び菩薩衆に承事して衣服・飲食・一切の樂具を供養せり。王と千子及び其の後宮とは、清淨の信を得て法を愛し歡喜して更に異心無く、常に佛前に於て手自ら供養し、親近して法を聽くこと百千歲を過し已れり。時に王・千子及び內宮は、四念を獲得せり。何者を四と爲す。一には、佛菩薩を念ずるなり。二には、施を念ずるなり。三には、戒を念ずるなり。四には、菩提の心を忘れざるなり。此の念を得たる故に、若しは晝若しは夜に、常に佛及び諸菩薩に見ゆるを得たり。後、一時に於て、淨莊嚴王及び其の眷屬は法を聽かん爲めの故に、佛の所に往き至れる時に、彼の如來は諸菩

一切法の有らゆる言說に於て悉く神變と名くるなり。と。文殊師利は言はく。是くの如し、是くの如し。一切の言說の實に說く所無きを、大神變と名くるなり。と。是の法を說ける時に、一萬二千の天子は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、五百の菩薩は無生法忍を得たり。

爾の時に、長老舍利弗は商主天子に語つて言はく。汝此の神變を聞いて驚怖せざるや。天子答へて言はく。我れは卽神變なり、云何ぞ驚怖せん。舍利弗言はく。天子、何の密意を以てして是の言を作すか。天曰はく。一切の諸法の善・不善の若くに、無動にして而も動するを大神變と名くればなり。是の故に、舍利弗、善業を作す者は天上に生じて大威德を有つも、是くの如き善業は不可思議なり。一切衆生の生死に往來するも、亦不可思議なり。不可思議をば大神變と名く。佛の說かるる四種の境界の不可思議——一には、業境界の不可思議、二には、龍境界の不可思議、三には、禪境界の不可思議、四には、佛境界の不可思議——の如きなり。是の義を以ての故に、一切の法を說いて大神變と名くれば、應に驚怖すべからざるなり。復次に、舍利弗、若し如來は此の神變を說きたまはんに、虛空界は寧怖るること有りや。答へて言はく。不なり。天曰はく。若し虛空にして怖れずんば、云何ぞ問うて、汝驚怖せずやと言はん。舍利弗言はく。汝は、豈虛空に同じきか。天曰はく。佛の說かるる如く、內空・外空の若くんば、是れ虛空なり。不なりや。答へて言はく。是くの如し。天曰はく。是の故に、一切の衆生は是れ虛空の性なり。舍利弗言はく。天子、汝の說く所の如くんば、久しからずして亦當に此の神變を現ずべし。何を以ての故ぞ。一切の境界に超過するは、是れ大神變なる故なり。と。

爾の時に、舍利弗は佛に白して言はく。世尊、此の商主天子は、往昔、諸佛世尊及び文殊師利を供養して、乃ち能く是くの如き辯才を成就せりや。と。佛は舍利弗に告ぐらく。是くの如し、是くの如し、汝の說く所の如く、是れ文殊師利の成熟せる所なり。舍利弗、乃往の古世に、無量劫を過

以ての故に、如來の神變の、心相に出過せるを、聞く者は欣ばずして、一切の世間の信ずる能はざる所なり。復次に、眼の境界を超えて色の法に非ざる故に、是を神變と名く。耳の境界を超えて聲の法に非ざる故に、乃至、意の境界を超えて意の法に非ざる故に、顯示すべからずして、智の知る所に非ざる、是を神變と名くるなり。復次に、空・無相・願は言說すべからざるに、而も空・無相・無願を說く。是を神變と名く。起無く作無く性無く相無く生無く、滅無く、本來涅槃にして言說すべからざるに、而も涅槃を說く。是を神變と名くるなり。復次に、布施は清淨の三輪なる故に、是に神變と名く。何等を三と爲す。謂はく。我の相及び衆生の相を離れ、菩提を念ぜざるなり。持戒の清淨なるを、是に神變と名く。謂はゆる身・口・意の業に、作す所無き故なり。忍辱の清淨なるを、是に神變と名く、剎那に壞滅して、著する所無き故なり。精進の清淨なるを、是に神變と名く。去無く來無く、身心動かざる故なり。禪定の清淨なるを、是に神變と名く。心依る所無く、內外寂靜なる故なり。智慧の清淨なるを、是に神變と名く。諸法を照明して、一切の見を滅せる故なり。復次に、法に出の相無きに、出離の法を說くを、是に神變と名く。法に差別無きに、文字にて分別するを、是に神變と名く。法の行ずる所無きに、修行有るを說くを、是に神變と名く。法に來去無きに、來去有るを說くを、是に神變と名く。一つの道證に於て諸の果を建立するを、是に神變と名く。一味の法に於て三乘を分別するを、是に神變と名く。一切の諸佛は唯是れ一佛なるに、無量の佛を說くを、是に神變と名く。一切の佛土は唯一佛土なるに、無量の土を說くを、是に神變と名く。無量の衆生は卽一の衆生なるに、無量の衆生を說くを、是に神變と名く。一切の佛法は唯一の佛法なるに、無量の法を說くを、是に神變と名く。法は示す可からざるに、諸法を顯示するを、是に神變と名く。法は得る所無きに修習して證を作すを、是に神變と名くるなり。と。

爾の時に、商主天子は文殊師利に白して言はく。我が解する所の如くんば、仁の說く所の義は、

天下に於て障礙する所無く、日月の光明も亦隱蔽せずに本の如くにして住し、其の中の衆生も亦往來・方所を覺知せざるも、世尊、是くの如き神變は未だ殊勝と爲さざるなり。若しくば、如來は、一切の法の說く可からず、文字無く名相無く、乃至、心・意・識を離れ、一切の語言の道斷ち、寂靜照明なるに於て、而も文字語言を以て宣說して顯示する、是れを諸佛の最大なる神變と名く。復次に、如來は、不共の身と神通力との故にて、諸の衆生に隨ひ、種種をば示現して悉く歡喜せしむるも、是くの如き神變は、未だ殊勝と爲さざるなり。謂はゆる如來の大神變とは、我無きに我を說き、衆生無きに衆生を說き、人無きに人を說き、養育無きに養育を說き、名無きに名を說き、色無きに色を說き、受・想・行・識無きに受・想・行・識を說き、處[一]無きに處を說き、界[二]無きに界を說き、眼空を說くと雖も眼をば空なりとは言はず、色空を說くと雖も色をば空なりとは言はず、眼識空を說けども識をば空なりとは言はず乃至、意空及以び法空・意識空等にも亦復是くの如くに、是等の如き名無き相無き動無き知無き言無き法を說きて、一切の生滅の相を摧滅するものにして、是れ則ち如來の最大なる神變なり。是くの如き神變は、眼と相應せず、色と相應せず、眼識と相應せず、耳・聲・耳識と鼻・香・鼻識と舌・味・舌識と身・觸・身識と意・法・意識と相應せず。是くの如き神變は身と合せず。心と合せず。行無く作無く、諸の境界を離れて、一切の世間の信じ能はざる所なり。何を以ての故ぞ。世間と言ふ者を、名けて五蘊と爲すに、凡夫は此れに於て妄に執著を生じて、或は蘊は常なりと說き、或は無常なりと說く。是の義を以ての故に、一切の世間は、妄に蘊の常を見て、無常なりと說くを聞くや信を生ずること能はず。妄に蘊の樂を見て、蘊は苦なりと說くを聞くや信を生ずること能はず。妄に蘊の我を見て、無我なりと說くを聞くや信を生ずること能はず。妄に蘊の淨を見て、不淨なりと說くを聞くや信を生ずること能はず。蘊の我所を計して、無我所なりと說くや信を生ずること能はず。五蘊を實と計して、不實なりと說くを聞くや信を生ずること能はず。是の義を

【一】處。「十二處」を謂ふ。
【二】界。「十八界」を謂ふ。

す。是くの如き道を行ぜば聲聞・辟支佛乘を得、是くの如き道を行ぜば大乘を成就す。非法をば應に離るべく、如法には應に住すべし。佛の教ふる所の如くに、決定して差無ければなり。是れは地獄の業に、是れは傍生の業に、是れは餓鬼の業に、是れは人・天の業なり。不善は應に捨つべく、善法は應に修むべし。此れは是れ聖道にして、應に是くの如くに學ぶべくば、此等の衆生は人・天に往返して漸く涅槃に入らん。と。是くの如くに示教して、終まで空しく過たざる、是れを教誡の神變と名くるなり。云何なるを名けて、神通の神變と爲すか。若しくば、憍慢の衆生を調伏せん爲めに、或は一身を現じて而も多身と爲し、或は多身を現じて而も一身と作し、山崖・牆壁に出入すること無礙に、身上に火を出し、身下に水を出し、身下に火を出し身上に水を出し、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、日月の威德も手を以て捫摩し、或は大身を現じて梵世に至り、乃至、廣大にして遍く三千大千の世界を覆ひ、隨所に應じ現じて衆生を調伏する、是れを神通の神變と名くるなり。と。

爾の時に、商主天子は佛に白して言はく。世尊、頗は神變の、能く此れに過ぐるものありや。佛は天子に告ぐらく。如來には復殊勝なる神變あり。とて、卽、文殊師利に語らく。汝、演說して、諸の菩薩をして深法忍を得て衆魔を摧伏せしめ、亦如來の菩提の法をして、久しく世に住せしむべし。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、如來は、若し三千世界の四大海の水を以て掌中に置かんに、水性の衆生は撓動する所無きも、是くの如き神變は未だ殊勝と爲さざるなり。若しくば、如來は、一切の法の、言說す可からず、名無く相無く色無く聲無く行無く作無く文字無く戲論無く表示無く、心・意・識を離れて一切の語言の道斷ち、寂靜照明なるに於て、而も文字語言を以て分別して顯示するを、一切の世間は解する能はざる所にして、沙門・婆羅門の聞く者は驚怖する、是れを諸佛の最大なる神變と名く。復次に、如來は、若し三千大千の世界を以て口中に內れんに、四

巻の第八十六

大神變會　第二十二の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘の衆千二百五十人と倶なりき。菩薩摩訶薩は八千人にして、文殊師利と商主天子とも倶に會中に在り。

爾の時に、商主天子は佛に白して言はく。世尊、如來は常に幾種の神變を以て衆生を調伏したまふか。と。佛は天子に告ぐらく。我れは三種の神變を以て衆生を調伏す。一には說法、二には教誡、三には神通なり。云何なるを名けて、說法の神變と爲すか。謂はゆる、如來の無礙の大智もて、未來世の一切衆生の心行の差別を見、三寶に於て有つ所の信・不信及び業・果報を皆悉く了知することと、佛の說く所――若しは、現在世に行ふ所の惡因にて當に惡趣に墮すべく、業に隨ひ報を受くることの決定して差無きこと。若しは、彼れ衆生の善業の因緣と誓願力との故にて、惡趣より出でて人・天の中に生れて、或は聲聞・辟支佛乘及以び大乘を以てして解脫を得るに、爾所の劫を經て苦を受け樂を受けて當に涅槃を得るに當り、當に若干の諸佛に値遇するを得べき、是等の如き業は、決定して差無きこと。若しは、彼れ衆生の善業の因緣と誓願力との故にて、當に欲界・色界・無色界に生じて爾所の劫を經て、是くの如き乘を以てして解脫を得べく、是くの如き行を以て當に佛に見えて承事・供養するを得べきこと。――の如き、是くの如き一切の上・中・下品の善・不善の業、乃至、一念をも、如來は悉く知つて法を說くことを爲す。是れを說法の神變と名くるなり。云何なるを名けて、教誡の神變と爲すか。若しくば、是くの如くに教ふるなり。諸持戒の者は、是れを應に作すべからず。是れを應に信ずべく、是れを應に信ずべからず。是れに應に親近すべく、是れに應に親近すべからず。是の法は雜染にして、是の法は清淨なれば、乃至、一切の功德・善道の資糧を攝受

つて衆生等に說くなり。亦少しの法も名けて涅槃と爲す無きに、然も涅槃の法を證得させん爲めの故に涅槃を說くなり。と。時に、跋陀羅は是の說を聞き已るや、前んで佛に白して言はく。我れ願はくは、出家して比丘と作らんことを。と。爾の時に、世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。汝當に是の善男子の與に、鬚髮を剃除して具足戒を授くべし。と。彌勒菩薩は佛の敎旨を承け、卽出家を與へ具戒を受けしめたり。既に出家し已るや、復佛に白して言はく。世尊、此の出家は唯形相のみにして、眞の出家に非じ。諸の菩薩の眞の出家の若きは、謂はく。諸の相を離れながら、三界に處つて衆生を成熟するを、方に名けて眞の出家と爲すべきなり。と。是の語を說ける時に、五千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、皆諸の漏に於て心に解脫を得たり。

　爾の時に、阿難は佛に白して言はく。世尊、當に何と此の經に名けて、我等は云何に奉持せんか。と。佛は阿難に告ぐらく。此の經をば、名けて幻師跋陀羅に記を授くる法門と爲し亦漸く菩提を證する法門とも名く。若し衆生あつて、未來世に於て、如來を見及び衆生の爲めに佛事を作さんと欲する者は、當に此の經に於て受持し讀誦して、廣く人の爲めに說くべし。所以は何ぞ。是の人は、則ち已に如來を見、亦已に他の爲めにも佛事を施作すと爲せばなり。是の故に、阿難、若し此の經に於て受持し讀誦して之れを流通せば、則ち衆生を哀愍し利益するを爲すなり。若し無上の菩提に發趣せんと欲せんにも、亦此の經に於て、當に勤めて修習すべし。此の經は能く無上菩提を出せばなり。此の經は能く無上菩提を生ずる是の故に、此の經をば亦復名けて出生菩提と爲すなり。若し此の經典を受持する者あらば、當に知るべし、諸佛は住止することを。何に況んや、中に於て理の如くに修行することをや。と。時に跋陀羅は、復佛に白して言はく。世尊、此の經をば亦發覺善根と名く。何を以ての故ぞ。今佛の所に於て是の經を聞くを得て、一切の善根は皆現前せる故に。と。佛の是の經を說き已りたまふや、尊者阿難及び跋陀羅・天・人の大衆・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。

涅槃に臨む時に、名稱菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け、告げて言はん。汝、來世に於て、次いで當に佛と作つて一切最勝如來・應・正等覺と號すべし。となり。と。

時に、跋陀羅は、如來の是くの如くに記するを聞き已るや、空よりして下り、佛足を頂禮して是の言を作さく。我れ今如來・應・正等覺及び法・比丘に歸命したてまつる。と。是くの如くに慇懃にすること、無量倶胝數百千遍にして、復是の言を作さく。佛世尊の如きは眞如と異ることある無き故を以て、「一切の法は眞如と異らず、乃至、差別ある無く、缺減ある無く、分別ある無く、生無く、作無し。」と說きたまふ。我れ今歸依することも亦復是くの如し。と。爾の時に、尊者阿難は跋陀羅に謂うて言はく。汝若し佛の眞如を說きたまふ所の如くにして歸依せば、汝は今豈佛の法性の中に於て得る所ありや。と。幻師は答へて言はく。我が身は即是れ如來の法性なり。所以は何ぞ。我れ及び如來の二無く別無きは、一切の諸法は皆眞如なる故なり。眞如と言ふは、則ち一切法の無差別の性なれば、一切衆生にも亦復是くの如きなり。尊者當に知るべし。二無しと言ふは、分別する所無き、是れを二無しと爲すことを。何を以ての故ぞ。諸法は但名字あるのみと遍く知るは、是れ佛智なる故なり。と。尊者阿難は前んで佛に白して言はく。奇なる哉。世尊、此の跋陀羅の、乃ち是くの如き智慧辯才を有てることや。昔は幻化を以て世間を惑亂せしに今時は復智慧を以て惑亂す。と。佛は跋陀羅に告げて言はく。善男子、汝實に爾るか。と。跋陀羅の言はく。佛の作したまふ所の惑亂の事の如くに、我れも亦是くの如くに世間を惑亂す。所以は何ぞ。謂はく。佛世尊の、無我の中の說に於て衆生及び壽命といふ者有るは、此れは世間に於て、是れ大に惑亂するなり。如來の、菩提を證し已つて、少しの法の是の生死・往來をも見たまはずして、而も生死・往來を說きたまふは、我が意の如くんば、唯如來のみ是れ大に惑亂したまふ有るなり。と。佛言はく。善男子、善い哉、善い哉。汝の說く所の如し。諸佛如來は、無我の中、乃至、生死往來ある無きに於て、而も世俗に隨

普く三界に聞えたまへる遍知の尊　威德の智慮難思の者　已に菩提の功德の岸に達したまへり
今微笑を現したまへるは何の緣かある　十方の五趣の諸の衆生の　心行の種性の上中下なるを　如來は彼れに於て悉く能く了したまふ　今微笑を現したまへるは何の緣かある　人天八部諸の大衆の　出す所の種種の妙音聲を　如來の清淨なる音に比するに　乃至歌羅分にも及ばず　世尊の光明は十方に遍く　普く無量の諸佛の刹を照したまふに　日月摩尼梵天の光の能く如來に比する者ある無し　已に性空の甚深なる法を了し　我無く人及び衆生無く　有無の二邊を皆捨離して　善く三際を知りたまふこと水月の如し　今誰れか最上の乘に趣き如來の法の種性を紹繼して　廣大なる三寶の中に生ずるか　微笑の因緣を願はくば宣說したまはんことを　如來の現したまふ所の微笑の光は　彼れ諸乘に依つて差別あり　膝に於て肩に於てして沒する者　斯くの如きは彼れ二乘の人の爲めなるに　今は放ちたまふ所の無量の光此の光は如來の頂に入れば　天中の勝者何人の爲めに　此の佛乘に於て當に授記したまふべきか　と。

爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。汝、今是の跋陀羅を見るや、不や。と。白して言はく。已に見る。と。佛は阿難に告ぐらく。此の善男子は、九萬二千劫を過ぎて、大莊嚴土に於て、善化劫の中にて、當に成佛して、號して神變王如來・應・正等覺と曰ふべし。彼の佛の國土は、人民熾盛に、安隱豐樂に、地の平にして柔軟なること兜羅綿の如くに、花果の諸樹は次第に行列し、幢旛、寶蓋をば以て莊嚴と爲し、衆の樂自ら鳴り、妙香充ち遍く、須ふる所の飮食は念に應じて至り、諸受用する所の資生の具は、忉利天の如くにして異ること無く、彼の國には常に種種の莊嚴を現せば、是の故に號して大莊嚴土と爲すなり。彼の國内に於ては、一切の人民は皆大乘に住して、深信すること堅固なり。彼の神變王如來の壽は七千歲にして、正法の世に住ること百億年を滿さん。

には、法の師を尊重し、恭敬して聽受するなり。三には、多聞を以てして自ら憍慢せざるなり。四には、少聞の者に於て輕賤を生ぜざるなり。復、四法有つて、應當に捨離すべし。云何なるを四と爲す。一には、貪・瞋・癡に於て應當に捨離すべきなり。二には、聲聞乘に於て應當に捨離すべきなり。三には、緣覺乘に於て應當に捨離すべきなり。四には、善法の想に於て應當に捨離すべきなり。復、四法有つて、甚深の義に入る。云何なるを四と爲す。一には、有爲の法に於て深く緣起に達するなり。二には、祕密の義に於て能く正しく了知するなり。三には、諸法の性に於て深く正解を生ずるなり。四には、一切の法に於て空の義に了達するなり。復、四法有つて、願をして圓滿ならしむ。云何なるを四と爲す。一には、尸羅の淸淨なるなり。二には、惡業を淨除するなり。三には、諂誑ある無きなり。四には、善根を增長するなり。復、四法有つて、諸の波羅蜜に於て不退轉を得。云何なるを四と爲す。一には、善巧方便を以て、能く一つの波羅蜜に於て遍く諸の波羅蜜に通ずるなり。二には、善巧方便を以て、一の衆生を了するに隨つて、遍く一切の衆生を了するなり。三には、善巧方便を以て、一法の淸淨なるを證して、遍く一切諸法の淸淨なるを證するなり。四には、善巧方便を以て、一の佛を了知して、遍く能く一切の諸佛を了知するなり。何を以ての故ぞ。法性に於て差別無きに由る故なり。と。佛は是くの如き菩薩の四法門を說ける時に、幻師跋陀羅は、無生忍を證して心に踊悅を懷き、卽虛空に昇り、其の身地を去ること七多羅の量なりき。爾の時に、世尊は熙怡として微笑せるに、其の面門より無量の光を放ち、其の光普く諸佛の世界を照し、還つて如來の頂上に於てして沒せり。

爾の時に、尊者阿難は是の念言を作さく。如來・應・正等覺の、此の微笑を現したまへるは因緣無きに非ず。と。卽、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を以て問うて曰はく。

る者をも觀じて皆、[一七]法器と爲すなり。三には、諸法の自性ある無きを了知するなり。四には解脫を修習するに、三昧門に於て執著の想無きなり。復、四法有つて、大慈の心を修す。云何なるを四と爲す。一には、大慈の心にて衆生を救護することを修するなり。二には、大慈の心にて衆生を度脫することを修するなり。三には、大慈の心にて衆生を覺悟することを修するなり。四には、大慈の心にて衆生をして涅槃に入らしむることを爲す故を修するなり。復、四法有つて、大悲の心を修するなり。云何なるを四と爲す。一には、大悲の心にて、衆生をして諸の惡道を離れて善趣に住せしむるを爲す故を修するなり。二には、大悲の心にて、衆生をして諸の惡行を捨てて善法を習はしむるを爲す故を修するなり。三には、大悲の心にして、衆生をして小乘を離れて大乘に入らしむるを爲す故を修するなり。四には、大悲の心にて、衆生をして生死を離れて涅槃を得しむるを爲す故を修するなり。復、四法有つて、神通を成就す。云何なるを四と爲す。一には、身命を惜まずして愛戀する無き故なり。二には、一切の法の幻化の如くなるを了する故なり。三には、諸の衆生に於て尊重を起す故なり。四には、奢摩他を修して散亂無き故なり。復、四法有つて、無礙の辯を得。云何なるを四と爲す。一には、義に隨順して文に隨はざるなり。二には、法に隨順して人に隨はざるなり。三には、諸法は文字を離れたることに了達するなり。四には、文字を了するに依つて演說するに盡くること無きなり。復、四法有つて、陀羅尼を得。云何なるを四と爲す。一には、諸の多聞に於て厭足ある無きなり。二には、多聞の者に於て恭敬し供養するなり。三には、種種の名を以は眞實の義を說くなり。四には、祕密の敎に隨つて能く正しく趣入するなり。復、四法有つて、能く[一八]法忍を得。云何なるを四と爲す。一には、多く勝解を修するなり。二には、退轉ある無きなり。三には、資糧をば圓滿にするなり。四には、精勤にして倦むこと無きなり。復、四法有つて、淨き辯才を得。云何なるを四と爲す。一には、說法の人に於て違逆する所無きなり。二

【一七】法器。佛道を行ずるに堪ふる者を謂ふ。

【一八】法忍。忍は認許の義なり。諸法の理を信解して、惑無きを謂ふ。

に於て生死の苦を受けんとなり。二には、應に先づ一切衆生の根性の差別を了知し、而して說法を爲して煩惱を捨てしむべしとなり。三には、應當に一切の惡を斷じ、一切の善を修め、魔軍を降伏して阿耨多羅三藐三菩提を證すべしとなり。四には、當に三千大千世界の無量の衆生の爲めに、一梵音を以て諸の法要を演ぶべしとなり。復、四法有つて、怯弱の心無く魔も摧く能はず。云何なるを四と爲す。一には、一切の法を觀ること猶幻化の如くにするなり。二には、常に如理の正智と相應ずるなり。三には、一切の法に於て分別する所無きなり。四には、一切の相に於て執著する所無きなり。復、四法有つて、義に於て思惟するなり。云何なるを四と爲す。一には、一切の法の因緣より生ずることを知るなり。二には、少しの法も名けて起る者と爲す無きを知るなり。三には、緣生の法は彼れ卽、無起なるを知るなり。四には、法の生無く亦滅壞も無きを知るなり。復四法有つて、衆生を捨てず。云何なるを四と爲す。一には、弘願を捨てざるなり。二には、疲苦を忍ぶなり。三には、身命を惜まざるなり。四には、恒に四攝を修むるなり。復、四法有つて、應に捨離すべからず。云何なるを四と爲す。一には、諸の布施に於て捨離せざるなり。二には、衆生を成熟して捨離せざるなり。三には、常に自ら覺察して捨離せざるなり。四には、他の善を增長して捨離せざるなり。復、四法有つて、常に應に攝受すべし。云何なるを四と爲す。一には、微少の善根をも亦當に修習すべきなり。二には、他の善を增長して心に懈怠無きなり。三には、施・戒を說くを聞かば能く信受するなり。四には、一切の利養・名譽を求めざるなり。復、四法有つて、[一五]正行に入る。云何なるを四と爲す。一には、[一六]通智を成就するなり。二には、大三昧に住するなり。三には、空性を修習するなり。四には、執著する所無きなり。復、四法有つて、善巧方便たり。云何なるを四と爲す。一には、菩薩は、諸の發心に於て、菩提心を以て上首と爲し、乃至、煩惱をすら猶無上菩提に順じ趣かしむ。何に況んや、諸の善心の等を發起することをや。二には、諸の衆生の乃至、邪見に住す

【一五】正行。異譯本には「道行」とあり。
【一六】通智。又、通慧と曰ふ。異譯本には「神通を逮得す。」とあり。凡べて、神通は智慧を體とするに由つて、名く。但し、通智は、又、神通と智慧との合名と爲すこともなり。

讃する故なり。三には、受くる所の律儀に遍く淸淨なる故なり。四には、勝れたる意樂を以て弘願を發す故なり。復、四法有つて、諸佛を供養して心に懈倦無し。云何なるを四と爲す。一には、應に我れ今最上の福田を供養すといふことに、自ら慶快なるべければなり。二には、我れの供養に由つて、一切の衆生も亦當に供養すべければなり。三には、供養し已るに因り、菩提の心に於て當に堅固なることを得べければなり。四には、如來の三十二相を觀て善根增長すればなり。復、四法有つて、諸の學處に於て尊重の心を生ずるなり。云何なるを四と爲す。一には、惡道に超過すればなり。二には、善趣に生ずることを得ればなり。三には、如來を尊重すればなり。四には、諸願を圓滿すればなり。復、四法有つて、應に學ぶべき所の處たり。云何なるを四と爲す。一には、菩提の心に於て常に捨離せざるなり。二には、諸の衆生に於て心行の平等なるなり。三には、波羅蜜に於て精進に修行するなり。四には、無量の法を聞いて恐怖を生ぜざるなり。復、四法有つて、學處淸淨なり。云何なるを四と爲す。一には、諸惡を造らざるなり。二には、深く空性を解するなり。三には、諸佛を謗らざるなり。四には、諸見を滅壞するなり。復、四法有つて、三昧の種性たり。云何なるを四と爲す。一には、憒閙を離るる故なり。二には、寂靜を樂む故なり。三には、心亂るること無き故なり。四には、善根の增す故なり。復、四法の如理の心有つて、應當に成就すべし。云何なるを四と爲す。一には、修する所の善法を菩提に廻趣するなり。二には、心常に宴寂にして執著ある無きなり。三には、解脱の門に於て常に勤めて修習するなり。四には、曾て二乘の涅槃を證することを求めざるなり。復、四法の不如理の心有つて、應當に捨離すべし。云何なるを四と爲す。一には、諸の生死に於て怖畏する所あるなり。二には、修する所の行に於て信受を生ぜざるなり。三には、祕蜜の教に於て勝解を求めざるなり。四には、諸の善根に於て而も修習せざるなり。復、四法の正思惟の心有つて、應に善く修學すべし。一には、菩薩は、乃至、一の衆生の爲めにも無量劫

諸惡を作さざるなり。三には、正法を聞き已らば、他の爲めに開示するなり。四には、正法を聞き已らば、菩提に廻向するなり。復、四法有つて、說法にて利益す。云何なるを四と爲す。一には、常に他人の香味飲食を受くるなり。二には、恒に衣服・種種の供養を受くるなり。三には、魔の眷屬をして勢力羸弱ならしむるなり。四には、諸天は護持して魔に便を得しめざるなり。復、四法有つて、他をして說く所の法を信樂せしむ。云何なるを四と爲す。一には、心少欲なる故なり。二には、常に足ることを知る故なり。三には、語柔軟なる故なり。四には、身は法に順ずる故なり。復四法有つて、能く正法を演ぶれども希望を有つこと無し。云何なるを四と爲す。一には、生死の中に於て恒に怖畏を懷くなり。二には世間の利養の親友を求めざるなり。三には、諸の衆生に於て常に擁護を生ずるなり。四には、諸の聖種に於て能く修習するなり。復、四法有つて、恩を知り恩に報ゆ。云何なるを四と爲す。一には、諸の衆生に菩提に趣くことを勸むる故なり。二には、作す所の業の失壞せざるを知る故なり。三には、衆生を慈愛すること己身の如くなる故なり。四には、善く菩薩の事を修行し能ふ故なり。復、四法有つて、諸の衆生に於て不壞の友と爲る。云何なるを四と爲す。一には、能く忍辱の大甲冑を被る故なり。二には、衆生を福利して報を求めざる故なり。三には、大悲の心に於て常に退かざる故なり。四には、多くの惱害なりと雖も亦捨てざる故なり。復、四法有つて、諸の善友に於て應當に親近すべし。云何なるを四と爲す。一には、善巧方便を成就すればなり。二には、殊勝の意樂を成就すればなり。三には、菩薩の正行を成就すればなり。四には、菩提を勸讚することを成就すればなり。復、四法有つて、諸の惡友に於て應當に捨離すべし。云何なるを四と爲す。一には、二乘を讚說すればなり。二には、菩提を退かしむればなり。三には、惡法を增長すればなり。四には、諸善を損壞すればなり。復、四法有つて、諸佛に値ふことを得。云何なるを四と爲す。一には、恒に一心に佛を專念するを以ての故なり。二には、諸の如來の功德を稱

修行せば、速に菩提の道場に至ることを得べし。云何なるを四と爲す。一には菩提の心に於て永く退失せざるなり。二には、諸の衆生に於て常に棄捨する無きなり。三には、一切の善根をば求めて厭き足る無きなり。四には、正法を護持せんと大精進を起すなり。善男子、菩薩に復四つの法の、遍く清淨なる行あり。云何なるを四と爲す。一には、律儀の清淨なり。二には、意樂の清淨なり。三には、智慧の清淨なり。四には、[二二]受生の清淨なり。復、四法の、唯菩薩の行にして、彼れ二乘の入り能ふ所に非ざるものなり。云何なるを四と爲す。一には、[二三]禪定を修習して生に隨はざるなり。二には、甚深の義に於て心に能く簡擇するなり。三には、諸の衆生に於て大悲の心を起すなり。四には、種種の辯才にて法の無礙を演ぶるなり。復、四法有つて、行ずる所の處たり。云何なるを四と爲す。一には、樂んで閑寂に住するなり。二には、憒鬧を厭ふなり。三には、諸の衆生に於て大悲の心を起すなり。四には、能く諸行に去來ある無きを了するなり。復、四法有つて、尊重し供養せらる。云何なるを四と爲す。一には、身命を惜まざるなり。二には、心常に歡悅するなり。三には、憍慢を捨離するなり。四には、說の如くに修行するなり。復、四法有つて、威儀は具足す。一には、時を知るなり。二には、處を知るなり。三には、寂靜なるなり。四には、眞實なるなり。復、四法有つて、能く疑悔を離る。云何なるを四と爲す。一には、[二四]惡作の事に於ては、應に預め防護すべきなり。二には、諸の智人に於ては、當に樂うて親近すべきなり。三には、聞く所の義に於ては、常に善く思惟するなり。四には、慈心を以てせずして他の過を擧ぐることをせざるなり。復、四法有つて、多聞して厭ふこと無し。云何なるを四と爲す。一には、自他の正しき智慧を增長する故なり。二には、他の疑惑に於て能く斷除する故なり。三には、佛の正法に於て能く攝受する故なり。四には、諸の如來に於て讃じて盡くる無き故なり。復、四法有つて、多聞は堅實なり。云何なるを四と爲す。一には、正法を聞き已らば、能く善く解了するなり。二には、正法を聞き已らば、

【二二】受生。異譯本に「所生」とあり。

【二三】「禪定を」の一句。異譯本には「其の行、四禪に過ぐるなり。」とあり。蓋し、四禪定を修しながら、色界四禪の處に生ぜざるを謂ふなるべし。

【二四】惡作。我が作せし事を惡みて追悔するを謂ふ。若し又、戒律上の惡しき作法、即ち突吉羅(Duskrta)を曰ふ者ならば「アクサ」と讀みて、即ち惡作・惡說の身・口の二業となる。而して、異譯本は、全く別異の說述にて參考とならず。

是の觀察を作さば　速に菩提を證せん　諸法は皆有に非ずして　妄分別に由つて生じ　因緣の體性は空にして　作者の性を離れたる故にと　是くの如くに能く　因緣作者の空たるに了達せば　彼れは則ち能く　離染清淨の法を了知して　清淨の法眼を以て　諸の如來を見るを得ん　と。

時に、彼の幻師は是の說を聞き已るや　[二]順法忍を得、五千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、二百の菩薩は無生忍を證せり。

爾の時に、世尊は飯食已に訖つて、幻師の施して願ずる所を滿さんと欲する故に、復偈を說いて言はく。

能く施す所の物　施す者及び受くる人に於て　等しく分別する心無くんば　是に則ち施は圓滿せん　と。

爾の時に、阿難は佛に白して言はく。世尊、我等如來に願ふ。佛の神力を以て、幻師の今施設する所の莊嚴の事に加持して、七日の中に於て隱沒せざらしめたまはんことを。と。是の時に、如來は衆の請に爲る故に、彼の幻師の幻化せる道場をして、七日を滿足して、嚴飾をば故の如くならしめたり。

爾の時に、如來は諸の比丘及び大菩薩・天・龍・夜叉・乾闥婆等の恭敬して圍遶せると與に耆闍崛山に還り、衆の爲めに法を說けり。爾の時に、幻師は復佛の所に往きて佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住り、而して佛に白して言はく。世尊、願はくば、爲めに、諸の菩薩道を勸めて修行する者は、速に當に菩提の道場に至るを得べきことを演說したまはんことを。と。佛言はく。諦に聽きて善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに說くべし。と。幻師白して言はく。唯然く、世尊、願樂して聞かんと欲す。と。佛言く。善男子、四種の法あつて、是の菩薩の道を、若し能く

【二】順法忍。異譯本には「柔順法忍」とあり。第一卷、同名の解及び「隨順忍」の解、參照。

現ずるに　迷惑せる諸の衆生は妄見して眞實と爲せども　是くの如き象馬車には　性無く亦生も無きが如く　諸佛には色相無く　去無く亦來も無きに　我見に住せる人は　妄に佛の想を生ずるなり　應に色相　種族及び生處　乃至梵音聲を以てして　如來を覩んと欲すべからず　亦心識を以ても　諸佛を分別し難し　諸佛の法性の身は　三世に超過し　自性は諸相を離れて　法の〔一〇〕數に墮せざれば　現ずる所の諸の如來は　自性として生起無く　亦蘊界處も無く　無所依に住したり　是くの如き佛の法身は　五眼にて見能ふに非ずして　若し我れ佛を見たりと謂はば　是れ則ち能く見ざるなれば　無見を以て見と爲すこと　空中の鳥の跡の如くにせよ　汝が見る所の佛　及び餘の未だ見ざる者の如きも　平等なること虚空の如くにして　一相にして差別無し　戒定慧解脫　及び解脫知見　一切の諸の如來の　功德に差別無く　皆空性に住して　法に於て著せらるる無く　一切皆幻化にして　性無く亦生も無し　一の如來を供養するは　則ち多佛を供ずるにて　諸佛の法身は　平等にして差別無ければ　是くの如き一切の佛は　咸く福利を生じ能ふなり　普く諸の如來に施さば　皆大果を獲て　同じく平等清淨の法性を證する　是の故は諸の如來に　種種の差別無ければなり　汝の先に問ふ所の何者を眞佛と爲すかの如きは　當に散亂の心を捨てて　諦に我が宣說を聽くべし　應に正念の慧に住して　諸法の　一切皆無生なるに於て　妄見して眞實と爲せることを觀察すべし　色相は若し生ずること有らば　則ち應に亦滅すること有るべく　是の故に諸の如來には　畢竟ずれば生あること無し　彼れは亦已に生ぜるにも非ざれば　亦散滅あることも無く　是れに由つて如來を觀ずるに　無見を以て見と爲すなり　汝の見たる所の佛の　方所に依止せざる如くに　一切の諸の凡夫の　皆五蘊に依るを　應當に彼の蘊に於ても　佛の如くにして觀察すべし　諸佛及び諸法　乃至衆生に於ても　無相を以て相と爲して　依止する者無しと　若し

【一〇】數。數は種類を謂ふ。主觀的に曰はば、心理學上の概念とも謂ふべし。

無礙智より聞かば　何ぞ明慧の者にして　菩提心を發さざる有らん　願はくば菩提の道　及び遍清淨の行を示したまはんことを　何等を修行と爲して　二乘は入る能はざるか　云何に行ずる所の處をば　尊重して供養せんか　云何にせば威儀を具し　及び諸の疑悔を離るるか　云何にせば多聞に於て　厭無く修むること堅實なるか　云何にせば人の爲めに說き　正法を樂ましめて　利養を希ふ心無く　及び善く恩報を知るか　云何にせば衆生に於て　常に不壞の友と爲るか　云何にせば善友に近づき　惡知識を捨離するか　云何にせば諸佛に値ひ　供養して心に倦む無きか　云何にせば學處の　尊重及び淸淨を爲すか　云何にせば種性を定めて　如理の心を成就し・及び不如理を捨て　正思惟を具足するか　云何にせば怯弱無くして　魔の攝むる所と爲らず　義理を思惟して　諸の衆生を捨てざるか　云何にせば應に捨つべからず　取らずして而も攝取せんと　正行に入り　善方便を具足することを得るか　云何にせば慈悲を修め　諸の神通を成就し　無礙辯を證し　及び陀羅尼を得るか　云何にせば法忍を獲て　淸淨の辯才もて　當に應に捨つべき法を捨て　甚深の義に入るを得べきか　云何にせば誓願に於て一切皆圓滿し　諸の波羅蜜に於て　而ち不退轉を得るか　我れ是くの如き法に於て　當に願うて勤めて修行すべければ　惟願はくは大悲の尊　我が爲めに廣く宣說したまはんことをと。

爾の時に、世尊は偈を以て答へて曰はく。

若し一切の法の　皆幻化に同じきを了せば　是の人は則ち能く　百億の諸佛の身を現じて　倶胝の刹に往き　諸の衆生を度脫せん　譬へば跋陀羅の　無色に衆色を現ずれども　生ならず亦滅ならず　住する無く去來無きが如く　世尊の變化の身　及與び比丘の衆も　亦生滅ある無く　乃至涅槃に於ても　此れは皆是れ如來の　不思議の神變なり　亦幻化者の　象馬軍陣を

乞ひたまふ。と。佛の神力の故にて、彼の幻師をして、還如來の、諸の聖衆と里巷の中に在つて、巡行して食を乞ふを見しめたり。又復第三の長者を化作して、幻師に告げさせて言はく。如來今は、彼の醫王耆婆の園中に在つて、諸の四衆の爲めに妙法を宣說したまふ。と。佛の神力の故にて、彼の幻師をして、皆是くの如きを見しめり。次に復釋提桓因を化作し、來つて幻師に詣つて、復告げさせて言はく。如來は今三十三天に在つて、衆の爲めに法を說きたまふ。と。彼の時に、幻師は復、如來の天衆の中に在つて諸の法要を演ぶるを見たり。爾の時に、幻師は復、林樹・華葉の間及び諸の一切の師子座の上、幷に王舍城の里巷・垣墻・室宅・堂殿及び諸の勝處に於て、皆如來の、諸の相好を具せるを見、亦一切の諸の如來の所に於て、自ら己身の悔過をば發露せるを見たり。

彼の時に、幻師のみ唯佛身を見て、餘のものは見る所無かりしが、歡喜踊躍して便ち念佛三昧を得、三昧より起ち、合掌して佛に向つて、偈を說いて言はく。

我れ昔閻浮に於て　幻化は上に過ぐるもの無かりしに　今佛の神通に比するに　能く少分にも及ぶこと無く　是れに由つて方に了知す　諸佛の難思の力は　心に隨ひ能く變現することを

化佛は恒沙の如くにして　見たてまつる所の諸の如來には　皆相好を具したまへば　願はくば尊　何者か是れ眞佛なるかを顯示することを爲したまはんことを　此の諸の如來に於て我れ供養を修せんと欲すれば　願はくば尊我が爲めに　何者を勝果と爲すかを說きたまはんことを　若し人佛の所に於て　尊重の心を生ぜずば　是くの如き諸の凡夫は　安樂より退失せん　今世尊の前に於て　先に犯しし所の　妄に如來を試みんとする罪を發露して　永く願ず滅して餘す無からんと　梵釋幷に大衆　願はくば皆我れを證知せられよ　諸の群生を度せん爲めに　今菩提心を發し　智慧の光明を以て　世間を覺悟し　甘露の法を施與して　悉く皆充滿せしめんとするを　若し人佛の所に於て　是くの如き神變を見　及び悅意の言を　勝行

れど　適師子の聲を聞くや　藏竄せんとして所無し　幻師も亦是くの如くに　如來に對せざる前には　常に外道の中に於て　自ら佛に超過すと讃ずれど　幻師は造作すと雖も　幻術に其の邊あるに　如來の成就したまふ所の　幻術には窮盡無くして　一切の諸の天魔も　能く邊際を知る莫し、　と。

師子慧菩薩は曰はく。

給侍の人　飮食幷に食ふ者は　一切皆幻化なるを了知せば　善施なること上に過ぐる無し
と。

彌勒菩薩は曰はく。

火の酥油を得て　展轉して　增盛なるが如くに　世尊の幻師に對する　幻化も亦是くの如し
と。

文殊師利菩薩は曰はく。

此の會衆の善事は　本より未だ曾て爲さざるが如くに　一切の法は皆然く　常に前の際に等し　と。

爾の時に、世尊は彼の幻師を成熟せんと欲する爲めの故に、一の長者を化して會中に入れ、幻師に謂はせて曰はく。汝今此に於て何の作す所を欲するか。と。幻師答へて言はく。我れ沙門瞿曇を供養せん爲めに、諸の飮食を設くるなり。と。長者は告げて言はく。是の說を作す莫かれ。如來今は諸の比丘と、闍王の宮に在つて供を受けて食したまふ。と。佛の神力の故にて、彼の幻師をして、如來の、諸の比丘と彼に在つて食するを見しめたり。又復第二の長者を化作して、幻師に謂はせて言はく。汝は何を作す所ぞ。と。幻師答へて言はく。我れ沙門瞿曇を供養することを爲す。と。長者は復言はく。是の說を作す莫かれ。如來今は、比丘衆と梵志の里巷の中に在つて、巡行して食を

【九】闍王。阿闍世王の略なり。第一卷、同名の解、參照。

大目乾連は曰はく。
座は是れ幻化にして　坐する者も亦復然るを知り　此の平等を了する時に　乃ち名けて淨施と爲す　と。
舍利弗は曰はく。
化の給侍の人の如くに　受くる者の心も亦然く　施す者も能く是くの如くにして　乃ち名けて淨施と爲す　と。
須菩提は曰はく。
施を以て施と爲す勿く　受を以て受と爲す勿く　施す者能く是くの如くにして　乃ち名けて淨施と爲す　と。
阿難陀は曰はく。
施す所は虚空の如く　受くる者も不可得なりと　身心を遠離せば　其の施は最も淸淨なりと。
光幢菩薩は曰はく。
譬へば彼の幻師の　莊嚴の事を幻化するが如くに　諸法は皆是くの如きを　愚人は覺知せざるなり　と。
光嚴菩薩は曰はく。
座及び諸樹の皆幻なる如きは　心の爲す所なれど　幻と心と虚空とは　何ぞ少しの差別あらんや　と。
師子菩薩は曰はく。
野干の未だ曾て　師子の哮吼する所を聞かざるや　其の心に懼るる所無く　林樹の間に嘷叫す

れは天帝の是くの如き說を作すを聞くや、心甚だ歡喜し、夜分を過し已つて、如來の所に往き、白して言はく。世尊、我れ今時に於て營み辦ずること已に訖れり。願はくば、哀愍を垂れたまはんことを。と。

爾の時、世尊は晨朝の時に於て、衣を著け鉢を持ち、諸の大衆の恭敬して圍遶せると與に王舍城に入つて、彼の幻師の道場の所に赴けるに、摩竭提國の外道・梵志・婆羅門等は、咸く如來の幻師の幻惑する所と爲るを願ひ、見んと欲する爲めの故に、皆來つて集會し、諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、如來の神變及び師子吼を見聞せんと樂欲して、亦皆集會せり。爾の時に、如來は佛神力を以て、彼の幻師・帝釋・四王をして、各世尊の已れの莊嚴せる處に在すと見しめたり。彼の時、幻師は既に是れを見已るや、憍慢を捨てて前んで佛足を禮し、白して言はく。世尊、今如來に於て悔過をば發露す。我れ先に佛に於て妄に欺誑を生じて、種種の莊嚴の事を幻化し、後に慚ぢ悔ゆと雖も、隱沒し能ふ無きなり。と。爾の時に、世尊は幻師に告げて言はく。一切の衆生及び諸の資具は、皆是れ幻化なり。謂はく。業の幻ずる所なるに由つての故なり。諸の比丘衆も亦是れ幻化なり。謂はく。法の幻ずる所なるに由つての故なり。我が身も亦幻なり。智の幻ずる所なる故なり。三千大千の一切の世界も亦皆是れ幻なり。一切衆生の【八】共に幻ずる所なる故なり。凡そ有る所の法として、是の幻に非るは無し。因緣和合の幻ずる所なる故なり。汝、今應に幻化の飲食を以て、次に隨つて行ふべし。と。時に彼の幻師は、四天王・釋提桓因幷に來れる眷屬及び幻化せられたる給侍の人等と、卽飲食を持ちて佛及び僧・同會の衆人に施すに、悉く皆充足したり。

爾の時に、摩訶迦葉は、而ち偈を說いて曰はく。

食は是れ幻化にして　受くる者も亦復然るを知り　此の平等を了する時に　乃ち名けて淨施と爲す　と。

【八】共。共同共通の義なり。

必ず當に大善利を獲て、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべければなり。と。

時に、彼の幻師は、卽其の夜に於て王舍城に詣り、最も下劣・穢惡の處に於て道場を化作せるに、寬廣・平正にして、繒綵の幡蓋もて種種に莊嚴し、諸の華香を散じ、覆ふに寶帳を以てせり。復八千の諸寶の行樹を現じ、其の寶樹の下に一一皆師子の座あつて、無量の敷具を悉く皆嚴好し、諸の比丘を供養せんと欲する爲めの故にて復百味の飮食を化爲し、並に五百の給侍の人を現じて、服は白衣を以てし、飾るに嚴具を以てせり。是の化を作し已れる時に、四天王は會中に來り至り、幻師に告げて言はく。汝、明日に於て如來に供ぜん爲めに、是の如き無量の嚴具を化作したれば、是の因緣に由つて大功德を獲ん。我れ今汝を助けんと欲する故にて如來を供養せん。爲めに、此に於て第二の道場を化爲することを、頗は聽し能ふや、不や。と。時に彼の幻師は、是の語を聞き已るや奇特の心を生じ、卽便に聽許せり。是に於て四王は、卽便に無量の殊妙なる莊嚴の具を變現すること、幻師の幻化の事に倍せり。時に、天帝釋も復三萬の諸天子等と道場に來り詣り、幻師に語つて言はく。我れも今亦汝に因んで、莊嚴せる道場を供養することを欲す。と。幻師は驚き悚れて、又便ち聽許せり。是に於て天帝は、如來の爲めの故に、堂宇の、猶三十三天の如きの殊勝の殿を化作し、又復、[六]波利質多・[七]倶鞞陀羅の天の妙樹の等を化作して、次第に行列したり。幻師は、爾の時に斯の事を見已るや、嗟歎し驚悔して化する所を攝めんと欲して、其の呪術を盡せども、幻化の事は宛然として故の如し。便ち自ら思念すらく。此れは甚だしき奇と爲す。我れ昔より來、變化する所に於て隱・現心に從へるを、而も今時に於て隱沒する能はざるは、必ず彼の如來の爲めの故に由つて然らん。と。時に天帝釋は彼れの心念を知つて、幻師に告げて言はく。汝今に於ては、如來の爲めの故に道場を莊嚴したれば、隱沒し能ふ無し。是れを以て當に知るべし。若し復人あつて如來の所に於て、乃至、一念の心を發すだも、斯の善本に由り、畢竟じて般涅槃の因を作り能ふことを。と。彼

【六】波利質多。「波利質多羅」と同じ。第三卷、同名の解參照。

【七】倶鞞陀羅(Kovidara)。忉利天上の香樹の名なり。或は、前の「波利質多羅」と合して一名なりとも曰ふ。

百分・千分すとも、乃至、算數・譬喩も及ぶ能はざる所なればなり。と。復告ぐらく。目連、意に於て云何。彼の幻師は頗は三千大千の有らゆる世界を變現して、令く嚴飾し能ふや、不や。答へて言はく。不なり。目連、當に知るべし。我れ今能く一つの毛端の中に於て恒沙の世界を變現し莊嚴すれども、猶未だ如來の神力を盡さざることを。目連當に知るべし。大風輪の、名けて碎壞と爲すあつて、彼れは三千世界を碎壞し能ふ。復、風輪の、毗嵐婆と名くるあつて、世界を壞り能ひ、復成立し能ふ。復、風輪の、名けて鼓動と爲せるあつて、彼の風は常に世界を旋轉し能ふ。復、風輪の、名けて飄散と爲せるあつて、彼れは須彌山王及び黑山等を飄散し能ふ。復、風輪の、名けて猛焰と爲せるあつて〔四〕劫火の燒く時に、猛焰を飄して上梵天に至らしめ能ふ。復、風輪の、名けて止息と爲せるあつて、劫火の燒く時に、彼れは劫火の燒く所を止息し能ふ。復、風輪の、名けて淸凉と爲せるあつて、一の雲をして普く三千大千世界を覆はしめ能ふ。復、風輪の、名けて遍霔と爲せるあつて、劫火の燒く時に、普く世界に於て大雨を降し霔ぐ。復、風輪の、名けて乾竭と爲せるあつて、〔五〕劫水の漂ふ時に、彼の水をして悉く皆枯涸せしめ能ふ。是くの如き風輪を、我れ若し具に說かば、劫を窮むとも盡さざることを。目連、當に知るべし。意に於て云何なるかを。此の幻師は、是くの如き諸の風輪中に於て、暫くも安住し能ふや、不や。答へて言はく。不なり。言はく。目連、如來は能く是くの如き風輪に於て、行・住・坐・臥して搖動する無きを得、又復能く是の如き風輪を以て芥子の中に內るるに、諸の風輪の作す所の事を現ずれども、然も芥子に於て增無く損無くして、諸の風輪も相ひ妨礙せざるなり。目連、當に知るべし。如來の幻術の法を成就するや、限極ある無きことを。と。爾の時に、尊者大目乾連及び諸の大衆は、如來の是の說を作すを聞ける時に、希有の心を生じて佛足を頂禮し、同聲にて唱へて言はく。我等、今は大威德神通の導師に遇ひ、大饒益を獲たり。若し如來世尊の是くの如き神力を聞くことを得て、深く信解を生ずる有らば、此の人は、

【四】劫火。第一卷「劫燒」の解、参照。

【五】劫水。壞劫、卽ち世界破滅の時の大の三災（火・水・風）中の第二なり。色界第二禪天以下を、悉く浸し破ると謂はる。

悉く皆我れに於て尊重の心を生ぜるに、唯、瞿曇沙門のみあつて猶未だ信伏せず。我れ今應當に彼に往いて較試すべく、彼れ若し我れに歸せば、摩竭提の人は、必ず皆我れに於て倍恭敬を加へん。と。彼の幻師は、宿に植ゑたる善根の成熟する時至り、及び世尊の威德の力に由る故にて、王舍城より耆闍崛山に往き、佛の光明の百千の日に踰え、面輪の嚴好なること猶滿月の如く、身相の圓滿なること尼拘陀樹の如く、毫相の清淨なること摩尼光の如く、其の目の紺色は青蓮華の如く、乃至、梵天も頂を見能ふ無く、[三]六十種の清淨なる音聲を以て衆の爲めに說法せるを見たり。而して此の幻師は、如來の威德の特尊なるを覩ると雖も、猶邪慢を懷きて、復更に念言すらく。我れ今應當に彼れを試驗すべし。若し是れ一切知見の者ならば、應に我が意を知るべし。と。是の念を作し已つて、前んで佛足を禮して是の言を作さく。願はくば、明日に於て我が微なる供を受けたまへ。と。爾の時に、世尊は彼の幻師及び王舍城の諸の衆生等の根の熟する時の至れるを觀、成熟せん爲めの故に、默然として請を受けたり。時に彼の幻師は、既に世尊の其の請を受くるを見已るや、復是の念を作さく。今此の瞿曇は我が意を識らず。定つて是れ一切智人に非るを知る。と。卽便に辭退し禮を作して去りぬ。

尊者目連は時に會中に在りしが、既に斯の事を覩るや、前んで佛に白して言はく。此の跋陀羅は、如來及び比丘衆に於て欺誑する所あらんと欲す。惟願はくば、世尊、其の請を受けたまふ勿らんことを。と。佛は目連に告ぐらく、是の念を作す莫かれ。然く貪・瞋・癡は能く誑惑を爲せども、我れ是の事に於て久しく已に斷滅して、諸法の本無生なる故を證得し、我れ長劫に於て正行に安住したれば、何ぞ人の我れを欺誑し能ふ者あらん。汝今當に知るべし。彼れの作す所は眞の幻化に非ずして、如來の作す所は是れ眞の幻化なることを。所以は以ぞ。諸法の皆幻の如くなるを現證せる故に、假に一切の諸の衆生の類をして、皆幻術を成ずること跋陀羅の如くならしむとも、如來のに比せば、

【三】六十種の清淨なる音聲。是れ佛の音聲の、善・美を極めたる者なる事を、六十の種類に分かちて擧げたる者なり。

卷の第八十五

授幻師跋陀羅記會　第二十一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の耆闍崛山の中に在して、大比丘の衆千二百五十人と倶なりき。皆阿羅漢にして、衆に知識せられたるものなり。菩薩摩訶薩は五千人にして、大神通の變現自在を得、無生忍及び陀羅尼を證したるものなり。其の名を師子菩薩・師子慧菩薩・妙栴檀菩薩・調御菩薩・大調御菩薩・光勝菩薩・光現菩薩・光威菩薩・光嚴菩薩・明覺菩薩・衆上菩薩・調御衆生菩薩及び賢劫中の一切の菩薩、彌勒菩薩摩訶薩・文殊師利法王子と曰ひたる等が而ち上首たり。復、四大天王・釋提桓因、娑婆世界の主、大梵天王幷に諸の無量の天・龍・夜叉・阿修羅・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽等あつて、衆に圍遶せられたるは、如來世尊の大名稱の故の、普く世間に聞えたればなり。謂はゆる如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊・一切知者・一切見者として、十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法・大慈・大悲を成就し、五眼具足し、記說の神變・教誨の神變・神通の神變を皆悉く圓滿して、能く三千大千世界の大地・城邑・草木・叢林・須彌山等・大海・江河・諸天の宮殿を以て、一毛の端に置いて虛空に住らしむるに、或は一劫を經或は一劫を過ぐとも、念の期する所に隨つて傾動せざればなり。

時に、王舍城の國王・大臣・婆羅門・居士・一切の人民は、皆如來に於て深く尊重を生じ、諸の上妙なる飲食・衣服・臥具・湯藥を以て恭敬して供養せしが、彼の城中に於て、一の幻師の跋陀羅と名くるあり。善く異論・工巧・呪術に閑ひ、諸の幻師に於て最も上首爲れば、摩竭提國にて、唯、見諦の人及び正信の優婆塞・優婆夷等を除ける諸餘の愚人は、皆幻惑せられて、歸し信ぜざる無かりき。時に、彼の幻師は、如來の功德の名稱を聞き、便ち是の念を生ずらく。今此の城中の一切の衆生は、

【一】四無礙解。又、四無礙智とも曰ふ。四無礙辯と同じ。意業に就いて曰ふと、口業に就いて曰ふとの差なり。第四卷「四辯」の解、參照。

【二】跋陀羅(Bhadra)。異譯本(幻士仁賢經「西晉竺法護」譯)には「名けて颰陀と曰ひ」と言ひ、「晉に仁賢と言ふ。」と割註しあり。

と名くるなり。菩薩は是くの如き智を成就せる故に、衆生の一切の希望を滿足すれども、而も作す所に於て亦染著する無きなり。と。爾の時、世尊の此の無功用の智を說ける時に、三千大千世界は六種に震動し、釋提桓因と忉利天とは、上空の中に於て曼陀羅華・優鉢羅華・拘物頭華・波頭摩華・芬陀利華・栴檀末香を雨して佛の上に散じ、天鼓自ら鳴り、大光遍く照すこと、昔より未だ曾て見ず、衆生の遇ふ者は身に淸涼を得たり。爾の時に、世尊は電得菩薩に告げて言はく。過去の如來・應・正等覺は、皆此の處に於て是くの如き法門を開示演說し、未來の諸佛も、當に世に出でば、亦此の處に於て是くの如き法門を開示演說すべければ、現在の無量阿僧祇の世界中の諸佛如來は、此の法門の斷絕せざる故の爲めに大光明を放てるなり。と。

爾の時に、長老阿難は座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、白して言はく。世尊、當に何と此の經に名くべく、我れ當に云何に奉持すべきか。と。佛は阿難に告ぐらく。此の經を名けて、無盡の伏藏と爲し、亦、一切法の無差別の相を說くとも名く。是の名字を以て汝當に奉持すべし。と。佛の此の經を說き已りたまふや、電得菩薩・長老阿難及び[七]諸の四衆・一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所說を聞き皆大に歡喜して信受し奉行せり。

【七】諸の四衆。第一卷「四衆」（十九頁）の解、參照。

樂說無礙と名くるなり。菩薩は是くの如き智を成就し已つて、普く一切、色法に迷惑し執著せる衆生に於て、其の性欲に隨ひ、無功用の智を以て、應ずる如くに法を說き、而も法界に於て二相を作さざるなり。廣く說かば、乃至、香・味・觸・法にも亦復是くの如し。電得、是れを諸の菩薩摩訶薩の法の伏藏と名け、菩薩は、此の伏藏を得已らんとて、是等の如き諸の境界の中に於て迷惑せる衆生を調伏せんと欲するに爲り、其の意樂に隨ひ、一一の處に於て、若しは一劫に若しは一劫を過して、種種の言詞を以て善巧に宣說するに、亦諸の處の邊際を得る能はず、菩薩の智慧にも亦損滅無きは、法界を離れずして無二・無差別に隨順せる故なり。是れを、菩薩は善巧に一切諸法の無差別の相を演說して、是くの如き法の伏藏を獲得し已り、能く衆生の爲めに、應ずる如くに法を說いて、無盡の法財を具足するを得しめ、生死の貧窮をば悉く永斷せしむと名くるなり。

電得、是れを菩薩摩訶薩の五種の伏藏たる大伏藏、無盡伏藏、遍無盡伏藏、無邊伏藏と名け、菩薩は是くの如き伏藏を成就せば、殊勝なる諸の功德を圓滿する故に、少しく功力を用ひて速に阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。と。此の伏藏の法門を說ける時に、電得菩薩は陀羅尼を得、五百の菩薩は電光明三昧を得、三萬六千の天子は阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

爾の時に、月幢菩薩は佛に白して言はく。世尊、佛の說かるる如き無功用の智とは、是の義云何。佛は月幢に告ぐらく。若し菩薩あつて、善法の中に於て身心相應せんと攀緣し造作せば、是れを功用と名く。若し菩薩あつて、身心調柔にして、念ずる無く依る無くして修行の相を離れば、彼れは往昔の願智を成就することを以て、億千の佛刹の所にて、施爲す可きを種種に示現すれども、而も法界に於て亦動く所無く、常に法を演說すれども少しの法の相無く、四攝の法を以て衆生を成熟すれども亦衆生として度す可き者無く、一切の諸佛の刹土を嚴淨すれども而も亦不淨なる佛刹を見ず、常に諸佛を念ずれども色相を觀ず、諸の佛刹に遊べども法界を離れざる、是れを菩薩の無功用の智

に住り、白して言はく。世尊、我れ今佛法の中に於て出家して、道を爲めんことを願欲すと。佛言はく。爾るべし。善來比丘。と。即、沙門を成じて[五]具足戒を得たり。爾の時に、勝生如來は、彼れの意樂の漸く已に成熟せるを知り、廣く諸の菩薩の行を演說することを爲せるに、可畏は聞き已つて無生忍を證し、佛法の中に於て永く退轉せざりき。彼の牛は如來の說く所の緣起の法句を聞くを得、其の聲の微妙なるに心に喜悅を生ぜしが、命終の後に、兜率天に生じて彌勒に見ゆるを得て正信を成熟せり。

是くの如くに、電得、諸の衆生の行は、甚深微密にして識り難く知り難し。是の故に、電得、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、應當に善く衆生の根・行を知つて、一切衆生の中に於て平等心に住し、無礙の心にて、一切の法に於て常に染著無く、諸の所有を捨て、淨戒を修持し、忍辱に安住し、精進を發起し、諸の禪定に入り、如實に一切の法性を觀察すべし。電得、菩薩にして是くの如き六法を圓滿せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を證得し能ふなり。云何にせば圓滿なる。謂はゆる、[六]一切智智に依止して修行する故なり。

電得、何者か是れ諸菩薩の法の伏藏なる。謂はゆる、菩薩は一切の色を見て、實の如くに、本來不生にして自性の淸淨なることを了知するなり。菩薩は色に於て善巧を得る故に、則ち能く四つの無礙解を成就す。何等を四と爲す。謂はゆる、義無礙・法無礙・詞無礙・樂說無礙なり。義無礙とは、諸の色の義に於て罣礙無き故なり。云何なるは色の義なる。謂はく。第一義なり。云何なるは第一義なる。謂はく。色の不可得なる故なり。是くの如き第一義の智を成就するを義無礙と名くるなり。法無礙とは、諸の色法に於て、如實に觀察して、如實に了知するを法無礙と名くるなり。詞無礙とは、謂はく。諸の色に於て、無礙智を以て、善巧の言詞にて、種種に分別するを詞無礙と名くるなり。樂說無礙とは、謂はく。諸の色に於て、衆生の機に隨ひ開示演說して、染無く著無きを

【五】具足戒。第一卷、同名の解、參照。

【六】一切智智。第一卷、同名の解、參照。

る王城の林中に在りて住せり。爾の時に、旃陀羅の、名けて可畏と爲せるありしが、兇險にして殺を好み、無慈に安忍し、手に血を塗り、見る者皆懼れたり。時に旃陀羅は、牛を其の舍に繫ぎ、方に入つて殺さんと欲するや、牛は見て驚怖し、繩を掣きて奔走し、勝生如來の林の所に往けり。時に旃陀羅は、刀を持ちて隨ひ逐ふに、彼の牛は惶怖して深坑に墜ち、其の命將に終らんとして楚痛し號吼せり。時に旃陀羅は、是の牛を見已るや、更に忿怒を增し、便ち坑中に入り、刀を持ちて殺さんと欲し、未だ下さざる頃に、爾の時、勝生如來は彼の林中に於て、無量なる百千の大衆の圍遶せるに、廣く[三]緣起の法門を分別することを爲せり。謂はゆる、無明は行に緣たり。行は識に緣たり。識は名色に緣たり。名色は六入に緣たり。六入は觸に緣たり。觸は受に緣たり。受は愛に緣たり。愛は取に緣たり。取は有に緣たり。有は生に緣たり。生は老・死・憂・悲・苦・惱に緣たり。是くの如き因緣は、一切皆是れ純大なる苦の集なり。と。電得、此の緣中に於て、無明は行に於て思無く覺無く、行も無明に於て亦思無く覺無し。乃至、生は老・死に於て思無く覺無く、老・死も生に於て亦思無く覺無し。是くの如くにして、諸法の性は不可得にして、行無く念無く、我・我所無く、本性清淨にして各相ひ知らざるを、凡夫は是くの如き法を聞かざる故に、色は是れ我にして、我れ諸色を有ち、色は我れに屬すと執し、乃至、受・想・行・識にも亦復是くの如くにし、此く我・我所に執著する故に由つて、無常を常と計し、苦を計して樂と爲し、不淨を淨と計し、無我を我と計して、四つの顚倒を生じ、顚倒の見の故に、無明迷惑して正しき思惟せず。心の染著に隨ひ、破壞する能はず。[四]有愛の繫縛・生死の輪廻は相續して斷たざれども、智者は善く法界の相を觀ずる故に、少しの我・人・衆生、乃至、壽命・生・老・病・死・繫縛・殺害として得可き者あるを見ざるなり。電得、爾の時に、可畏旃陀羅は是の時中に於て、遙に如來の說法の聲を聞くや、卽便に覺悟し、尋いで殺心を止め、持つ所の刀を棄て、坑よりして出でて佛の所に往き詣り、頂にて雙足を禮し、卻いて一面

【三】緣起の法門。第一卷「緣起」並に「十二因緣」の解參照。

【四】有愛。第二卷、同名の解、參照。

是くの如き智慧を成就して、大衆の中に處つて、能く衆生の心行の差別を了すれども、時に非ざるを知る故にて、默然として捨に住し、但是の念を作すなり。此の諸の衆生は、法に於て迷惑して解了する能はず。と。如來は殊勝なる根力を具足して、善く時を知れる故に、調伏に堪ふる者・勝れたる志樂の者・堪忍し能ふ者・善言を受くる者を、我れは悉く了知するなり。是くの如くに知り已るや、彼の衆生に於て攝受し利益するなり。是の故に、電得、初業の菩薩は未だ正位に入らずして、諸の衆生の勝れたる志樂の行に於て、善く知ること能はざれば、若しは在家若しは出家に、皆應に嫌害の心を起すべからずして、長夜に於て自ら衰惱を致すこと勿れ。是の故に、菩薩は、初發心より、當に一切の大乘に住する者に於て佛の想を生じ、餘の衆生に於て、復彼れの諸の惡業を作るを見ると雖も、而も亦損害の心を起さざるべきなり。何を以ての故ぞ。如來は、常に、若し諸の衆生にして、白淨の法に於て少しの缺減あらば、終まで涅槃に入る能はずと說けばなり。菩薩は、若し貪行の衆生を見ば、應に是の念を作すべし。彼れの、貪欲の熱惱の爲めに燒かるるは、是れ我れの過咎なり。と。彼の瞋恚及以び愚癡の熱惱に燒かるるを見ば、皆悉く念言せよ。是れ我れの罪なり。と。何を以ての故ぞ。我れ一切衆生の病苦を見ば、應に藥を求め、方便して療治することを爲すべきは、我れ先に衆生の病を除かんと誓願し、而も今是れを捨置かば、是れ我れの過咎なればなり。と。菩薩は、是くの如き意樂にて自ら其の過を省み、諸の衆生に於て深く慈心を起さば、身分を殺害し割截する若きにも、彼の怨の所に於て反報の心を生ずることは、是の處ある無きなり。電得、菩薩は是くの如くに正しく修行する時に、過去に有ちし所の不善の業は、永く盡きて餘無く、未來の不善は、終まで更に起らざるなり。

電得、乃往の古昔、無量なる阿僧祇劫に、燃燈佛の前に、佛あつて勝生如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名けて世に出現し、世界を光明と名け、安隱な

佛に奉事し　然る後に正覺を成ぜしが　今の則ち我が身是れなり　彼の比丘の害せんと欲し
し　無罪の法師は　當來に佛と作るを得る　彌勒菩薩是れなり　時に彼の王宮内の　八萬の
諸婇女は　淨信にて衆德を植ゑ　無量の佛に承事せしが　今に於て復行を發し　衆生を利せん
と大願し　當に千億の佛に奉じて　各．等正覺を成ずべし　我れ今汝等に告ぐ　一切に害を
生ずる勿かれ　慈を修することは佛の讃ずる所にして　速に大菩提を得ることを。

是の故に、電得、諸の衆生の根性・志樂に於て善く知る能はずんば、應に一切時に害心を生ずる勿るべし。電得、譬へば、諸山にて須彌を最と爲すが如く、如來の智慧も亦復是くの如くに、諸智の中に於て最尊無上なり。譬へば、一切の諸水の中にて、海を最勝と爲すが如く、如來の智慧も亦復是くの如くに、諸智の中に於て最も深大と爲すなり。又、諸の國王の中にて轉輪聖王を最も尊上と爲すが如く、如來の智慧も亦復是くの如くに、諸智の中に於て無上上と爲すなり。電得、如來は是くの如き智を成就せる故に、一切衆生の貪・瞋・癡の行の心と心の轉變とを、如來は悉く知つて、一彈指の頃に皆攝受し能ふなり。電得、如來は一切種智を成就したれば、明眼の人の、自ら掌中の[三]五菴羅果を觀るに、功力を用ひず、明了にして疑無きが如くに、如來も亦爾く、一切衆生の心行を了知して、大衆の中に於て種種に法を説くに、無量無數の佛世界の中の、貪行と相應せる諸の衆生等の、貪の爲めに熱惱し、晝夜に尋・思して虛しく時を過すを、我れは悉く知見するなり。貪の爲めに熱惱して、身・口に種種の業を起すを、我れは悉く知見するなり。瞋行の衆生の、瞋忿にて心を覆はれ、互に相ひ憎嫉し、以て毒害する故に、無間の處に墮するを、我れは悉く知見するなり。癡行と相應せる諸の衆生等の、無明の闇蔽にて迷惑し執著して、樂うて邪見に隨ふを、我れは悉く了知するなり。堪任を有つ者・堪任せざる者・增進を有つ者・退失を有つ者・如來乘に於て善根を種うる者・緣覺乘に於て善根を種うる者・聲聞乘に於て善根を種うる者を、我れは悉く了知するなり。如來は

【三】五菴羅果。一五「菴果」と同じ。第二卷、同名の解、參照。

忿に隨つて害を生じ　魁膾は刀を持ちて進むや　無垢は便ち悲泣せり　王は語らく汝非法にして　何故に而も復悲むと　無垢は王に白して言はく　是の事は自ら表し難きも　且く待て須臾の間　我れに當に明證あるべしと　王は比丘の言を聞き　卽魁膾を止め　當に何事を作すかを試みるべしとて　汝應に速に宣說すべしと　勝れたる意樂を成就し　慈を行ひて世を利する者は　十指の爪掌を合し　而して誓言を發さく　大王汝當に知るべし　若し實に此の事無くば　願はくば地は六種に動き　空中に妙華を雨さんことをと　是くの如き言を發すに當り　大地は六種に動き　空界に天華を雨して　魔衆は憂惱を懷けり　王は時に淨信を生じ

足を禮して歡喜を求むらく　我れ當に地獄に墮すべくして　依る無ければ願はくば覆護したまはんことを　咄なる哉此の　惡に遇ひ　如何にして毒心を起せるか　覆無く依る所無く從ふ所は唯惡友のみ　十方に我れ護無く　唯大師のみ有れば　我れ當に王位を捨てて　壽を盡すまで歸依し住すべしと　比丘は彼の王　及び眷屬の志樂を知り　爲めに第一義を說けるに　王は聞いて正信を得　百億の眷屬と與に　王位を捨てて出家し　頭陀の行を修習して　他人の請を受けず　時に王の後宮內の　綵女八萬人は　第一義を說くを聞き　皆不退轉に住したり　王は佛の敎に依ること　二十四年の中　日夜に常に懺悔したれども　罪業は猶盡きざりき　百俱胝の眷屬の　惡心にて法師に向へるは　此より命終せる後に　無間獄に墮し　多億の年苦を受け　罪畢つて如來に遇ひしも　昔の恐怖の因を以て　餘報は常に羸劣にして　次第に轉じて　千億の佛を供養することを修習し　各　餘國の中に於て　悉く皆正覺を成じ　俱に同一の名字にて　功德名稱と號せん　時に彼の廣授王は　慈忍比丘の所にて　毒害の意を起せるに由り　多億歲の中に於て　昔の惡業の對を受け　大叫地獄に墮し　此の業報を畢し已つて　還つて人身を得　普眼如來に値ひ　親近して常に供養し　此れより轉じて　八十俱胝の

阿耨多羅三藐三菩提に任せしめたり。爾の時に、多く諸の惡比丘あつて、行を修することを知らず、常に嫉妬を懷き、魔に爲つて惑されて、彼の主の所に詣つて是の言を作さく。王の師とし敬ふ所の無垢比丘は、王宮に出入するに禁制ある無し。而も彼の比丘は、未だ貪欲を離れずして、非時にして食ひ、香鬘にて身を厳り、實に梵行に非ざれば、應に供養すべからず。我れ此の事の爲めに、來つて王に告ぐ。過つて、後に佛の正法の中にて不信を生ずること莫かれ。と。時に、一魔あつて、名けて極惡と爲ししが、卽自ら身を變じて比丘の像と作り、復王の所に詣り、前の如くに重ねて說けり。時に廣授王は、數此の語を聞きたるも、卽是の念を作せり。無垢比丘は、精勤にして智を有ちたれば、我れの尊重する所なり。此の事ある若きは、終まで是の處無けん。と。是の念を作し已るや、爾の時に、魔衆は、虛空の中に於て便ち半身を現し、彼の王の所に向つて、偈を說いて言はく。

王は應に技藝を學んで　善く機宜を識るべし　廣授知る能はずんば　是れ人王の相に非じ
佛の羅漢弟子は　已に大智を具して　是くの如くに語るに依らずして　云何ぞ[一]斷見に隨ふ
比丘は利益せん爲めに　汝に告ぐるに誠言を以てす　斷見惡趣の人は　實には梵行を修するに非ず　彼の人は宮內に於て　釆女と共に娛樂するを　王應に侍從と與に　親しく覩て疑心を離れよ　と。

王は是くの如き事を聞くや　心に大驚惱を生じ　卽便に侍從を將ゐて　速疾に宮中に詣れり
無垢は時に宮に在つて　第一義の諸法の自性は空にして　我無く壽者無きことを演說したりしが、王は諸の兵衆と　倶に魔に爲つて惑され　宮中の婇女の　比丘を圍遶せるを見るや　瞋猛きこと醉象の如くにして　便ち旃陀羅に勅すらく　比丘は我が宮を汚したれば　當に治するに苦の法を以てすべしと　臣佐及び眷屬も　皆魔に爲つて持れたれば　無罪の比丘に於て

【一】斷見。「無し」と主張するを指す。尙、第一卷「斷常」の解、參照。

電得、過去の無量無邊なる阿僧祇劫の五濁世の時に、佛あつて出現し、號して寶聚功德聲如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と曰へり。時に世の壽命は百二十歲なりしが、我が今日の如くに、彼の諸の衆生は、極重なる貪欲・瞋恚・愚癡の煩惱にて覆蔽せられて、父母・兄弟・朋友に違逆し、和上・阿闍梨に順ぜず、恩德を知らず、常に毒害・姦詐・賊心を懷きて互に相ひ破壞し、非理にして行ひ、佛・法・僧に於て敬信を生ぜず、慳悋・鄙薇にて餓鬼の法を行へり。彼の佛刹の中には、是等の如き諸の惡衆生あつて、調伏せられ難かりき。時に彼の世尊も、亦往昔の誓願力の故を以て、此の惡世に於て阿耨多羅三藐三菩提を得たりしが、其の佛に復二萬二千の大聲聞衆ありき。彼の時に、王の、名けて廣授と曰へるあつて、自在に王化して閻浮提を統べ、佛法の中に於て信心清淨にして、彼の如來及び比丘衆を夏安居に於て請じて、廣く供養を設けたり。爾の時に、一の法師比丘の、名けて無垢と爲せるあつて、辯才を具足し善巧に說法して、衆に樂聞せられしが、衆生に開示するに常に疲倦せず、凡べて說く所の法を、希求するある無きにも、容相熙怡として、先に言うて問訊するに、色力具足し顏貌端嚴にして、諸の衆生の、樂見し供養し恭敬し尊重し讚嘆する所と爲れり。復、新學年少の比丘あつて、常に無垢に隨つて王宮に出入せしが、障礙ある無く、種種に衣服・飮食・臥具・醫藥を供養せられたり。時に、彼の衆中に多く比丘ありしが、身の戒・心の慧を修習することを知らず、佛法及以び衆僧を敬はず、常見・斷見及び我見等もて佛法を謗り、輕躁にして調じ難く、諸根を攝めず、非法に住して、沙門の行無きに自ら沙門と稱して、身・口・意の業は悉く皆邪僻なりき。時に彼の世尊は、安居を過し已つて便ち涅槃に入りしが、其の王、廣授は、赤栴檀を以て闍維をば供養し、八十倶胝の寶塔を造立するに、赤栴檀を以ひて欄楯と爲し、四面に皆金色の蓮華を有ちたりき。無垢比丘は、佛に多聞第一と記別せられしが、佛の滅後に於て、正法を弘く宣べ、遊行する所の城邑・聚落に隨ひ、無量なる百千の衆生を敎化して、皆

巻の第八十四

無盡伏藏會　第二十の二

復次に、電得、菩薩は是くの如き智を成就し已るや、諸の衆生の根行・意樂に於て善巧に了知して、若し多貪の衆生を見ば、調伏して其の病を療せんと欲する爲めの故に、同じき凡夫を示して、現に諸欲を受け、妻子・家業・資生を具有すれども、猶蓮華の如くにして染著せざるを、諸の衆生の、癡にして智慧無きあつて、菩薩の善巧方便なるを知らずして、是の念を作さん。何ぞ智有る者にして、諸欲を貪受すること凡夫に異らざるか。と。便ち菩薩は菩提を遠離せりと謂ひて、是くの如き衆生は、心不淨なる故に、大瞋恚を起して敬信を生ぜざるなり。此の業に由る故に、身壞れ命終るや、大地獄に墮すれども、復菩薩の密化の因緣を以て、罪報畢き已るや、決定して當に平等に入ることを得べきなり。電得、譬へば、猛火の、草木を投ずるに隨ひ、一切熾然として悉く火を成ずるが如く、菩薩も亦復是くの如くに、智火は熾然たれば、有らゆる衆生の、若しは貪・瞋・癡若しは善・不善も、菩薩は彼れに於て之れと同じく行ずるや、一切は熾然として皆智慧を成ずるなり。是れを、菩薩の不共の法と名く。又、須彌山王の不共の相、謂はゆる四面は四寶にて成ぜられ、隨つて諸の衆生の靑・黃・赤・白・種種の色相も、彼れ若し瑠璃の面に往き詣らば、皆同一の色にして彼の瑠璃の如く、金色の面に詣らば、皆金色なる如く、銀 玻瓈色にも悉く皆等を同じうするが如く、菩薩も亦復是くの如くに、不共の法を得たれば、隨つて諸の衆生の、若しは貪・瞋・癡・若しは善・不善も、菩薩の之れと同じく行ずる所に至るや、一切皆菩薩の智に入らしめ、彼れ心不淨にして、自らの惡業の故にて、或は地獄・餓鬼・畜生・閻摩羅界に墮つとも、是の菩薩の不共の功德及び願力の故を以て、罪報畢き已るや、決定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきなり。

空には種種なる差別の相ある無く、亦建立することも無きが如く、菩薩も亦復是くの如くに、善く法界を觀じて、一切の法の一相に入ることを了すれども、亦往昔の誓願力に由る故に、衆生の行に隨ひ種種に法を説き、而も法界に於て差別を有つこと無きなり。電得、此の等分行の二萬一千及び彼の諸行の八萬四千をば、菩薩の觀察すること悉く皆明了なるは、譬へば、良醫の病を知つて藥を授くるが如くに、無功用の智を以て種種に法を説く、是れを菩薩摩訶薩の等分行の伏藏と名く。菩薩は此の伏藏を證得し已らんとて、諸の衆生の爲めに、若しは一劫若しは一劫を過して、其の志樂に隨ひ、種種の言詞を以て善巧に宣説すれども、其の諸行の邊際を得る能はず、菩薩の智慧・辯才も亦盡く可からざる、是れを、菩薩は善く法界無差別相を説きて、是くの如き等分行の伏藏を獲得す。と名くるなり。

願力の故を以て、善く縁起を觀じ、自然に百千の法門を演出して、衆生の無明の業行を斷除して解脫を得しめたるなり。電得、譬へば、良醫の善く衆病を療するは、先づ善く醫方の諸論を綜習したれば、纔に病相を見るも皆悉く了知して、呪藥の施す所、除愈せざる無きが如きなり。菩薩も亦復是くの如くに、善く法界を觀じ、無功用の智を以て、彼れ癡行を積集せる衆生の爲めに、其の根性に隨ひ、百千の法門を開示し演說して、悉く明了ならしむるなり。電得、是れを、菩薩摩訶薩の癡行の伏藏と名け、菩薩は此の伏藏を證得し已らんとて、善く縁起を觀じて、是等の如き癡行の衆生の爲めに、若しは一劫若しは一劫を過したるに於て、其の性欲に隨ひ、種種の文字語言を以て善巧に演說すれども、其の癡行の邊際を得る能はず、而も是の菩薩の智慧・辯才も亦盡く可からざる、是れを、菩薩は一切法の無差別相に於て、善巧に宣說して、是くの如き癡行の伏藏を獲得すと名くるなり。是くの如き癡行は二萬一千及び彼の諸行は八萬四千なるを、菩薩は是くの如き行を斷ぜん故の爲めに、百千の法門を開示し演說する、是れを菩薩の癡行の伏藏と名くるなり。

復次に、電得、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の等分行の伏藏と爲すか。譬へば、四面の鏡輪の、清徹明淨にして諸の垢翳無きを、四衢に懸くるに、對する所の色像は、皆中に於て現じて增減ある無く、而して此の明鏡は亦、我れ能く此の種種の色像を現ずと念言せざれども、然も善く此の鏡輪を磨瑩し已らば、一切の諸相は自然にして現ずるが如し。菩薩も亦復是くの如くに、法界の鏡輪を善く磨瑩し已らば、無功用の三昧に住して、諸の衆生の心行の差別に隨ひ、百千の法門を開示し演說して、悉く了知して皆解脫を得しむれども、法の相及び衆生の相を起さざるなり。何を以ての故ぞ、菩薩は、善く法界の相を觀ぜる故に、此の四行と相應せる衆生に於て、實の如くに了知し、其の根性に隨つて法を說くことを爲せども、而も法界及び衆生界の如實の觀察に於て、二相を有つこと無きは、爾所の法界及び衆生界に、二無く差別無きことを明見せる故なり。電得、譬へば、虛

くにして差別あること無きが如し。菩薩も亦復是くの如くに、此の法界無差別の智に依つて、善巧に法を說いて、種種の瞋行の衆生を摧滅すれども、法界に於てして差別を作すにあらざるなり。電得、譬へば、日輪の出す所の光明の、照す所の處に隨ひ皆日輪に攝るが如く、菩薩も亦復是くの如くに、瞋行を調伏し滅除せんと欲する爲めに有つ所の言說は、皆是れ法輪にして、法界に於て差別を作さざるなり。是くの如き瞋行は二萬一千及び彼の諸行は八萬四千なるを菩薩は無功用の智を成就し、彼れ衆生の種種の瞋行に隨つて法を說くことを爲せども、是の念――我れ衆生の爲めに今現に法を說き、已に說き、當に說くべし。――を作さざるなり。是れを、菩薩摩訶薩の瞋行の伏藏と名け、菩薩は此の伏藏を證得し已らんとて、若しは一劫若しは一劫を過したるに於て、諸の衆生の種種の意樂に隨ひ、種種の文字語言を以て方便し演說すれども、其の瞋行の邊際を得る能はず、而も是の菩薩の智慧・辯才も亦盡く可からざる、是れを、菩薩は善く法界の無差別相を說きて、是くの如き瞋行の伏藏を獲得すと名くるなり。

　復次に、電得、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の癡行の伏藏と爲すか。電得、諸の菩薩等の是の行の如きは甚だ難事と爲す。謂はく。諸の衆生の、惑に隨つて行ずる者・他を惱害する者・無明の胎殼に纒裹せらるる者・癡の繭に處つて自ら繫縛する者・法界の中に於て方便無き者・應に行ずべき所を善く觀察せざる者・我見に著する者・邪道を行ずる者・鈍行に住る者・出離し難き者・是等の如き迷惑せる衆生の爲めに、初發心より大加行を起して、疲苦を生ぜず亦懈怠も無くして、是くの如くに思惟すればなり。應に何の緣・何等の勝解を以て、云何に說法して、此の衆生をして、菩薩の行に入づて解脫を得しむべきか。と。菩薩は、往昔に善く法界を觀じ、無功用の智を以て大悲に住し、彼れ衆生の法界に迷へるを知り已つて、力の堪ふる所に隨つて法を說いて、悉く調伏せしむることを爲したれども、亦、我れ今法を說き、已に說き、當に說くべし。と念言せざりき。彼れの往昔の誓

復次に、電得、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の瞋行の伏藏と爲すか。謂はく。諸の衆生は、憍慢と相應して、我・我所を計して自他の相に住し、久遠より來慈忍を修めず、瞋恚熱惱して自ら其の心を壞り、佛・法・僧に於て憶念を生ぜず、瞋毒に覆れて法に迷惑するを、菩薩は彼の多瞋の衆生に於て、終まで損害・傷惱を起さずして、唯是の念を作すなり。奇なる哉、衆生の愚癡にて迷惑して、乃ち諸法の本性の寂靜にして、垢濁無く和合無く違諍無き遠離の法の中に於て、顚倒と相應して妄に瞋恨を生ずることや。と。是の如くに念じ已つて、大悲の心に住して、常に自ら愍に惻み、設ひ其の身分を支解する者ありとも、瞋行の衆生を調伏せんと欲して、忍辱に安住することを爲し、若しくば、彼の無量なる瞋行の衆生の、互に相ひ違背して心に恚恨を懷き、是の業成り已つて當に毒蛇の惡趣の中に墮すべきを、忍に住せる菩薩は、慈念の力を以て、此の衆生を化して、能く惡趣の報を受けずして、決定して當に平等を證することを得べからしむるなり。是れを、菩薩は善巧方便にて、衆生の瞋恚の行を滅除すと名く。復次に、電得、菩薩若し瞋惱の衆生を見ば、是の念言を作すなり。一切の諸法の本性は淸淨なるに、此の諸の衆生は、相に隨つて妄に分別を生ずることを行じ、此の平等にして違ふ無き法の中に於て瞋心を起すは、彼れ諸の衆生は、法界の性に於て了知する能はざればなり。若し、此の衆生にして法の性を見ば、終まで他に於て忿害を生ぜじ。法界の本性を了知せざるを以て、是の故に瞋を生ずるなり。と。菩薩は、彼れ多瞋の衆生に於て、慈愍を倍增して大悲に住し、昔の願を成滿せんとて、無功用の智を以て、衆生の瞋恚の行を壞らん故の爲めに、種種の法門を開示演說して、而も亦、我れ衆生の爲めに瞋を除かんとて法を說く。と念ぜざるなり。何を以ての故ぞ。菩薩は法界の相を善く觀ずる故なり。是れを、菩薩は法界に差別無き相に安住して、煩惱の行を滅すと爲すなり。電得、譬へば、黑闇を除いて光明を現すことを得るにあらず、亦能く黑闇を除かんとする者無きに非れども、是の黑闇及び光明の性の如きは、皆虛空の如

常に自ら汎滿して衆生の用を爲すが如し。菩薩も亦復是くの如くに、昔の願を成就せんとて、無功用の智を以て、四聖諦を說きて一切の生死の熱惱を滅除し、普く人天に聖解脫の樂を施し、而も是の菩薩も亦、我れ今法を說く。已に說けり。當に說くべし。と念言せず。任運に大悲の心に住して、衆生を觀察して、應に隨ひ法を說くなり。復次に、電得、譬へば、帝釋に十二那由他の諸の天女等あるに、彼れ帝釋の自在力の故を以て、其の多くの身を現じ、諸の天女をして、彼れの欲樂に於て皆滿足を得て、各自ら、我れ今獨り帝釋と歡娛す。と念言せしめ、而も是の帝釋は、實には染する所無きが如し。菩薩も亦復是くの如くに、諸の衆生に於て、度す可き者に應じ、其の意樂に隨つて之れを成熟すれども、然も是の菩薩にも亦染著無きなり。復次に、電得、譬へば、日輪の山峯に出づる時に、光明普遍に閻浮提を照して、照さるる處は、青・黃・赤・白・種種の形色は皆悉く顯現すれども、而も彼の日輪は一色一光にして、差別の相無きが如し。菩薩も亦復是くの如くに、智慧の日輪にて法界を照すに、彼の衆生の執著の山峯に出でて、緣ずる所の一つの相に、其の意樂に隨つて法を說くことを爲せども、然も法界に於ては二相を有つ無きなり。電得、是れを菩薩摩訶薩の貪行の伏藏と名け、菩薩は此の伏藏を證得し已らんとて、或は一劫或は一劫を過したるに於て、諸の衆生の種種の意樂に隨つて無量の身を現し、種種の言詞を以てして法を說くことを爲し、然も法界に於て亦二相無きなり。復次に、電得、譬へば、眞金もて、工巧の力に由り、意に隨つて種種の瓔珞・莊嚴の具を作る所にて、其の相各異れども、而も彼の金の性に差別ある無きが如し。菩薩も亦復是くの如くに善く法界を觀じて、諸の衆生の種種の意樂に隨ひ無量の身を現し、種種の言詞を以ひて法を說くことを爲せども、然も法界に於て亦二相無きなり。是れを常に法界の一相に入ると爲す。菩薩は是くの如き伏藏を獲得して、能く衆生の爲めに種種に法を說くや、彼れは法を聞き已つて、富――無盡の聖財を有つ――を具足し、生死の貧窮は悉く皆永く斷つなり。

づて暫く見て貪染の心を離れ、便ち無上の明脫を成熟するを得る有り。是の故に、電得、菩薩は是の種種の貪病及以び貪藥に於て、善巧に了知し、而して法界に於て二相ある無きに、此の法界に迷惑せる衆生に於て、大悲の心を起すなり。電得、若しは貪・瞋・癡若しは法界智は、少の法として得べき者無ければ、菩薩は是の念言を作すなり。我が見る所の如くんば、是の諸の衆生は、此の無相の自性空寂の、假名にて安立せる和合の法の中に於て、貪欲・瞋恚・愚癡を起せば、我れは當に此れに於て、實の如くに觀察して、彼の迷惑せる貪欲の衆生の爲めに大悲に住し、昔の願を成滿せんと、法界より動かず、[四]無功用の智を以てして之れを成熟すべし。と。若くにして、丈夫の、彼の女人に於て妄に淨の想を生じて、重き貪染を起すあらば、菩薩は、即便に、女身の、端正殊妙にして色相具足し、珍寶・瓔珞種種の莊嚴の、猶天女の如くにして、昔より未だ見ざる所のものを示現し、彼の衆生に隨つて、其の愛著をして貪戀を極めしめ已つて、彼の堪任するを量り、方便して其の貪欲の毒箭を拔かんと、自在力を以て、還變れる女身を其の人の前に現じて法を說くを爲して、彼の衆生をして法界に通達せしめ、便ち沒して現れざるなり。若し女人あつて、彼れ丈夫に於て、心に愛染を生ぜるにも、菩薩は便ち丈夫の身を現じ、乃至、其の貪欲の毒箭を拔くことを爲し、而して法を說いて法界に入らしむるを爲し、便ち沒して現れざるなり。電得、是の諸の貪行の二萬一千及び[五]彼の諸行の八萬四千をば、菩薩は無功用の智にて、無量なる億千の法門を出生し、衆生を開曉して悉く解脫せしむれども、而も亦「我れ衆生の爲めに是くの如くに法を說けり。」と念はず。亦「衆生は解脫を得たり。」とする者も無きなり。電得、譬へば、[六]無熱龍王の、業力の故を以て、其の宮內より[七]四大河を出し、諸の衆生の水陸に住する者の爲めに、夏時の熱惱に而ち清凉を作し、花果を潤澤し、五穀を滋實して、諸の衆生をして安隱快樂ならしめ、而も彼の龍王は、是の念――我れ今此の河水の流出をして、已に出で、當に出づべくせしめん。――を作さざれども、然も四河に於ては、

【四】無功用の智。意志の發動無くして、自然に起る行動を、無功用と謂ふ。菩薩の第八地以上の智は、任運自然に、眞性に適ふ者なるに由つて名く。

【五】彼の諸行の八萬四千。貪行に隨伴して起る種種の煩惱行を謂ふ。八萬四千とは、無數を意味する概大數なり。

【六】無熱龍王(Anavatapta nāga-rājan)。阿耨龍王に同じ、第一卷、同名の解及び「阿耨大池」の解參照。

【七】四大河。阿耨達池より四方に出づる大河なり。一に、恒伽河(Gaṅgā)池の東面より出でて東南海に入る。二に、信度河(Sindhu)池の南面より出でて西南海に入る。三に、縛芻河(Vakṣu)池の西面より出でて西北海に入る。四に、徙多河(Sītā)池の北面より出でて東北海に入る。(是れ支那大河の源なりと)是れなり。

と。電得菩薩言はく。唯然く、世尊。願はくば聞かんことを樂欲す。と。佛は電得菩薩摩訶薩に告ぐらく。五種の〔二〕伏藏たる大伏藏、無盡伏藏、遍無盡伏藏、無邊伏藏あり。菩薩は、是くの如き伏藏を具足せば、永く貧窮を離れて、即能く上に說く所の如き殊勝の功德を成就し、少しき功力を以て、速疾に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきなり。云何なるを五と爲す。謂はゆる、貪行の伏藏・瞋行の伏藏・癡行の伏藏・等分行の伏藏・諸法の伏藏なり。

電得、云何なるを、名けて菩薩摩訶薩の貪行の伏藏と爲すか。謂はく。諸の衆生は貪行と相應して、顚倒繫縛して、行の諸相に隨つて種種に分別し、色・聲・香・味・觸・法等の諸の境界の中に於て、執著すること堅固に、耽樂し昏迷するを、菩薩は、彼の諸の衆生等の種種の心行に於て、應に實の如くに知るべきなり。彼の諸の衆生は、何を樂欲する所ぞ。何の境界に於て染習すること增強なるか。何等の信解を具足し成就せるか。往昔曾て何等の善根を種ゑて、何の乘中に於て當に發趣するを得べきか。有つ所の善根は久如に成熟せりや。と、菩薩は、諸の衆生等の一切の欲を斷ぜん爲めの故に、彼の善心をして常に相續せしめん故に、審に諦に觀察して療治することを爲すなり。電得、當に知るべし。衆生の〔三〕根行の差別の識り難きことは、一切の聲聞・辟支佛も知る能はざる所なることを。何に況んや、凡夫及び諸の外道をや。是の故に、電得、或は衆生の、諸欲に著すと雖も、阿耨多羅三藐三菩提を成熟し能ふ有り。或は衆生の、纔に欲の境に觸れ、或は染心を以て語言に發して、便ち無上の明脫を成熟することを得る有り。或は衆生の、諸の妙色を覩て心に欲染を生じたるも、彼の色の變壞するや、即便に覺知して欲惱便ち息み、深く無常を念じて、則ち能く無上の明脫を成熟する有り。或は衆生の、女人を見ると雖も貪著を生ぜずして、後に於て思念して方に染心を起し、彼の形容を想うて愛戀を生ずる有り。或は衆生の、其の夢中に於て、意に可なる色を見て心に貪著を生じ、念を繫けて追求する有り。或は衆生の、女人の聲を聞いて便ち貪愛を生じ、時あ

〔二〕伏藏。土中に埋沒せる寶藏の義なり。一切衆生の三界に流浪しながら、佛性を具有せるを、佛、此れに法を說いて、開發せしむるに喩へたり。

〔三〕根行。諸根に有つ所の造作、即ち心・身の能力・活動を謂ふ。

ども色身を見ず、三解脫に住すれども正位に入らずして、衆生の欲するに隨ひ佛土を嚴り淨め、刹那の頃に於て速に阿耨多羅三藐三菩提を成就し能ふか。と。

爾の時に、電得菩薩摩訶薩は、卽、佛前に於て偈を以て問うて曰はく。

無上、人中の尊　無邊の知見者　共法に安住して　諸の世間を利益したまひ　等心にて衆生を觀、世の依り怙む所と爲り　諸の邪正の道を示して　畢竟の安樂ならしめたまひ　勝功德を積集したまへること　猶衆寶の　聚の如くなる　世間の智慧の日　三界の應供の尊　願はくば最上の乘を說きたまはんことを　菩薩の道を成就して　面相は滿月の如くに　奢摩他を具足して寂靜の法を開示し　能く諸の煩惱を滅したまふ　願はくば菩薩の行を說きたまはんことを

諸の衆生を饒益したまはんとて　佛刹幷に壽命　色身と眷屬　三業及び諸法と　一切皆淸淨なり　唯願はくば如來　淸淨なる菩薩の行を說きたまはんことを　云何に魔を降伏し　云何にして法を說き　云何に忘失せざるかを　唯願はくば宣說を爲したまはんことを　云何に勇進の者は　遍く生死に入りながら　一相の中に安住して　法に於て常に動く無く、云何に諸佛の所にて　親近して供養し　常に佛の色身を觀ながら　畢竟じて諸相を離れ、三解脫を證して鳥の空界に飛ぶが如くなりと雖も　未だ諸の功德を具せずして　終に涅槃に入らず　諸の根性と欲とを知つて　隨順して畏るる所無く　亦染著をも生ぜずして　彼の衆生を成熟せんと先づ世間の樂を施して　後淨心を發し　殊勝の智を具足せしめて　無上の菩提を證するか是くの如き深妙の義を　唯願はくば如來說きたまはんことを　と。

爾の時に、世尊は電得菩薩摩訶薩に告げて言はく。善い哉、善い哉、善男子。乃ち能く佛に是くの如き義を問ひて、無量の衆生を利益し安樂にし、現在の世間の天・人及び未來世の諸の菩薩等を攝受することや。是の故に、電得、應當に諦に聽き、善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに說くべし。

卷の第八十三

無盡伏藏會　第二十の一

是の如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の耆闍崛山に在して、大比丘衆一千人と倶なりき。皆悉く殊勝の功德を成就して、能く師子吼するものなり。菩薩摩訶薩は五百人にして、一切、皆陀羅尼門を得て辯才無礙に、無生忍を證して不退轉に住し、諸の三昧を具して神通に遊戯し、善く衆生の心行の趣く所を知れり。其の名を日幢菩薩・月幢菩薩・普光菩薩・月王菩薩・照高峯菩薩・毘盧遮那菩薩・師子慧菩薩・功德寶光菩薩・一切義成菩薩・成就宿緣菩薩・成就願行菩薩・空慧菩薩・等心菩薩・喜愛菩薩・樂衆菩薩・戰勝菩薩・慧行菩薩・電得菩薩・勝辯菩薩・師子吼菩薩・妙言音菩薩・能警覺菩薩・巧轉行菩薩・寂滅行菩薩と曰ひ、是等の如き菩薩摩訶薩は、而ち上首たり。復、釋提桓因・四大天王・娑婆世界の主、梵天王及び大威德の諸の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽あつて、是等の如き無量の諸の大衆と倶なりき。

爾の時に、電得菩薩は諸の大衆の、寂然として清淨に、諸の大[一]龍象の、皆悉く已に集れるを見て、即、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、白して言はく。世尊、我れに少しき疑あつて、今諮問せんと欲す。惟願はくば、世尊、聽許を垂れられんことを。と。爾の時に、世尊は電得菩薩に告げて言はく。如來・應・正等覺は、汝の問ふ所を恣にせしめて、當に汝が爲めに說くべし。と。電得菩薩は佛に白して言はく。世尊、菩薩摩訶薩は、何の法を成就せば、能く衆生の一切の欲する所を滿して、諸過の染著する所と爲らず、其の根性に隨ひ方便引導して、彼の衆生をして、身壞れ命終つて、惡趣に墮せず、決定して、當に平等を得べからしめ、世に處りながら、染る無きこと猶蓮華の如く、法界より動せずして諸の佛刹に遊び、常に佛を離れざれ

【一】龍象(Nāga)。那伽を龍又は象と譯す。佛門の賢聖の、德力の偉大なる者を、龍に喩へ象に喩へたるなり。或は衆の勝れたる者を美稱して、龍象とも曰ふと謂ふ。

正覺の爲めの故に、往いて此の經を聽きて、受持し讀誦し、說の如くに修行すべし。阿難、若し三千大千世界をして、中に七寶を滿たしめたるを、恭敬して施し奉らんより、此の法を聞きて受持し讀誦し、說の如くに修行することを爲せ。阿難、若し過去の一切の諸佛の爲めに七寶の塔を起し、一切の供を以て之れを供養すとも、阿難、若し現在の佛及び聲聞僧を、諸の樂具を以て壽を盡すまで供養すとも、阿難、未來の諸佛及び諸菩薩に、悉く奴僕と爲り及び弟子と爲つて之れを供養すとも、是の經を聞かず受けず持たず讀まず誦せず轉ぜず住めずして、是等の法を離れば、諸佛如來を供養すとは名けじ。阿難、若し菩薩あつて、是の經を聞きて、受持し讀誦し、他の爲めに廣く說き、說の如くに修行せば、而ち是の菩薩は、已に三世の佛を供養することを爲し已れるなり。何を以ての故ぞ。阿難、[八九]說の如くに修行することは、卽ち是れ如來の調伏の法なればなり。と。是の語を說き已りたまふや、大德阿難・郁伽長者・乾闥婆・世間の天・人・阿修羅等は、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜せり。」

【八九】說の如くに、乃至、法なればなり。異譯本には、「諸の如來、無所著、等正覺は、法を以て上と爲し、法從り生ずることを爲せばなり。」とあり。

たり、善逝。と。阿難、是の郁伽長者は、在家地に住すれども、是の賢劫中の如來・應供・正遍覺の世に出現せるに、常に在家にて是の諸の如來を供養し恭敬して正法を護持し、常に在家の中にて出家の戒に住して、廣く如來の無上菩提を聞きたるなり。と。爾の時に、大德阿難は、郁伽長者に語らく。汝何の利を見て、在家の中にて聖智を有つ者を樂むか。と。答へて曰はく。大德、大悲を成ぜずんば、應に自ら、我れは是れ安樂なり。と謂ふべからず。大德阿難、菩薩摩訶薩は、一切の苦を忍んで衆生を捨てざるなり。と。是の語を說き已るや、佛は阿難に告ぐらく。是の郁伽長者は、在家地に住しながら、是の賢劫の中にて多く衆生を化せること、出家の菩薩の百劫・百千劫なるに非ず。何を以ての故ぞ。阿難、百千の出家の菩薩の有つ所の功德も、是の郁伽長者の有つ所の功德に如かざればなり。と。大德阿難は佛に白して言はく。世尊、此の經をば何と名けて、云何に受持せんか。と。佛、阿難に告ぐらく。是の經をば、郁伽長者の問ふ所と名け、亦、在家・出家の菩薩戒とも名け、亦殷重に師長に給事する品とも名く。阿難、若し菩薩あつて、是の經を聞くを得て、是に大精進するあらば、非下の精進にて梵行に住するものの、百千萬倍たりとも及ぶ能はざる所なり。是の故に、阿難、自ら進に任せんと欲し、他を進に勸めんと欲し、自ら一切の功德に住せんと欲し、他に住せんことを勸めんと欲せば、應に此の經を聽きて受持し讀誦し、廣く人の爲めに說き、說の如くに修行すべし。阿難、我れ是の法を以て汝に付囑す。受持し讀誦せよ。何を以ての故ぞ。阿難、此の法は一切の功德を具足すればなり。阿難、若し菩薩あつて、是の法と相應せば、則ち如來と相應することを離れざるなり。阿難、若し菩薩あつて、是の法に於て離れば、則ち佛を離ると爲し、若し菩薩あつて、是の法に於て離れて、受持し讀誦し說の如くに修行することを離れば、是れ一切の諸佛に見ゆることを離るるなり。何を以ての故ぞ。阿難、佛の出家の事は、皆此の經に於て之れを顯示したればなり。阿難、假令ひ三千大千世界に中に滿ちたる大火なりとも、應に中より過ぎて、

く。世尊、此の善根を以て普く一切の諸の衆生に施し、等しく諸の在家の菩薩摩訶薩をして、佛の敎へたまへる如き戒法を成就せしめ、諸の出家の菩薩に、一切の諸法を滿足せしむることも、亦佛の敎へたまへる如くに滿足せしめんことを願ず。世尊、云何にせば、在家の菩薩は、在家地に住しながら出家の戒を學ぶか。と是くの如くに問ひ已るや。佛は長者に告ぐらく。在家の菩薩は、五法を具足せば、在家地に住しながら出家の戒を學ばん。何等を五と爲すか。長者、菩薩は在家地の中に住しながら一切の有つ所の財物を恪まず、一切智の心と相應して果報を望まざるなり。復次に、長者、在家の菩薩は、在家地に住しながら淨き梵行を具して、[八六]欲の想をすら習はず、況んや、二つの和合することをや。復次に、長者、在家の菩薩は、空處に至つて四禪を修習すれども、方便力を以て[八七]正位には入らざるなり。復次に、長者、在家の菩薩は、在家地に住しながら應に極めて精進して智慧を學び、一切衆生に慈を以て相ひ應ずるなり。復次に、長者、在家の菩薩は、在家地に住しながら法を守護し、亦他人に勸むるなり。復次に、長者、在家の菩薩は、在家地に住しながら[八八]五法を具足して出家の戒を學ぶなり。と。爾の時に、郁伽長者は白して言はく。世尊、我に在家の中にて、世尊の敎の如くに、當に是くの如くに住して佛道を增し廣め、諸の出家の戒をも我れ亦當に學ぶべし。と。爾の時に、世尊は、即便に微笑せるに、諸佛の常法として、微笑する時の若きは、種種なる色光の靑・黃・赤・白は、面門より出でて遍く無量無邊の世界を照し、上梵世に過ぎて日月の光を蔽ひ、還つて身を遶ること三匝して、如來の頂に入るなり。

爾の時に、阿難は、佛の微笑を見るや、座よりして起ち、衣服を整へ、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著けて、佛に白して言はく。大德世尊、何の緣を以て笑みたまへるか。諸佛世尊は、緣無くして笑みたまふこと非ず。と。佛、阿難に告ぐらく。汝、今是の郁伽長者の如來に供ぜるを見るや、不や。法を修行せんと欲して師子吼を作して。と。阿難は白して言はく。已に見たり、世尊。已に見

【八六】欲の想をすら、乃至、和合することをや。異譯本に「心、婬欲を習ふことをすら念はず。何に況んや、受くることをや。」とあり。

【八七】正位には入らざるなり。色界四禪の天に生れざるを謂ふ。

【八八】五法。次前に擧げたる五法を指す者とす。

るなり。長者、是れを四つの淨戒と名く。復次に、長者、出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、應に是くの如くに四つの淨戒を學ぶべし。何等か四なる。我に我を得ざるを知るなり。[八一]他を聞覺すとも、心をして清淨ならしむるなり。心は一切の法に住することを樂はざるなり。[八二]等しうして動搖を有つ無きなり。長者、是れを四つの淨戒と名く。復次に、長者、出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、應に是くの如くに四つの淨戒を學ぶべし。何等か四なる。謂はゆる、空を解するなり。無相に畏れざるなり。一切の衆生に大悲を起すなり。無我に入るなり。長者、是れを出家の菩薩の四種の淨戒と名く。復次に、長者、出家の菩薩は、淨三昧を聞き已らば、應に是くの如くに學ぶべし。何等か淨三昧なる。謂はく。[八三]一切の法に有つ所無く、二つを有つ無き心・正業の心・處を一つにする心・動搖無き心・戲論無き心・亂鬧無き心・依止する無き心もて心に於て自在にして馳散ある無く、心界に住せずして心の幻の如くなるを見、一切法の等しく法界の如くなるを觀じ、行無く住無く、又亦起も無く、[八四]內外を得ずして三昧と同等なる、是くの如き法に住するを、說いて三昧と名くるなり。是くの如くするを、長者、是れを出家の菩薩は、淨定の聚を觀ずと名く。復次に、長者、出家の菩薩は、淨慧の聚を聞き已らば、應に何等を名けて清淨慧の聚と爲すかと觀ずべし。是の菩薩は、應に是くの如くに緣法を知る分別智・辯智・疾智・衆生智・外の衆生を攝する智を修學すべし。是くの如くに、長者、出家の菩薩は淨慧の聚を觀ずるなり。復次に、長者、出家の菩薩は、應に是くの如くに學ぶべし。[八五]謂はゆる慧とは、繫縛無きに名く。身無き故を以て執持する所無く、動く無く住る無く、形無く相無く、生ずる無く行ずる無く、虛空の如き故に。と。長者、若し是くの如くに觀ぜば、名けて、菩薩は出家に住すと爲すなり。と。是の法を說ける時に、八千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、是の諸の長者は無生法忍を得、三萬二千の衆生は塵垢を遠離して法眼淨を得たり。

爾の時に、郁伽長者は歡喜踊躍して、價値百千なる衣を以て、奉上して佛に供へて、白して言は

て「十二處」に同じ。

【八一】他を、乃至、清淨ならしむるなり。別の異譯本に「是れ我が有なりとするを遠離するなり」とあり。

【八二】等しうして動搖を有つ無きなり。異譯本に「諸念を滅するなり。」とあり。

【八三】一切の法に、乃至、有つ無き心。異譯本に「一切の法を擧ずるに意に欲及び我所を捨て、其の心を一と爲し」とあり。

【八四】內外を、乃至、同等なる。異譯本に「內外に著する所無く、正受し、」とあり。

【八五】謂はゆる慧とは、乃至、虛空の如き故にと。異譯本には「法に於て正受せば、彼れ智と無智とに於て、相に於て身無ければ、空と爲し、相に持つある無く、亦捨つるある無く、相に處ある無ければ、無央數の相もて念ずる所も、空と爲すなり。」とあり。

は、其の意を稱へ滿せて、功德の利を爲し、利養を捨てて法を讃歎せよ。長者、若し是の菩薩は、他の人の所に於て、一の四句偈の施・戒・忍・進・定・慧と相應したるを受持・讀誦して、菩提の道を集めば、是の師の所に於ても、法の爲めに恭敬すること、上の諸師の如くにせよ。文字・章句・偈頌を受持すとも無量の劫に於て、應に彼れに使はれて、諂僞を生ぜずに一切供養すべし。長者、當に知るべし。其の恩に報いざることは、法を敬はざるに況ふることを。長者若くにして、信に善念――佛・法・僧を念じ、無漏を念じ、寂調伏を念ずる、――を起さば、無量劫に於て給侍し使令して和上を供養すとも、猶和上の恩に報い滿さざることを、長者、應に是くの如くに知るべし。長者當に知るべし。法を聞き已らば、無量の報あり無量の智を得れば、我れ應に無量に和上を供養すべきことを。

復次に、長者、出家の菩薩は、出家の法の如くに住せよ。長者、云何なるを名けて、出家の法の如くに住すと爲すか。是に出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、應に是くの如くに四つの淨戒を學修すべきなり。何等を四と爲すか。謂はく。[七七]聖種に住するなり。頭陀を樂むなり。在家に親近せざるなり。出家に諂曲せずして、阿練兒處に住するなり。復次に、出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、復應に是くの如くに四つの淨戒を學ぶべし。何等か四なる。身の淨戒を爲れども、亦身を得ざるなり。口の淨戒を爲れども、亦口を得ざるなり。諸の見を離るるなり。一切智の心を發すなり。長者、是れを四つの淨戒と爲す。復次に、長者、出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、應に是くの如くに四つの淨戒を學ぶべし。何等か四なる。我の想を離るるなり。我所を棄つるなり。斷・常の見に遠るなり。因緣の法を解するなり。長者、是れを四つの淨戒と名く。復次に、長者、出家の菩薩は、淨戒を聞き已らば、應に是くの如くに四つの淨戒を學ぶべし。何等か四なる。謂はく。[七八]陰をば、有つ所無きなり。[七九]界をば、法界の如くにするなり。[八〇]入をば、空聚の如くにするなり。假名に住せざ

【七七】聖種に住するなり。異譯本に「賢聖の教に住するなり。」とあり。

【七八】陰をば有つ所無きなり。異譯本には「我が身と法と一なり。」とあり。「陰」は五陰を謂ふ。

【七九】界。十八界なり。第一卷「界處」の解、參照。

【八〇】入。即ち「十二入」にし

長者、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、是くの如くに修して六波羅蜜を滿すなり。

長者、出家の菩薩は、四法を成就せば阿練兒處を知るなり。何等か四たる。淨戒と多聞と。思惟と相應して、法の如くに修行するなり。是れを出家の菩薩は阿練兒處に住することを知ると名く。復次に、長者、出家の菩薩は、若し結は增上せば、應に彼れに親むべからずして、阿練兒處に住して應に結を摧伏すべきなり。復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處に住せば應に五通を修すべし。天・龍・夜叉・乾闥婆を化せん爲めの故に。復次に、長者、出家の菩薩は、應に佛の敎の如くに阿練兒處に住して、是の中にて、我れ應に一切の淸淨の善を滿さんとて、善法に熏ぜられて、後に、城邑・聚落に至つて法を說くべきなり。長者、是れを出家の菩薩は、是くの如き四法にて阿練兒處に住すと名く。

復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處より起つて法を受けて讀誦せんとて、和上・阿闍黎の所に詣らば、[七六]上・中・下座は是れ我が福田なれば、應に懈怠すべからず。是れ我が自の業なれば、彼れを嫌まず。とて、應に彼に爲つて使はるべく、應に是くの如くに觀ずべし。如來・應・正遍覺は、一切の天・人・魔・梵・沙門・婆羅門の供養したてまつる福田なり。佛は是れ一切衆生の父なれども、佛は給使を求むることに心を生ぜず。我れ今は學ばんと欲するなれば、我れも亦當に一切衆生の爲めに給使を作すべく、我れ他の我が爲めに給使するものを求めじ。と。何を以ての故ぞ。長者若し比丘あつて、給使を重ねば、法の功德を失すればなり。若し財を以て彼れを攝めば、當に云何なるべきか。我れをして作さしめんと欲する故を、財を以て攝むるものにて、我れ法を爲すに非さる故に、自ら己れの信を失すれば、若く財にて給使を攝むることは、大なる報利なければなり。若くなれば、和上・阿闍黎の所に向はば、其の心意を知つて、應に作す所の如くにし、和上、阿闍黎をして、我れを信ぜず我れを敬愛せさらしむる莫かれ。彼れ身命を捨てて法を讀誦せん爲めの故に

乃至、妄想無きが如し。異譯本には、單に「心の念ずる所の如くに身に行ずることも是くの如く、道に於ても亦然く、念ずる所無し。」とあり。

【七六】上・中・下座は、乃至、福田なれば。異譯本には「長・幼・中年に、稽首して禮を爲すことも」とあり。

るは、菩提心を忘れざらん故なり。阿練兒處に住するは、空を觀じて畏無からん故なり。阿練兒處に住するは、一切の諸善根を失はざらん故なり。阿練兒處に住するは、佛に讃歎せられんとてなり。阿練兒處に住するは、菩薩に讃ぜられんとてなり。阿練兒處に住するは、諸聖に譽められんとてなり。阿練兒處に住するは、解脱せんと欲する者の依る所なる故なり。阿練兒處に住するは、一切智を欲する者は應に是の處に住すべければなり。と。

復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處に住せば、少許の事を以ても六波羅蜜を滿さん。何を以ての故ぞ。阿練兒處に住せば、身命を惜まざれば、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修習して檀波羅蜜を滿すと名く。長者、出家の菩薩は、頭陀の戒たる身・口・意の戒に住すれば、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修習して忍波羅蜜を滿すと名く。長者、云何にして、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、修習して忍波羅蜜を滿すか。諸の衆生に於て、瞋恚の心無く一切智を忍すればなり。長者、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修習して忍波羅蜜を滿すと名く。長者、云何にして、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、修習して進波羅蜜を滿すか。而ち是の菩薩は、應に是くの如くに學ぶべければなり。我れ是の處を離れずして、要ず當に無生法忍を得べし。と。長者、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修習して進波羅蜜を滿すと名く。長者、云何にして、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、修習して、禪波羅蜜を滿すか。長者、出家の菩薩は阿練兒處に住して、[七四]禪定を捨て衆生を敎化せんとて、諸の善根を起すなり。長者、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修習して禪波羅蜜を滿すと名く。長者、云何にして、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、修習して般若波羅蜜を滿すか。長者、是の出家の菩薩は、阿練兒處に住して應に是くの如くに學ぶべきなり。[七五]我が此の身の如くに空處も亦爾く、我が此の身の如くに、菩提も亦爾く、如の妄想無きが如く、空の妄想無きが如し。と。長者、是れを出家の菩薩は阿練兒處に住し、修して般若波羅蜜を滿すと名く。

【七四】禪定を捨て、乃至、諸の善根を起すなり。異譯本には「禪に於て我に著せざることを得て、諸の徳本を起す。是れを一心度無極と爲す。」とあり。而して意義よりするも「禪定を捨てず（卽ち原本に於て「不」の字を脫せる者）して」の方然るべし。

【七五】我が此の身の如くに、

依著せず、諸法に住せず、諸法に於て礙る無く、色・聲・香・味・觸・法に依つて住せず、一切法の平等無垢なるに住し、善く調ぜる心に住し、一切の畏に於て無畏に住し、一切の結の流の大河を脱せるに住し、[六九]聖種に於て住し、少欲に於て住し、足ること知つて滿し易く養ひ易きに於て住し、智を充滿することに住し、聞くが如くに修行することに住すればなり。解脱に於て、[七〇]空・無相・無作の門を觀ずることに住する故なり。解脱智見に住して、繫縛を斷ずるなり。[七一]邊際に於て、[七二]因縁に順ずることに住する故なり。作す所已に辦じて、究竟の淨に住する故なり。長者、猶空處の[七三]藥木叢林の怖れず畏れざるが如く、是くの如くに長者、出家の菩薩は阿練兒處に住せば、應に自ら心を生ずること、猶草木・牆壁等の想の如く、猶幻の想の如くなるべく、是の中に誰をか畏れ誰をか怖れん。是の故に、應に無畏を以て身を觀ずべし。此の身には、我非ず、我所非ず、衆生無く、壽命無く、人無く、丈夫無く、少年無ければ、言ふ所の畏とは、空名にして實無し。我れ今應に無實のものを以て畏を生ずべからざること、彼の空處の藥木叢林の、主とする無く護る無きが如くなるべし。と。應に是くの如くに一切の法を知り已つて、是くの如くに善く阿練兒處に住すべし。何を以ての故ぞ。憂・諍を斷つ故にて阿練兒處と名け、生ずること無く護ること無くして阿練兒處と名くればなり。

復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處に住せば、應に是くの如くに學ぶべし。漸く、戒聚に順じ、次に定聚を修めて阿練兒處に住するは、慧聚を集めんとてなり。阿練兒處に住するは、解脱聚を習はんとてなり。阿練兒處に住するは、解脱知見聚を生ぜんとてなり。阿練兒處に住するは、菩提を助くる法を敷かんとてなり。阿練兒處に住するは、十二頭陀の功德を集めんとてなり。阿練兒處に住するは、方便を諦めん故なり。阿練兒處に住するは、善く陰を知らん故なり。阿練兒處に住するは、法界に等しからん故なり。阿練兒處に住するは、諸入を刪り除かん故なり。阿練兒處に住する

【六九】聖種に於て住し。異譯本に「賢聖の行の、無念なるに於ける居なり」となり。
【七〇】空・無相・無作。「空・無相・無願」と同じ。謂はゆる三解脱門なり。
【七一】邊際に於て、乃至、住する故なり。異譯本に「意に十二因縁を觀じて、作す所已に辦ぜる居なり。」とあり。
【七二】邊際。有爲の世間は、凡べて邊際あるに由り、以て、色・心界を指す者とす。
【七三】藥木。「草木」の誤寫なるべし。以下に來たる文に由つて明なり。次節の「藥木」も同様なり。

故にか。慳貪を畏るる故にか。色・聲・香・味・觸を畏るる故にか。陰魔・煩惱魔・死魔・天魔を畏るる故にか。〔六五〕無常に常なる畏か。無我に我なる畏か。苦中に樂なる畏か。不淨に淨なる畏か。心・意・識の畏か。〔六六〕現在の捶打の畏か。我見の畏か。我・我所の畏か。惡知識の畏か。利養の畏か。非時に語る畏か。見ざるに見ると言ふ畏か。聞かざるに聞くと言ふ畏か。念ぜざるに念ずと言ふ畏か。識らざるに識ると言ふ畏か。沙門の垢の畏か。欲界・色界・無色界の畏か。一切の諸道の生死の處の畏か。地獄の畏か。畜生の畏か。餓鬼の畏か。我れ今是等の如き畏を怖懼して、來つて此の阿練兒に至り、在家・憒閙の衆中に住せざるなれば、若し修行せず〔六七〕念處を修せずんば、則ち是の畏を脱せん故に此の處に來り至れることと相應せざるなり。過去の無量の菩薩摩訶薩は、一切皆阿練兒處に住して、諸の畏を解脱して無畏を得、阿耨多羅三藐三菩提に畏無きを得たりき。未來の菩薩も亦復是くの如くに、阿練兒處に住して一切の畏を脱して、無上正道に畏無きを得ん。現在の菩薩摩訶薩も亦復是くの如くに、阿練兒處に住して無畏を修行して、阿耨多羅三藐三菩提に畏無きを得、一切の畏を脱す。是の故に我れ今、無畏を得て一切の畏を脱せんと欲して、阿練兒處に住せん。と。

復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處に住せば、怖るる無く畏るる無くして、應に是くの如くに學ぶべし。畏を有つ者の若きは、皆我に著するに由り、皆我を執するに由る。我を初首と爲して、皆我を愛するに由る。我見・我想・我持・我妄想を起すは、我に於て我を守護するなり。若し阿練兒處に住しながら、我を執するを捨てずんば、是れ利を失すと爲す。と。長者、若し阿練兒處に住して我想を有つ無くば、是れ阿練兒處に住せるなり。〔六八〕見著を有つ無くば、是れ阿練兒處に住せるなり。我・我所に住せずんば、是れ阿練兒處に住せるなり。長者、應に知るべし。涅槃の想無くば、是れ阿練兒處に住せることを。況んや、煩惱の想をや。長者、阿練兒處と謂ふ者は、一切の諸法に

【六五】異譯本に「非常に於て、常の想を爲すを畏るゝか。」とあり。

【六六】現在の捶打の畏か。異譯本に「諸の蓋・覆・蔽諸の求を畏るるか。」とあり。

【六七】念處。四念處の略なり。「四意止」と同じ。第一卷「念處」の解、參考。

【六八】見著。「見取」と同じ。第二卷「見」の解、參照。

大悲を修し、五通自在にして、六波羅蜜を滿し、一切智心を捨てずして方便を修行し、常に法施を以て衆生を攝取し、衆生を教化するに、攝法を捨てず[六一]、六念を修行し、勤進して聞を修め、念を繫けて[六二]正相應の行を修集すれども、果智を證せずして、正法を守護して業報を信じ、――是れを正見と名く。――一切の妄想分別を斷じ、――是れ正思惟なり。――解する所の法に隨つて演說を爲し、――是れを正語と名く。――業の漏を除き盡し、――是れを正業と名く。――結の習を斷除し、――是れを正命と名く。――勤めて定に趣き、――是れを正進と名く。――諸法を忘れず、――是れを正念と名く。――一切智をば知ることを得、――是れを正定と名く。――空を解し[六三]て驚かず、相を無くして怖れず、願ずる無くして怯れず、心に有を執せず、義に依つて語に依らず、智に依つて識に依らず、法に依つて人に依らず、了義經[六四]に依つて不了義經に依らざるなり。と。長者、是れを出家の菩薩は沙門の法に住すと名く。

復次に、長者、出家の菩薩は、應に多人衆の中に親近すべからず。我れ應に彼れを捨つべくとも、我れの善根は、終まで一切衆生を捨てざらん故にて善根を修するなり。と。長者、出家の菩薩には、四つの親近あつて、如來の許す所なり。何等を四と爲すか。長者、出家の菩薩の、親近して、法を聽くことは、是れ佛の許す所なり。親近して、一切衆生を成熟することは、是れ佛の許す所なり。如來を供養することは、是れ佛の許す所なり。親近して、一切智の心を捨てさることは、是れ佛の許す所なり。長者、是れを出家の菩薩の四種の親近を、如來の許す所と名く。長者、是の四つに親近して餘に親近する勿れ。

復次に、長者、出家の菩薩は、阿練兒處に住せば應に是くの如くに念ずべし。我れは何の故を以て、來つて此處に在るか。我れの來つて此に至れるは、何事を怖るる爲めなるか。誰れを畏るる故に來れるか。衆閙を畏るる故にか。親近を畏るる故にか。貪・瞋・癡を畏るる故にか。狂慢を畏るる

【六一】攝法を捨てず。異譯本には「四恩の行に違はず。」とあり。

【六二】念を繫けて、乃至、――是れを正見と名く。別の異譯本に「法の本末、正度の道の因緣を擇ぶことを爲せども、智は亦、正道に入る事をせず、正法を護らん事の爲めに、以て罪福を信ずるを、正見と爲す。」とあり。因みに、以下「是れを正定と名く。」までは「八聖道」に就いて曰ふ者とす。

【六三】空を解して、乃至、怯れず。此れは「三解脫門」に就いて曰へり。

【六四】了義經。究竟眞實なる義を顯はしたる經典を謂ふ。

根本の因を植ゑん爲めの故にとなり。慢を降伏するに依るとなり。[五七]無見頂の因緣を積集せん故にとなり。[五八][五九]女人・丈夫・男女と共に和合する爲めの故ならずして、平等に食を乞ひ、諸の衆生に於て平等の心を生じて、一切智の莊嚴の具を集めん故にとなり。長者、出家の菩薩は、此の十利を見て、壽を盡すまで乞食の法を捨てざるなり。若し至心に敬信して來り請ふものあらば、爾の時に、應に去くべく、若し請ふ者あつて、至心の請ならずとも、自ら利し彼れを利する因緣あるを觀ば、卽便に應に去くべきなり。

復次に、長者、出家の菩薩は、十利を見る故に、終まで阿練兒の處を捨てざるなり。何等か十なる。自在に除去せらるる故なり。我れの持つもの無き故なり。臥具の愛を捨つるなり。寂として愛するもの無き故なり。處として利す可き無き故なり。阿練兒の處にて身命を捨てん故なり。衆の閙を捨てん故なり。如來の法中の作す所をば作さん故なり。寂定を意に適せん故なり。專念するに留難無き故なり。長者、是れを出家の菩薩は、十の德利を見て、壽を盡すまで阿練兒の處を捨てずと名く。長者、若し阿練兒より、法を聽かんと欲する故に、和上・阿闍梨の因緣の事ある故に、病を問はん爲めの故に、村聚の中に至らば、當に是の念を作すべし。今夜還り去らん。と。若し讀誦の爲めに房舍に在つて住せば、應に是の念を作すべし。我れ今故に阿練兒處に在り阿練兒處に住して法と相應せるなれば、一切の物に於て諍想を有つ無く、一切の法に於て障礙の想無くして、法を集めて厭ふこと無からん。と。長者、出家の菩薩は阿練兒處に在つて是くの如き觀を作すなり。我れ何の緣を以て阿練兒處に住するか。[六〇]但空しく處るを名けて沙門と爲すに非ず。是の中には、多く不調・不寂・不堅・不相應のものも、亦是の中に住するあり。謂はゆる獐鹿・獼猴・鳥獸・師子・虎・狼・賊・旃陀羅にして、是等には沙門の功德ある無ければなり。是の故に、我れは應に阿練兒の行たる沙門の義利を具すべきなり。謂はく。念を繫けて亂れずして、陀羅尼を得、大慈・

【五六】滿足の、乃至、故にとなり。
異譯本に「意を發す頃に一心をして、止足することを知らしむるなり。」とあり。

【五七】無見頂。無見頂相の略なり。第二卷、同名の解、參照。

【五八】前句と次の句との間に。異譯本には「九には、人我れを見ば、亦當に我が學ぶ所を效ふべし。」の一句あり。本經には、此れを脫漏したる者の如し。然らずんば、謂ふ所の「十事」とはならず。

【五九】女人、丈夫、乃至、集めん故にとなり。
異譯本には「一切の男女小大の、布施して我れに與ふるには、我れ當に、一切の、專ら志を一切智を得ることに致すことに於て、等心なるべし。」とあり。

【六〇】但空しく、乃至、爲すに非ず。
異譯本に「但、閑居に在つて、沙門と爲さざるなり。」とあり。

ず、其の過咎を知つて出離することを知り、隨つて是の知足もて自ら稱譽せず、他人を毀らざるべきなり。長者、出家の人は、食を乞ふ所に隨ひ、具を敷く所に隨ひ、亦當に足ることを知つて歎美を生じ、敷具の爲めにして妄語を起さず、得ずとも、念ぜず憂惱を生ぜず、得とも、染著せず、染心にて畜ふること無く、悋まず繫れず、其の過咎を知り、出離することを知つて行じ、隨つて是の知足もて終まで自ら稱せず、他人を毀らず、斷を樂み離を樂み、修習を樂み、此の斷を樂み離を樂み修を樂むことに於ても、自ら稱譽せざるべきなり。長者、是れを出家の菩薩は、四聖種に住すと名く。

復次に、長者、出家の菩薩は、十の功德を以て身の衣を持ち著くるなり。何等か十なる。慚恥の爲めの故なり。形を覆はん爲めの故なり。蚊・虻の爲めの故なり。風暴の爲めの故なり。軟觸の爲めにせず、好き爲めにせざる故なり。沙門の表戒の相の爲めの故なり。此の染色の衣は、諸の人・天・阿修羅等をして、塔の想を生ぜしむる故なり。而して之れを受持するは、解脫にて染めたるにて、欲にて染めたる衣に非れば、寂靜に宜しき所にして、結に宜しき所に非ればなり。此の染衣を著すれば、諸の惡を起さず諸の善業を修すればなり。好む爲めの故ならずして染めたる服衣を著すれば、聖道を知ることを已に我れは是くの如くに作すなり。一念の頃に於ても結に染ることを持たず。と。長者、是れを出家の菩薩は、十事の功德にて身の衣を持ち著くと名く。

復次に、長者、出家の菩薩は十事を見る故に、其の形壽を盡すまで食を乞ふことを捨てざるなり。何等か十なる。我れ今自活して、他に由つて活きじとなり。若し衆生あつて我れに食を施さば、[五五]三歸の處に安住せしむることを要し、然る後に食を受けんとなり。若し食を施さずんば、是の衆生に於て大悲の心を生ぜんとなり。彼の衆生の爲めに勤めて精進を行じ、是の衆生をして、作す所を辦ぜしめ已つて、後に其の食を食せんとなり。又我れ佛の敎勅する所に違はずとなり。[五六]滿足の

【五五】三歸。又、三歸依、三歸戒とも曰ふ。一に、佛に歸依して、師と爲す。二に、法に歸依して、藥と爲す。三に、僧に歸依して、友と爲す。の三なり。

爾の時に、郁伽長者及び諸の長者は、一切同聲にて歡喜し讃歎すらく。希有なり、世尊。善く在家の過患を說きたまへることや。而も猶未だ出家の功德を知らず。世尊、我等も亦在家の過多く、出家の德の大なるを觀る。唯願はくば、世尊、我等を哀愍して、願はくば、出家を得しめたまはんことを。と。是の語を說き已るや、佛は長者に告ぐらく。出家は甚だ難し。一向の淨行なればなり。と。時に諸の長者は、白して言はく。世尊、實に聖敎の如きも、唯願はくば、世尊、我れに出家を聽したまはんことを。當に敎の如くに行ずべければ。と。爾の時に、世尊は卽出家を聽して、彌勒菩薩、[五四]一切淨菩薩に告ぐらく。汝、善丈夫、是等をして出家せしめよ。と。時に、彌勒等は、九千の長者をして悉く皆出家せしめたり。是の長者等の出家の戒を受けたる是の時に、復千の長者ありしが、等しく阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。爾の時に、郁伽長者は白して言はく。世尊、已に在家の過患の功德を說きたまへば、善い哉、世尊、願はくば、出家の菩薩の戒・聞の功德の行を說きたまはんことを。云何に菩薩は、善妙の法中にて、調伏し出家して、禮拜・起住し去來・進止するか。と。佛は長者に告ぐらく。善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに、出家の菩薩の、應に是くの如くに學び、是くの如くに行に住すべきを說くべければ。と。唯然く世尊敎を受けて聽かん。と。

佛、長者に言はく。出家の菩薩は、應に是くの如くに學ぶべし。我れは何の緣を以て、業を捨て出家せるか。慧を修せん爲めの故なれば。とて、勤めて精進を加ふること、頭の然ゆるを救ふが如くにして、應に是の念を作すべきなり。我れ今當に四聖種に住し、頭陀を樂み行ずべし。と。長者、云何に出家の菩薩は四聖種を修するか。是に出家の菩薩は、有つ所の衣に隨つて應に知足を生じ、知足を歎美し、衣の爲めの故にして妄語を行はず、若し衣を得ずとも、想はず念ぜず憂惱を生ぜず、設令ひ衣を得とも、心に著を生ぜず、衣を服著すと雖も繋著する無く、貪らず、住せ

【五四】一切淨菩薩。異譯本には「諸行清淨菩薩」とあり。

に涅槃に入らん。と。是に僧坊に入るや、一切の諸比丘の德を觀るなり。誰れは是れ多聞なるか。誰れは是れ法を說くか。誰れは是れ律を持つか。[四八]誰れは阿含を持つか。何等の比丘は菩薩藏を持つか。[四九]誰れは[五〇]阿練兒なるか。何等の比丘は欲を少くして食を乞ひ、糞掃衣を著、獨り處つて欲を離れたるか。誰れは是れ修行するか。誰れは是れ坐禪するか。誰れは是れ事を營むか。誰れは是れ寺主なるか。と、悉く彼の行を觀じて、[五一]諸人の欲するに隨ひ譏呵を生ぜざるなり。若し寺廟に在り及び聚落に往いて言說する所あらば、善く口業を護り、若し比丘あつて、衣鉢に乏しく病藥を須つ所には、隨つて應に給與して、[五二]瞋を起さざるべきなり。何を以ての故ぞ。諸天及び人には妬嫉の結あつて、應に倍彼れを護るべきは、凡夫人の心は阿羅漢に非ず、凡夫は過を起して阿羅漢に非ればなり。彼れは多聞に近いて聞を修する故を爲し、說法の者に親んで修行をば決定し、持律の者に近づいて結使を調伏して、犯の中に墮せず、菩薩藏を持つ人に親近して、學ぶことに於て、六波羅蜜を修行し及び方便を修し、阿練兒に近いて獨り處ることを修學し、修行に親近して端坐を修學するなり。若し比丘あつて、[五三]未だ定位ならざる者の、衣を須つには衣を施し、鉢を須つには鉢を施して、彼の比丘に無上心を發すことを勸むるなり。何を以ての故ぞ。此れは勝れたる處に非れば、財の法もて彼れを攝せんとて、是くの如くにするなり。長者、在家の菩薩は、是くの如くに善く沙門の行を知つて、若し沙門あつて、鬪訟し諍競せば、而ち之れを和合し、身命を捨てても正法を守護するなり。長者、在家の菩薩は、病める比丘を見ば、自の肉血を捨てても、彼れの病をして愈えしむるなり。長者、在家の菩薩の未だ施心を開かざるものは、先の請はざるに他に施し已れば、心に悔ゆれど、一切の善本は、菩提の心を以て上首と爲すものなり。長者、在家の菩薩は、在家の地に住すとも、佛の教の如くに行じて、菩提を助くる法を忘れず失はずんば、現法に染ること無くして增勝の法を得ん。と。

【四八】誰れは阿含(āgama)を持つか。異譯本に「誰れを法に住する者と爲す。」とあり。
【四九】誰れは阿練兒(araṇya-ka)なるか。異譯本に「誰れを閑居の行者と爲すか。」とあり。
【五〇】阿練兒「阿蘭若」と同じ。
【五一】諸人の、乃至、生ぜざるなり。異譯本に「皆等しき給足を以て施與し、當に異心にて行ふこと有るべからず。」とあり。
【五二】瞋を起さざるべきなり。異譯本には「怨望の意有らしむる莫かれ。」とあり。
【五三】未だ定位ならざる者。異譯本には「煩乏の者」とあり。

も、出家は慈多し。在家は擔を負へども、出家は擔を捨つ。在家は一切の諍訟を盡さざれども、出家は諍を盡す。在家は過を有てども、出家には過無し。在家は忽務なれども、出家は閑務なり。在家は熱惱すれども、出家は熱を離る。在家は讎多けれども、出家は讎無し。在家は貯へ聚むれども、出家は聚むる無し。在家は財堅けれども、出家は德堅し。在家は憂と俱なれども、出家は憂を寂す。在家は損耗すれども、出家は增益す。在家は得易けれども、出家の人は億劫にも得難し。在家は作し易けれども、出家は作し難し。在家は[45]流に順ずれども、出家は流に逆ふ。在家は流に處れども、出家は船栰なり。在家は結の河なれども、出家は越え度る。在家は此の岸なれども、出家は彼の岸なり。在家は纏縛なれども、出家は纏を離れたり。在家は嫌恨すれども、出家は恨を寂せり。在家は王の法なれども、出家は佛の法なり。在家は染汙を愛すれども、出家は染を離れたり。在家は苦を生ずれども、出家は樂を生ず。在家は淺近なれども、出家は深遠なり。在家は伴ひ易けれども、出家は伴ひ難し。在家は妻と伴へども、出家は心と伴ふ。在家は務に悤つれども、出家は務を離れたり。在家は他に逼つて苦めども、出家は他を樂ませて樂む。在家は財施すれども、出家は法施す。在家は魔の幢を持てども、出家は佛の幢を持つ。在家は巣窟なれども、出家は巣を離る。在家は非道なれども、出家は非道を離れたり。在家は稠林なれども、出家は林を離れたればなり。と。是くの如くにして、長者、在家の菩薩は、漸次に思念するなり。[46]我れ恒河沙の等にて大禮を設け、諸の衆生の爲めに一日に悉く施し、善く調ぜる法中にて出家の心を生ぜば、是れ則ち堅實に施すこと已に畢く足れば、我れ今は應當に堅く戒・[47]聞を修すべしとて、彼れは僧坊に入つて如來の塔を禮して、三つの想を生ずるなり。我れも亦當に是くの如き供養を得べきなり。我れも亦當に一切衆生を愍んで、舍利を留むべきなり。我れも是くの如くに學び、是くの如くに行じ、是くの如くに精進して、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得、一切の佛の諸事を設け作し已つて、佛如來の如く

【四五】流(Srota)。流は相續旋轉の義にして、一切の凡夫の、善惡の業を作りて六趣に輪廻して、苦樂の果を受けて絶えざるを、水の流れに喩へて謂ふ。

【四六】我れ、乃至、悉く施し。異譯本に「我れ當に、一日祠祀を爲して、一切の所有を布施し。」とあり。

【四七】聞。多聞の略なり。

ども、出家の人には大なる滋潤あり。在家は結の樂なれども、出家は滅の樂なり。在家は刺を増せども、出家は刺無し。在家は小法を成ずれども、出家は大法を成ず。在家は不調なれども、出家は調伏す。在家は戒を離るれども、出家は戒を護る。在家は涙・乳・血の海を増長すれども、出家は涙・乳・血の海を乾竭す。在家の人は諸佛・聲聞・緣覺に呵せらるれども、出家の人は諸佛・聲聞・緣覺に讃ぜらる。在家は足ること無けれども、出家は足ることを知る。在家をば魔は喜べども、出家をば魔は憂ふ。在家は降伏せざれども、出家は降伏す。在家は奴僕なれども、出家は主爲り。在家は生死の際なれども、出家は涅槃の際なり。在家は墮落すれども、出家は墮を拔けたり。在家は闇冥なれども、出家は明炤なり。在家の人は[四三]根自在ならざれども、出家の人は諸根自在なり。在家は狂逸すれども、出家は逸せず。在家は相應せざれども、出家は相應す。在家は下觀すれども、出家は上觀す。在家は營多けれども、出家は營少し。在家は少力なれども、出家は大力なり。在家は諂曲なれども、出家は正直なり。在家は憂多けれども、出家は憂無し。在家は箭と倶なれども、出家は箭を除けり。在家は病患なれども、出家は無病なり。在家は老の法なれども、出家は壯の法なり。在家は放逸の[四四]命なれども、出家は修慧の命なり。在家は誑詐なれども、出家は無誑なり。在家は多作なれども、出家は無作なり。在家は毒器なれども、出家は甘露の器なり。在家は災患なれども、出家は災害無し。在家は捨てざれども、出家は放ち捨つ。在家の人は毒の果を取れども、出家の人は無毒の果を取る。在家の人は愛せざると相應すれども、出家は愛せざると相應せず。在家は癡にて重けれども、出家は智にて輕し。在家は方便を失すれども、出家は方便に淨し。在家は正意を失すれども、出家は正意に淨し。在家は至意を失すれども、出家は至意に淨し。在家の人は救を作す能はざれども、出家は救を作す。在家は窮劣を造れども、出家は窮を造らず。在家は舍に非れども、出家は舍と作る。在家は歸に非れども、出家は歸と作る。在家は怒多けれど

【四三】根（Indriya）。能生と増上との義にして、諸根ありて、多きは二十二根を數ふ。

【四四】命。此の命は活命即ち生活の義なり。

の結を解かんと、正觀を修行して[三八]初果に至るを得ば、定つて無上正眞の道に趣けばなり。何を以ての故ぞ。智は能く結を害すればなり。世尊は又說かく。人をば則ち應に妄に輕んずべからず。人を量れば則ち自ら傷くと爲す。と。如來の知りたまふ所は[三九]我れの知る所に非ず。[四〇]是の故に、應に瞋り嫌ひて、彼れを害すべからず。と。

　復次に、長者、在家の菩薩は、若し僧坊に入らば、門に在つて住り、五體にて敬禮し、然る後に乃ち入つて、當に是くの如くに觀ずべし。此の處は卽是れ空行の處・無相行の處・無作行の處・慈悲喜捨の四梵行の處にして、是れ正行・正住の安ずる所の處なり。我れも當に何時かは家の垢を捨つべく、我れも當に何時かは是くの如き行に住すべし。と、應は是くの如くに、出家せんと欲する心を生ずべきは、在家にして、無上正覺の道を修集せるものある無く、皆悉く出家して空閑の林に趣き、修習して無上の正道を成ずるを得ればなり。[四一]在家は塵汙多けれども、出家は妙好なり。在家は具縛なれども、出家は無礙なり。在家は垢多けれども、出家は捨離せり。在家は惡の攝なれども、出家は善の攝なり。在家は愛欲の淤泥に沒すれども、出家は愛欲の淤泥に遠離せり。在家は凡と倶なれども、出家は智と倶なり。在家は[四二]邪命なれども、出家は淨命なり。在家は多垢なれども、出家は無垢なり。在家は衰滅すれども、出家は無滅なり。在家は憂に處れども、出家は歡喜す。在家は則ち是れ衆惡の梯隥なれども、出家は隥を離れたり。在家は繫縛なれども、出家は解脫せり。在家は畏と倶なれども、出家は畏無し。在家は讁罰なれども、出家は無罰なり。在家は憂多けれども、出家は患無し。在家は煩熱なれども、出家は無熱なり。在家は求多くして苦なれども、出家は求無くして樂なり。在家は掉動すれども、出家は無動なり。在家は貧苦なれども、出家は無苦なり。在家は怯弱なれども、出家は怯無し。在家は下賤なれども、出家は尊貴なり。在家は熾然なれども、出家は寂靜なり。在家は他に利なれども、出家は自ら利す。在家の人には潤へる精氣無けれ

【三八】初果。聲聞の第一次の得果たる預流果なり。
【三九】我れの知る所に非ず。異譯本に「我れの究むる所に非ず。」とあり。
【四〇】是の故に、乃至、害すべからず。別の異譯本には「是非の時には如來は有り、是れ我が有つに非るを知る。」とあり。
【四一】在家は塵汙多けれども、等。此の文と前文との間に、異譯本には「所以は何ぞ。」の接續の句あり。但し、以下の說述の內容は異なり。
【四二】邪命。乞食以外の種種の俗事、又は不正の業を以て生活するを謂ふ。

善き大丈夫、今汝に向つて悔ゆれば、嫌恨を生ずること勿れ。我れ當に是くの如くなれば、勤めて精進を行じて、一切衆生の願ふ所を滿足すべし。と。長者、在家の菩薩は、應當に是くの如くに乞ふ者に白すべきなり。

　復次に、長者、在家の菩薩は、過去の佛の語を聞けども、若し佛及與び聖僧に値はずんば、彼れは、應に十方の諸佛を敬禮し、諸佛の本行、乃至、成佛に悉く隨喜を生ずべきなり。是くの如くにして、晝・夜各三時に、身・口・意の業を淸め、慈善を淸め、慚愧淸淨の服を具足し、集むる所の善根を菩提心に以ひて、隨喜を生ずるなり。柔軟に善く恭敬を作して、慢を斷ずるなり。[三三]修行すること三分して[三四]三分の法を誦し、專心に過を悔い、諸の不善の業をば更に造らず、新しき一切の福業に悉く隨喜を生ずるなり。相好を集め滿して「諸佛の、法輪を轉じて、說に於て悉く一切の法を受持せる、」を勸請して、佛は久壽にて善根を增長したまへば、我が國土をしても亦復是くの如くならしめたまへと願ずるなり。

　復次に、長者、在家の菩薩は、[三五]八戒を受持して、沙門の行を修するなり。應當に淨戒・德行の沙門・婆羅門に親近し、依止・給使して其の過を見ざるべく、[三六]若し沙門の、戒行に越ゆるを見るとも、應に敬はざるべからず。又、佛如來の、是の應供・正遍覺の戒行の熏ずる所、定・慧・解脫・解脫知見の熏ずる所の袈裟には、滓濁ある無くして、一切の結染を皆悉く捨離せる仙聖の幢なれば、倍恭敬を生じて、彼の比丘に於て大悲の心を生ずるなり。彼れは應に此くの如き惡行を爲すべからず。諸佛世尊を寂調伏と名けて、一切を悉く知りたまへる聖幢の相をば服しながら、寂ならず調ぜず伏せずして、此の非法を作すことを知らざるなり。と。世尊の說の如くんば、未だ學ばざるを輕んぜざれ。是れ彼れの過に非ずして、是れ結使の咎なればなりと。結使の故を以て現に是の惡を造るとも、此の佛法の中には出の法あれば、是の人の出で能ふことは、則ち是の處あり。[三七]若し是

【三三】修行すること三分して、乃至、三分の法を誦し。別の異譯本には「是に於て、晝三たび夜三たび、三品經を誦する事を以て、」とあり。

【三四】三分の法。異譯本には「三品法經を諷誦し」とあり。謂はゆる「三品弟子經」(吳の支謙譯)を指す者なるべし。

【三五】八戒。又、八齋戒とも曰ふ。殺生・不與取・非梵行・虛誑語・飮酒・香の塗飾と鬘と舞歌を觀聽すると、高廣嚴麗の床上に眠坐す、非時の食を食す、の八種を禁ずる者にして、在家の男女の、一日一夜受持する戒法なり。但し、別に、塗飾香鬘と舞歌觀聽とを分ちて、九戒とする者もあり。

【三六】若し沙門の、乃至、敬はざるべからず。異譯本には「若し戒を犯す比丘を見るとも、當に袈裟に敬事すべし。」とあり。

【三七】若し是の、乃至、趣けはなり。異譯本には「若し能く是の淫塵を覺了して、空を念ぜば、便ち第一の道意を得べし。」とあり。

て得るに非ず。と。復應に己れの心を呵して、自子の所に於て、怨家の想・惡知識の想・非善知識の想を生じ、佛智平等の慈に違逆して我が善根を害すとすべし。彼れ應に、隨處に自ら心を調へて、其の子を愛するが如くに一切をも亦然く、自身を愛するが如くに一切をも亦然くすべし。應に是の觀を修すべし。我れは異る處より來り、子も異る處より來れり。何を以ての故ぞ。一切の衆生は曾て我が子と爲り、我れも亦是れ彼の諸の衆生の子たれば、終まで我が子を念じて彼れには非ざることを生ぜざるなり。何を以ての故ぞ。去つて六趣に至つて、復怨と爲り、或は復子と爲ればなり。我れ其れ當に、等しき親を、親に非るものにも作すべし。我れ何の故を以てか、其の親しき所に於て倍愛を生じて與へ、親しきに非る所に於て一切與へざらんや。我れ若し愛・不愛の心を生じて、親しきに非る所に於て一切與へざることをせじ。我れ若し、愛・不愛の心を生ぜば、法を趣くこと能はず。何を以ての故ぞ。不等の行は不等の處に至り、平等の行を行ぜば、等の處に至ればなり。我れ應に是の不等の行を行ずべからずして、我れは等心を學んで、一切の衆生を疾く一切智に至らしめん。と。

長者、在家の菩薩は諸の財物に於ては、我所の想、攝護の想を生ぜずして、彼れに繫れず、想はず愛せず、結使を生ぜざれ。復次に、長者、在家の菩薩は、若し乞ふ者あつて、其の所に來り至つて、求索する所あらば、隨つて、應に至心にて念ずべし。我が施す所の財及び施さざる財は、倶に當に散滅すべし。願ふ所を滿さざるに、必ず當に死すべし。我れ財を捨てずんば財は當に我れを捨つべければ、我れ今當に捨てて、堅財と作さしめて、然る後に乃ち死すべし。此の財を捨て已つて死する時には、恨無く、歡喜して悔無けん。と。若し施すこと能はずんば、應に四つの事を以て、乞ふ者に白せ。今我れ力劣り、善根未だ熟せざるなり。大乘の中に於て、我れは是れ初行なり。其の心未だ自在に施を行ずるに堪へず。我れは是れ相に著し、我・我所に住するなり。

すの想なり。霜・雹の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。病の想なり。老の想なり。死の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。魔の想なり。魔女の想なり。畏る可きの想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。憂の想なり。哭の想なり。苦惱の想なり。復三つの想を生ずるなり。大なる雌狼の想なり。[三一]摩竭魚の想なり。大なる雌猫の想なり。復三つの想を生ずるなり。黑蛇の想なり。尸守魚の想なり。精氣を奪ふ想なり。復三つの想を生ずるなり。救ふ無きの想なり。歸する無きの想なり。護る無きの想なり。復三つの想を生ずるなり。母の想なり。姉の想なり。妹の想なり。復三つの想を生ずるなり。賊の想なり。殺の想なり。獄卒の想なり。復三つの想を生ずるなり。暴水の想なり。波浪の想なり。洄澓の想なり。復三つの想を生ずるなり。淤泥の想なり。溺泥の想なり。混濁の想なり。復三つの想を生ずるなり。盲の想なり。杻の想なり。械の想なり。復三つの想を生ずるなり。火の坑の想なり。刀の坑の想なり。草の炬の想なり。復三つの想を生ずるなり。無利の想なり。刺の想なり。毒の想なり。復三つの想を生ずるなり。繫獄の想なり。謫罰の想なり。刀劍の想なり。復三つの想を生ずるなり。鬪諍の想なり。言訟の想なり。閉繫の想なり。復三つの想を生ずるなり。怨憎會の想なり。愛別離の想なり。病の想なり。略して說かば、乃至、一切の鬪諍の想なり。一切の滓濁の想なり。一切の不善根の想なり。長者、在家の菩薩は、己が妻の所に於ては、應に是くの如き想貌の觀念を生ずべきなり。

復次に、長者、在家の菩薩は、自の子の所に於ては、應に極めて愛すべからず。長者、若し子の所に於て極愛を生じて、他人の所に非ずせば、則ち自ら毀ると爲して、應に三法を以て自ら呵責すべきなり。何等か三なる。菩提の道は、是れ平等の心にして、不平等の心に非ず。菩提の道は、是れ正行にて得る所にして、是れ邪行にては非ず。菩提の道は、[三二]是れ無異の行にて得て、雜の行に

【三一】摩竭（Makara）魚。鯨魚、又は巨鼇と譯すれど、恐らく神秘的のものなるべし。

【三二】是れ無異の、乃至、得るに非ず。別の異譯本に「多行ならざる者を道と爲せば、多行は非なり。」とあり、

て、亦隨つて報を受けたれど、彼れも亦業に隨つて善惡の報を受けたればなり。と。而して是の菩薩は、去來・坐起に、常に是の事を觀ずるなり。父母・妻子・眷屬・奴婢・作使の爲めに身・口・意の惡・不善の業の、猶毛分の如きをも造らじ。と。是の故に、長者、在家の菩薩は、已れの妻の所に於ても、應に三つの想を起すべし。何等か三なる。無常の想なり。變易の想なり。壞敗の想なり。長者、是れを在家の菩薩は、已れの妻の所に於て三つの想を生ずと名く。在家の菩薩は、已れの妻の所に於て、復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。是れは娛樂の伴にして、他世の伴に非ず。是れは飲食の伴にして、業報の伴に非ず。是れは樂時の伴にして、苦時の伴に非ず。となり。長者、是れを、在家の菩薩は、已れの妻の所に於て三つの想を生ずと名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。好しからざる想なり。臭穢の想なり。惡む可き想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。怨家の想なり。魁膾の想なり。詐親の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。羅刹の想なり。毘舍遮の想なり。鬼魅の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。我所に非る想なり。攝受に非る想なり。乞求の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。身の惡行を持てる想なり。口の惡行を持てる想なり。意の惡行を持てる想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。欲覺の想なり。瞋覺の想なり。害覺の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。黑闇の想なり。汙戒の想なり。繋縛の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。戒を障ふる想なり。定を障ふる想なり。慧を障ふる想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。諂曲の想なり。羅網の想なり。猫伺の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。災患の想なり。熱惱の想なり。病亂の想なり。是れを三と名く。復三つの想を生ずるなり。何等か三なる。妖媚の想なり。衰を作

廻向せば、是れを癡薄と名くればなり。長者、是れを施す者は貪・瞋・癡薄しと名くるなり。復次に、長者、在家の菩薩は、乞ふ者を見[二八]已らば、滿足せる[二九]六波羅蜜に趣くことを修する想あれ。何等を六と爲すか。若し是に菩薩は、有つ所の物に隨ひ不施の心無くば、是れを滿檀波羅蜜に趣くことを修すと名け、菩提の心に依つて施さば、是れを滿尸波羅蜜に趣くことを修すと名け、求むる者の所に於て瞋呵を生ぜずんば、是れを滿忍波羅蜜に趣くことを修すと名け、若し布施する時に、自己は乏少なりの想を生ぜずんば、是れを滿進波羅蜜に趣くことを修すと名け、若し布施し已つて心に憂悔せずして倍歡喜を生ぜば、是れを滿禪波羅蜜に趣くことを修すと名け、若し布施し已つて、諸法を得ず果報を望まずんば、是れを慧と名くる者は、諸法に住せず、住する所無きに隨つて無上道に向ふものなれば、是れを滿般若波羅蜜に趣くことを修すと名くればなり。是れを菩薩は、乞ひ求むる者を見て、六波羅蜜を滿すことに趣くことを修すと名く。

　復次に、長者、在家の菩薩は、世の八法に於て應に放捨を生ずべし。彼の人、家の財賄・妻子に於て、憂喜を生ぜず、假使ひ忘失すとも憂愁を生ぜずして、應に是くの如く觀ずべきなり。有爲は幻の如くにして、是れ妄想の相なり。父母・妻子・奴婢・使人・親友・眷屬は悉く我が有に非ざれば、我れは是れが爲めに不善の業を造らざるなり。此れは我が宜きものに非ず。是れは現の伴侶なれども、他世の侶に非ず。是れは樂の伴侶なれども、苦の伴侶に非ず。我れは彼れを護る(べき)に非ずして、我れの護る所は、施・[三〇]調人・慧・進・不放逸の助菩提の法・諸の善根等なり。此れは是れ我が有なれば、我れの至る所に隨ひ彼れも亦隨ひ去く。何を以ての故ぞ。父母・妻子・男女・親屬・知識・作使は、我れを救ふ能はず、我れの歸依に非ず、我れの舍宅に非ず、我れの洲渚に非ず、我れの蔭覆に非ず、我れの我所に非ず、是れ陰・界・入にして、我・我所に非ればなり。況んや、父母・妻子は是れ我が所なりとするに當つても、父母・妻子は是れ業の爲す所にして、我れは善惡の業に

【二八】已らば。原本には「已」とあれど、恐らくは「己」の誤寫ならざるか。「己れは」ならば、意義層充實すればなり。

【二九】六波羅蜜。第二卷、同名の解、參照。

【三〇】調人。異譯本には「持戒」とあり。持戒は人を調伏する者なれば、然るべし。

復次に、長者、在家の菩薩は、在家の中に住するに、善く調伏して施し、分別すること柔軟にして、應に是の觀を作すべし。[二三]若し彼れに施し已らば則ち是れ我が有なれど、餘の家の中の者は、是れ我れの有に非ず。已に施せる者は堅なれど、餘の者は堅ならず。[二四]已に施せるは後に樂なれど、餘の者は現に樂なるのみ。[二五]已に施せるは護らざれど、餘の者は守護す。若し已に施せる者ならば、愛の縛する所に非れども、餘の者は愛を增すのみ。若し已に施せる者ならば、我所の心非れども、餘の者は我が有とす。已に施せるは怖無けれども、餘の者をば怖畏す。若し已に施せる者ならば、是れ道の基柱なれども、餘は是れ魔の柱なり。已に施せるは盡くる無けれども、餘の者は盡くる有り。已に施せる者は樂なれども、餘は苦を守護するなり。已に施せるは結を離るれども、餘の者は結を增すのみ。已に施せるは[二六]大封なれど、餘は封に非ず。若し已に施せる者ならば、是れ[二七]丈夫の業なれども、其の餘の在る者は丈夫の業に非ず。若し已に施せる者ならば、諸佛の讃ずる所なれども、其の餘の在る者は凡夫の讃ずる所なり。と。是くの如くに、長者、在家の菩薩は、應に堅く施に住すべきなり。復次に、長者、在家の菩薩は、若し乞ふ者を見ば、應に三つの想を起すべし。何等を三と爲すか。善知識の想なり。他世の富の想なり。菩提の基の想なり。復三つの想を有つなり。如來の教に順ずる想なり。果報を欲する想なり。魔を降伏する想なり。復三つの想を有つなり。求むる者の所に於て、親眷屬の想を起すなり。四攝の法に於て、攝取する想を起すなり。無邊の生に於て、出離する想を起すなり。應當に是くの如くに是の三想を生ずべし。復三つの想を有つなり。何等を三と爲すか。貪欲を除く想なり。瞋恚を除く想なり。愚癡を除く想なり。是の三想を生ぜよ。何を以ての故ぞ。長者、是の人は貪欲・瞋恚・愚癡に、倶に微薄なるを得ればなり。長者、云何にして三事は倶に微薄なることを得るか。若し財を施す時に、心に貪著無くば、是れを貪薄と名け、乞ふ者の所に於て慈心を生ぜば、是れを瞋薄と名け、若し布施し已つて無上正眞の道に

【二三】若し彼れに、乃至、有に非ず。　別の異譯本に「若し已に施さば、我が有と爲せども、若し家に在かば、我が有に非ず。」とあり。

【二四】已に施せるは、乃至、樂なるのみ。　異譯本には「施與せる者は後世の安きを爲せども、家に在かば後世の苦と爲る。」とあり。

【二五】已に施せるは、乃至、守護す。　異譯本には「家に在かば守備を憂ふることを爲せども、施與せる者は復た護ること無し。」とあり。

【二六】大封。　異譯本には「大富」とあり。意は同じ。

【二七】丈夫の業。　異譯本には「上士の行」とあり。

に在つて住すれば、惡として造らざる無く、是の中に在つて住すれば、則ち父母・沙門・婆羅門に於て敬順するを好まざれば、是に名けて家と爲すなり。又復、長者、愛の枝條を長じ、憂悲・苦惱悉く中に在つて生じ、殺縛・呵打・瞋罵を招き集め、惡言は出生する、是の故に家と名くるなり。未だ作らざる善根をば掉動して造らず、已に作れる善根をば悉く散滅せしめて、智者の呵——諸佛・聲聞の、若し是の中に住せば惡道に墮し、若し是の中に住せば貪・瞋・癡に墮すと謂へる、——する所なれば、是の故に家と名くるなり。若し是の中に在らば、戒聚・定聚・慧聚・解脫聚・解脫知見聚は妨廢する、是の故に家と名くるなり。若し是の中に住せば、父母・妻息・姊妹・親友・眷屬・知識の[20]貪愛に攝められ、常に財貪の欲を思念して滿る無きこと、海の流を呑むに、終まで滿足せざるが如きなり。若し家に在つて住せば、火の薪を焚くが如くに、思ふ處に定無きこと、風の住らざるが如くなり。家に在れば、猶毒を服するが如くに、一切の衆苦皆悉く來り歸す。是の故に、應に捨つること怨家を離るるが如くにすべし。若し在家に住せば、聖法に障と作り、多く諍の緣を起して常に相ひ違逆するなり。在家の中に住せば、善惡の緣雜つて、諸の事務多きなり。在家は無常にして、久しく住することを得ず。是れ停らざる法なればなり。在家は極苦なり。守護を求むる故にて、諸の憂慮、謂はく、怨親の所多ければなり。在家は我無きに我所を倒計す。在家は、誑惑して、實の事ある無きに如實に似たるを現ず。在家は離別する多人の住處なり。在家は幻の如し。實無き衆生を多く容れて集聚す。在家は夢の如し。興衰代る故なり。在家は露の如し。速に破れ落つる故なり。家は蜜の滴の如し。須臾の味なる故なり。家は刺網の如し。色・聲・香・味・觸に著する故なり。家は[21]針口蟲の如し。不善の覺をば食する故なり。家は毒蛇の如し。互に相ひ侵す故なり。[22]家は希望多し。心躑躅する故なり。在家は怖多し。王・賊・水・火に劫奪せらるる故なり。家には論議多し。過患多き故なり。是くの如くなるを、長者、在家の菩薩は善く家を知ると名く。

【二〇】貪愛に攝められ。異譯本には「恩愛の蜜に著し、」とあり。

【二一】針口蟲、乃至、食する故なり。異譯本には「鐵觜鳥」の如く、但、不善の想を憂ふ。とあり。

【二二】家は希望多し。乃至、故なり。別の異譯本には「恒に恐怖を懷く哉、意は以て亂るゝ爲めの故なり。」とあり。

財を給し、病める者には藥を施し、護無きには護と作り、歸する無きには歸と作り、依る無きには依と作り、彼の人應に是くの如き諸處に隨ひ是の法を行じて、一人をも惡道に墮せしめざらんと念ずべきなり。是くの如くに菩薩は、[一八]一一勸め導き、乃至、第七にも、衆生をして德行に住せしめんと欲するに、是くの如き處に隨ひ住せしむる能はずば、而ち是に菩薩は、此の衆生に於て應に大悲を生じ、堅く一切の智慧の莊嚴を發して、是くの如き言を作すべきなり。我れ若し是の惡衆生を調ぜずんば、我れ終まで無上正眞の道を成ぜじ。何を以ての故ぞ。我れは是の爲めの故に、誓を發して莊嚴せるにて、以て無諂・無僞・具戒・德行を調ぜん爲めに大莊嚴を發さざればなり。我れ當に勸めて、是くの如き精進——作す所をして空しからずに、衆生我れを見ば卽信敬を得しむる——を發すべし。と。長者、若し菩薩にして、是くの如き城邑・村落の中に在つて住しながら、衆生を敎へずして惡道に墮せしめば、而ち是の菩薩は諸佛に呵せらるるなり。長者、是の故に、菩薩は應當に是くの如くに大莊嚴を莊嚴すべし。我れ今應當に是の行——住する諸の城邑・村落・郡縣にて、一人をも惡道に墮せしめざる、——を修行すべし。と。長者、猶城邑に善き明醫あつて、一の衆生をして病毒にて死せしめば、多くの衆の呵責するが如し。是くの如くに、長者、若し是の菩薩は住する所の處に隨ひ、衆生を敎へずして惡道に墮せしめば、而ち是の菩薩は、則ち諸佛の呵責する所と爲るなり。

復次に、長者、在家の菩薩は、學行を善く修めよ。謂はゆる、家をば善根を殺すと名け、過を捨てず善を助くる業を害すと名け、是の故に家と名く。云何なれば、在と名くるか。一切の結使は中に在つて住する故に、名けて在と爲すなり。又復[一九]不善の覺を住とする故に、不調伏を住とし、無慚愧・愚小の凡夫を住とし、不善行・諸惡の過咎を住とする、是の故に家と名くるなり。又復在家は、一切の苦惱悉く中に在つて現じ、先の善根を害する故に在家と名くるなり。又復在家とは、是の中

【一八】一一、乃至、第七にも。異譯本には「當に一反を爲し、若しは二若しは三より、百反に至るまで等」とあり。

【一九】不善の覺を住とする故に。異譯本に「諸の不善の想に居り、諸の不善の行に居り」とあり。

語を離れて、[一五]諦語・實語し、說くが如くに作すが如くにして他を誑さず、善心をば成就して先づ思ひ而して行ひ、見聞する所に隨ひ實の如くに說き、法を守護して、寧ろ身命を捨つとも、終まで妄語せざるべきなり。彼れは應に酒を離れて、醉はず亂れず、妄に說く所あらず、自ら輕躁ならず、亦嘲譺せず、相ひ牽掣せずして、應に正念に住すべし。然る後に、之れ——心に一切の財賄を捨てんと欲する若き、——を知つて、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を施すなり。若くにして他に施す時には、應に是の念を生ずべし。今是れ檀波羅蜜の時なれば、彼れの欲する所に隨ひ我れ當に給施すべく、又我れ當に求むる者をして滿足せしむべく、若し彼れに酒を施さば、當に是の人を攝めて、正念を得て狂惑する無からしむべし。と。何を以ての故ぞ。悉く他の欲を滿すは、是れ檀波羅蜜なればなり。長者、是の故に、菩薩は酒を以て人に施すとも、佛に於て過無きなり。長者、若し在家の菩薩は、此の五戒を受持する功德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に迴向せんと、善く五戒を護らば、又復應當に兩舌を離るべく、若し諍訟あらば應當に和合すべし。惡言を離れて愛歎の語を出し、先語にて問訊し、他を毀辱せざるなり。他を利益する語、法の語、時の語、實の語、[一六]捨の語、調伏の語、戲笑せざる語を說の如くに作す如くするなり。貪癡を生ぜず、[一七]常に一切を安んじて心毀壞せざるなり。常に忍力を修めて、以て自ら莊嚴するなり。常に應に正見にして邪見を離るべきなり。餘の天を禮せずして、令く當に佛に供ずべきなり。

復次に、長者、在家の菩薩は、若し村落・城邑・郡、縣の人衆の中に在つて住せば、住する所の處に隨ひ、衆の爲めに法を說きて、不信の衆生をば勸め導きて信ぜしめ、不孝の衆生の、父母・沙門・婆羅門を識らず長幼を識らずして、教誨に順ぜず畏避する所無きには、勸めて孝順ならしめ、若し少聞の者ならば、勸めて多聞ならしめ、慳なる者には施を勸め、禁を毀るには戒を勸め、瞋る者には忍を勸め、懈怠するには進を勸め、亂念なるには定を勸め、慧無きには慧を勸め、貧なる者には

【一五】諦語。第二卷「諦」の解、參照。

【一六】捨の語。第一卷「捨」の解、參照。

【一七】常に一切を乃至毀壞せざるなり。別の異譯本に「安隱を以て加へ施し、衆生の意に、敗亂せざるを爲すなり。」とあり。

於て慳惜を有つ無く、聞くが如くに開示するに聞く所の義を思ひ、諸の欲樂に於ては無常の想を生じ、身を貪愛せず命を觀ずること露の如くにし、財物を觀ずること幻・雲の想の如くにし、男女の所に於ては閉獄の想の如くにし、眷屬の所に於ては苦の想を生じ、田宅に在るに於ては死屍の想を生じ、求むる所の財に於ては善根を毀る想もてし、其の家中に於ては繫閉の想を生じ、親族の所に於ては獄卒の想を生じ、夜に於て晝に於ては無異の想を生じ、不堅の身に於て堅施の想を生じ、不堅の命に於て堅施の想を生じ、不堅の財に於て堅施の想を生ずるなり。彼の云何なるを、不堅の身に於て堅施の想を生ずと名くるか。他の作す所あるには、悉く皆之れが作務・使令を爲すを、不堅の身に堅施の想を生ずと名くるなり。[一三]本の善を失はずして現の善根を增すは、是れ不堅の命に堅施の想を生ずるなり。慳悋を降伏して布施を行ずるは、是れ不堅の財に堅施の想を生ずるなり。長者、是れを在家の菩薩の、是くの如くに修習する善丈夫の行と名け、諸の如來に於て一切の過無ければ、[一四]相應の語と名け、名けて法語と爲し、異想ある無くして無上道に向ふなり。

復次に、長者、在家の菩薩は、應に善戒を受くべし。謂はゆる五戒なり。彼れは不殺を樂うて刀杖を放捨し、羞愧して、堅く一切の諸の衆生の等を殺さず一切を惱さずと誓ひ、心を衆生に等しうして常に慈心を行ふなり。彼れは應に盜まずして、自財にて足ることを知り、他の財物に於て希望を生ぜず、貪を除き捨てて愚癡を起さず、他の封祿に於て貪著を生ぜず、乃至、草葉にても與へざるを取らざるべきなり。彼の邪婬を離れ、自ら妻の色に足つて他の妻を希はず、染心を以て他の女色を視ず、其の心厭患して、一向に苦惱として心常に背捨し、若し自妻に於ても、欲覺の想を生ぜば、應に不淨・驚怖の想を生じて、是れ結使の力なれば、是の故に欲を爲すは我の爲す所に非ずとすべく、常に無常の想・苦・無我の想を生じて、彼の人は應に是くの如くに思念すべきなり。我れ當に、乃至、欲念をも生ぜざるべし。況んや、二和合して體をば相ひ摩觸することをや。と。應に妄

【一三】本の善を、乃至、善根を增すは。異譯本に「若し令く善本を減ぜず、功德をして常に增さしめば、」となり。
【一四】相應の、乃至、法語と爲し。異譯本に「則ち至誠と爲し、爲す所、法の如くにして、」とあり。

已つて、菩提の心を忘失せざる、是れを僧に歸依すと名くるなり。復次に、長者、若し菩薩は、常に佛と倶にして施を行ぜんと願ぜば、是れを佛に歸依すと名く。正法を守護して施すことを行ぜば、是れを法に歸依すと名く。此の布施を以て無上道に迴向せば、是れを僧に歸依すと名く。復次に、長者、在家の菩薩は、善丈夫の業を作して、善丈夫ならざる業を作さされ。長者、云何なるを名けて、善丈夫の業と爲し、是れ善丈夫ならざる業に非るか。長者、是れ在家の菩薩の、法の如くに錢財・封邑を集聚して、法の如くならざるに非ず。平直に正しく求めて、麁惡にて求むるに非ず。他に逼切せずして法の如くに封を得、無常の想を起して慳の想を生ぜず。捨を喜んで悋む無く、父母に給事し、妻子・奴婢・諸の作使の者には、法の如き財を以て之れに給施し、謂はゆる親友・眷屬・知識には、然る後に法を施すなり。復次に、長者、在家の菩薩は、重擔を荷負せんと大精進を發すなり。謂はゆる、一切の諸の衆生等の五陰の重擔にして、聲聞・緣覺の擔を捨つるなり。衆生を敎化して疲倦する無く、自ら己れの樂を捨て衆生の爲めの故に、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂に而ち傾動せずして、世の法に超過し、財富量無くとも而も憍逸する無く、利・名稱を失ふとも憂慼ある無く、善く業行を觀じて正しき行を守護し、禁を毀る者を見るとも而も瞋を生ぜず、諸べて趣く所有れば善に住し、覺する所は、輕躁を除去して智慧を滿足し、他の務を助け成して己れの作す所を捨て、希望する所あり爲作する所あれば、而ち中にして捨てず、恩を知り恩を念じて作す所を善く爲し、貧には封祿を施し、勢力ある者には大憍慢を折り、勢力無きに於ては之れを慰め喩して他の憂箭を除き、下劣の者に忍び、憍慢及び增上慢を除き捨て、恭敬し尊重して多聞に親近して、明慧を諸問し、見る所は正直に、行ふ所は無爲にして幻惑ある無く、諸の衆生に於て愛を作すある無く、善を修めて足ること無く、多く聞きて厭ふ無く、作す所は堅固に、賢聖と同じて、非聖の者に於ては大悲の心を生じ、親友には堅固にし、怨親は同等にし、心を衆生に等しうして一切の法に

【三】妻子、乃至、給施し。異譯本には「等眞を以て、門室親屬に與へ」とあり。

恭敬し、法の爲めに法を欲し法を樂み、極めて樂んで法を助け法に住し法を持ち法を護り、堅く法に住して法を讃歎し、[八]法行に住して法を增し、法を求むるに法を以て力と爲し、[九]法の器伎を施すにも唯法を務と爲して、我れ阿耨多羅三藐三菩提を成じ已らば、當に正法を以て等しく一切の人・天・阿修羅に施すべしとするなり。長者、是れを在家の菩薩の、法に歸依すと名く。長者云何に在家の菩薩は僧に歸依するか。長者、若し是に菩薩は須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を見、[一〇]及與び凡夫に若し聲聞乘を見ば、皆悉く敬順し、速に起つて承迎して好語・善音し、右に彼の人を遶つて、應當に是くの如くに思念すべし。我等は無上正眞の道を得る時なれば、聲聞の功德の利を成ぜん爲めの故にて法を演說するものに、[一一]恭敬を生ずと雖も、心は中に住せざるなり。と。長者、是れを在家の菩薩の、僧に歸依すと名く。長者、在家の菩薩は、四法を成就して佛に歸依するなり。何等か四なる。菩提の心を捨てざるなり。菩提の心を勸發することを廢めざるなり。大悲を捨てざるなり。餘の乘の中に於て終まで心を生ぜざるなり。長者、是れを在家の菩薩は四法を成就して佛に歸依すと名く。長者、在家の菩薩は、四法を成就して法に歸依するなり。何等か四なる。法師の人に於て親近し依附して、法を聽聞するなり。已つて、善く之れを思念するなり。聞く所の法の如くに、人の爲めに演說するなり。此の說法の功德を以て、無上正眞の道に迴向するなり。長者、是れを在家の菩薩は四法を成就して法に歸依すと名く。長者、在家の菩薩は、四法を成就して僧に歸依するなり。若し未だ定つて聲聞乘に入らざるあらば、勸めて一切智の心を發さしむるなり。若くは財を以て攝め、若しは法を以て攝むるなり。不退の菩薩の僧に依りて、聲聞僧に依らざるなり。聲聞の德を求むれども、心は中に住せざるなり。長者、是れを在家の菩薩は四法を成就して僧に歸依すと名く。復次に、長者、在家の菩薩の、如來を見已つて、佛を念ずることを修する、是れを佛に歸依すと名く。法を聞き已つて、法を念ずることを修する、是れを法に歸依すと名く。如來の聲聞僧を見

【八】法行。別の異譯本(「法鏡經」後漢、安玄、譯)には「法術」とあり。因みに、以下「別の異譯本」と謂ふは、「法鏡經」を指す者とす。

【九】法の器伎を、乃至、務と爲して。異譯本には「法施を行ずるに、法寶を求め、」とあり。

【一〇】及與び、凡夫に若し聲聞乘を見ば。別の異譯本に「或は凡夫の、弟子の道を求むる者を見ば、」とあり。

【一一】恭敬を、乃至、住せざるなり。別の異譯本に「而ち彼れを恭敬することを爲せども、亦而も彼れを美まざるなり。」とあり。

と欲する爲めに、堅固に莊嚴して、我れ要ず當に、未だ度せざる者を度し、未だ脫せざる者を脫すべく、安慰無き者をば當に之れを安慰すべく、未だ涅槃せざる者をば當に涅槃せしむべく、一切を荷擔して大橋船と作り、無量の佛智を聞きて佛智を修することを欲し、大莊嚴を發して【四】生死の中の無量の苦患を無量の阿僧祇劫に於て知るとも、心に憂惱無く、無量の劫に於て生死に流轉すとも、心に倦む無からんとするに、世尊、此の中には、若く菩薩乘に住する善男子・善女人の、或は出家して法行を修習するあり、或は在家にして法行を修習する有らん。善い哉、世尊。人・天・阿修羅を哀愍したまひ、世尊、大乘を守護し三寶を斷たずして、一切智の久しく世に住することを爲させん故に、世尊、唯願はくば、在家の菩薩の【五】戒德の行處にて、云何に在家の菩薩は在家の地に住して、如來の勅したまふ所に隨順し修行して、菩提を助くる法を損壞せず、現法の中に於て纏覆の業無くして增勝の行を得るか。世尊、云何に出家の菩薩は、珍愛する所を捨てて出家を行ずるに、當に是等に、云何に法を行じ云何に善を修するかを敎ふべきか。出家の菩薩は云何に住す可く、云何に任せざるかを演說したまはんことを。と。是くの如くに請ひ已れり。爾の時に、世尊は、郁伽長者に告ぐらく。善い哉善い哉、長者、汝の問ふ所は、是れ汝等の宜とする所なり。長者、諦に聽きて善く之れを思念せよ。今汝が爲めに在家・出家の菩薩の、學に住して勝行を得る所を說かん。と。郁伽は白して言はく。是くの如くに、世尊、敎を受けて聽かん。と。

佛言はく。長者、在家の菩薩は、應に佛に歸依し法に歸依し僧に歸依して、此の三寶の功德を以て、無上正眞の道に迴向すべし。長者、云何に在家の菩薩は佛に歸依するか。我れは佛身の三十二相を成ずるを得、以て自ら莊嚴することを要すとて、【六】此の善根を持ちて三十二の【七】丈夫の相を集めんとし、此れを集めん爲めの故に、勤めて精進を行ずるなり。長者、是れを在家の菩薩の佛に歸依すと名く。長者、云何に在家の菩薩は法に歸依するか。長者、而ち是れ菩薩は法及び法を說く者を

【四】生死の中の、乃至、憂惱無く。異譯本には「無量の生死の諸の惡・報・險を、心に疲厭せず。」とあり。

【五】戒德の行處。異譯本には「戒德の法」とあり。

【六】此の善根を持ちて。異譯本には「諸の作す所を、善本の功德と爲し、」とあり。

【七】丈夫の相。異譯本には「大人の相」とあり。

卷の第八十二

曹魏　康僧鎧　漢譯

郁伽長者會　第十九

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衞國の祇陀林中の[一]給孤窮精舍に在して、大比丘僧千二百五十人と倶なりき。菩薩は五千人にして、彌勒菩薩・文殊師利菩薩・[二]斷正道菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩、是等の如きは而ち上首たり。爾の時に、世尊は無量なる百千の大衆の恭敬し圍遶せるを與へて、法を演說せんとせり。爾の時に、郁伽長者は、五百の眷屬と與に舍衞大城より出でて、祇陀林の給孤窮精舍に詣り、到り已るや頂にて佛足を禮し、遶ること三帀し已り、却いて一面に坐せり。爾の時に、復、愛敬長者・名稱長者・善與長者・耶舍達多長者・善財長者・愛行長者・給孤窮長者・龍德長者・實喜長者有りて、是等は各五百の長者と、倶に舍衞大城を出でて祇陀林の給孤窮精舍に詣り、到り已るや佛足を禮し、遶ること三帀し已り、却いて一面に坐せり。是等の一切及與び眷屬は、皆大乘に向ひ、厚く善根を種ゑ、決定して無上の正道に至れるものなり。

爾の時に、郁伽長者は、諸の長者の皆悉く集り已れるを知り、佛の神力を承け、佛に向つて合掌し、佛に白して言はく。世尊、問ふ所あらんと欲す。願はくば聽許を垂れたまはんことを。と。是の語を說き已るや、世尊は告げて曰はく。長者、如來は當に聽すべし。汝の問ふ所を恣にすること、汝の疑ふ所に隨へよ。我れ汝の問に隨つて、當に演說して汝の心に悅可せしむべし。と。時に郁伽長者は、是の語を聞き已るや、佛に白して言はく。世尊、若し善男子・善女人にして、阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、[三]大乘に解向し、大乘を信じ、大乘を集めんと欲し、大乘に乘ぜんと欲し、大乘を[illegible]つて諸の衆生を護つて、一切の衆生を安慰し、撫喩せんとし一切の衆生を安樂にせん

○「備考」註解は、前卷までに一度出でたる者は、再揭せず。

【一】給孤窮精舍。給孤獨園と同じ。

【二】斷正道菩薩。異譯本（「郁迦羅越問菩薩行經」西晉、笠法護、譯）には「除惡菩薩」とあり。

【三】大乘に解向し。異譯本には「大乘を學び」とあり。

目次

目次

寶積部 五

長井眞琴譯

國譯一切經

大東出版社藏版

(25)